
美少女男子と美男子少女

菊地陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少女男子と美男子少女

【Nコード】

N0572Q

【作者名】

菊地陽

【あらすじ】

「美少女にしか見えない少年」と「美男子にしか見えない少女」オレは毎日毎日『女装部』の変態から逃げ回る日々を送っていた。正直、変態と絡む日々には飽き飽きしているところだ。そんな時、オレのクラスに転校生がやってきた。そいつは美男子のような少女で、ボーイッシュな雰囲気纏っていた。オレがそいつを10年前に別れた親友だと認知するのに時間はかからなかった。しかし10年前は偽名でそいつと付き合っていたオレは、向こうにあの時の親友だと気付いてもらえず……

結局、変態に追われる日々を繰り返すのだった……。

「どうしてこうなったんだ……」 作者名を変更しました

！詳しくは活動報告をくらってください。

プロローグ

これは10年前の記憶だ。

オレは小学1年生だった。オレの母親はかなり評判の悪いやくざみたいな母親だったから、周囲の友人は静かにオレから離れていく。たまにこちらから声をかけても、怯えたような表情を作って離れていってしまう。その頃のオレにはその行動の原因がわからなかった。どうしてオレから遠ざかるのか、避けるのか。いつだって質問したかった。でも、声をかければみんな離れていく。オレは一人だった。公園に行ってもみんなオレから離れて遊んでいる。オレは泣きながら砂場で砂を弄っていた。どうしてオレだけこんな目に遭わなければならぬのか、どうしてオレだけこんな悲しい思いをしなければならぬのだろうか。そう思うと涙は止まらない。それからずっと砂場にいた。太陽も沈んで、辺りは暗くなって、公園には誰もいなくなつた。暗い中、街灯の下で一人砂を弄る。そんな時、泣いている俺を迎えに来た姉貴が手を差し伸べた。俯いていたので誰だかはわからないけど、その手に非難の感情は感じられなかった。それもそうだ、自分の姉貴が自分の弟を非難してどうする。と、わけのわからないことを考えながら手をとって顔を上げた。

その人物は姉貴じゃなかった。

短い黒髪に、ナイキのジャージ、オレンジ色のキャップを被つた顔立ちのいい『少年』だった。

「どうしたの？早く帰らないと危ないよ？」

その子は、優しく微笑みながらオレに話しかけてくれた。純粹に嬉しかった。今までオレに話しかけてくれる人なんて父と姉貴だけだった。他の奴らはオレが話しかけても逃げていくだけだったのに、この少年はあるうことかオレに話しかけてくれて更に手まで差し伸べてくれた。オレは素直にその手を握りながら立ち上がった。

「君・・・名前はなんていうの？」

「ここでオレは迷った。本名を言っつて、母の存在がばれてしまえば、この子も離れていってしまうのだからか。しばらく間をおいてオレは読んでいた小説の登場人物の名前を名乗った。」

「・・・秋谷岬あきやま・みさき」

「岬くんかあ・・・。ボクは長門水希ながと・みずきつていうんだ。よろしくね」

屈託のない笑みで握手をした。その手の感触は男のものではなく、やわらかい女の感触だったのを覚えている。

「水希ちゃんは、何年生なの？」

「え・・・っ！」

こちらから名前を呼ぶと、水希は驚いたように目を丸くした。

「ゴメン・・・何か悪いこと言っただかな・・・」

「ううん。ボクを人目で女だつてわかつてくれたの岬くんだけだったから・・・びつくりしちゃつて・・・」

そう。その『少年』は少女だったのだ。

確かに外見は美少年さながらだったが、彼女には人目で女性だとわかるものがあった。水希の首にかかっているネックレス。それはピンクに輝く非常に可愛らしいものだったのだ。それで女だとわかったのだ。それが見えてなければオレも男と認知していただろう。

「だって・・・ピンクの可愛いネックレスしてるじゃん。そんな可愛いものを男の子がするとは思えなかつたし」

そういうと、ネックレスを愛おしそうに見つめて笑った。その笑顔を見た瞬間に、オレは水希に惚れた。

それからオレと水希は仲良くなった。お互い別の小学校だったが、初めて会った公園に行けば必ず会えた。行く度に遊び、オレは奴を好きになっていった。とても幸せだった。虚無感のない濃厚な時間。こんな時間がいつまでも続けばいいなあ、なんて本気で願っていた

矢先に父から告げられた一言。

「今日から、母さんと離婚することになった。お前たちはオレについてきなさい」

いきなりの離婚通告。別に驚かなかつたが、諸悪の根源である母親と離れるのであればそれはそれは幸福だった。でも、一つだけ気にかかることがあった。

「ねえ、引越したりするの？」

引越し。場合によっては水希と離れなければならない。水希と一緒にいる時間だけが幸せだった。叶うものなら引越して離れ離れになるなんて避けたい。

「することになるな。ソラだってここにはいたくないだろう？」

もつともな質問だったが、だからといって水希と離れるのはいやだ。たった一人の親友をクソな母親のために奪われてたまるか。姉貴はすぐ承諾していたが、オレは承諾できなかった。

「ソラ。お前に友達がいるのも父さんは知っているよ？でもね、母さんのことが知ればその子だってソラから離れていってしまうんだよ？親友を騙してこのまま付き合っていくのと、きっかり別れるのどっちがいいんだい？」

確かにオレは水希に偽名で名乗っている。それは本当のオレじゃなく、水希と付き合っているのはあくまで「秋谷岬」の方だ。オレは考えに考え抜いて、別れることを決めた。小学1年には重過ぎる決断だったが仕方がない。

「引越しは12月24日になった。準備しておいてくれよ」

父さんは姉貴とオレの髪をワシヤワシヤと撫でてから部屋をあとにした。

「岬くん、今日はなにしようか？」

「・・・・・・・・・・」

「岬くん・・・・・・・・？どうしたの？」

「えっ？ああ・・・・・・・・」

それから引越しの日までオレはちゃんと笑えなくなった。もうすぐ別れてしまうのだと思うと胸が締め付けられる。たった一人の親友。初めての親友。大好きな親友。それを簡単に手放すなんてオレにはできない。引越しのことを打ち明けようにも勇気がない。この意気地なしが。

それでも時間は待ってくれない。ついに前日、オレは意を決して水希に話すことにした。その日は雪が舞っていたような気がする。いつものように公園で遊んでいて、帰る時間になったときだ。小学校の帰宅時刻を守ろうと急いで帰る水希を引き止めた。

「水希ちゃん・・・・・・・・待つて！」

大声にびっくりしたのか、しばらく静寂が流れる。

「どうしたの・・・・・・・・？」

若干怯えている表情だったが、水希に限ってそんなことはないと自分に言い聞かせる。

「オレ・・オレ、明日引越すんだ。お父さんの仕事の関係で、遠くに引越すんだ。だから、水希ちゃんに会えるのも明日で最後になっちゃう。明日の１１時、この公園に来てくれるかな・・・・。最後に話しておきたいことがあるんだ」

沈黙の後、水希は少し涙を流しながら懸命に笑った。

そしてついに別れの日。その日は晴天だった。まるで、オレと水希の別れを盛大に演出しているように。オレから見ればくそつたれの太陽がわけもわからず輝いているようにしか見えなかったが、メンドーなんて黙っていた。約束の１１時。オレは父さんに事情を言っつてから公園に向かった。

「水希ちゃん……。待たせちゃったね」

公園には瑞希がいた。悲しげな表情でも笑おうとしている。

「今日で……この公園にも来れなくなっちゃうんだね。ボク、岬くんと一緒に遊べて楽しかったよ」

「オレも、水希ちゃんに会えて幸せだった……」

互いに黙り込み、ついには父さんが迎えにまで来てしまった。

「……水希ちゃん、今度会えたら君に話せなかったことを話すよ」

駆け出していこうとしたオレを水希は引き止めて、いきなりキスをした。時間が止まったように思えた。父さんは微笑まじげに見つめていただけだったけど。オレ自身、好きな子からキスをされたことで頭がパニック状態だった。ワケがわからない。本当にパニックに陥っていた。

「ボクも……次会えたら岬くんに言いたかったことを話すね……」

泣きながら水希は笑った。

「お互いに想いあっていれば、きっと繋がるよ。またね、岬くん」

それが、一番幸せで、一番悲しいオレの記憶。

再び2人が会うのは10年後になることなどこのときは思いもよらなかった。

プロローグ（後書き）

初めまして。七色アゲハと申します。

初投稿なので、文章が拙かったり話の構成が下手だったりするかも知れませんが、そこらへんには目を瞑っていただきたいと思います。これからも、続編を書いていくつもりですのでよろしく願います。

「誰が待つかバカヤロー！」

走りながら叫ぶので声は大分揺れているはずだ。自分じゃわからない。

「何もしないから！何もしないから少しだけ大人しくしてよおおお！」

では、手にしている数々の衣装は何だと言うのか。著しく知能が劣っている奴らだ。そんな可哀想な奴らにオレは言ってしまった。

「君たちの心に深い傷があるのはわかるからさ、人に手を出すのはやめようー！」

なるべく優しい声で叫んだ（叫んでいる時点で優しいのか怪しくはあるけど）。

すると奴らは、

「「「ふおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！キターー！深海ちゃんのツンデレー！！」「」「」

何故か興奮していた。

一部の生徒の間では『深海ソラはツンデレ』という噂が出回っているらしい。どうせ広めたのは『女装部』の変態たちだろうけど。

オレ自身、ツンデレがどういうものなのかよく理解していないので何とも言えない。

それで、興奮して闘志を更に燃やした奴らはさつきより速い速度でオレに迫ってくる。自分の部屋でパソコンの画面を見てハアハア言ってるようだったから体力はないと思ってるんだけどなあ・・・。

オレも人間だ。永遠に走ることはできない。

（早くチャイム鳴れよ・・・！）

いつもなら、登校して準備をしている途中で鳴ってしまうチャイムが今は物凄く恋しい。小中と何もやってこなかったので体力もそこまでない。

今、15人対1人で走り回っているのは職員棟でここで廊下を爆走するにはかなりの勇気がある。職員の目をかわしながら走り抜けるのは至難の技だ。一応、オレは模範的で特に何の変哲もない生徒

なので追われていると助けを請えば職員室や事務室で保護してくれるはずだ！

「先生！助けてください！今、『女装部』の連中に女装を強要されるうなんです！」

近くを通りかかった先生に助けを請う。すると、その先生は冷めた目でオレと『女装部』の面子を眺めて何も言わずオレたちを指導室へと連行した。

どうしてこうなった……。

「……　　」

担任の矢部は、連行されたオレたちを見るなり溜息混じりに呟いた。別にオレは悪くないのに……。

「先生！僕たちは正式な部活動を行っていただけです！罪は全て可愛らしい外見で食べちゃいたいくらい愛おしい深海ちゃんにあります！僕たちは無実なんです！」

「テメエら、何濡れ衣着せてんだ！女装を強要して、オレを追い駆け回したのはテメエらだろうが！」

頭に及ばず、性根も腐っていた連中らしい。あ、嗜好もか。

「違いますよ先生！深海ちゃんは僕たちを苛めて楽しんでいるんです！これは、DMの僕たちには最高の悦びですよ！？」

「だから何だよ変態！これ以上オレに付きまとうな変態！変態は変態らしく変態ライフを送ってりゃいいんだよ！！」

こいつらは本当に頭がおかしい。教師に自分たちの性癖を暴露してどうするんだよ。

ちなみに、矢部は黙って目を瞑りながらオレらのやり取りを聞いていた。止めるよ。可憐な……。いや、模範的な生徒が変態に襲われたんだぞ。矢部は大きな溜息を吐いて目を開いた。その口から出てきた言葉は、

「『女装部』の正式な活動だというのは認める。しかし、朝っぱらから人を女装させるのはよくない。誰だって不快になるだろう」

流石は教師。悪きはしつかり止めるんだな。

「だがな」

矢部は言葉を切つてオレの方を向いた。へ？オレが何かした？

「コイツらを誘つた、深海も悪い」

何も言えなかった。

別に自分の非を認めたくはない。何も言い返せないわけじゃない。何か・・・こう黙ってしまったのだ。あ、絶句したつて言えはいいのか。

この人が本当に教師なのか疑いたくなる。

対面にいる『女装部』の変態は反省したように頂垂れている。それが演技だつてことくらいお見通しだよバカヤロー。対してオレはどういった反応をしたらいいのかわからなくなってきた。何もしてないから反省する必要もないし、反論する気力もない。

「わかつたら、教室へ戻れ。ホームルーム始まるぞ」

矢部は扉を開けて出て行った。そして、教室に残つたのは変態たちとオレだけ。もう一度攻撃がくるのかと身構えていたが意外や意外、奴らはしょんぼりして帰って行った。

「んだよ・・・理不尽すぎるっつーの！」

小さく吐き捨てて、オレも指導室を後にした。

朝の一騒ぎから一転、ホームルームはしんみりと進んでいった。

矢部も指導室で別れてから会っていないし、教室にも来ていない。

どこで何をしているのか甚だ怪しかったりするのだが、考えるだけの体力が勿体無いのでそこまで考えなかった。

それにしても眠い。今日はいつてもより1時間も早く起きたから、物凄く眠い。起床時間が早いのと朝っぱらから走り回ったことが、睡魔に莫大な力を与えている。このまま睡魔と闘い続ければ授業など聞いていられないのでここで眠っても問題ないかなあと思っていた矢先、教室の扉が勢いよく開け放たれた。もちろん、そんなことには関心を示さない。どうしてかって？眠いからだよ。

一応矢部の姿を確認してから、もう一度眠りにつく。しばらくウトウトしていたら、矢部がオレの耳に聞こえるような大声で話し始めた。

「皆にお知らせがある。今日からこのクラスで共に生活する仲間が増えるぞ」

微笑ましげに言っているのか、その口調は柔らかいものだった。オレにはカンケーないけどね。

「では、早速ご登場願おう。入ってきてくれ」

矢部が入り口に向かって言うと、控えめな音で扉が開いた。

「喜べ男子諸君、可愛い可愛い女子の転校生だぞ？」

ニヤニヤと矢部は話す。転校生（しかも、可愛いを2回も言われるような美少女）にオレは眠たげな視線を送る。セミショートの黒髪に、透き通るような白い肌、形のいい唇に、何かに目覚めてしまいきそうな瞳……まあ、確かに美少女だったが雰囲気はどことなくボーイッシュだ。オレにボクっ娘属性はないので一回視線を送っただけでもう一度眠りの中に墮ちようとした。

「では、自己紹介をよろしく」

矢部がバトンタッチをすると、転校生はおずおずと話し始めた。

「み、皆さん初めまして……えっと、ボクの名前は
ほら見る、やっぱボクっ娘だったじゃないか。」

「ながと・みずき長門水希です。よろしくお願ひします」

.....

・は？

オレはいつの間にもやら跳ね起きて、転校生　　長門水希と名乗った少女をマジマジと見つめた。確かに水希と似たような雰囲気と風貌だけど、まさか本当にアイツが帰ってくるなんて・・・そんなバカな。

長門水希。

10年前に理不尽な都合で別れてしまったオレの人生初の親友。別れてからアイツがどこでどんな生活をしていたのかは知らないけど、この街から離れた所に住んでいたはずだ。オレも10年前までそこに住んでいたからね。孤独なオレを孤独から救ってくれた救世主のような存在。

オレは別れ際にアイツとある約束をしている。

『今度会えたら、君に話せなかったことを話すよ』

その話せなかったことについてはまた別の機会に話そう。今はそれどころじゃない。この長門水希と10年前の長門水希が同一人物なのか、オレは信じられそうになかった。

「長門は、えーと・・・」

うる覚えなのか、矢部は掌に書いてあることをそのまま口に出した。

「聖パウロ学園から、親御さんの都合で転校して来たんだよね？」

「はい・・・ちょっとした都合です」

・・・聖パウロ学園。ここらじゃ、有名なミッションスクールだ。しかも、結構な進学率を誇る学校からなんでこんな学校に転校して来たのか、オレの脳内は疑問で埋め尽くされた。

脳裏でさまざまな疑問が飛び交っているうちに、矢部はオレの名前を呼んだ。

「深海、長門はちょうどお前の隣の席になる。まだ来たばかりで何もわからないだろうから、教えてやれよ？」

ニヤついた。矢部の野郎、今完全に不純な何かを考えやがった。

長門は、少し顔を赤らめながらオレの隣の席に座る。間近で見る

と、その美貌が更に可愛く見える。やべっ、惚れそう……。
「君の……名前は？」

長門がそう聞いてきた瞬間、オレは血の気が引くのを感じた。
オレの名前を聞いてくるってことはオレを初対面だと認知しているということだ。とりあえず、ここは慎重に答えないと……！

「し……深海。よろしくな、長門……さん」

悪い癖だ。オレはちよつとでも何かあると、上手に笑えなくなる。
今もきつと引きつったような笑みを浮かべているんだろう。ダメだな……。ちつともあの頃と変わってない。

長門はさして気にした様子もなく、柔らかな笑みを浮かべてこう言った。

「深海くんか……。これからよろしく」

それが、転校して来て一日目の会話だった。

翌日、オレは友人である橋雪時たかはな ゆきじと友人だけで性別がわかりにくい結城ゆいぎのぶながと教室で話をしていた。もちろん話題は、転校生について。

「いやあ……。長門ちゃんは今まで会ってきた女の子の中で一番可愛いなあ！」

興奮冷めやらぬ様子でユツキは言った。ちなみに、ユツキというのは雪時のあだ名だ。

茶髪でポニーテールでそこそこイケメンというユツキの風貌はかなり珍しいものだ。中学から同じクラスだが未だにユツキの髪型の理由はわかっていない。

「確かに、可愛いですよ。僕も惚れちゃいそうですよ」

平淡な声で続けたのはのぶながだ。コイツはオレと同じように女子扱いされたり、『女装部』の魔の手から逃げている同胞。貴重な仲間だ。ただ、本人も本当の性別を一切明かそうとしないので性別

はわからない。そこで周りの連中はコイツの性別を「人類の神秘」とした。考えた奴らの脳内が人類の神秘だろ。

「つかユツキ興奮しすぎだろ……。どっだけストライクゾーンに合致してたんだよ」

「なぬっ！ ソラには長門ちゃんの美しさがわからないのか！？」

「そんなの、オメエよりわかってるよコノヤロー」。

「ソラは無関心ですからね」

のぶながも余計なこと言うな。このバカがろくでもないことを口走るじゃないか。

「お前も長門ちゃんの美しさに気づくべきだ。そのためだったら俺は火の海に焼かれても悔いはないぜ」

「そんなことのために人生投げ捨てるのかよ。バカだなお前」

まあ、橘雪時という男はそういう男だ。くだらない所に全身全霊で挑む。バカと言えばバカだがオレはどうしてもコイツを憎めない。「それにしてもソラ。ソラはラッキーですね。美少女転校生といきなり接点を作れるんですよ？ ユツキから見れば夢のような出来事でしょうに」

「そうだぜソラ。お前は神様から選ばれた幸運な人なんだぜ？ なあなあ、俺のことも紹介しておいてくれよ？」

「紹介？ そのうち接点ができるだろ？ なんでわざわざ……。」「

オレが言い切る前にユツキは身を乗り出して再三願ってきた。

なんとというか、微妙に疲れるな。

その日帰宅すると、靴が一足多かった。最初は姉貴の友達でも来ているのかと考えたが、部屋から聞こえてくる物音から察するに、誰も来ていないだろう。

なら、この靴は誰のだろうか。

不審に思いながらリビングへ向かう。

ちなみに、うちは父さんが海外で活躍してくれているため家は結構大きい。客間も使わないけどあったりする。キッチンも広く、バーを彷彿させるテーブルもある。そして、一番の目玉は風呂だ。風呂場は父さんの趣味で大きくしてある。一般男性が2人入っても2人も足が伸ばせるくらいゆったり空間だ。父さん以外使わないけどサウナもある。更に脱衣所と風呂場はガラス一枚で仕切られており、脱衣所に入ればそのまま風呂が見えてしまうというエロスな空間だ。これも父さんの趣味だけど、ここまで来ると反応に困る。リビングは、風呂場を通り過ぎた所にあるため否応なしに風呂場を通り過ぎていかなければならない。普段なら普通に通り過ぎるんだけど、今日だけは少し違った。

『』

風呂場付近に差し掛かると、聞いたことのない美声で誰かが陽気に歌を歌っている。姉貴はかなりの音痴だから歌は歌わないし、第一この家に女性は姉貴しかいない。母親は10年前に離婚していて消息不明だ。じゃあ、この歌声の主は誰なのか。オレは女の子の風呂を覗くのはいけないことだと知りつつも脱衣所から風呂場を覗いた。

「……ありゃ、曇ってて見えないや……」

当然のことに気が付けないほど動揺しているのか緊張しているのか興奮していた。どれをとっても結局変態にしかならないことに気が付くと、ズシリと胸に何かがぶらさがる。

『あまやーどり駄菓子屋でーかみさーまの帰りをまーった』

全てを曝け出している空間の傍に男がいることに気付いていないのか、歌声の主は歌い続けている。オレは緊張しながら、風呂場の扉を開けた。

「あれ……」

のよお？アంత覚えてないの？」

別に覚えていないわけじゃない。オレは覚えていたが、向こうがオレを赤の他人だと思っているのが問題だ。きつと、長門は初対面の人の家に泊まり、初対面の人の家で生活させられている、という認識でしかないのだろう。哀れな話だ。

「ま、水希ちゃん覚えていなくてもそのうち思い出してくれるわよ。心配性なんだから、ソラは」

姉貴は笑った。

ひとまず、落ち着いたかとオレはソファに腰掛ける。すると・・・

・・・

「お風呂空きましたよミナトさん・・・」

姉貴に頭を下げた長門は、その向こうにいるオレに目を留めて言葉を切った。

「あれ・・・？なんで深海くんがここにいるの・・・？」

素でオレを覚えていないらしい。姉貴は覚えているのに・・・

「いて悪かったな。今更文句のいいようのないことだけど、そこにいる姉貴とオレは姉弟だ。ということは長門さんはオレとも生活することになる」

オレ自身、説明するのが非常にメンドーだった。

「あ、苗字一緒だもんね。・・・って、え？ボクはミナトさんと昔からの知り合いなのになんで君はボクと初対面なの？」

お？お、お、お？長門はオレとの記憶を目覚めさせたのかもしれない！そーなりや、一気に攻め込むぜ！

「ほら・・・覚えてないか？クリスマスイヴの公園でのこと、あの日オレはお前に」

言い切る前に長門は怒ったような表情で言った。

「君じゃない。ボクが知っているのは君じゃない。君とは真正正銘の初対面だし、君にあのことを話した記憶もない。勝手に人の過去

に踏み込んでこないで」

「………」

オレも姉貴も何も言えなかった。特にオレは、終わったと直感で感じ取った。

10年前のこと自体は覚えているらしいが、約束をした人物とオレは全くの別人として彼女の記憶の中に取り込まれているらしい。いくらオレが美少女のように変貌したからってそれはないんじゃないの？

まあ、その時は頭から冷えていくような錯覚を感じた。視界が歪んで、フラフラした。よく耐えていたと自分で自分を褒めてやりたいくらいだ。君じゃないという一言ならまだしも、勝手に人の過去に踏み込んでこないで、という一言は一撃必殺の死の呪文だ。ドラクエで言うザキだな。んで、オレはその呪文を受けてしまった哀れなスライムで、長門はそれを倒す勇者様だ。これじゃ、まるでオレが悪役のようにじゃないか。

どうせ、悪役なら最後まで悪になりきって死んでこよう。それで、安らかに成仏しよう！

未だにオレを怒った目つきで睨んでいる長門にオレは切り札を使った。

「オレは……オレは、あの時お前と約束した人物の名前を知っている」

オレの切り札。最後の砦。

秋谷岬^{あきたにのみさ}。あの頃のオレの名前だ。

これを聞いて別人だという認識を改めてくれるかはわからないが、試してみないことには意味がない。

「………だから何？」

俯いていた長門は底冷えするような低い声で呟いた。

「君があの人の名前を知っている？だから何だって言うの？自分があの人だったとも言いたいの？ワケわからない。君が何を言いた

いのか、どうしてボクの過去のことを知っているのか・・・何もかもわからないよ・・・」

死んだ。完全に抹殺された。心臓に杭を打たれた。ザラキーマ唱えられた。

「死」にまつわる単語と知識が脳裏を巡った。

長門はそのまま2階に上がってしまった。姉貴は哀れむような視線をオレに送っている。オレはソファに頂垂れた。何もかもが終わりだ。10年前、オレと別れた「長門水希」は今うちにいる「長門水希」とは別人なんだ。そして、彼女の中で「秋谷岬」と「深海ソラ」は別人物として認識されている。これは結論だ。確定してしまった。

10年前、オレが約束したのは本当の親友じゃなかった。

あの時、偽名を使って付き合っていたオレが恨めしい。何をしていたんだオレは。本当の名前で、何も隠し事なく付き合っていれば今頃ハッピーなバラ色生活が待っていたというのに・・・。しかも、かつての親友と再会して、同じ屋根の下で気まずく暮らしていかなければならない。

今のオレにはとてつもなく精神的に重いものだった。

翌日、オレが悪夢にうなされていた頃の話だという。

「昨日はごめんねえ？ソラったらあんなこと口走っちゃって・・・。水希ちゃんに想い人がいることくらいあの子だってわかってるはずなんだけど・・・」

「え？それってどういう意味ですか？」

「あたしの口からは言えないわ。あの子が、打ち明けるべき時期に

ちゃんと打ち明けるから。それまで待つてくれるかしら？」

「まだ……会って1週間も経ってないのに……」

「そうなのよ、水希ちゃんは可愛いんだから男の子はすぐに一目惚れしちゃうのよ」

「でも、誰から告白されてもボクは待ち続けてますから……。岬くんは絶対に約束を果たしに現れてくれるはずですので……」

「まあ、水希ちゃんてば一途ね。あの頃からちっとも変わってないわ」

「ミナトさんも、岬くんはご存知なんですよね？」

「そりゃあ……知ってるわよ？」

「岬くん……今はどこに住んでるんだろ……」

「き、きつといつか水希ちゃんに想いを伝えに来てくれるわよ。それまで、うちのソラと仲良くしてあげてね」

「はい……昨日はついカツとなっちゃってあんなこと言っちゃいましたけど……もう大丈夫ですよ」

「あの子、相当気にしてると思うわ……。女の子からあんなこと言われたら、凹むわよ」

「すみません……」

数秒の沈黙。

「さて、そろそろ起こしてくるかな……」

「あ、じゃあ朝食の準備しておきますね」

「ありがとう」

こうして、長門の機嫌は治ったらしい。とりあえず、姉貴に感謝するとして長門との付き合い方を変えていかなくちゃいけない……。

オレは長い長い時間を取り戻す生活の幕を開けた。

6月・深海ソラ（後書き）

しょーもない小説始動しました。

どうも、七色アゲハです。毎度毎度時間があるときには後書きを書いていきたいと思えます。

拙い小説ですが、お付き合いお願いします。

6月：リア充の実態

6月の初旬、まだ梅雨入りしていないのか空には元気な太陽が輝いている。気温もそれほど高くなく、低くなくで非常に過ごしやすい。そんな平和な時間、車窓を眺めながらオレとユツキとのぶながは登校していた。オレとユツキは、うちが近所なので同じ駅からのぶながは少し離れた所に住んでいるので、オレたちの乗る駅の2つあとの駅から合流する。そこから4つあとの駅が星園学園せいえんがくえん前の駅になる。オレとユツキからだとも6駅も離れてしまっただが、星園学園がオレの家から一番近くで尚且つオレの学力でも入れそうな所だった。ちなみに、オレの家から本当に一番近い高校はここらで一歩の進学率を誇るところでどう足掻いてもオレの学力じゃ入れない。

まあ、そんなことはどうでもいい。イヤホンから流れる曲を聴きながらウトウトしていると、横からユツキが強すぎるくらいの力で揺する。おえ・・・気持ち悪っ・・・。

「なあなあソラよお！ちゃんと俺のこと紹介しておいてくれたか？」
何かを期待する眼差しでオレを見つめてくる。ああ、そういえばそんなことも言ってたな。すっかり忘れてた・・・。昨日はそれどころじゃなかったし。

長門とオレは別々に登校している。長門の方は、一本前の電車に乗っていったので会うことはなさそうだ。というか、昨日の今日。あまり会いたくない。一応、オレのいないところで解決はしているらしいけどやっぱり抵抗がある。

「おい、ソラ？聞いてんのか？」

ユツキが疑わしげな視線を送ってくるので、仕方なく本当のことを話した。

「悪いけど、話してないや。昨日は宿題が多くてね」

「昨日宿題は出ていませんよ。ソラは何を言っているんですか？」

オレの右隣、のぶながは淡々と呟いた。いつもは口数が少ない奴

なのに……。

「正直に言え。なんで忘れたんだ？」

ポニーテールを揺らして、端整な顔を器用に使いながらユツキは迫ってきた。仕方ない、本当のことを話そうじゃないか。

「関心がなかったし、興味ないし、オレに関係なかったから」

わざと、ユツキの心に突き刺さるように言っただけだ。

「ひでえよ……ソラとは親友だと思っただけなのに……」

すると、涙を流しながらユツキは塞ぎこんだ。オレは弁解に困つてのぶながに助けを求めたが、視線を送っただけで彼は首を横に振った。この薄情者！何だつて言うんだ、この状況をオレの力だけで打開しろというのかよ。のぶながって本当に鬼だな。

と、言った具合にオレとのぶながの間で刹那の交渉をしているうちに、一人の老人がこちらへ近づいてきた。老人は優しい目をしてオレを見つめると、

「お嬢ちゃん、いくら気に食わない男の子だとしてもひどい断り方はしちゃいけないよ？」

ん？お嬢ちゃんって、オレのこと？そんでもってオレがユツキからの告白をひどい断り方で断ったからユツキが泣いていると思われているの？のぶながに視線を送ると、またしても首を横に振るだけだった。

「いや……オレが振ったわけじゃ……」

苦笑しながらオレは振ったことを否定した。だが、オレの言葉を聞くなり老人は更に言及してきた。

「お嬢ちゃん、自分のことをオレなんていうのはやめた方がいいよ？あなた可愛い顔しているんだから、寄ってくる男の子は慎重に捌きなさいね？」

「だから……オレは女じゃないって……」

老人は完全にオレを女だと思っただけだ……！

「男遊びもほどにするんだよ？いつか後悔するからね」

老人は停車駅に着くとこちらを見て出て行った。……そんな

なにオレの外見って女っぽく見えるのかな・・・？どっちかっていうと**のぶなが**の方が可愛いと思う。

「なあ、**のぶなが**。オレってそんなに女っぽい？」

のぶながに訊くと、

「ソラは昔から皆のアイドル。悩殺されそうですよ」

惚れそうな笑顔で最悪の一言を言われた。

やっぱ、**のぶなが**がって鬼畜だよな？

登校中のハプニングを乗り越えてやっと学校に着いた。オレは真っ直ぐに自分の席へ行くタイプなのだが今日だけはそういうわけには行かなかった。昨日、あんなことを言われて翌日から「はい、普通にやるう」なんて切り替えられるわけがない。自分で言っただが、オレは引き摺るタイプだ。

オレの隣の席は長門。席に行くにはどうしても長門の席を通り過ぎなければならぬ。簡単なことだがとても難しいことに思えた。

「ソラ、今のうちに紹介してこようぜ？」

早くも荷物の準備を終えたユツキが企んでいるような笑みを浮かべながら言った。いつもなら冷たく弾いている所だが今日だけは、コイツの助け舟に乗ろう。こういう時のコイツの無神経さは役に立つ。

いつ見ても惚れ直す笑顔で、クラスメイトの質問に答えている長門へオレとユツキは近づいた。途中で視線がぶつかり、チャンスとばかりにユツキが乗り出す。

「やあやあ、長門水希さん。俺は橋雪時たかはなゆきじと言います。これからの高校生活をバラ色に染めて差し上げましょう」

ユツキは初対面の女子にはかなりの人気がある。長門にもそれが通用すると思ったのか、さわやかイケメンボイスで自己紹介と不吉な一言を長門に告げた。長門のことだ、普通に受け流すんだろうな。

「橘くん・・・でいいのかな？」

長門が戸惑うように訊く。別にユツキのことなんか「変態」とか「顔だけ色男」とか呼んでくれてもいいのに。オレが黙って（長門の顔を見ないように通り過ぎた）席に着くと、ユツキは更にアピールした。

「いいえ。みんなは俺のことを『ユツキ』と呼びます。長門さんもユツキで構わないよ」

活字だからわかりにくいかと思うが、これはユツキだ。字だけ見ると知的なイケメンを彷彿させるが決してそんなことはない。ユツキに知的なんていう言葉は似合わないから。

長門は戸惑ったように首を傾げて（そんな姿も可愛い）照れながらユツキの名前を呼んだ。

「じゃ、じゃあ・・・ユツキ、よろしくね？」

頬を染めて、照れながらも紡ぐ言葉にユツキは完全に射止められた。コイツ結構惚れやすい奴だからな。とは言っても、今のはオレも見惚れるほど可愛かった。どうしょ。

「「「ふおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」」」

遠くで不吉な叫び声が聞こえたので、オレは座りながら『女装部の姿を探した。

・・・あ、見つけた。

「長門ちゃああああん！君、ききき君、これ着て見ない!？」

「いやいや、これが先だよね？これを着ようか！」

「こつちが先だろ!？邪魔すんなよ!!」

長門に詰め寄った変態は、手に白い学ランを持ちながら興奮した様子で長門を問い詰めた。ただの変態でしょ。

まあ、長門は見ての通り美少女だし美少年だしあれどっちだ？中性的な美貌だから男装でも女装でもどっちでも変態の欲求不満は晴らせると思う。白い学ランなんて完全に男装だろ。

「え……この学ランを着ればいいんですか？」

戸惑いながらも変態の要求に応じそうな長門。長門に男装の意思があるとわかった途端に、奴らは長門の手を乱暴に引っ張ってどこかへ連れ去ってしまった。

「ユツキ、ちゃんとアピールできたのか？」

溜息混じりにオレは問う。

「ん……イマイチだったかな。俺が寄ってくれば大体の女の子は墮ちるんだけどさ。まあ、そんなクールビューティーも悪くない」

コイツと『女装部』の連中は気が合うと常々思っている。

〜数分後〜

「何あのカツコいい人……」

「凄いかっこいい……」

まあ、驚いた。めっちゃ驚いた。

教室には純白の学ランを纏った、絶世の美少年がオレを真っ直ぐ見据えていた。怖いといえば怖い。可愛いと言えば可愛い。そんな微妙な視線を送ってくる長門にオレは見惚れた。なんか……こう、Mに目覚めさせられたような感覚……ってヤバイ！このままじゃオレは屈辱陵辱侮辱大好きっ子になってしまうじゃないか！

「ね、ねえ……。深海くん、これ似合ってるかな……？」

顔を仄かに赤くして、クルリと一回転する長門。ほんのわずかな時間だったが、長門の性別を間違えそうになった。

「なんつーか……。ヤバイ」

一応正直な感想を述べると、長門は更に顔を赤くして俯いた。ああ……もうダメ。オレは長門の男装姿に悩殺されるんだ。でも、悔いはない……。

と、意識を失いかけているとユツキが頭を叩いた。

「帰って来い、このシヨタコン」

「あ、今逝きそうになった」
別に、オレはシヨタコンじゃない。

その後、長門のあの姿が忘れられなくて授業中も悶々としていた。授業なんて頭に入らない。なんというか、長門に本格的に惚れてしまいそうだ。誰か助けてほしい。視線が合えば、顔が紅潮するのがわかるし声が聞こえただけで、心拍数が跳ね上がる。

そんな、修羅場を潜り抜けて今は昼休み。オレはいつものように、ユツキとのぶながと売店へ行こうと教室を出た所だ。

「今日は何食べるかな……」

オレは品揃え豊富な売店で今日は何を食べるか真剣に考えていた。星園学園の売店は、普通の高校よりも少し大きく作られており、食べ物の種類も豊富だ。ハンバーガーやホットケーキもある。パン食派じゃない人のためにもおにぎりや弁当もきっちり揃えてある。卒業生が言うには、売店のものを全て食べ尽くすには3年以上かかると言っていた。ま、オレはそういうバカなことに手は出さない。自分の食べたいものを食べて、満足して、寝る。それが最高の至福だ。「ソラ、さっきの数学の問題わかりましたか？ぜんぜんわからなかったのですが」

のぶながが数学の問題のことを尋ねてきている。悪いが、オレはガチガチの文系だ。数学の問題の答えなど自分の力じゃ導き出せない。のぶながは普通の成績だけど、ユツキに至ってはテストの大虐殺と言っても過言ではないほどの壊滅ぶりだ。コイツにテストのことを聞いても何の特にもならない。

「オレが理数系苦手だと知っててそれを聞いているのかよ……。数学の問題なんて端から相手にしないよ」

「それもそれでどうかと思いますけど……」

のぶながは若干引き気味で答えた。しかし、いつもは壊滅してい

るユツキが今日は冴えた。何かの予兆だろうか。数週間は気を付けて過ごさないと……。

「へへん。あの問題はな」

呆然とするのぶながとオレを差し置いて、ユツキはざっと説明してくれた。

「……絶対何かよからぬことが起きるな……と、警戒していたとき。」

「深海くん」

誰かに呼び止められた。後ろを振り返ると、そこには弁当を持った長門がいて……。

「お弁当……ボクが作ってきたんだけど、よかつたら食べる？」
弁当を差し出しながら長門は訊いた。弁当か……。いつも売店だからな、ずいぶんと手作り弁当なんて食べてない。ここはお誘いに乗ることにしよう。

ん？……長門が、弁当を作ってきてくれた？

「いやいやいやいや……ちょっと待て。これは何かの幻だ。昨日会ったばかりの長門がオレに弁当を作ってきてくれるはずがない。」

ユツキが変なことを言い出すから、こんなことが起こってるんじゃないだろうか。

「ユツキ、オレの頬を掴ってくれ」

すると、何も言わずユツキは頬を掴り始めた。これで、夢が覚めるはずだ。

……

覚めない……。これは現実なのか……。

呆然としているオレに長門は再三訊いてきた。

「食べるの？食べないの？ボクにもお昼食べる時間があるんだけど」
昨日の毅然とした口調で言う。そんな気迫で迫られたら、食べる

っていうしかないだろ。

「た、食べるよ。ありがとな」

弁当を受け取ると長門はさっさとどこかへ行ってしまった。

長門の手作り弁当。こんな高価なものをオレが食べてしまったもいいのだろうか。あの長門が弁当を作ってきてくれた。昨日のことはもう怒っていないと認識してもいいのか？でも、結構本気で怒ってたし、迂闊な発言で更に怒らせてしまった。オレには長門と話す資格すらないはず……。なのに、弁当を作ってくれた。これってもしや……………

「何にやけてんだ」

「そうですよ」

両端から鋭いエルボーを食らった。一瞬にして夢の中から激痛の走る地獄へと突き落とされた気分だ。傍から見るとオレはにやけていたらしい。何という赤っ恥……………！

「ベ…………別に何も…………」

咄嗟の言い訳が思いつかず、オレは視線を逸らした。

「ふん、特に気にしてねえよ。思う存分長門ちゃんの愛情に浸っているがいい。このリア充め…………」

気にしていないというのにその忌々しげな口調はなんだ。

「はい、特に気にしていませんよ。思う存分長門さんの愛情に浸っててください。このリア充め…………」

のぶながまで壊れた!?

結局気に食わないんじゃないか。このアホヤロー。

ユツキとのぶながが昼食を購入して、オレたちは屋上へ向かった。星園学園の屋上は、生徒同士が交流できるように共用スペースになっている。大きなテーブルや、ベンチがあり昼食を食べるにはもってこいのベストポジションなのだ。オレたちはいつもここでお昼を食べる。今日の昼食は、オレが長門手作りの弁当で、ユツキがパン

各種を6つほど。のぶながは質素に日の丸弁当だ。

「どれどれ、長門ちゃんの弁当はどんなものなのか、見せてもらおうか」

ユツキがオレの弁当を覗き込む。ここで断れば更にめんどくさくなるし、仕方がない。

包みを開いて、ふたを開ける。

「……おー」

白いご飯に、から揚げ、ポテトサラダと焼きウインナーが綺麗に盛り付けられていた。これが……女子高生が作るお弁当……！！何か無性に感動する……。

食べるのが勿体無い貴重なお弁当をオレは神に感謝しながら食べた。味付けも薄くなく濃くなくて、おいしかったしポテトサラダにはからしが加えられていて、少し辛かった。密かに辛党なオレにとっては最高のポテトサラダだ。そんな幸せな時間を過ごしていると急にユツキが真剣な顔をしてオレに尋ねてきた。

「正直に言え。お前、長門ちゃんのこと好きだろ」

時間が止まるかと思った。オレは親友にウソはよくないと思ったので、小さく頷く。

「やっぱりな。お前ってわかりやすいんだよ。さっきだって、真っ赤になってただろ」

「そうですね、リア充。凄い真っ赤になってました。トマトですかっけくらい」

「う、うるさいな。人のことを好きで何が悪いんだよ……」
本当のことなので、強く言えなかった。

「ん……？のぶなが、今オレのことをリア充って呼んだよね……」

「何のことですか？そんなことするわけがないでしょう」

いつもと変わらぬ表情でのぶながは言った。この鬼畜無表情野郎……

「告白するつもりはあるのか？」

(恐らく) ジャムパンを食べながらユツキは他人事のように訊いた。

「ないよ。長門さんには別の好きな人がいる。オレじゃその人に敵わないからね」

そう。長門はオレじゃなくて、秋谷岬が好きなんだ。10年前に約束をしたのは秋谷岬の方で長門が想いを寄せているのは秋谷岬だ。オレなんてお呼びじゃないだろう。きっと、朝食を作るついでに作ったとかそんな感じだったし、同じ屋根の下で生活するのに気まぐずいのはいかなものか、ということで作ったともとれる。長門がオレのことを好きだとは思えないし。そんなことを思っていると、弁当のおいしさがなんか薄れた気がする。かといって残すわけにもいかないし、全部食べておいた。

「……オレなんて、眼中にもないんだろうな……」

最後の呟きは、ユツキにもものぶながにも聞こえたと思う。

「ま、青春には失恋も付き物だよ、そうへこたれるな」

「そうです。これくらいでめげてはいけませんよ」

励ましてくれているであろう2人の表情は満面の笑みだった。

「ちっ、それが目的だったか……」

オレは舌打ち混じりに吐き捨てた。

それから毎日長門の弁当は続いた。ある日はお好み焼きと焼きそば、またある日はご飯としょうが焼き、またまたある日はご飯と玉子焼きと焼き鮭だった。これはおかしいとオレはついに意を決して長門にどうして弁当を作ってきてくれるのか尋ねてみることにした。2階へ上がって、長門の部屋の扉をノックする。

「長門、入っていいか？」

僅かに声が震えたけど、わからないだろう。

「(がちゃ) どうしたの？」

風呂上りの寝巻き姿で長門は現れた。ヤバイ・・・オレの理性が・・・！

「いや、ちょっと聞きたいことがあってさ」
視線を逸らしながらオレは続ける。

「聞きたいこと？何かあったの？」

「あ、その・・・」

一呼吸。

「どうして、オレに弁当を作ってくれるんだ？オレはお前を怒らせちゃったのに・・・」

すごい緊張したけど、長門は柔らかい笑みを浮かべて、

「どうしてって・・・変なこと聞くね」

「変なことって・・・ホントに気になってたんだから」

ふと、耳に長門が聞いていたと思われる曲が聞こえてきた。MP

3プレーヤーで流しているんだろう。

「お弁当を作った理由？それはソラくんに食べてもらいたかったからだよ」

長門は言った。

「オレに・・・？」

「そう。ボクだって一人の乙女だよ？一番近くにいる男の子にいいとこ見せたいじゃん。だから張り切って作ってみたんだけど・・・おいしくなかった？」

微笑から一転、不安げな表情で上目遣いでオレを見る。そのしぐさでまた悩殺されそうだった。

「そ、そんなことない。すごいおいしかった」

「よかった・・・」

「オレさ、今まで女の子にお弁当作ってもらったことなかったから・・・どうも不自然に思えちゃって」

16年間生きてきて、そんな幸福なエピソードは一つもない。長門が作ってくれるまでは。

それを言っていると長門は、くすつと可愛らしく笑った。ちよつと、理性が死にそうだ。耐えてくれ理性よ！

「な、長門は男子に弁当することに抵抗はないのか？」

長門はイタズラっぽく笑い、オレに指を突きつけた。

「あのさ、同じ屋根の下で暮らしているのに、苗字で呼び合つてちよつと変じゃない？ボクだってソラくんって呼んでるのに、なんでボクのことには苗字なの？」

「それは……呼ぶのに抵抗があつたからで……」

正直言つと、昔を思い出してしまうから今まで強引に苗字で呼んでただけだな……。

「そんなもの捨ててさ、普通に呼んでみようよ。ね？」

「み……水希は、男子に弁当って抵抗ないのか？」

再び問う。近頃の女子高校生は男子と接するのが苦手だと、どっかのサイトで見つけた。それなのに、なが……水希は初日で弁当を作ってくれた。水希はこういうことに慣れているのだろうか。

「ないよ、特にソラくんだと、なんだか懐かしい気がしてさ。つい助けたくなくなっちゃうんだよ」

「……」

それは、オレのことを思い出しそうだと受け取っていいのだろうか。

記憶が戻りそうだと受け取ってもいいのだろうか。オレは会った初日から水希のことを思い出したというのに、お前が覚えていないなんてなんか癪じゃないか。

「あ、悪かつたな。宿題の途中だったんだろ？邪魔した」

「いいよ、夕食の準備するけど……もうちよつと待っててもらうていい？」

うちに来て2日で食卓事情を悟った水希の勘はスゴイと思う。

「オレが作るから大丈夫。水希は風呂でも入ってたら？」

一応、オレも姉貴が料理できない人なので嗜んではいる。
オレは階段を降りて、キッチンへ向かった。
「さて、今日の夕食は何にするかな……」

何とというか、妙に心が躍っていた。

「何？それは真か」

「はい、間違いありません。完全に長門水希の手作りお弁当を食べ
ていました」

「それはけしからんな……。よし、1週間後の放課後に奴を
捕縛して事情を洗いざらい吐き出させてやろう」

「そうですね。それも『女装部』努めですから！」

「深海ソラに、『女装部』の恐ろしさを思い知らせてやろう……
……」

t o b e c o n t i n u e d

6月・リア充の実態（後書き）

どうも、七色アゲハです。

読んでくださっている方、本当にありがとうございます。
では、また次のお話で。

6月：女装と荒縄と合言葉と

「いい？ここへ入るための合言葉は、『海と空』だからね。ちゃんと覚えておいてよ？」

「『海と空』って、正反対でしょ？誰もこんない合言葉思いつかないよ！ボクって天才！」

「岬くんも早く覚えてね？この言葉でボクと岬くんを結び付けるんだよ。離れたって、繋がるんだから」

「お互いに想っていれば、きっと繋がるよ。またね、岬くん」

「深海ソラ。ちょっと我々に付き合ってもらおう」

6月も終盤に差し掛かった頃、オレは登校するなりいつもと雰囲気が違う『女装部』の面に捕らえられた。理由はさっぱりわからない。何かコイツらの癪に障るようなことしたっけ？思い出しているうちに変態たちは、乱暴な手付きでオレを引き摺っていく。ちよ……ちよつと待て……

「え……オレが何したって言うんだよ！？何もしてないっつーの！」

「今日の我々は『女装部』じゃない。高校生活でバラ色生活を送る輩を裁くための『女装部』だ。今回は貴様の罪を償わせてやろう」

「もはや『女装部』じゃないじゃん！別の部活になってるじゃん！そんな活動をする部活なんて聞いたこともない。つか、ただの嫉妬じゃん。」

「お前らって醜いよな、人を羨んで、拳句の果てに実力行使だもん

な」

「いくら深海ソラだと言えど、今の我々を侮辱するなら女装と写真集撮影を強要するぞ」

「そこはいつもと変わらないのかよ……」
本当に頭の腐った奴らだ。

そして、オレは変態たちに連れられて『女装部』の部室へと連れ込まれた。扉には2人の門番がいて厳重に鍵が掛けられている。それに、今のオレは手足を荒縄で縛られており自由に身動きは取れない。くそっ……何か気持ちいい いや、気持ちよくないっ！

幸い口は封じられていないが、どういいうわけか縛られて床に転がっているオレを入念に撮影している変態がいる。何を想像してるんだよ……！！

「何をする気なんだよ！何もしてないだろ！？」

オレは抵抗を試みる。部室内の一番大きな机に偉そうに腰掛けているのはきつと部長だろう。その部長でさえ、ビデオカメラを回してハアハアしている。うえ……気持ち悪っ。

一瞬の表情の違いを見抜いたのか、部長はゆっくりと話し始めた。「深海ソラ。貴様は、2週間ほど前から転校生の長門水希の手作りお弁当を毎日食べていただろう？」

ギクリとなった。なんでコイツらが知っているのか怖くなったし、カメラを回しているコイツらも怖くなった。殆どストーリーカーじゃないか。

「どうだ？否定できるのか？」

ほくそ笑みながら部長は訊いて来る。悔しいけど、大人しく首を縦に振っておいた。

「次の質問だ。貴様と長門水希はどのような関係にあるのだ？」

さあ、来た。絶対来ると思った。関係を聞いてくるヤツ。

オレと水希はどんな関係かって？多分お前らが思ってるよりも複雑でメンドクサイ関係だよ。でも、ちゃんと答えないとコイツらは

何をするかわからない。テキストに答えておくか。

「あー……ク」

「嘘を吐くな」

まだ言い切っていないのに……。

「嘘なんか言っていない。オレと水希はただのクラスメイトだよ！」

「ただのクラスメイトの話をするのに、なぜ貴様の顔は赤くなるのだ？」

「……へ？」

変態どもがさつきより更にハアハアしている。そんなにオレの縛られた姿はお前らの欲望を引き出すのかよ!?

それはともあれ、自分がそんなことになっていくなんて知らなかった。まあ、今赤いのは水希の話をしているだけが原因じゃないけど……。け、けど、別にMじゃないんだからねっ!?

「べ、別にこれは……!」

更に紅潮するのがわかる。自分でわかっていても止められないよお……。ハア……んはあ……やばい、やばいよ……。どンドン興奮していくよお……。

「さあ、はつきり言え。貴様と長門水希はどのような関係なのだ? 早く言わねば、更にウレシイ仕打ちが待っているぞ……」

さ、更にウレシイ仕打ち……? え、え……これ以上やったら、オレもうダメかも……。

つか、答えれば開放されるのか。じゃあ、答えちゃおっか。

「わかったよ、オレと水希は同き」

「嘘を吐くな」

「ええっ!?!」

対応が早すぎる!!

「ただの同級生なのに、どうして弁当を作ってくる必要がある。明らかに同級生以上の間柄だろうな」

万策尽きたか……。正直に吐こう。

だがその前に……

「正直に言うからこの縄を解いてください。この体勢じゃ、ちよつとダメかも・・・」

「ふおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!!!!!!!!」

「なんで！？どうしてそこで興奮するの!？」

変態は物凄い勢いで興奮していた。もうワケがわからないっ!

「ふむ・・・貴様の性癖も明らかになったし、充分目に焼き付けたし、販売用のDVDのネタも撮れたしもうよいかもしれないな。」

おい、解いてメイド服に着替えさせる。そして下はスク水、紺だぞ
「はっ!」

あれ？解いてくれるのはいいんだけど、今よりも更に恥ずかしい格好をさせられるんじゃない？何この流れ。

変態が鼻息を荒くしながら、オレを縛っている縄を解いていく。変態に体を触られるのは決している感覚じゃないわけで、それで興奮したりするわけで・・・。手足が自由になり、跡がついていなか確認する。あ、やっぱり食い込んでたんだ。そんで、このまま逃げてやるうとするとうる人の変態がオレを取り囲んだ。へ？まだ何かやるの？

「済まないが、少しだけ待っていてもらおう」

ハンカチをオレの顔に覆い被せた。・・・なんか、甘い匂いだ・・・。

目を覚ますと、オレはメイド服を着ており、下着はスク水という恥ずかしすぎる格好をしていた。

・・・何があつたんだ、オレ。

「お目覚めかね、我々のメイドは」

部室の入り口から偉そうに入ってきたのは変態を統べる変態だった。

「なんだこの格好は……」

「見てわからないのかね？我々の最大級の娯楽と生き甲斐だ」

「バカだろ、メイド服が生き甲斐とかただのバカだろ」

「まあ、それを着用している貴様の生き甲斐も知れたものだがな」

腹立つな、コイツ。

「残念だけど、これはオレの意思じゃない。変態が自分たちで着せたヤツだろ？」

「でも、その格好でご奉仕する貴様は結構萌えるぞ。それで稼いでみたらどうだ？」

「変態のせいで身体売るとか、絶対しないわ」

「そんなもので人生投げ出すとかありえない。」

「今は昼休みだ。何か食べたいものはあるかね？」

へ？と間抜けな声を上げて、ケータイを見る。既に1時を指している、昼休みの時間だ。つかまったのが朝だから、半日は寝て過ごしたということになる。なにしてんだ、オレ。

「……何時間監禁してやがる」

「ざっと6時間だね。君の欠席届はしっかり出しておいたよ」

「そういう問題じゃない……。オレは一応教室に入ってるんだよ。オレが学校に来ていることくらい割れてるっつーの」

「ふん、早退届も出してある。矢部にも深海は風邪で早退したと伝えてある。これで思う存分我々にご奉仕できるぞ。よく考え」

「……待てよ？」『女装部』の連中がオレを監禁してたって矢部に伝えれば、『女装部』は廃部になるんじゃないか？いくら活動内容に沿っていると言えども、他の生徒の授業を妨害するのはマズイことだと思う。いや、矢部でなくとも変態たちの所業を明かせば廃部は免れない。……我ながら妙案じゃないか。でもどうやってここから抜け出すが問題だ。今は門番はいないが、突破するには部長さんを倒さなければならぬ。今のオレに戦闘力は皆無だ。

メイド服で下はスカートだし、スカートの中はスク水だし。さて、どうするかな……。

「誰が奉仕するか。変態には変態なりの過ごし方ってのがあるだろ？こんなことしなくても欲情は満たせるんじゃないか？」

「いや、生じゃないと萌えない」

腐ってる。完全に腐ってる。

「普通はだな、妄想を膨らませておいてから実物を見て興奮するのだ。今の貴様の言い分だと妄想だけでも過ごせるんじゃないか、というワケのわからない生活をしろということだろう？そんなことが我々にできると思うか？『女装部』はそんな欲求不満を晴らすために存在しているのだ。この人があんなかつこしたらどうなるんだろう、と期待と妄想を膨らませておいてから実物を見て興奮するわけだ。それが最大級の娯楽であり、最高の贅沢なのだよ。他にも例があるが、例えば

「……なんか、語りまくってるけど気が逸れてるっぽいな。今のうちに脱出しちゃえ！」

オレは腰を浮かせて、変態の真髓を語っている部長にタツクルを食らわせた。

「ぶほえっ！」

腹部に直撃したらしく、逃げるための時間は稼げたようだ。扉を勢いよく開いて、猛ダッシュ。後ろを確認している暇があったら走るのだ！走れ、メロ……深海ソラ！！

と、どこかの名作にあつたフレーズを丸パクリしながらオレは廊下を爆走した。もはや服装など気にしている場合ではない。階段を飛び降りて、窓から窓へと飛び移る。他の生徒は目を丸くして見ていたり、ヒソヒソと何かを話していたけどそんなことを気にしている場合じゃない。

「これ、廊下を走ってはイカ……へ？」

廊下を走るオレを注意しようとした先生も（多分オレの服装を見て）口をポカンと開けていた。

徐々に集まってくる野次馬を押し退け跳ね除け、オレは教室まで完走した。扉を勢いよく開けて、転がり込む。

「きゃあっ!?!」

女子が悲鳴を上げたが、気に留めなかった。それよりも、今は生還を喜びたい。

「おお!? 誰だこの美少女は!?!」

「ユツキiiiiiiiiiiii!!! バカにしてんのかあああああ
あ!?!?!」

ユツキはメイド服のオレを見て、驚きの声を上げていた。コイツだけはオレの性別をちゃんと認識してると思ってたのに。

「お、ソラなのか? どうしたそんな格好で」

『女装部』に襲われた。朝連れてかれてから6時間も監禁されたんだよ。荒縄で縛られるわ、女装させられるわでたまったものじゃない」

「でも、似合ってるぞ? ソラが女だったら確実に惚れてる」

「何だお前。殴りたいのか? グーで殴りたいのか?」

一呼吸。

「とりあえず、何があつたか詳しく聞かせてくれ」

「やっぱり頼りになる奴だな。コイツと友達でよかったぜ」

「朝連行されて、荒縄で縛られて、水希とどういふ関係か聞かれて、気が付いたら女装させられてた」

「……すまん、何一つ理解できないんだが」

「ソラは説明が下手ですね」

いつの間にか集まっていたのぶながもにこやかな表情でさらりと酷なことを言った。

「あと、1つ聞いていいか?」

ユツキが目を逸らしながら聞く。

「どうして、お前の下着が……その、スクール水着なんだ?」

『おお……なんて綺麗な脚なんだ……』

『あの脚を一回だけでいいから触ってみたい……!』

「・・・・・・・・ほえ？」

透き通るような白い肌。

ムッチリとした太もも。

紺のニーソックス。

きゅつとくびれている腰。

「あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・あああ・・・・・・・・！」

オレは震えが止まらなかった。こんな羞恥プレイをどうしてオレがされなきゃならないんだよ。

「きゃあ

っ！！！！見ないでええええええっ！！！」

女の子顔負けの絶叫が、きつと校内に響いただろう。

この恥辱・・・・・・・・絶対に忘れるものか・・・・・・・・っ！

結局、その日は制服が行方不明だったので半日をメイド服（下着はスク水）という屈辱的な服装で過ごした。好奇の目に晒されるわ、勝手に写メを撮る奴はいるわ、廊下を歩いているだけで上の学年からナンパされるわで大変だった。

そして、制服を取り返したのは放課後。『女装部』の部室から制服は見つかった。いち早く着替えたいが変態が何をしたかわからないし、第一気持ち悪いのでその日はメイド服で帰った。当然、水希と姉貴は驚愕の目でオレを見ていたワケだが・・・・・・・・。オレはすぐさま部屋に閉じ籠り、ルームウェアに着替えた。ま、当たり前だけどね。

でもって、さっき夕食を食べ終えて今はつかの間の休息。オレは冷蔵庫からチーズを取り出して適当に食べていた。

「ミナトさん・・・・・・・・？あれ、いないの？」

水希がお風呂上りなのか火照った顔で髪を拭きながらリビングへ入ってきた。

「姉貴なら今出掛けてる。なんか、買い物があるとか」
テレビを見ながら、答えた。

「ふうん……」

心なしか嬉しそうな声が聞こえてくる。姉貴の不在が嬉しいなんて変な奴だな。すると、水希は駆け足で二階に駆け上がりすぐに戻ってきた。

怪しい写真を手に持って。

「ねえ、ソラくん……」

感情の消えた声で水希は問う。

「この写真……何があったの？縄で縛られて、嬉しそうなソラくんが激写されてるんだけど」

水希がこちらに突きつけてきた写真には、縄に縛られて顔を赤らめて嬉しそうにしているオレの姿があった。なんで、コイツがこれを持ってんだよ……。

「それは……『女装部』に襲われて……」

「それなのに、なんで嬉しそうな？ソラくんて実はドMなの？縛られたいの？」

「……信じたくないことだが、水希の顔にS的な笑みが浮かんでいる。コイツ、もしかしてソツチの人なの？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「答えてよ。残り3分以内に答えてくれないと、また縛るよ？」

最高峰の笑みでオレを地獄のどん底に突き落とす一言を言い放った。

なんと答えていいのかわからない。ここで「はい、オレはMです」と答えるのがいいのか、「いいえ、オレは普通の人です」と答えるのがいいのか迷う。前者の場合、「なら、縛ってもいいよね？だって気持ちいいんでしょ？」とか言われて縛られそうだし。後者でも「嘘つき」とか言われて縛られそうだ。つか、この問題に最初から無事で助かるという結末は用意されてないの？

「早く答えてよ」

既に荒縄（うちの物入れに入ってた奴だ）を手にして、嬉しそうな笑みを浮かべている水希。

さてさて・・・困ったものだ。オレだって自分の性癖を明かしたくないし、縛られたくないし。仕方ないか。正直に言おう。

「水希・・・よく聞いて欲しい」

オレは語りかけるように言った。

「オレは、極度のMだ」

次の瞬間、視界が暗転した。

気が付いたときには、縄が全身に巻かれていて、きつく縛られていた。身動きをする度に得体の知れぬ快感が全身を迸り、頭の中が空っぽになっていく。えっと・・・？どうなったんだ？上を見ると、雁字搦めにされたオレの上に水希が跨り、嬉しそうにオレの頬を撫でる。やっぱり、Sだったか・・・。

「うふふ？これが、気持ちいいの？」

いやいや、これはやばいって。年頃の女の子が同年代の男の上で嬉しそうに微笑むんじゃないよ。

「話せばわかる。話せばわかりあえるんだから・・・！！」

抵抗を試みるも、スイッチの入った水希には届いていないようだ。「そういえば、ボクの昔の親友もこんなことが好きだって言ってたよ。君もそういう人なんだね」

昔の親友・・・？それって、オレのこと？

「水希は、その人のことをす、好きだったの？」

自分で自分のことが好きなのか、なんて聞くのは恥ずかしすぎる。地雷を踏んだかと思えたが、水希は顔を赤らめて小さく頷いた。これで、オレが秋谷岬だと認識させるための努力が可能になるだろう。理由は聞くな。

「そっか・・・。で、その人とは離れ離れなのか？」

「そうだよ。10年前のクリスマススイヴから、音信不通。どこに住

んでるのかもわからない。ずっと会いたって思ってるのに……
「関係ないが、水希のスイッチはオフに切り替わったらしい。助かった。」

水希がその気なら、オレにはとっておきのセリフがある。以前、水希がオレに言った言葉だ。今それを使わずにどこで使う!!
噛まないように、ゆっくり息を吸って、オレは語った。

「お互いに想ってれば、きっと繋がるよ。そうでしょ、水希」

最後の日 12月24日 水希がオレに言った一言。オレはその言葉を一日も忘れたことはない。ずっと水希のことを想っていたからこそ、不本意な形だが再び会えたんじゃないか。

「……そ、その言葉」
「ま、そういうわけでそろそろ解いてくれないかな?興奮しそうで仕方ないんだけど……」
いいセリフを言ったのはいいが、格好は縄で縛られて上に跨られている様だ。

すると、水希の目に再び光が灯った。
「それとこれは別の話だよ?今日はボクが満足するまで、延々と縛り続けるからね?」
オレにはその言葉が幸せなのか不幸なのかわからなかった。

今日は金曜日。一週間の中で一番幸せな日だ。ちなみに最悪な日は月曜日だというのは言うまでもない。明日が休日とあつてか、教室内の雰囲気は明るいものだった。当然、オレとユツキとのぶながもいつもとは顔色が違う。ユツキとのぶながはいい顔色だが、オレは昨晚、あれから姉貴が帰ってくるまで(出て行ったのが7時で帰

つてきたのは9時だ。どんな買い物をしていたのやら・・・あの荒縄プレイを続行させられていたので顔面蒼白だ。姉貴が寝て、オレが寝ようと布団に入った途端再び水希が現れてオレを縛り上げてさらって行った。おかげで昨晩は全く眠れていない。水希はすぐに眠れたようだが、オレは興奮しすぎて目が冴えていた。全く、オレの身にもなってもらいたいものだ。

当然だが授業も、集中できず、すぐに眠ってしまった。

そこで、オレは夢を見た。10年前に秘密基地を作ったときの夢だ。あの時は、水希が先陣を切って隠れられそうな所を探して、水希が合言葉を決めた。その合言葉がなんだったのかは覚えていない。

「いい？ここへ入るための合言葉は、『海と空』だからね。ちゃんと覚えておいてよ？」

水希は言った。

「岬くんも早く覚えてね？この言葉でボクと岬くんを結び付けるんだよ。離れたって、繋がるんだから」

もしかすると、この時点で水希はオレとの別れを察していたのかもしれない。これがいつの出来事だったかは覚えていないが、12月ではなかった気がする。

「お互いに想っていれば、きっと繋がるよ。またね、岬くん」
夢特有の不安定な視線でも、その言葉を紡ぐ水希の表情はしっかりと確認できた。そして、オレは父さんに連れて行かれた。そこま

でが幸せな記憶だ。

「・・・・・・、合言葉は『海と空』、か」

目覚めても、夢の中で聞いた言葉がくっきりと残っていて、さらに口に出していたようだ。

「ソラ・・・くん？」

隣で水希が信じられないものを見たような表情でオレを見つめていた。何があったの？

「ん？どうかした？」

寝惚けている頭で、水希の方を向く。

「その合言葉……」

一呼吸。

「その合言葉、どうして知ってるの？」

水希の声は、震えるほど怖かった。

6月：女装と荒縄と合言葉と（後書き）

遅くなってしまいました。

七色アゲハです。

今回も読んでくださった皆様、ありがとうございました。
受験勉強に追われ、遅くなってしまった次第です。

これからもよろしく願います。

6月・そこに王子様がいるからだ

「どうしてその合言葉を知ってるの？」

水希は世にも恐ろしい声で言った。

さて、これは困った。どう弁解してもオレへの精神的ダメージは深すぎる。逃げ道も見つからないし、生憎オレは水希を丸め込むような話術は持ち合わせていない。ということ、オレは適当に逃げられる道を自分で作った。それは、自分が水希と関係していたことを仄めかしていそう、尚且つ普通の返答だ。

くられ・・・っ！

「オレの昔の親友が作った合言葉だ。お前には関係ないんじゃないの？」

「ソラくんの昔の親友・・・？その人の名前は？」

お、更に深く追求してきたか。その返しも決まっている。

「名前は忘れた。知っていても、水希の知らない人だよ。言っただけ伝わらないと思うよ」

「本当に覚えていないの・・・？」

水希の表情が悲しみに満ちてきた。あれ・・・地雷でも踏んだかな・・・？まさか・・・オレの事を思い出し始めてきた、とか？

「ソラくん・・・その秘密基地ってどこにあった？」

ちなみにだが、オレは秘密基地とは一言も言っていない。これは期待できるんじゃないのか？

「秘密基地・・・ね。公園の茂みの中にあつたかな。そこには合言葉を言わなくちゃ入れなくてさ、何回も忘れたっけ・・・」

何回も忘れて、何回も怒られた思い出がある。今までは笑い話だったが、ここでは重要なカードとなる。雑に使っては損するだけだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

水希は震えている。何が来るのか身構えていると・・・・・・・・

「・・・・・・・・わかったよ・・・・。君はもう、ボクを」

次の言葉を聴こうとした瞬間、視界の端からツインテールがオレに抱き付いてきた。

「ソラ　　っ！会いたかった　　っ！！」

熱烈抱擁。直立不動になる水希、そして困ったことに最悪のタイミングで最悪な奴が来て下さった。

淡いオレンジのツインテール。あどけなさが残っていないながらもどこかに大人の色気を感じるその容姿。白い肌に、スラリと長い四肢。英語ぺらぺらの帰国子女。そしてオレの女装姿にしか興味のない腐女子。

「このえみはる」
九重美春。

「ちょ・・・美春かつ！？もう戻ってきたの！？」

「もちろん！ソラに一刻も早く会うために向こうから直でここへ来たのよ！どう？あたしのいない生活って寂しかったでしょ？そんなんでしょ？」

更にきつく抱きしめてくる美春。更に硬直する水希。あ・・・これってもしかして、よくある浮気男の顛末と酷似してるよね？もうダメだね、オレはここで浮気男として認識されるよね？

「ささ、あたしに誓いのキスを・・・・」

瞳を閉じて端正な顔を近づけてくる。髪からは仄かにシャンプーの香りがして、いい形をした唇がオレのキスを待っている。目の前に水希がいるけど、かなりドキドキする・・・・・・・・！
耐えたオレの理性は美春をそつと離し、ゆっくりと語った。

「美春・・・・。今はちよつと相応しくない状況なんだけど、わかるかな・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・どうして？」

オレの視線の先を追っていく美春はある一点を見つめて動きを止

めた。

「なるほど、この女の前じゃやっちゃいけないってことね。わかったわ」

「全然理解してないでしょ……」

コイツの超マイペースには困ったものだ。美春はオレから離れて、水希を一瞥すると優雅な足取りで教室を出て行った。

オレにとってはここから勝負だった。水希は屍のような目つきでオレを見ると、こう言ったのだ。

「ソラくん……今日帰ったらボクといっぱい遊ぼうね」

もうダメだ、と直感で感じ取った瞬間。オレはクタツと机に伏した。

昼休み。またもや美春はオレの元へ直行してきたらしく公衆の前でいきなり抱きついてきた。ちなみに先程水希の機嫌を損ねてしまったため、弁当はなしになった。そんで、今日はやけにこやかなユツキとこれまたにこやかなのぶながと購買部のパンで済ませることにした。購買部へ向かう途中、ヒソヒソと話し声が聞こえてきたので耳を傾けていると、

『なあ……あそこにいる美少女二人って、百合なのか……?』

『どう見ても百合だろ……。女同士で禁じられた愛を育ててるんだよ。そっとしておけ』

オレの評判がどうなっているのか、じっくり聞き出したいが我慢しておいた。誰が女だ。

オレはメロンパン2つとジャムパンを買って、いつもの屋上へ行った。沈んでいる気持ちとは裏腹に気持ちよく晴れている。

「まったく、神様はオレの敵なのか……」

ブツブツとつぶやいても無駄なので、空いているテーブルに着く。
「ソラ、お前ら何があつたんだよ」

向かいで1メートルもある名物パン「チョコタワー」を豪快に頬張っているユツキが尋ねてきた。

「気になりますね。リア充の実態が暴けそうなので教えてください」
のぶながは最近オレの事を「リア充」と呼び始めた。こいつはやっぱ鬼畜だ。

「あたしも気になるなあ……。あの子絶対にソラのこと好きだよ。誰に断って付き合ってるんだか」

お前に断る必要はないだろう。この天然野郎。

しかし、美春の言葉には間違いがある。

「あのな……。水希はオレじゃなくてもっと素敵な王子様を心から待っているんだ。オレなんてお呼びじゃないんだよきつと」

「それ前も聞いた」とユツキ。

「聞きましたよ」とのぶなが。

お前らちよつと黙ってる。

「へえ〜白馬の王子様ねえ〜。意外とロマンチックな子じゃない」

美春は少しだけ羨ましそうな表情で呟いた。・・・美春にも王子様と呼ぶべき人物がいるのだろうか。少しだけ気になった。

「美春の王子様はソラだろ〜？待つ必要なんかないじゃねえか」

ユツキがいやらしい笑みで余計な一言を吹き込んだ。

「そうですね。美春さんにはソラがいるじゃないですか。他人なんかを羨むより、コイツを地獄の底へ突き落とすのが先決です」

あれ……。？のぶなが、今すごいヒドイこと言った。

「あのさ、のぶなが。お前最近口調がひどくなってない？今の一言さりげなく傷つくんだけど」

のぶながは最上級の笑顔で、

「そんなことないですよ」

。。。。。。もういいや。

「。。。。美春は昔から変わってないなあ。。。。いつまでオレの

女装に萌えてるんだ？」

ちなみに、美春とオレとユツキとのぶながは中学以来の付き合いだ。偶然3年間同じクラスでそこそこ交流もあった。ユツキとのぶながとの出会いは、オレがユツキに喧嘩を売ったのが出会いだっただけのぶながは女装趣味（中学にもいた）の変態に捕まった所で意気投合。それから仲良くなった。そこで美春はたまたま女物の衣装を着ていたオレに一目惚れしたらしく、その現場でオレに抱きついてきた。どれも普通の出会い方じゃないが、今は親友なんだから問題ないだろう。

「ずうううううつとだよ。前はソラ的女装が好きだったけど、今はありのままのソラが好き」

一瞬ドキッとしてしまった。ま、まあ・・・美春は普通に美少女だしドキッとしても問題ない。

「ソラは人気者だな。羨ましいぜ・・・美少女3人に囲まれてるお前が・・・」

ユツキは何が悲しいのかわからないが、滂沱と涙を流していた。

「ユツキ、美少女は2人だけです。僕は女じゃありません」
のぶながが初めて自分を僕って言った。ある意味レアかも。

「ソラ！お前が女装しててもいいから、一度だけハーレムを体験させてくれっ！」

意味不明の頼みごとに、オレは絶句した。女装が似合うと言って、オレとのぶながだけだし。

「悪いけど、無理。ユツキは顔だけはいいんだからさもうちょっと頑張って見たら？」

「そうですね。顔だけはいいわよ」

オレに続き、のぶながと美春までユツキに止めを刺してしまった。まあ、事実だししょうがないか。

メロンパン（2つめ）の封を切ってパクリとかぶりつく。オレの個人的な意見だけど、菓子パンの王様はやはりメロンパンだ。あん

ぱんとかジャムパンでもいいけど、中に入っているだけじゃなんかつまらない。それに対しメロンパンは外側がしつかりと味付けされていて、中はふんわりとしている。それが菓子パンの原点であり頂点だと思う。

「……つと、語っている暇はない。」

「ときにユツキ。お前のアピールは100パーセント通じないと思うよ。」

「アピールと言うのは水希に行っているやつだ。」

「どうしてだ？長門ちゃんには王子様がいるからか？そんなもんカシケーないね。王子様がいるなら王子様を倒す。また、王子様が乗っていた白馬でさえ倒す。」

「どうして王子様を倒すんだよ。」

「そこに王子様がいるからだ。」

ユツキがジョージ・マロリーの格言を文字つて最低なことを言った。

「でも、ソラはどうして王子様の存在を知っているんですか？まだ会って数週間しか会ってないのに。」

のぶながは鋭いところを突いてきた。いくら親友と言えど、10年前の出来事は話していない。

「そこに王子様がいるから。」

咄嗟にユツキの言葉を借りた。オレの判断力ってこんなものなのか……。

「パクってんじゃねえ。著作権侵害だ。」

「ユツキだって元ネタからの引用じゃないか。」

一触即発の状態で、美春がクスッと可憐に笑った。

「ユツキとソラって、仲良いんだね。見ているこっちも楽しくなるわ。」

「僕も同感です。」

美春とのぶながが二人で可憐に笑っていた。

「そりゃあ……なあ。」

ユツキが照れくさそうにオレに話を振る。

「出合いが喧嘩だからね。もう慣れたもんだよ」
オレとユツキは笑った。

こんな平和が続けばいいなあ・・・なんて思っていた。

放課後、水希はかなり情緒不安定っぽいので先に帰ってしまった。
まあ、あんな夢をみたオレも悪いし、仕方がないか。

「行こうぜ、電車出るまでにちよっと時間あるけどどっか寄ってくか？」

ユツキはフットワークが異様に軽い。休日でも「暇だから」という理由で他県に渡ったり、昼休みは、学食がへボいからといって警備の監視の目を潜り抜けたこともあった。コイツが寄ってこうか、なんていうとどこに連れて行かれるかわからないので、迂闊な返事はできない。

「ユツキはフットワークが軽いですからね、どこに誘拐されるのかわからないです」

「だよな・・・。ユツキってどーでもいい理由でトンデモないとこまで行くからな・・・」

「失礼な。今日は駅前の店でも寄ってこうと思っただけに」
頬を膨らまして怒るユツキ。今日はって言っている時点でアウトだろ。

「わかったよ・・・。出るまでの時間潰すんだろ？さっさと行こうかばんを背負ってオレは教室を出た。」

そんでもって、駅前のファストフード店の一席。オレたちは各自

好きなものを注文し、適当に話をしていた。

「なあなあ、そのシェイク一口くれよ」

ユツキはオレのバナラシェイクを要求してきたが、オレがそこま
でお人よしに見えるのか？

「ヤダね。オレのシェイクはオレだけのものだ。ユツキにはポテト
があるだろ？オレにはないんだよ」

冷たく返すとユツキはふてたようにポテトを鷲掴みにして頼張っ
た。

「あ、そだ。ユツキに聞きたいことがあって……」

「んあ？ソラが俺に質問なんて珍しいな」

「ちよつとだけ、ね……」

確かにユツキの言うとおり、オレがユツキに質問や頼みごとをす
るのは珍しい。喧嘩してから一回もそんなことしなかったからなあ。
……。

そして、オレの聞きたいことは恋愛についてだ。横には淡々とシ
ェイクを飲むのぶなががいるが、気にしている場合ではない。これ
で家に帰れば、瞬時に快樂地獄へと直行だ。二夜連続でそんなこと
になるのは避けたい。今日は授業中の睡眠でなんとか繋ぎ止めたが、
明日はそうはいかない。

「相談なんだけど……さ」

緊張する……。

「きつ 機嫌を損ねた女の子はどう扱えば機嫌が直るのっ

!？」

「ブバアツ!？」

隣でシェイクを飲んでいたのでぶなががシェイクを壮大に吹き出し、
ユツキは顔を紅潮させたまま硬直していた。あれ？何か変なこと言
った？

「ソ……ソラ……っ！そのセリフは、結構……ドストライク
ですよ……あはははははっ!!!」

堪えていたのぶながはセリフが終わると同時に大きく笑い出した。

コイツが大声で笑うなんて珍しいな。

「なるほど・・・長門ちゃんの機嫌を損ねちゃったから気にしてるんだな？まあまあここは恋愛の天才、橘雪時にお任せをっ」

「でも、成果が出てないよ・・・？」

「それは問題じゃないっ！」

コイツ、現実にも目を瞑りやがった。

「まあ、簡単なことだろ。ギュッと抱きしめて耳にキスすれば一瞬で仲直りだぜ」

「ッバアッ!?」

今度はオレとのぶながが一斉に吹き出した。

「そ、そそそそんなことできるわけないだろっ!? そんなことしたら・・・!!」

その先を考えるだけでゾツとする。

「ソラは意外とウブですね・・・。。恋愛経験値が少ないのしよようか」

「のぶながだつて吹き出しただろっ!? お前だつてできないでしよっ！」

「いえいえ・・・できますよ。耳でなくとも唇でも、おでこでも」

「どうして!? 経験あるの!？」

「はい。中学時代に14度ほどありました。みんな向こうから要求してきましたよ?」

この時、初めてののぶなががプレイボーイ(ガールかな?)だとわかった。わかりたくない新事実だったけど仕方がない。

ちなみにだが、中学時代ののぶながはちよくちよく姿を消していた。週末とか休日に連絡がつかないと思ってたらそういうことだったのか・・・。

「ちなみに、性別は問いません。男の人だったり、女の人だったりしました」

前言撤回、全然プレイしてない。

「まあ、いいや。んで、ユッキ。どうやってき・・・キスマで持つ

結局、全部白状した。

耐えられなかったんです。ユツキとのぶながの精神攻撃に。

翌日。

昨夜は帰るなり水希の荒縄に捕縛され、延々と縛り上げられた。

一昨日よりいい感度・・・いや、きつい縛り方で、オレの全身には荒縄の跡が残っている。つたく、限度つてものを知るべきだ。

その日は一度も水希と会話せずに過ぎていった。

そんで更に翌日。金曜日。

精神シヨックからなのか、水希は学校を欠席した。どういうわけか知らないがいきなり高熱を出してぶっ倒れた。それも、オレの家で。風呂上りでリビングに上がった瞬間倒れた。幸い姉貴がいたのでそっちに任せただけ・・・倒れたときにバスタオルがはだけてイケナイモノが見えそうになった。

てなわけで、明日とあさっては休日を利用して水希の看病に充てることにした。ただのんびり過ごしても無駄だし。

そんなこんなで土曜日の午前9時。

目が覚めて、適当に朝食を済ませた後オレは水希の寝ている和室へと氷を持って入った。水希はまだ寝ているらしくすやすやと寝息が聞こえてくる。布団の横に正座で座り、寝顔を拝見する。普段の美少年のような面持ちは、具合が悪いとか弱い乙女に変わっていた。なんだかんだ言っつて、水希は可愛い美少女だ。

(・・・いつになれば、コイツはオレを思い出してくれるんだろう)

水希の寝顔から視線を外し、天井を仰ぐ。ヒノキの天井には色々な模様が入っていて、結構面白い。

オレの思いは一途だった。

水希と別れてから一度も女の子とオイシイ付き合いはしたことがない。まあ、告白されるようなことはしばしばあったが全て断ってきた。それは、いつか水希と再会できると信じていたからだ。

念願の再会。教室に入ってきた瞬間にオレは感じ取った。コイツが長門水希だということ、10年前に別れた親友だということに。でも、水希は完全に忘れていた。最初名前を聞いてきたとき、すこしだけ緊張していたのは見ていてわかったがオレの名前を言った途端に、その表情は少し悲しげなものになった。

これらの行動から言えることは、水希はオレと秋谷岬を別人だと思いついでいること。そして、オレのすべきことは秋谷岬と深海ソラが同一人物だと水希に証明させること。口では簡単に言えるが、行動に移すのは難しい。10年前のことに触れれば、水希は本気で怒る。それほど過去に思い入れがあるんだろう。それはオレも同じだ。だからこそ、こつこつと努力しているわけで……

「うん……？あれ、ソラくん」

色々考えていると、水希が目を見ました。

「ゴメン……起こしちゃったかな？」

「ううん。ちよつと夢見ててさ、その夢のオチで目が覚めちゃったんだよ」

そう言つて、微笑む水希。まだ具合は悪そうだ。

「夢……ねえ」

オレは氷を取り出しながら呟いた。

「その夢でさ、ソラくんとそっくりな人がボクと遊んでたんだ。どうしてか、すごい懐かしい感じがした。前から知ってるような、幼馴染みたいな感じ」

氷を既に氷が溶けている氷嚢の中へ入れる。平静を装っているがかなり緊張してる……。

「そしてね、その人に合言葉を聞いたらちゃんと返ってきたんだ」

一呼吸。

「『海と空』って。ちゃんと答えてくれたんだよ」
流石にハツとなった。

「水希……」

「よく考えるとき、うみとそらって、両方ソラくんの名前に入ってるよね。何か、偶然じゃないみたいだなあって」

既にオレは落ち着きを失っている。水希がオレを思い出してくれる瞬間を待ち望んでいるのか、それとも別の何かを期待しているのかわからない。

「正直言うとな、初めてソラくんに会ったときあの人によく似てるなあって思ったんだ。でも、名前を聞く限り別人だったんだよ。……ねえソラくん。一つだけ訊いていい？」

水希が上半身を起き上がらせて、オレの目を真っ直ぐ見つめた。

「ソラくん、ボクのこと覚えてない？」

少し赤らんでいる顔で、水希は言葉を紡いだ。

待ち侘びた一言。ずっと待っていた一言。水希からの一言。

なのに、一言も言い返せない。いつの間にかオレの掌は汗で濡れており、額には一筋の汗が流れている。どう答えて良いのかわからない。

「うん……。覚えてるよ」

すると、水希は微笑んで

「そうかぁ……。やっぱり君が、岬くんだったんだね……」

沈黙が流れる。水希は何かを堪えるように俯いて、震えている。

オレはどうしていいかわからず天を仰ぐだけだった。

「ねえ……。岬くん……。抱きついて、いいかな？」

熱のせいじゃなく、水希の顔は紅潮していた。オレの呼び名が岬くんであるところを見ると、どうやら同一人物だと認識されたようだ。ならば……。何も堪える事はない。

「オレでよければ、どうぞ」

言つと水希は抱きついてきた。胸に当たる顔がまだ熱い。

「岬くん・・・ずっと、ずっと待ってたよ・・・？ボク、ずっと待ってたんだよ・・・？君に会えるからって、誰ともお付き合ひしてこなかったんだよ・・・？全部、全部君のためなんだよ・・・？」

感極まつてついには泣き出してしまった。頭を撫でながら紡がれる言葉を聞く。

「あの日の約束・・・覚えてる？ボクが君に話したかったこと・・・ここに言つてもいいよね？」

10年前、オレと水希は約束をして別れている。オレの約束は、オレが秋谷岬でなく深海ソラという名前だと言つ事を伝える。水希の約束が何なのかはわからないけど。

オレが頷いたのを感じ取つたのか、水希は顔を上げてオレに言つた。

「10年前から、ずっと岬くんのが好きだった・・・。ワガママなボクと楽しそうに遊んでくれた岬くんが大好きだった・・・。本当は寂しいのに、ボクとは笑顔で遊んでくれる優しさが大好きだった。今でもその気持ちは変わらないの・・・。」

・・・これ、実は夢だったつてオチじゃないよね？嫌な予感がしてならないんですけど・・・。

「岬くん・・・だあいすきっ」

更にきつく抱きしめられるオレ。本来なら立場逆じゃない？おかしくない？

「これからは・・・ずっと・・・岬くんと・・・。」

すやすやと規則正しい寝息が聞こえる。どうやら、途中で眠つてしまったようだ。・・・なんとというか、散々「待て」をされて拳の果てに寝オチかよ。オレの身にもなってもらいたいね。こっちが泣きそうだよ。

ともかく、オレは水希をそつと寝かせて和室を出た。リビングには普通の顔をしてココアを飲んでいる姉貴がいたが、視線がぶつくと優しい笑みで返してくれた。こういうところが、姉貴のいいところだな。

「よかったわね、あんたが岬くんだと認識してくれて」

「まあね・・・」

それだけ答えると、オレは2階上がった。

オレは使命を果たした。

秋谷岬と深海ソラが同一人物だと認識させることができた。

満足感とともにやってくる虚無感はなんだろうか。何かが引つかかる。

とりあえず、ハッピーエンドってことで。めでたしめでたし。

1週間後、6月の最終日だ。

水希の熱も下がり、朝食を囲んでいる最中。

水希はトンデモないことを言った。

「ご迷惑をかけてしまいました・・・。ミナトさん、すみません・・・」

「いいのよ、殆どソラが看病してたんだからお礼はソラに言って」
姉貴のウインクがこちらを向く。ナイスマシスト！

「ありがとね、ソラくん。おかげでいい夢が見られたよ」

「いや、礼には及ばないよ」
「・・・いい夢？」

「そんでさ・・・夢ってどんな内容？」

「え？ボクの元に昔の親友が出てきてさ、約束を果たせたんだ。夢だったけど何かすつきりした」

ええ・ええ・・・ええ・ええ・？

番外編：ちよつと息抜き（前書き）

脱力感満開の話です。

よろしく願います。

番外編：ちよつと息抜き

どうも、七色アゲハです。

本編も6月編を終了いたしましたので、登場人物によるテキスト的な話を書きたいと思います。

ホントにグダグダでいくつもりなのでそういうのはゴメンという方だけ戻るをクリックしてください。

それでは、どうぞ。

ソラ「 というわけで、オレたちでテキストに話をします」

のぶなが「 どういうわけなのか、しっかり説明してくださいよ」

ソラ「 んー・・・急に振られたからわからないよ・・・。ユツキ、何か知らない？」

雪時「 俺も知らされてない。いきなりココへ呼び出されて話してるところだ」

のぶなが「 ココとか言われても今回は地の文ないですからね。わかりませんよ」

雪時「 はあ！？ 会話文だけで構成していくのか!?!?」

ソラ「 そうみたいだな・・・。こーゆーのはユツキとか美春とかに任せちゃえばいいのに」

のぶなが「 確かに。その2人なら軽くコントができそうですね」

美春「 ソラ、何か呼んだ？」

ソラ「 タイミング計ってただろ。オレが名前呼ぶまで待ってただろ
雪時「 まあまあ、会話文だけなんだし人数は多い方が盛り上がるでしょ」

のぶなが「 それもそうですね」

ソラ「 それは否めないけど・・・」

美春「なら、参加決定ね！で、何を話せばいいの？」

ソラ「それが、何も知らされてないんだよ。テキストに話して来いとだけ言われたってねえ……」

雪時「なら、ゲームでもして罰ゲーム代わりに言わせるか」

のぶなが「ゲームですか。例えばどんな？」

雪時「そうだな……。何も使わないゲームが望ましいんだけど……」

美春「丁度良いところにトランプとかウノがあったわよ」

ソラ「地の文なしだから何でもやりたい放題だな」

雪時「んじゃ、ババ抜きでもやってみるか。ビリがそうだなあ……」

・・・人生のバラ色体験を語るとか」

美春「はいはいっ！あたし話しますっ！」

ソラ「まだ負けてないだろ……。気が早いなお前は……」

のぶなが「せっかちですね」

雪時「ほらよ、さつさとまとめろ」

ソラ&のぶなが&美春「ありがとー」

のぶなが「ここは今一番普通の格好をしている僕が先ですね」

ソラ「のぶながよ、あまり変なことを言うな。地の文なしだからみんなが変な格好してると思われる」

美春「ちなみにあたしは今ソラのことを受け入れるためにすごい格好をさせられてる……。いやああん！ソラったら……」

ソラ「やめええええい！！！！本気で誤解される！」

雪時「遊んでないでさつさと引け」

のぶなが「すいません。番外編なのでついつい……。よいしよつと」

雪時「ふむ……。悪くはないな」

ソラ「次はユツキが引くんだよ」

雪時「そう急かすな。お前の手札にジョーカーがあることくらいお見通しだよ」

ソラ「なんで……。っ！」

のぶなが「顔に出てますから。ソラはポーカーフフェイスができない人ですね」

美春「そういう不器用な部分がまた可愛い……………」

雪時「まあ、妥当だろう」

のぶなが「ユツキは引きが強いですね。全部捨ててるじゃないですか」

雪時「まだ序盤だからな。そんなことも不可能じゃない」

ソラ「美春、引いてよ」

美春「はい」

雪時「だいたい、こういう時って……………」

のぶなが「美春がババを引き当てるんですよ……………」

美春「ええっ!? 何で引いちゃったのよお!!!!」

ソラ「美春の引きが弱いから」

のぶなが&雪時「お前が言うな」

雪時「結局、最後の最後で引き当てたソラの勝利だな……………」

のぶなが「弱すぎますね……………」

美春「そんなところも好き……………」

ソラ「何でだ……………何で最後の最後でババを引くんだ……………」

雪時「まあ、そんなことはいいからお前のバラ色体験を暴露しろ」

のぶなが「内容次第では襲い掛かるかもしれないよ」

美春「あたしも戦闘準備しなくちゃ……………」

ソラ「えっと……………バラ色体験というと……………」

のぶなが「……………」

ソラ「この前結構可愛い女の子がうちに来て、夜遅くまで遊んでたっけな……………」

雪時「まあ……………いいか」

のぶなが「そうですね。問題ないでしょう」

再び七色アゲハです。

ちよつとした息抜きとして書いてみました。

ホントにグダグダですね。

これからも一生懸命書いていく所存ですので、よろしく願います。

7月：したいならしてあげてもいいんだよ・・・？

7月。7月。文月。ジュライ。

夏が始まった。オレが最も嫌いな季節である。どうして嫌いかわからない、理由は色々あるが一番はちゃんとした性別の更衣室へ入れないことだ。男子更衣室に入ろうとすると慌てて従業員に止められる。そして理性と本能が戦っている中着替えて外へ出ればまたもや従業員に女の子が男の子用の水着を着てはいけません！などと言われて強制的に更衣室へ連行される。そこで従業員が用意してくれたスタッフ用のシャツを着せられるのだ。おかげでプールも満足に入れやしない。なのに、なのにだ。

「ソラくん、プール行こ？」

水希から殺人的なセリフを言われた。

「は・・・？プール？」

「そう、プール」

水希はオレが何を言っているのかわからないといったような顔をしていた。わからなくても構わないからプールにだけは連れて行かないでくれ・・・。

「あ、もしかして・・・水着とか用意してないの？」

「あー・・・水着はあるんだけどさ・・・その・・・」

どう誤魔化していいかわからない。さあ、ここで力を見せるオレの判断力！

「水希と一緒に着替えることになるけど、いい？」

何を言ってるんだ・・・オレ。

「・・・何言ってるの？」

当然の返しだ。

き返つてよ!!」

ちなみにだが、死んではない。ちゃんと意識はある。だからこそ、水希が屈みながら近づいてくるとやばいんじゃないか。

「頼む……お願いだからその格好しないで……」

言われて気が付いたのか水希は自分の胸元を見て一瞬硬直し、後に絶叫を上げて背筋を伸ばした。今更隠しても遅い……。

オレは貧血になりかけながら眼福を恵んでくれた神様に感謝していた。

流石にキャミソール一枚は諦めたのか、後にナイキのウェアを着た水希がおずおずといった体で部屋に入ってきた。結構反省してるな……。別に水希は悪くないのに。

「ソラくん、大丈夫?」

「大丈夫だよ。水希が気にする必要はない。オレが水希の胸を見て興奮しただけだから」

ん?オレ今トンデモないこと言ったような……。

「……」

気のせいじゃなかったらしく、水希がジト目でこっちを見つめていた。

「……ねえソラくん。君、あの騒ぎの中ボクの胸を見ている余裕があつたの?」

身体を抱きながら水希は問う。視線を真つ直ぐに捉えられていて逸らせない。

言葉もなく、水希の目を真つ直ぐに見つめながらオレは首を立てに振った。そして、一瞬視界が暗転した。

「え?ちよつと待って……」

いつの間にか荒縄で全身を縛られていて、あられもない姿にされていた。

「そんなにボクの胸が見たいなら、好きなだけ見せてあげるけど見た分だけボクにも報酬くれるんだよね？」

縛られたオレの上に笑みを浮かべた水希が跨っている。イケナイイケナイ……。

あれ？なんかこれデジャヴ……。

「さあ……プールに行ってくれらるまできつくきつく縛ってあげるからね？」

荒縄を引つ張る水希。オレの全身に（以下略）

「ああん……ンはあ……」

あれ……今喘いだよねオレ。男なのに女顔負けの声だったよ今。

聞こえていたのか水希も顔を赤くして慌てているようだ

「な、なななんて卑猥な声を出すのっ！ソラくんが既に経験してるなんて知りたくもなかったっ！」

「待つて！これは誤解だ！決してオレの意思じゃない！」

なんかの拍子に緩くなっていた縄を力で解き、泣きながら逃げていこうとする水希の肩を掴んで振り向かせる。

「オレにそっちの趣味はないん　　っ」

バダン

オレは水希に覆いかぶさるように手を突いていた。幸い、手がついているのは床だ。水希の少し赤い顔が目の前に来て、心拍数が上がる。血圧も上がる。理性は崩れていく。やべ。

「ソラくん……」

水希から声が聞こえた。どうすりゃいいんだこれ。離れように離れられないじゃないか。

「な、なんだ」

「何がしたいの……？」

なんだその返答。何を求めてんだ。顔を赤らめて言う水希は異様

に可愛かった。

「別に、したいことはないけど」

そう言っただけの名残惜しさを堪えながら水希の上から動く。あー、汗かいた。

やっと安心地帯に避難したと思ったのに次に瞬間予想だにしない出来事に襲われる。

「……………は？」

今度は水希に押し倒された。なんなんだ今日は、こんなんばっかりか……………」

「そ、ソラくんがその……キスしたいならしてあげてもいいんだよ……………」

目を瞑り、徐々に顔を近づけてくる水希。ここで避けたら傷ついてしまうだろう。いけない、これはまさにピンチだ……………！もう彼我の距離は数センチ。水希の吐息がかかるくらいの距離だ。そろそろオレの理性にも限界が……………」

「ソラ！一緒にプール行こ」

愉快的な声と軽快な足取りでドアを豪快に開け放った美春がオレと水希の状態を見て凍り付いていた。

更なる混沌と誤解を招きそうな予感が……………」

「そう……………。ソラとそこの美少年くんは愛し合ってたんだね……………」

感情の消えた声で呟く美春。今すぐに爆発しそうな火山みたいで不気味だ。

「みかんへアーに何がわかるか知らないけど、ボクは女だよ？そこ誤解しないでよね」

「自分のことをボクって呼ぶ時点で美少年じゃないの。あたし、シヨタコンじゃないからあなたには関心が持てないなあ」

「何回も言うけど、ボクは男じゃない。みかんへアーの方が変なん

じゃないの？」

「あら？失礼したわ。美少年じゃなくて男装趣味の変態なのね。間違えてゴメンなさい？」

.....

何なんだ、オレを取り巻く険悪な雰囲気は。

美春は完全に水希に敵愾心を抱いてるし、水希も美春に敵愾心を抱いてる。例えるなら、磁石のN極とN極を強引にくっつけようとした感じだ。あ、別にS極でも構わないんだけどね。そこは問題じゃない。今問題なのはその原因がオレにあるということだ。このまま2人を野放しにしておけば、いずれはオレに矛先が向けられる。そしてオレは容赦なく叩かれるだろう。

「ていうか、あなた誰なの？名乗りもせずうちにうってくるなんて不法侵入以外の何者でもないよ」

「知らないのなら教えてあげるわ。あたしはソラの許婚よ。ねえ、ソラ？」

急に振られてビクツとする。視線の先には言葉にし難い迫力を持った美春の視線があった。いやいや、お前と許婚になった覚えもないし.....。その対面にはオレを信じてくれていると取っついてい水希の優しい視線がある。どうすりゃいいんだよ.....。

「いや.....そんな約束はした覚えがないんだけど.....」

一応、やんわりと断る。

「（何？このあとソラの嫌がる場所に連れ回すわよ？それでもそんなこと言えるのかしら？）」

アイコンタクトで恐ろしい恐喝がこちらに伝わってきた。オレの嫌がる場所って具体的にはどこよ？

「（具体的にはどこに連れて行くつもりだ？）」

「例えば.....メイドカフェとか」

オレ猛ダッシュ！四の五の言っている場合ではない、これはオレの性別が男でいられる最後の砦だ。ここが崩れればオレは性別を偽って生きていくことになる。それだけは避けたい.....っ！

「ソラくんっ!?!どこへ行くの!?!」

水希がオレの只ならぬ行動に困惑している。すまない・・・オレは自分の人生が大事なんだっ!

『そんなに、みかんへアーの方が大事だっと言うの・・・?』

その言葉を微かに聞き取ったオレは急停止して部屋へ戻った。悲しげな水希の顔を見て心の底から後悔する。

「そりゃね・・・オレだっつてメイドカフェに連れて行かれたら確実にスカウトされるからね。逃げたくもなるさ」

実際にカフェに行ったら店長らしき気持ち悪い外見の男性に「きみ、メイドになってみない?」と声を掛けられ店内の更衣室に連れて行かれて着替えさせられた苦い思い出がある。ちなみにだが、接客もした。

「わかったかしら?ソラはあたしの方が大事なのよ。わかったら男装女はお下がり願いたいわ」

「ちよつと、美春。それは言い過ぎじゃ・・・」

涙目になっている水希に気を使って仲裁に入る。やれやれ、世話のかかる人たちだ。オレが言うつと美春も少し言い足りない感じで黙ってくれた。これ以上、美春の毒舌攻撃を受けていたら水希が可哀想だ。

「んで、美春は何でうちに来たの?」

話を振り出しに戻し、本来の話題へと引き戻す。

「あ、そうだったわ。ソラとプールに行こうと思って来たんだけど・・・時間大丈夫?」

「時間は大丈夫だけどプールには行きたくない」

「「ええっ!?!」」

2人が目を丸くして驚いていた。そんなに珍しいかな。

「だって、ソラくんさっきまで行ってくれるって言ったじゃん!」

「そうよ!あたしとドキドキ密着遊泳してくれるんじゃないの!?!」

そんなことを言った覚えはない。勝手に脳内で話を進めるなよ。

「少し落ち着いて……。そうだ、下で麦茶でもどう？よく冷えるよ」

とりあえず、この2人を落ち着かせるためにゆっくり話し合うことが必要だ。

オレは2人を引き連れて1階へ降りた。

あれから数分話し合ったところ、2人の意見は平行線で一向にまとまる気配がないので仕方がなくオレは2人の要求を受け入れることになった。

まず、水希の要求はオレとプールへ行くこと。まだ、可愛いものだ。着替えのときだけ我慢すればそのあとはオレと水希のデートになる。そして、恐ろしいのが美春の要求。プールへ行くだけでなくオレと密着して泳ぐという。ただでさえ、水着という際どい姿だというのに更に密着するとなればオレはきつと本能に従ってしまうだろう。

2人の勢いに任せて近くのプール施設へ。ここは温水プールで、流れるプールやウォーターライダー、更には市内一の深さを誇る「深海プール」なんてのも存在する。溺れてしまうのではないかと不安になるかも知れないが、プールの水が、死海クラスの浮力を誇っているので沈むことなく浮力に任せて浮いていることができる。その心地よさが好評でそのプールは休日になると満員で入れなくなるくらいだ。オレは入ったことがないが、今日来たのも何かの縁だ。一度くらい入って見よう。

「ねえねえソラはどのプールに入りたい？」

早速ハイテンションの美春がオレの右腕を抱きしめながら問いかけてくる。ちょ……。その体勢だと胸が当たってるって……。
「ダメだよ、ソラくんはボクと一緒に入るんだよ！みかんへアーには渡さないからね」

左側の水希も腕を抱きしめているので胸が当たっている。これじゃあ、水着を見る前に倒れてしまうだろ。勘弁してくれ……。大層な入り口を抜けて、チケットを人数分買う。そして、ここからが修羅場だ。オレは何が何でも男子更衣室へ行かなければならない。どうやって従業員の目を盗むか、どうやって男子更衣室へ忍び込むかが問題だ。こうしていると、なんだかオレが男子更衣室を覗こうとしている変態みたいだけど、そこを気にしていたら勝負は始まらない。恥も外聞もかなくなり捨てて行かなければならないんだ……！

「じゃあ、男装女とソラはそっちね。また後で」

美春が女子更衣室へ入っていく。水希もそれに続こうとしているが、美春が変な目で水希を睨みそれを妨害していた。バカ……。そんなことしたら従業員に目を付けられるだろうが。

「あのさ……。オレこっち入るね……」

いがみ合う2人を放置してオレは当初の目的を再開した。

普通の足取りで男子更衣室へと向かう。入り口まで残り数メートルだ、順調に行けば……！

がしっ

そう意気込んでいたら、男性に手首を掴まれた。

「……………はえ？」

呆然として男性の服装を見ると、胸元に「STAFF」と刺繍があった。やられた……。また女子更衣室へ連行されるんだ……。

「女の子はあっちだよ。ここには危ないおじさんとかいるんだからね？女の子がフラッと男子更衣室には入っちゃいけないだよ」

くそ……。オレは男なのに……。つ。せめてもの抵抗として自分の性別を主張してみよう。

「あの、オレは男なんですけど……。女子更衣室に入った

ら逆に逮捕されるんじゃない？」

「男なのかい？そんな可愛い顔してるのに？」

ダメだ、完全に女だと思われてる……。

「そうなんですよ、オレこんな外見ですがちゃんとした男です。だから男子更衣室へ行かなければならないと思います」

「でもねえ……」

「お願いしますっ！オレを男子更衣室へ入れさせてくださいっ」

……こうしていると、男子の着替えを覗こうとして縋り付いてる変態みたいで嫌なんだけど。

「……きみの主張はよくわかった。けどね、男子更衣室に入ったら君を犯そうとするおじさんがいるかもしれない。それで君が犯されたら嫌だろう？」

テメエ、公衆の面前でなんてこと言っただけだ。説得するにも他の手段があつただろ。

もう、意地でもオレを男子更衣室へ入れさせないつもりで従業員。それを正面から睨むオレ。さて、どうしたものかな……。

「これ以上、男子更衣室へ入りたいというなら警察呼びますよ。男性の着替えを覗こうと聞かない少女がいるってね」

ダメだ。このおっさんを口説き落とす手立てはない。

オレは死んだような足取りで女子更衣室へと向かった。

着替えと本能と本能との戦いを終えて、プールへと向かった。何というか、遊ぶ前から疲れた……。

「あれ？ソラ遅かったじゃない」

自分の名前を呼ばれたので声の方向を向く。そこには……

「ふえ……」

純白のビキニを着て、いつものツインテールからポニーテールにした美春が惜しげもなく肌を晒して更に更に極上の笑みを浮かべて

いた。これだよ・・・これをみるためにオレは女子更衣室にまで入ったんだ。

「どうしたの？あたしの水着姿に惚れちゃった？」

からかうように聞いてくる美春から目を逸らし、一応否定しておく。

「別に・・・」

「へえ」

何かオレの心理が読み取れたような笑みを漏らす美春を放っておいて、水希を探した。すると、目の前に淡いピンクのビキニを着たボーイッシュな女の子が怒ったようにオレを睨んでいた。

「・・・水希」

その女の子は水希だったのだ。まったく、可愛すぎてわからなかったじゃないか。

「ソラくんはボクの水着姿よりみかんへアーの水着姿の方が好きなの？」

上目遣いで不安そうに問う水希。いやいや・・・そんなことないって。

美春よりも透き通った白い肌に色っぽい鎖骨、絶妙なサイズの胸にはにかむ仕草。そんなことを目の前でされたらどんな男でもイチコロだと思っね。現にオレは本能と必死の戦いをしてるわけだし。

「そ、そんなことないよ？水希だって可愛いし、美春だって可愛い・・・。幸せすぎる・・・」

これが俗に言うハーレムというやつか・・・。

「・・・（ムスツ）」

ちなみに、その間美春は不機嫌そうにそっぽを向いていた。何か気に障ることもしたかな？

「まあ、いいわ。これからが本番だからね、忘れるんじゃないわよ？」

「当然だよ。ボクの方が清纯だし、みかんへアーみたいに淫らには攻めないからね」

「言っただけ言えばいいじゃない。世の中強い者が勝つのは……」
何なんだ、オレを取り巻く険悪な雰囲気は。今回2回目。
何か2人の間でオレに被害が降りかかる何かをやっているんじゃないだろうな……。

がしっ むにゅっ

ポカンとしてしていると、美春が腕を組んできた。ちよ……その体勢だと当たっちゃいけない物がオレの肘に思い切り当たってるじゃないか……!!

「ソラ？最初はどこ行きたい？」

くそ……っ、わざとやってやがるのか……!!

「……（これ以上男装女と接するようなら実力行使に出るわよ？それでもいいの？）」

実力行使って……一体何をやる気だよ……。

といったような、返事をアイコンタクトで返した。

「例えば 強……」

「わかった、まずはウォーターライダーからやろっつ！」

どうせコイツはろくでもないことを考えてる。その考えを聞く前にオレが動くしかないっ！

がしっ むにゅっ

すると、空いていた左腕を今度は水希が組んできた。きっと、肉体的接触を躊躇していたらしく顔が紅潮していて遠慮しているようだ。まあ、遠慮する必要はないんじゃないかな。オレは水希との接触ならどんな場面でもオーケーという男だぜ？

「そ、ソラくんはボクと深海プールへ行くのっ」

言いながら更に強くオレの腕を抱きしめる水希、抱きしめた分だ

け水希の胸の感触が鮮明に伝わってくる。イケナイ……このままじゃ本能が……っ！

「何なのよ、ソラはあたしと密着密閉ウォーターライダーをやるのよ」

何その18禁の匂いがプンプンする怪しいアトラクション。

「違うよっ。ソラくんはボクと深海プールで遊ぶんだよっ。そしてボクがソラくんの……（ポツ）」

「ちよつと待って。男装女はソラと何をする気なの!？」

「べべべ別にソラくんの身体とか触ったり偶然を装ってキスなんかしたりしないからねっ!？」

言ってるよ、全部言っちゃってる。

「じゃあわかったわ。ソラの身体をどっちが先に気持ちよくさせるか勝負して、勝った方が一緒にふわふわタイムを過ごせるって言うルールで……」

「はい、ゲームセット!スコアは引き分けでいいでしょ？」

やむを得ず論争を中止する。やれやれ、遊びに来たのにちっとも遊べないじゃないか……。

「望むところだよ……!ボクに胸はあまりないけど、手の器用さだったら……」

「だから、水希も何を考えてるのっ!？勝負は終了したんだってば!」

オレ個人の意見だが、水希くらいの大きさのほうがオレは好きだ。

この2人、今度からは一緒にしないでおこっ……。

貞操の危機に晒されながら2時間ほど泳いだり滑ったり触られたりしたあと、オレたちは帰る事にした。なんか、余計に疲れた感じがするのは気のせいではないと思う。

「はあく楽しかったあ！また来ようね」

いっぱい遊べたのか美春は満足そうに言った。極上の笑顔で。この笑顔を見ると、ここまでやってきた甲斐があるってものだ。

「水希は、どうだった？」

水希にも感想を尋ねる。すると、目が合った瞬間に目を逸らされた。

「……………？」

「うん……………楽しかったよ」

頬を赤らめながら、水希は言った。

夕日に照らされながらの帰り道、美春と別れる時だ。何を考えたのか美春は立ち止まり、オレのほうを向いた。

「あのね、ソラ……………」

「どうした」

振り向いた瞬間に、目の前には美春の顔があった。そして少し遅れて唇に温かくやわらかい美春の唇の感触が伝わってきて一気に血が昇っていく。え……………何が起きてるんだこれ。

美春は唇を離すと、甘い声で囁いた。

「ソラは、あたしのモノだからね……………」

真っ直ぐに目を見て、美春は晴れやかな笑顔で言った。

「楽しかったよ、また行こうね」

……………。

……………美春がオレに好意を抱いているというのは知っていたけど……………まさかここまで積極的だとは思わなかったわ……………。

「……………ソラくん？」

夢の中からいきなり引き摺り落とされたような声が背後から聞こえてきた。そうだ……………今は水希も一緒なんだ……………！

「な……………何でしょうか……………」

頬をぷくつと膨らませた水希は、

「先に帰るっ！」

とだけ言い残して帰ってしまった。

やれやれ・・・どう弁解したらいいんだよ・・・。責任取ってくれるのか？

キスの感触を思い出しながらキスを後悔しながらオレは自宅へと歩いていった。

さて、そこが問題だった。

帰ったはいいけど、水希が完全に怒ってしまい部屋から出てこない。姉貴は部活の仲間と出掛けてくるとかいつてしばらく帰ってこないし、今はオレと水希だけがこの家にいる。普通のラブストーリーならここらでウフフな展開が待ち受けているのだけど、これは普通のラブストーリーじゃない。だからウフフな展開なんて待つてくれない。ウフフというより、ひええな展開しか待つていない気がするのはひょっとしてオレだけなのだろうか。

(・・・どうしたもんかな・・・)

ソファに座りながら対策を考える。どうすれば水希の機嫌は治るのか、どうすれば水希は部屋から出てきてくれるのか。オレの頭脳では正解を導き出せない問題を必死で考えていると、根本的なあることに気が付いた。

「なんで、水希は怒ってるんだ？」

そう、まずそこだ。どうして水希は怒っているのが問題だ。オレの推理で言うと、帰り際の美春からのキスが原因だと思う。だけど、別に好きでもない相手が嫌いな相手からキスされた所で水希には何のダメージもないはずだ。

なのに水希は怒っている。

これは・・・オレに好意を抱いていると感じ取っていいのだろうか。そうだ、オレのことを何とも思っていないのならオレが誰とキスしようが何しようがどうでもいいはずなのだ。今水希が怒っ

ているということは、水希はオレに何らかの感情を抱いていることになる。そして、今家にはオレと水希の2人だけ……。

あると思います！

と、既に時代遅れとなった一芸人のネタを心の中で繰り広げながら水希の部屋の前に立つ。見慣れた扉の扉はすなの

今日だけは重々しい雰囲気を放っていた。だからどうしたというのだ！ここでめげてはハッピーエンドを逃してしまっじゃないか！

男深海ソラ……思い切って、ハッピーエンドへの扉を開けてっ！

「水希……ちよつと話が……」

そう言いかけて、足を止めた。そして、微笑がこぼれる。

「うにゅん……」

水希はベッドで眠っていた。天使のような笑顔で。

よくよく考えて見れば、こんな綺麗な寝顔を汚すなんてオレにはきつとできないだろう。たとえ絶好のシチュエーションに出くわしてもオレは彼女に何もしないと。思う。

なんて善人なんだ……オレ……。

自分に泣けてきた。

月曜日、最悪のテンションの中登校するといきなり異様な殺気を放つ変態集団に捉えられた。

「深海ソラ、我々と来てもらおう」

薄々予感してたけどね。学年のヒロイン2人と一緒にプールに行ったんだ。それも、遊んでいる最中はずっとベツタリくっついてたし（主に美春。水希も躊躇いながら身体をくっつけてきた）。

まあ、裏切り者には生きる道はないんだよね。仕方ない、今回だけは罪を認めようじゃないか。

「ちよ……ちよつと待って！」

覚悟を決めたところで、後ろから声が聞こえた。この声は……水希か？

「ソラくんは悪くないよ！全部ボクが悪いの！ボクがくつついたり、身体を触ったり、ちよつとだけいやらしいことを考えたからソラくんはボクのワガママに付き合ってくれたんだよ！」

水希……助けてくれようとするのはありがたいんだけど、それは逆効果だ。白黒曖昧な容疑者を審議している裁判官に「その人は悪くないんです！私が部屋の鍵を開けっ放しだったから！」とカミングアウトしてるのと同じ意味だからね……。でも、止めが水希の一言でよかった……。

「ふむ……」

恐らくリーダー（部長）である人物が顎に手を当てて考えている。もしかして、無罪放免になるのか？

「それにそれに……ボクが偶然を装って唇を当てたんだから……ソラくんは悪くないのっ！」

「連れて行け」

「ハッ」

え……？期待させておいてそれ？

「ばっ……離せ！変態野郎！オレに何の罪があるっていうんだよおおおおお！」

「……」

「言つてよ！何か言つてよ！不可抗力だつつうの！」

「……」

はあ！？黙秘かよ！

「おつす、ソラ……」

通りかかったユツキとのぶながは連れて行かれるオレを見て目を丸くして口をパクパクさせていた。バカヤロっ！見てないで助けるっ！

使えないユツキを睨みつけて、隣ののぶながを期待の眼差しで見つめる。のぶながだけは助けてくれるさ。そうだよな？のぶなが……

・・・っ！

意思が通じたのか、のぶながはオレの目をまっすぐ見つめて、にこりと微笑んだ。

「話は大体わかりましたが・・・裏切り者は死すべきです」

・・・・・・・・・なんで、親友からも見放されないといけないんだ？

連中がオレを掴む手に力が籠る。オレを引きずっていく速度が速くなる。殺気が強くなる。

マズイ・・・このままだと終わる・・・っ！

「離せ、離せ、離してよ！今離さなきゃ、今逃げなきゃオレが死んじゃうんだ・・・。そんなのもういやなんだよ！だから・・・離してよ・・・」

くそつたれ・・・っ！びくともしないじゃないか・・・っ！
「離せええええええええええっ！！！！！！！！」

この時、人間の嫉妬が生む力の強さが痛いほどわかった。
いい勉強になりました。これからは気を付けます・・・。

後に姉貴から聞いた話によると・・・

「ミナトさん、偶然ソラくんの机から出てきた紙なんですけど、これって何ですかね」

「紙？あの子の机から？」

「はい、紙には『秋谷岬』って書かれてるんですけどソラくんがどうしてあの人のごと知ってるのかちょっと気になっちゃって・・・」

「・・・」

「どうかしましたか？」

「……水希ちゃん、驚かないで聞いてね？」

「えっ？急にどうしたんですか……？」

「実は

」

7月：したいならしてあげてもいいんだよ・・・？（後書き）

お久しぶりですね。七色アゲハです。

無事前期選抜にも合格したということで、活動再開です。

これからもよろしくお願いします。

受験の関係で、次話投稿までの時間が不順になる場合があります。
詳しくは「活動報告」でご報告しますので、よければそちらもチェックして見てください。

7月：絶対に譲れない

「ソラくん……一つだけ聞いていいかな？」

オレにとつての最悪の残酷劇はこの一言で幕を開けた。オレが帰宅して一段落していたところにこのセリフだ。しかも、悲しげですが折れてしまいそうな儂げな笑みで。唐突で状況が理解できないオレに水希は続けた。

「ソラくんは、どうしてあの人の名前を知っているの？」

そう言つて水希がこちらに見せたのは小さな紙切れ。そこには紛れもなく「秋谷岬」と力強く書かれていた。不可解なこと

だが、一瞬で落ち着きを取り戻すことができた。

水希が持つている紙切れは、オレが『あの小説』から名前を取つた時に書き置きしておいたものだ。確か、オレのベッドの布団の下に敷いておいたはずなんだけど……。それがどうして見つけれられたのかオレはそっちの方が疑問だった。

「……ねえ、答えてよ」

水希の表情から悲しみが消えて、静かな怒りが表れ始めた。別にオレは悪くないじゃん、とダダを捏ねても時間の無駄だ……。展開的には早いのだが、ここで事実を伝えておくのも悪くない。大きく息を吸つて、オレは水希の瞳を真つ直ぐ見据えた。

「……オレが『秋谷岬』だ。黙つててごめん……」

一瞬、時間が止まったかと思つた。

オレも呼吸を忘れていたし、水希も呼吸を忘れていただろう。オレはしばらくして、目を伏せた。これ以上、夢を壊されたような表情をする水希の顔を見ていられなかった。

全ては自分が悪いのに。全て偽名を名乗つた自分が悪いのに。

なのに、自分の罪を受け入れられない。

自分の罪を受け入れられないから、目を伏せた。今の水希がどんな顔をしているのか、想像もつかないし想像したくもない。

「じゃあ・・・合言葉を知っていたのも、10年前のことを知っていたのも・・・君があの人だったからなの・・・？」

オレは何も言わず頷いた。どうしてか、口を開く気になれない。

「そっか・・・あの人はずっとボクの前にいてくれたんだね・・・ボクの願いは通じたんだね・・・」

寂しそくに俯いて言葉を紡ぐ水希。なんだか、期待を裏切ってしまったようで申し訳ない。・・・別にオレは悪くないのに・・・。勝手にオレのベッドを漁った水希が悪いんじゃない。

オレは俯く水希を励ますために、水希の中に生きている幻想を打ち消すために、口を開いた。

「なんてね、冗談だよ」

このあと、鬼の形相で迫り来る水希に鬼のような仕打ちをされたのは言うまでもない。

「姉貴い！これは一体どーゆーことだっつー！」

水希の怒涛の攻撃から抜け出し、心も身体もボロボロになったままオレは姉貴に詰め寄った。姉貴は涼しい顔でコップを傾けながらオレを一瞥した。

「どうしたのよ、そんなに焦って・・・」

「これが落ち着いていられるかっつーの！なんで、姉貴が勝手に暴露してくれてんだよ！」

「あー・・・そのことか」

姉貴は気にする様子もなく普通に流した。なんだ？バカにしてん

のか？

「姉貴にとつちやくだらないことかも知れないけど、オレから見ればすごい重大なことなの！迂闊に真相を話したりしないで！」

すると、姉貴は首を傾げて、

「真相・・・？別にあたしはあんたが秋谷くんだったことなんか一言も言っていないわよ？」

「だったら何で水希はあんなに・・・っ！」

それを言っていないならどうしてオレはあんな仕打ちをされたのかわからないじゃないかっ！

「あたしは、『実は、ソラと関係があるかもよ？』って水希ちゃんに言っただけなのよ？それを勘違いしたソラが悪いんじゃない？」

「・・・・・・」

「いやあんっ！その顔可愛すぎるっ！」

頬を両手で押さえて、萌える姉貴。・・・姉貴だけはオレの性別をすっかり認識していてくれると思ってたんだけどな。どうやらオレの勘違いだったらしい。

「姉貴っ！ふざけるのはやめてっ！」

「そのままその顔で『もう、知らないっ』って言ってプイっしてしてえ！」

「コノヤロオオオ！ふざけんのはやめるよおおお！」

このままだと話が続けられそうにないので、オレはリビングを出た。

「てなことがあったわけで、現在に至るってワケ」

オレの愚痴を聞くユツキとのぶながは困ったように笑った。まあ、確かに反応には困るよね。

席は隣だというのに、今朝から（正しくは昨夜から）一言も話していないのはおかしいとユツキが言及しそれにのぶながが悪乗りし

たので、渋々白状したと言うワケだ。……オレ自身、コイツらにだけは絶対に聞かれたくなかったんだけど、仕方ないよね。抵抗できなかったんだし。

「……んまあ、お前も大変だな……」

「そうですね、僕らが聞いてはいけないような話まで聞いてしまいましたし」

「……。オレが偽名で付き合ってたことを言っているのならよしとしよう。だが、もう一つの方のことを言っているのであれば……オレは親友2人をこの手で始末しなければならぬ。まだ高校生だできれば前科なんて欲しくないんだけどなあ……」

「どしたソラ。『お前らを手にかけてやるっ!』って顔してるぞ」「なんで!?!なんでバレてるの?!?」

「図星のようですね。本当にソラはポーカーフェイスができないですわね」

のぶなががオレを咎めることなく優しく微笑んでいる。……この状況だと逆に恐ろしいんですけど。

「心配するな。俺が驚いているのはお前の姉貴がお前の女装姿に興味があることじゃない方のことだからな。どうせお前のことだからそのことを心配してたんだろ?」

「心配無用ですよ。僕もソラの女装姿には少しだけ興味がありますから」

数秒の沈黙。

「マジかつ!?!」

オレとユツキは一緒に驚愕の声を上げた。ちょっと、のぶながの性癖が疑われる事実だ。

「そんなに驚かなくてもいいじゃないですか……。ソラ的女装姿は可愛いですよな?」

「驚くに決まってるんだろ……。今までソラに何の下心もなく付き合ってきた仲だと言っのに、ここにきて女装に興味あります発言だぞ。普通は驚くっつーの」

ユツキも驚いているようだが、対象であるオレの方がショックはデカイ。もうのぶながとは正面から付き合えないかもしれない・・・。

「で、ソラは何をしたいのですか？」

「この流れでそんな際どいこと聞いてくるなっ！」

オレは咄嗟に反撃した。

「と、ともかく。俺らはお前と長門ちゃんを仲直りさせればいいてわけだ」

やけに自信有りげにユツキが言う。

「その口調からすると絶対に仲直りできる方法があるんだよね？流石はユツキ、女たらしは伊達じゃないね」

「うるせーよ」

ユツキは不機嫌そうに言った。

「まず、女心を変えるにはこれが最適だな」

信頼し難い親友2人の協力を以って、「水希と仲直り作戦」はスタートした。

まず、オレたちが決行した作戦内容は「不機嫌な水希にそつと置手紙を置く」という何とも恥ずかしいものだった。ユツキ曰く「これで落ちない女はいねえだろお？」らしいが、ユツキ自身連戦連敗なのであまり信用はできない。でも、オレらの中で一番恋愛経験値が多そうだからコイツに縋るより他ない。理不尽な世界になったな・・・。それでもって、手紙の内容なただけどそれもユツキがオレの字を真似て書き上げたらしい。どれどれ・・・？

『大事な話がしたいです。昼休み屋上で待ってます』

・・・見た瞬間、一気に血の気が失せた。

「何これ？何の罰ゲームなの？」

「ちよ、ちよっと待つんだユツキ」

「堪らずオレはユツキに抗論した。」

「なんだ。何か文句でもあるのか？」

ユツキは平然とした態度でオレを見る。そりやそうだ。協力してくれているのに依頼主が反抗するんだもの、普通に不愉快だというのは重々承知している。でも、でもね？これはちよっと……。「文句じゃないけどさ、これで水希に余計な誤解が生まれちゃうよ？これ以上2人を取り巻く雰囲気が悪化したらどうしてくれるの？」

「まあ、その時はその時で対応策はある。俺の恋愛経験値を舐めちゃいけないぜ？」

その経験値はどこで活かされているんだろ。普段のユツキの姿から全く想像ができない。

ユツキは手紙を普通に水希の机の上に置いた。コイツはきっとオレが困っているのを見て楽しんでるんだろ。この鬼！

「ユツキってさりげなく人を追い詰めるよね……」

「んあ？何か言ったか？」

コイツ……都合のいいことしか聞いてないし。確実にオレの予想は当たってる。

「置いたのはいいんですが、これからどう動くんですか？」
「のぶながが問う。」

「俺の作戦が成功すれば、このまま屋上で大事な話をさせるつもりだ。失敗したときは……まあ、ソラが何とかしてくれんだろ」

「結局オレに投げてんじやないか。この腐れ外道」

口喧嘩をすることしばし、水希が教室へ帰ってきた。

「来たぞ、ここからが勝負だ」

ユツキの言葉に頷きながら、水希を観察する。オレの予想だと差出人がオレだとわかった時点で奴は手紙を引き裂くだろう。まあ、

自分の予想が当たったら相当ショックだろうな……。でも、水希を怒らせてしまったことに変わりはないんだから結局のところ自分が悪い。なんで、オレは偽名まで名乗って彼女と付き合っていたんだろう。未だに謎だ。本当のことを言っていれば、悪いのはオレじゃなくてあの忌々しい女だったのに。そうだ、全てはあの女から始まったんだ。父さんが離婚していてくれなければ今も友達がいなくて孤独な青春を送っていたと思う。もしあの女がオレの母親であり続けていたら……。

「おい、帰って来い」

「ソラ、動きますよ」

両方からの声でオレは意識を取り戻した。顔を上げて前を見ると水希が手紙を真っ赤な顔で眺めながらどこかへ去っていくのが見えた。……え？オレの予想が全く外れてるんだけど。

「これって何かの間違いじゃないかな。もしかしたら夢を見ているのかも。2人と、ちよつと抓つてよ」

次の瞬間、抓っただけとは思えないような激痛が全身を駆け巡った。

「痛いっ！抓つてって言ったじゃん！確実に抓る以上のことしてるよね！？」

そう言つてにらみつけた2人の両手にはドライバーと金槌があった。そして、ユツキの足元にはチェーンソーがあつてのぶながの足元には鋸があつた。

コイツら、オレを仕留めるつもりだったな？覚えておけよ……
っ！

「そんなことはどうでもいいんだよ。ほれ、長門ちゃんが真っ赤になつてお前からの手紙読んでたぞ？しばらく読んで、それから手紙持ってどっかに行った。さっさと追わないと見失つちまうからな……」

「オレにとつては命にかかわる重大なことなんだけど、ユツキにはどうでもいいことなんだね」

「行きますよソラ。話は後です、今は作戦のほうが大事でしょう？」
「違う！オレにとつては命の方が大事だよバカっ！」

2人の間違っている考えを訂正しながらオレたちは教室をあとにした。水希が行ったであろう場所を順々におつていくけど全く見つからない。体育館裏や食堂、更には女子更衣室まで覗いたけど全く見つからない。あ、ちなみにだけどオレとのぶながは容姿が女子みたいだから女子更衣室に入っても別に怪しまれない。今回だけはこの外見に感謝しよう。んで、今は最後の砦　屋上の扉の前にいる。この扉を開けた先に水希がいてくれるのかはわからないが、手紙の呼び出し場所は屋上だ。最もいる可能性が高い。

金属のドアノブを握って、
外から入る日光を背に浴びて、
オレは重いドアを開けた。

そこには

「……ソラくん？」

お目当ての水希が仄かに赤い顔をして首を傾げていた。その手にはユツキが書置きした手紙がある。どうやら、オレが呼び出した時間まで待っていていらなかったらしい。なんか、可愛いところもあるじゃん。

「水希……」

何から話せばいいのかわからず、困惑する。

「昨日はごめんね……。ボクつてば、あの人のことになると何か強引になっちゃうんだよ。それだけあの人のことが好きだったんだと思う。今でも好きなんだけどね、連絡先はわからないしこの学校に通っているかもわからないんだ……。あの人のことを考えるだけで胸が高鳴るし、夢を見ているような感覚にもなっちゃう。そんな時にミナトさんがソラくとあの人が関係あるかもって言ってきたからどうしようもなくて……」

まあ、この一件の責任は全て姉貴にあるってことで一件落着しそうだ。家に帰ったら文句言ってる。水希も反省してくれているようだし、あとはオレが謝って真実を話せば終わる。

「あのさあ、水希」

自分でもわかるほど声が震えていた。

「オレ……実は」

その続き、「実は秋谷岬はオレだ」と言うために息を吸った瞬間だった。

「ダメだよ、ボクとソラくんじゃ一緒になれない。ボクは待ち続けるって決めたからね」

目の前が歪んで、息が苦しくなって、今にも倒れそうだった。

要するにフラれたのだ。しかも、10年来の親友に。

「気持ちはすごく嬉しいんだけど、ボクはあの人と約束したんだ、絶対に待ち続けるって。だから他の男の人とは一緒になれない。そんなことしたら、あの人に合わせる顔がないでしょ？」

やめてくれ……これ以上オレの中の『長門水希』を壊さないでくれ……っ！

「それに、あの人も言ってたんだ……。今度会ったら言えなかったことを言うって。ボクとあの人の約束は誰にも邪魔させないし、誰にも破らせない。ボクの人生を懸けても果たさないといけない約束なんだよ」

「……」

そんなことを言うなら、今までオレを騙してきたというわけか？オレに勘違いさせておいて、拳句の果てにあなたとは一緒になれませんかよ。ふざけてやがる……！

胸の奥で沸々と怒りがこみ上げてくる。ここで逆ギレなんぞしたもんなら、オレと水希もとい、秋谷岬と長門水希は永遠に結ばれなくなってしまう。つか、それ以前に男としてどうかと思う。だ

から逆ギレはしない。必死に耐えるだけだ。

「もう一度言うけど、気持ちはスゴク嬉しいよ？でも、ボクは君と一緒になれない」

何だっつてんだ。何度も言われなくなつてわかつてるっつーの！

オレが立ち尽くしているすぐ横を水希は歩いていった。

これで、オレが真相を話せる状況までの道のりが一気に遠のいた。ここでオレが適当なことを口走つたらそれこそ完全に終わりだ。まったく、いつになつたら言えるんだろうなあ……。

不思議と動揺はしなかった。虚無感を覚えただけなので、精神的シヨックは軽いのかも知れない。

空を仰ぐ。

オレはいつから間違っていたんだろう。偽名を名乗ったときか？それとも、生まれてきたことが間違っていたのか？

まあいい。

いずれ、水希は気が付いてしまうだろう。その時、アイツはどんな表情をするんだろうか。傷ついた表情をするのだろうか。もし、傷ついた表情をするのであれば、水希の傷ついた表情を見なければならぬ。ならないのなら正体を隠してそつと別れるのも悪くない。それでオレも未練はない。アイツには遠くで幸せになつてもらいたいし。そうなつた時、オレはどうなるんだろうか。オレは幸せを掴めるのだろうか。幼い頃からお互いに想い合っていた人物を蹴つて、別の人物と結ばれてオレは幸せなのか？

前言撤回だ。オレに未練はありすぎる。

やっぱり、水希のことが好きらしい。でも、真実を知ったときのアイツの顔は見たくない。これは我儂かも知れない。けど絶対に譲れない。

約束をしたから。水希とあの時、約束したから。これだけは絶対に譲れない。

この約束は誰にも破らせない。オレの手で果たしてみせる。

「たーだいまあ」

ダルそうな声で帰宅を告げる。中からは姉貴の声が返ってきた。おや？水希はいそうにないな……。いつも履いてるピンクのスニーカー（ナイキ）もないし。ナイキもないし。いいギャグができたかも。まあギャグのことはどうでもいい。水希がどこに行ったのか義理でも聞いておかないと。

リビングのドアを開けて、ソファでくつろいでいる姉貴に問う。

「姉貴、水希は？」

すると、ポテチを啜えながら振り向いた姉貴は、

「水希ちゃんなんて帰って来てないわよ？ソラ何か知らない？」

どうやら、帰ってきていないらしい。これは困った。恐らく原因は屋上での一コマだろう。このまま行くと責任はオレに降りかかってくる。なんか、理不尽だけど……。まあしょうがない。それが男の性だ。

「はあ？帰ってないの？」

「そうみたいだけど……。アンタと何かあったの？」

姉貴の勘は鋭い。今わかった。

「いや……。オレじゃなくて……」

「あーはいはい。秋谷岬くんと一悶着あったわけねえ」

ニヤニヤしながら言う姉貴に苛立ちを覚えたいわけでもない。

「姉貴のケータイから電話かけてみてよ。場所がわかればオレが行くから」

「気まずいのはお互い様だから、ね。オレが行っても問題ないだろう。」

「水希ちゃんの番号知らないのよね……。ソラは知らないの？」

「知らないから聞いてるんでしょうが」

こんな姉貴でも学校では成績優秀、才色兼備、文武両道と完璧超人と言われているらしい。正直言って家の中ではズボラでだらしない女性だ。どこを見ても完璧超人なんて言えたものじゃない。誰が言ったのかは知らないけど家での姿を言った奴に見せてやりたいくらいだ。ホントに名乗り出てもらいたい。

それはともかく、姉貴も水希の電話番号を知らないときた。これは詰んだのか？ちなみに、暗闇の中どこかへ行った女の子を男が探すようなドラマチックな展開はこの小説には存在しない。理由？面倒くさいからに決まってるじゃん。水希を探す手がかりもないし、行っていそうな場所にも当てはない。まさに八方塞ぎ……。あー、実にメンドーだ。なんで逃げたりしたかなあ……。逃げたいのはこっちだつてのによー。

とは言っていられない。仕方ない、ここはドラマチックな展開を披露しようじゃないか。

「……不本意だけど、オレが探してくるね。夕飯までに間に合わなかったら先に食べてていいよ」

それだけ言い残すとオレはリビングを出て、手早くスニーカーを履き外へ出た。

夏真っ盛りというわけで、まだ日は落ちていない。視野が確保できるほど明るかった。そんな中をオレは走っていく。風も温く、少し走っただけで軽く汗を掻く。まあ、走ったところで当てもないわけだけど走らずにはいられなかった。理由はわからない。多分けど、このことに責任を感じているんだと思う。水希が幻想を抱いてしまったこと、水希を悲しませてしまったこと、あの約束を果たしていないこと。どれもオレが悪いわけだが、いくら反省したところでそれが報われるわけじゃない。キッチンと「オレ」を証明して、約束を果たすまで報われないう。……。どうしてあんな約束をしてしまったのか、今では少しだけ後悔しているんだけどね。親友に嘘を吐き続けるのが辛かったのか？それとも親友が離れていきそうで不安だったのか？

自分に聞いてみたところで真実は見つからない。何も変わらない。どうやら、オレは自分に甘いらしい。

自分に甘かったからこうなった。全ての元凶はオレだ。水希に罪を擦り付けるわけにはいかない。何というか、この物語こんなにシリアスだったつけ？もつとこう・・・明るい感じのじゃないの？そんな疑問を抱きながらオレは日が沈みそうな道を駆けた。

メロスのようには行かず、日も暮れて星が瞬き始めた。完全に失踪した。これでは親友が殺されてしまうじゃないか。と、冗談を言っている場合ではないので息を整えながら歩く。

走っているうちに隣町に来ていたみたいだ。道なんか覚えていないし、どう帰るのかも考えていない。まあ、それはいいとして

ここは、オレが10年前に住んでいた場所だ。10年前の12月24日以来立ち寄っていなかったがこれが引越後初の来訪となる。懐かしいというか、悲しいというか複雑な気持ちだ。しかし、ここまでくれば場所は確定できる。水希がいるとしたら、きっとあの場所だ。

しばらく歩くと、ある小さな公園にたどり着いた。そこでオレは静寂に包まれてみる。何も聞こえず、風の音だけが耳を制した。目を瞑りながら風の音だけに耳を澄ます。

目を開くと水希は、小さな砂場を公園のベンチから慈しむような視線で眺めていた。あの砂場。それがオレと水希が出会った場所。オレを孤独の闇から救ってくれた場所。オレが生きる意味を見つけた場所。

あの時みたいに。

あの日みたいに。

今度はオレが救う番なのかな？

オレは小さく息を吸った。ベンチには水希が悲しげな目をして座っているのが伝わってくる。それなのにオレは動き出すことができない。ここから一步踏み出せば、彼女は救われる。あの時オレを救ってくれたように。踏み出せない。

きつと怖いんだ。今日みたいに自分を否定されるのが怖い。

そんなことで怖気づいてどうする。水希はあの時オレと怖がらずに接してくれた。母親の実態を知らなかったというのも大きいだろうけど、それが何より嬉しかった。

その嬉しさ、水希には届いているだろうか。

不思議と気持ちが悪く落ち着いた。今なら、彼女に救いの手を差し伸べることができそうだ。オレはもう一度小さく息を吸って、公園に一步踏み出した。

ジャリ

と、足元の砂が鳴り響く。無音だからやけに響いた。その音に気が付いたのか、水希は疲れ果てた顔でこちらを向く。目が合った瞬間、向こうは目を逸らしたけれどオレはじつと水希の目を見つめていた。

「……………」

何も言わない。きつと、今日のことを気にしているんだろう。

オレは、あの時言われたセリフを一言一句間違えずに言う。

「……………」
「どうしたの？早く帰らないと危ないよ？」

水希が驚いたような顔をしてこちらを向いた。オレは微笑んだ。

「ほら、早く帰るぞ」

「……………」
「……………」

水希の呟くようによく聞こえる声がオレの耳に入る。

「……？」

頭に疑問符を浮かべていると水希は再び言葉を紡いだ。

「どうしてあんなこと言われたのに、ボクのことを迎えに来るの？ボクなんて居候なんだから放っておいたっていいじゃない。それなのに、ソラくんは……っ！」

感極まった、と表現していいのだろうか。水希の頬に一筋の涙が見えた。続いていくつも涙も。

「ソラくんには関係のないことなのにどうしてそこまでしてくれるの？ボクは……あの人を待ち続けてるって言ったよね？君とは一緒になれないって言ったよね？なのに……なのに、なんでこんな優しいことしてくれるの？こんなことされたってボクの心は変わらないよ」

「……」

オレは黙って聞いていた。

「どんなに優しいことされたってボクの想い揺らがない。絶対にだよ。ソラくんがボクをどんなに想っていてくれたって、ボクは君の気持ちを受け入れられない。それだけわかっていれば、ボクのことなんて放っておいても君に害はないはずなのに……っ」

まあ、予想はしていたけど。まさか、ここまで全否定されるとは思わなかったわ……。

要するに水希はオレの想いを受け入れられないから、オレに迷惑を掛けたくないわけだ。

上を見て、下を見て、それから左を見た。

「関係なくたっていい。いくら害が降り注いでも構わない。オレはお前を助けたかったんだ。お前がオレの想いを受け入れられなくていい。でも、オレには関係あるんだ。お前がいくらオレを拒絶したってオレはそれをやり通す」

自分でもカツコつけたなあ……とちょっと後悔する。

でも、これがオレの本心だ。水希がいくら拒絶してもオレは約束

を果たす。オレは水希に本名を告げる。……しかも、やっと掴んだチャンスだ。無駄にはしない。

「……なんで……なんでっ!」

このままだと更に口論がデットヒートしそうなので、水希を強制的に捻じ伏せる。

「もう何も言うな。お前の気持ちもわかったんだ、オレはそれだけで満足だよ」

その言葉で水希は落ち着いた。涙は流れっぱなしだが、とりあえず落ち着いたと見ていいだろう。

くるりと踵を返す。水希を渋々といった体で着いてきているし、とりあえず任務完了かな?あとは帰るだけ。帰り道は厳しそうだな……精神的重圧に耐えられるだろうか、オレの精神よ。

さて、やることも終わったことだし、

「あ、姉貴?あのさ、隣の公園まで迎えに来てくれない?」

姉貴に迎えに来てもらわないと帰れない。姉貴のバイクに3人も乗れるかな……?

姉貴のバイク(3人乗り)で家に帰ると、水希は風呂に入っさつさと眠りについてしまった。今はオレが入浴中。湯気に包まれる天井を見上げながら、今日の出来事をざっと振り返って見る。朝から色々あったが、なんとか収縮の方向へ向かっているのかな?オレが思うに、水希が星園学園に転校してきたのは、オレにチャンスを恵んでくださったんだ。神様辺りが。そのチャンスを無駄にしまえば、きつと次はない。ここで離してしまえば、水希とは一生相容れない存在となってしまう。だからこそ、慎重に話を持っていく必要がある。少しでも外れたことをすれば今まで積み上げてきたもの

がドンガラガツシャーンと音を立てて崩れるだろう。その時、オレは立っていられるだろうか。

「……………」

多分無理だな。うん。

今日でチャンスが一気に使い難いものになった。これからどう運ぶかが重要で、迂闊に過去のことを話し始めれば失恋の二の舞だ。こんな精神的ショックは一回でいいんだけど、そこはオレの話の運び方が握っている。

さてさて……………どうしたらいいものか。

髪をかき上げて、浴槽から出る。浴室から出るとさっきまで生ぬるかった空気がちよつとだけ冷たくなっていてこれが心地いい。

着替えを取ろうと、カゴの中を見ると……………。

「あれ……………？何この衣装……………」

中には淡いピンクのスカート（ゴスロリ）と、胸元が大きく開いたフリフリ服（多分これもゴスロリ）が入っていた。

多分、姉貴が犯人だと思うんだけど……………。今日だけは笑って許せる気がした。

「姉貴いー。オレの寝巻きがトンデモないことになってるんだけどおー」

「それ着ちやいなさあーい」

姉貴が犯人だ。

しばらく、ゴスロリ衣装を眺める。すると、何だか笑っていた。

水希の幻想を本物にするためには時間がかかるかも知れない。

幻想から醒めた時に水希は傷つくかも知れない。

でも、オレの約束は破らせない。

時間がかかってもいい。このチャンスをモノにすればいいんだ。

「……………まあ、いいか」

オレは溜息交じりに呟いて、淡いピンクのゴスロリ衣装に手を掛けた。

7月：絶対に譲れない（後書き）

インフルエンザに蝕まれている七色アゲハです。

今回はちよつとシリアスに書いてみました。そろそろ、大きく進展させてもいいと思いましたが・・・。

39度も熱が出ていて何を書いているのかさっぱりわからないと思います。お付き合いください。

あ、ちよつと目が回ってきたかも・・・。

7月：告白 ・ 前編（前書き）

性的な描写が含まれています。
苦手な方はご注意くださいまし。

七色アゲハ

7月：告白 ・ 前編

夕暮れ時の学校。

誰もいない図書室。

目の前には頬を赤らめて上目遣いでオレを見る美春。

「ソラ……あたし、もう我慢できないの……」

漫画やゲームでよく聞くセリフを彼女は言った。

何だこれ？夢なのかな？どうして美春がこんなに可愛く見えるんだろう。

「あたしの気持ち……聞いてくれるかな？」

紡がれるセリフにオレの心臓は早く鳴っている。これ、大丈夫かな……。病気だったりしないよね。

オレはゆっくり頷く。

そして美春は……。

「ソラのこと……好き」

そのまま抱きついてくる美晴を、オレは受け止めた。髪からは仄かにシャンプーの香りがしてこの変な緊張感を更に高めていく。遅れて美春の体温と心臓の鼓動が伝わってきてオレはもうどうしていいかわからないでいて……。

「もう我慢できない。男装女に取られちゃいそうで、居ても立ってもいられなかった!」

水希のことをあまり口にして欲しくないんだけど……。傷が痛むからね。

それにしても、美春がここまでオレを好きでいてくれたなんて普通に嬉しい

「お願い……もう、どこにも行かないで」

続けてセリフは紡がれる。

「あたしだけの、ソラになってください……」

どう答えればいいんだ？ここで頷いたらオレと美春は恋人になってしまうのか？だとしたら、水希はどうなる？秋谷岬を待ち続けている水希が報われなくなってしまう。でも、彼女はオレが秋谷岬だということを知らない。

このまま、待たせ続けてもいいのだろうか。

彼女を傷つけてもいいのだろうか。

美春の想いを受け入れれば水希は後に傷ついてしまう。水希の想いを受け入れれば今美春は傷ついてしまう。

モテる男はつらい。その言葉の意味を今理解した。

でも、今は美春の方が好きだ。水希に否定されたというのもあるけど、今は美春に想いは傾いている。ここで、オーケーしてもいいのだろうか。それで後悔したりしないのだろうか。

美春は儂げで、しかもどこか期待しているような眼差しをオレに向ける。

その眼差しに応えてもいいのか？

「お……オレは……」

気付くと声が出ていた。

「…………美春、オレは…………」

美春の眼差しを受けながら、

自分に問いかけながら、

オレは、

頷いた。

次の日の朝。現と夢の狭間でうとうとまどろんでいると、誰かの声が届いてきた。

「んん？この声は誰の声だろう。水希の声にしては高いし、姉貴の声にしては話し方がキチンとしてる。聞き覚えがない様で聞いたことのあるこの声の主は誰なんだろうか。」

「ほら、起きなさい。もう朝よ？いつまで寝てるの？」

もう少しだけ待っててください。今すぐいい気持ちで寝てるんです。朝ごはんは電車の中で済ませるからさ…………もう少しだけ…………。

「早く起きなさい…………っ」
バサッ

オレを包んでいた布団は引き剥がされ、目の前の美春の手の中に入っていた。

…………。

あれ？なんで美春がいるんだ？

「……………美春？」

「おはよっ。今日もいい天気だよ」

布団を握りながら、窓から外を眺める美春……………なんといいか、可愛い。朝からいいものを見させてもらったよ。美春は制服を

着ていて、このままオレと学校へ行くつもりのようなのだ。まあ、オレもその方が助かったりするるのでそれは構わない。ただ、一つだけ引つかかることがあるんだ。

「・・・美春、水希や姉貴とは会ってるの？」

そう。どうやってオレの部屋に侵入したのかがわからない。下手すれば法に触れることをした可能性もあるし・・・。つか、オレに断りもせずに部屋に入っているんだから既に不法侵入だ。うん。

「会ってないわよ？もう出発していたらしいし、あたしは普通にしんにゅ・・・入れたわよ？」

不法侵入だ。通報するかな。

「通報なんて野暮なことしないわよね？あたしとソラはもうただの幼馴染じゃないんだから」

そう言いながら、寝惚けているオレに腕を組んでくる美春。ちょ・・・その体勢でくっついてくると朝からいけない物が当たっちゃうんだけど・・・！

戸惑っていると、美春は小悪魔のように笑ってオレをベッドに押し倒した。そして、オレが声を上げる前に唇を塞がれた。数秒ほどキスに思考を奪われたあと、美春はオレを見下ろし耳元で囁く。

「これからは、ずっと一緒だよ」

「・・・」

恥ずかしいのか照れてるのかキスに動揺しているのかわからないけど、オレの本心を見抜いたのか美春は可憐に笑った。

どういうわけか、今日に限ってユツキは日直、のぶながは何か用事があるらしく2人きりでの登校になった。当然、交通手段は電車がなわけだがここでも美春は腕を密着させてくる。周りの学生がジロジロ見てきて正直良い気分じゃない。見ている奴らの記憶がなくなるまで殴り続けてやりたいところだ。人様の恋愛なんか見てないで

勉強しろよ。

それにしても困ったものだ。美春がここまでスキンシップが好きだと思わなかったからなあ……。電車に乗るだけで結構恥ずかしいじゃないか。しかも、残りの駅は3つ。恥ずかしくて顔から炎が出そうだ。火よりも強くなった感じだ、うん。と、とりあえず美春にもう少し離れるように言ってみよう。

「……み、美春？」

「や」

「……」

まだ何も言っていないのに……。なんて鋭い勘しているんだ。

「いやって言われてもさ……。オレにも羞恥心というものがあって、人前でベタベタするのはあんまり好きじゃないんだけど……。すると美春の目が半眼になった。ちよつと怖いような可愛いような……。複雑な感情を抱くオレがいることはひとまず置いておこう。」「何よ、あたしとイチャイチャするのは嫌いだって言うのかしら？」「……。正直、スキンシップは嫌いじゃない。ただ、場所を選んで欲しいだけだ。」

「嫌いじゃないけど、場所を選んで欲しいだけだって」

「へえ……。場所を選べばどんなにくつついても良いってことなのねえ……」

美春の表情がオスのカマキリを食らうメスのカマキリのように変化した。いや、そういう状況にあるカマキリを見たことはないけど何か直感でそう思った。人間で例えれば、女王様（性的な）が自分の奴隷（性的な）にオシオキをする前の表情だと思う。……。よくわからないと思ったあなたは、無視したほうが身のためです。

「それって……。どういう意味なの？」

嫌な予感を覚えつつも訊いてみる。

「楽しみにしておきなさい。いつでもソラを快樂の渦へと引き込んであげるから」

。。。。。

恐怖と期待で何も言い返せなかった。
なんとというか……心のどこかで期待している自分に気が付き
たくなかった。

「おーソラ、今朝は悪かったな」

美春とオレはクラスが違うので、授業中にベタベタされることは
ない。それに少し安堵していると目の前にユツキが現れてそう言っ
た。

「ユツキが真面目に日直の仕事するなんて珍しいこともあるもんだ
ね……」

「聞き捨てならないけど、今は許してやる」

まあ、事実だし。

中学時代、ユツキは名を馳せる不良だった。不良なので当然学校
の仕事など手を付けないし、他校の不良を片っ端からシバキ回して
いた。そのユツキが日直の仕事をやるようになるとはねえ……。
奴も大人になったな。

「今日は1人で登校してきたのか？」

教室へ歩きながらユツキが尋ねてくる。ここは、正直に答えて問
題ないのだろうか。

「んー……2人、かな？」

「2人？のぶながと来たのか？」

「僕も用事があつてソラとは登校してませんよ」

計っていたとしか思えないタイムミングでのぶながが現れた。今ま
でどこに隠れてやがった。

「じゃあ、誰と……？」

ユツキが顎に指を当てながら考えている。あまり、バレて欲しく
ない事なんだけど。まあ、いいか。

「もしかして、美春とですか？」

「そうだけど・・・別に普通じゃない？オレと美春が登校するなんて」

自分で言ったのを否定するようで何だが、オレと美春が一緒に登校するのは普通じゃない。美春の家から学校まで徒歩で行ける距離だ。その美春がわざわざ電車でないと通えない所まで来て、オレを起こして再び自分の家の方向へ行く。結局1往復しているわけで、美春からしてみれば無駄足でしかない。

「まあな、普通だし追求しないでやるか」

「そうですね」

そのかわり、とユツキが前置きした。

「お前が何かしたら、その時は容赦しねえぞ」

ユツキの目が本気になっていて、いつの間にか拳を握っていた。

上等だ。お前がそういうつもりなら、オレだって全力で美春の暴走を阻止してやるっ。

「わかってるよ、ユツキ」

オレも真面目な視線でユツキを正面から見つめた。

「決闘の前のようなシチュエーションですけど、実際には嫉妬と羨望と暴力しかありませんからね・・・」

のぶながが呟いた。

それを言っちゃぁお終いよ。

昼休みに美春の襲撃があっただけで、特に何も起こらなかった。

そんなこんなで放課後。ユツキはやはり日直の仕事で居残り。帰りが遅くなるから先に帰ってるとのことだ。言われなくなったら先に帰るっつーの。のぶながは一緒に帰れるようなので、のぶながと学校を出た。いつも通り電車で揺られ、のぶながが先に降りてしばらく

くしてオレも降りた。駅から真っ直ぐ歩くこと10分で自宅に着く。
.....

ドアノブを握れない。

水希に否定された傷がまだ癒えていないんだろう。水希と会いたくないというのが今の心境だ。でも家には帰らなければならぬし。
.....メンドーな世界だな。

.....いつまでも外にいるわけには行かないし、入っちゃおうか。
ガチャ

ドアがいつもより軽く開いた。

「「あつ」」

目の前には水希がいた。.....神様、オレにどこまで試練を与えるんですか。もう勘弁してください。

水希は数秒オレの目を見つめたあと、目を伏せて外へ出て行った。オレは水希の背中を眺めたあと、家に入った。

「ただいまー」

リビングにはいつものようにソファに腰掛けながらお菓子を齧っている姉貴がいた。ちなみに今日のお菓子はチョコらしい。

「あ、おかえりソラ」

キッチンで水を飲み、二階へ上がる。たしか、今日は宿題が恐ろしいほど出ていたはず。古典の復習に現代国語の問題集、更には物理の実験結果をまとめるプリントと英語の復習プリント、更に更に授業中に終わらなかつた数学のプリントとある事件の加害者ということで反省文が待っている。こんな量を一晩で終わらせるなんて教師陣も鬼ですねこれ。反省文なんか、オレは何もしていないんだから書かなくてもいいはずんだけど、担任である矢部が「お前が挑発するから悪い」と聞かないものだから仕方なく書く。本当にオレは何もしていない。

「うあ.....なんでこんなに宿題が出てるんだよ.....」

思わず机に突っ伏して溜息を吐く。長い溜息だ。

・・・オレは美春の告白を受け入れたのだろうか。受け入れてもよかつたのだろうか。今更になってそんなことをふと思った。このままだといずれ彼女を傷つけてしまう。

朝からのハプニング続きで疲れていたらしく、数分もしないうち眠りに落ちてしまった。

「ソラ、ソラったら！」

誰かが身体を強く揺する。誰の声だろう、聞いていてすごく心地いい。

「もっつ、どうして起きてくれないのよ・・・」

起きてくれないって？どうして起きる必要があるんだろう。

「仕方ないわねー・・・起きないと、メイドカフェに連れてっちゃうわよ？」

「起きました」

起きる必要はあったね。オレの性別を女にされないために起きるんだ。

・・・って、あれ？なんかデジャヴ。

「また美春か・・・」

「『また』って何よ。何か悪いことでもあるの？」

美春が咎める。

まだ醒め切っていない頭で現在時刻を確認すると、長針は既に10を指していた。すっかり寝てしまったらしい。宿題どうしよ・・・

「何しにきたの？特に用事がないなら帰らないと心配するよ？」

すると美春は目を半眼にして、妖艶な笑みを浮かべてこう言った。

「今朝さ、場所を選べばどんなにくつついてもいいって言ったわよね？」

・・・あ。

「今はソラの部屋の中。家には2人だけ、もう邪魔する人は誰もい

ないのよ?」

一呼吸。

「これで、思う存分くっついてもいいのよね?」

返答する前に押し倒された。これって、立場が逆じゃない? 普通は男がするものでしょう。抵抗するまもなく一瞬で唇を塞がれた。

「んんっ……」

自分のものとは思えないほど色っぽい声が漏れる。オレって男だよね、自信がなくなってきた。

そんな事実には肩を落としている暇はない。余程溜まっていたんだろっ、ついには舌まで入れてきた。これわいわゆるディープキスという奴では……?

って、こんなことを考えている暇はない! いち早く美春を離さないとオレの理性が吹っ飛んでしまうし、それで美春に取り返しのつかないミスを犯してしまう可能性があったりして美春はずっとオレの傍にいる可能性もあるし水希に見られたらユツキとのぶながが核シエルターを無効化して戦車が生徒会長を襲って女装部がオレに濡れ衣を着せるわけ……

「……」

「そ、ソラ?」

遅かったか……。

気付けばオレと美春の位置は反転していて、オレが美春に覆いかぶさっていた。これはマズイぞ……これはきつと、止められないし止まらないだろう。どうしよ、これで訴えられたらオレ勝ち目ないじゃん。

しかも何を思ったのかオレは自ら美春にキスをした。さっきよりも深く。

ダメだダメだダメだ……! これ以上乱れるなオレ!

「え……っ、服も脱がすの……?」

美春の服に手を掛けている。何する気だオレ!

自身の制御も聞かず、オレは美春の服を脱がしていく。淡いピン

クの下着が見えてきて、その中央には絶妙な大きさの胸が下着に隠されていた。ダメだ・・・こんな時にそんなものを見たらもうお終いだ！オレが中央の谷間に手を掛けようとしたその時、救いの女神は現れた。

ドアの向こうから現れたのは 水希だった。

え？これって救いの女神なの？逆にオレを地獄に突き落とすための女神じゃないの？つかそれって女神なの？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

絶句する水希。絶句しているのは水希だけじゃない。オレも美春もだ。

服から手を下ろして、呆然と水希を見る。

終わった。

7月：告白 ・ 前編（後書き）

どうも、後期試験を終えた七色アゲハです。

今回はやや・・・いや、すごい乱れています。かなり乱れています。

前書きにも書いてありますが苦手な方はご注意ください。

これからもこの駄作にお付き合いお願いします。

7月：告白 ・ 中編（前書き）

昼ドラのようにドロドロしてるかも知れませんが（個人の差があるので明確にはいえません）。
苦手な方はご注意を。

ボクは目の前で何が起きているのかわからなかった。

ソラくんのベッドの中に肌蹴た服を着て押し倒されているみかんへアーとその上に跨るソラくんがいて2人はいつもと違う雰囲気を纏っていた。

特にソラくん。瞳からは何の感情も感じ取れなくて、欲望のままに赴く獣のような感じさえ感じ取れた。ドアを開けた直後は誰なのかわからなかったくらいだった。

ボクはどうしたらいいんだろう。このまま黙って退室するべきなのかな？でも、このままじゃみかんへアーの貞操が危ないし・・・あれ？みかんへアーが逃げ出さないってことは、これって両者が認めた上での行為なの？じゃあ、2人は既にそういう仲だったってことなのかな・・・？

あの告白は何だったの？

ソラくんは自分が傷つくってわかっていてもボクに想いを伝えてくれた。それにボクも真剣に応えた。結果的にソラくんは傷を負ったかも知れない。でも、想いは嬉しかった。純粹に嬉しかった。

今は別の人とこういう状態になっている。

ボクへの想いは何だったの？

あの告白は嘘だったって言うの？

君の目にボクはどう映っているの？

湧き出る疑問と怒りは抑えようもなく大きくなっていく。そして、なぜだかわからないけど悲しみも一緒に。こんなことを思うなんて、ボクはソラくんをどう思っていたんだろう。ただのルームメイト？

ただのクラスメイト？ただの知り合い？
ううん、そんな安っぽい存在じゃない。
ボクにとってソラくんは

「だ、男装女……？」

ベッドに押し倒されているみかんへアーがボクを呼んだ。肌蹴た服はそのまま、ソラくんを優しく抱きしめながら起き上がってボクの目を挑発的な視線で見つめる。ソラくんは人形のように身体をみかんへアーに委ねている。そんなに、その子が好きなの？

ボクは何も言い返せない。今まで生きてきてこんな場面に直面したのは今回は初めてだから。

俯いて黙っているのみかんへアーは申し訳なさそうに言った。

「ゴメンね……。あたしとソラは恋人になったの。あたしからソラに告白したらソラは受け入れてくれた。それで……。色々あって今に至るってワケよ」

その「色々」が何なのかを知りたいけど、重すぎる雰囲気と衝撃の事実で口を開けない。一応、みかんへアーも罪悪感を抱いているようだね。

「……何言ってるの？」

ボクは知らないうちに口を開いていた。

「え？」

「君は人のか……。好きな人を寝取ったんだよ？それでよく飄々とそんなこと言えるよね」

トゲを隠そうとしても言葉の端からトゲが顔を出す。この状況で平静を保ってられるほどボクの問題は成熟していなかった。

いや、そうじゃない。ボクがこんなに怒っているのは、みかんへアーにトゲのある言葉を言ってしまったのは、全てボクが抱いている感情が引き起こしているもの。この間は、勢いで否定し

ちやっただけどやっぱり、ソラくんを否定することなんてボクにはできないのかな……。ソラくとあの人はどうしても重なっちゃう。だから、ソラくんを易々と渡すわけにはいかない。

「あなたには理性がないの？本能しかないの？だからそんな態度とれるんでしょ？」

「そんなこと……っ」

「ないと言えるの？人の好きな人をここまでにしておいて、そんなこと言えるの？やっぱりあなた人間じゃないんじゃないの？」

「そんなことないっ！」

みかんへアーの叫びで、意識が帰って来た。今までどこかにトリップしていたみたい。

涙目のみかんへアーを見つめる。

「あたしだつて……。あたしだつてソラのこと大好きなのよ！何もかもが愛しくて仕方がないの！あたしはちゃんと自分の想いを受け入れてもらった。でも男装女は何も言っていないじゃない！それなのに、それなのに……。っ！」

そうだった。

彼女は、ソラくに想いを伝えた。

今ではそれが最大のアドバンテージだ。

ボクはソラくんを断っている。想いは聞いたけど、受け入れてはしない。ソラくんはそのあと彼女の想いを受け入れたんだ。

「何も想っていないのに……。何も伝えてないのにあたしの想いを踏み躪らないで！」

みかんへアー、心の叫び。

ボクは黙ってドアを閉めた。

翌朝。

目が腫れている。充血している。なんか、頭も痛い。ベッドから降りて、カーテンを開ける。心地よい日差しを浴びると少しだけ気分が盛り上がる。

「ん・・・つと。今日もいい天気だなあ・・・」

でも、昨夜のショックからは抜け出せていない。ソラくんの部屋の前で、少しだけ立ち止まり下へ降りる。リビングのドアを開けると朝食が用意されていた。あれ？ミナトさんはお料理できないはずなんだけどな・・・。ボクも今起きてきたし、じゃあ、作ったのはソラくんかな？ソラくんもまだ寝ているはずなんだけど。

「あ、おはよ〜」

「おはようございます。えっと・・・この朝ご飯誰が作ったんですか？」

するとミナトさんは首を傾げて、

「誰って・・・ソラに決まってるじゃない」

「でも、まだ寝てるんじゃない？」

「珍しく今日は早く起きて出てったわよ？何か約束事でもあった？・・・胸にグサリと何かが刺さる。

別に約束はなかったけど、ソラくんがみかんへアールと一緒に登校しているんだと思うだけで胸が締め付けられるというか・・・。

「何も・・・ありません」

「そう。それじゃ、早く食べましょ」

「あ、はい」

勿体無いから作ってもらったご飯は全部食べた。不本意だけど、おいしかったのが悔しい。

教室に入ると、真っ先にソラちゃんと目が合った。でも素直じゃないボクはすぐに目を逸らしてしまい、ソラくんを不愉快にさせちゃ

つたかもしれない。ボクだって昨夜はずいぶん不愉快だったんだから、お互い様だよ。教室にみかんへアーはいない。それだけで大分心が軽くなる。

「あ・・・水希っ」

ソラくんが何か言いたげに声をかけてきた。そう言えば、あれから会話するのは初めてかも。

「何？何か用？」

あ、少しだけ言い方がきつかったかも・・・。

「その・・・えっと・・・」

・・・正直言うと、こういうウジウジした人は好みじゃない。話したいことがあるならさっさと話してつてなっちゃうからね。

「言いたいことがあるなら手短にお願い」

ほら、本音が出ちゃった。

「今日の昼休み、屋上に来てくれないかな。その・・・水希にちゃんと話しておきたいことがあるから、さ」

話しておきたいこと？それってみかんへアーとの関係をちゃんとボクに伝えておきたいってことなの？そんなこと今更言われなくて2人の関係くらいお見通しだよ。お互いに許しあってあーゆーイケナイことをしている関係なんですよ？みかんへアーの服を剥がすほど興奮しちゃってたんでしょ？そんなことわかっている。

わかっているのに。

「・・・わかった。屋上だね」

ボクは返事をした。

昨日あれだけ衝撃的な場面を見せられたのに、まだどこかで期待している自分がある。まだソラくんがボクを見ていてくれているとどこかで期待している。ははっ、相変わらずボクって甘いなあ・・・目の前で境界線を越えていた人を未だに信じてるなんて。

そう思うと涙が出てきた。とは言え、教室で泣くわけにもいかなしい・・・。どうしようかな。

「長門ちゃん？どうした、そんなに涙をためちゃって」

目の前に茶髪ポニーテールの……何て言ったけ、橘くんだ。
橘くんがボクに声をかけてくれた。

「うっん……何でもないの……」

橘くんは気まずそうに頬を掻きながら、

「……どうみても、放っておけない状態なんだけど……」

「ははっ……そりゃそうだよね」

小指で涙を拭きながら笑う。

「もし、俺でよければ相談に乗るけど……まあ、そこまで関係は深くないしね、拒否するのも無理ないわ」

「……相談、乗ってくれるの？」

か細い声で言った言葉が聞こえたらしく橘くんは目を丸くしていた。

誰でもいい、今のこの気持ちを誰かに聞いてもらいたくて仕方がなかった。自分だけで抱え込むには重過ぎる。人任せと言われてもいい。ボクはそんなに強い人間じゃないんだから。

「俺で良いのか？ ソラとかじゃなくて」

「相談したいのは、ソラについてのことだから。関係の深い橘くんに聞いてもらいたいんだ」

可愛いかわからないけど、上目遣いで頼み込んでみる。

「んじゃ、ソラとの約束の時間までだな。行くぞ」

上目遣いを使ったのに橘くんは表情を全く変えずにボクを連れて行った。

ボクの上目遣いはあまり可愛くないのかな？

そんなことを考えている余裕ができたなんて、少しだけ元気になれたかも。

「……んで、相談っつーのは？」

よくわからないけど、図書室に連れてこられたボクは橘くんの向

かに座らされて話を始めた。橘くんは軽そうに話を聞こうとしてくれているけど、ボクにとって軽い問題じゃない。幼い頃から抱いてきた夢と約束が壊れてしまつかもしれないことを軽いことなんて言わせない。

「じゃあ、何も隠さないで事実だけをハッキリと言っね？」

一呼吸。

「ボク、ソラくんのことが好きなのかも知れない」

一瞬だけ橘くんの動きが止まった。そりゃそうだよな、自分から相談に乗って」って頼んだのに、内容が他の男の子に好意を抱いている内容だもんね。無理はないよ。

「……マジか？」

「うん。ソラくんのことが好きなの。どうしようもないくらいに……。でもね、この気持ちは一時的なものかもしれないの。胸の奥が締め付けられて、なんだかどうしていいかわからないの……」

頭では考えていないことですら口から出てくる。壊れたおもちゃみたいに、次々と言葉が出てくる。

「そんな時に、みかんへアーとソラくんがあんなことしてたから、もうどうしていいかわからなくなっちゃって……」

ついに、涙まで溢れてきた。

きつと、誰かに聞いてもらうだけでボクの心の負担は減ったんだろっなあ。

「みかんへアーって……。もしかして美春のことか？」

啞然としていた橘くんが尋ねてくる。ボクは小さく頷いた。すると、橘くんは感情の消えた恐ろしい目をして、ブツブツと何かを呟き始める。呟いているっていうより、唱えているって表現したほうがいいかな？

「んで、美春とソラが何をしていた」

・・・。

これって、他の人に言っても大丈夫なのかな？未遂とは言え、ア
シはイケナイ行為だったしそれを見ちゃったボクも精神的シヨック
があったわけだし。それを第三者にも伝えていいのかな？仮に伝え
たとして後でソラくんやみかんへアーに火の粉は降りかからないの
かな？

「・・・長門は優しいな。自分に害を及ぼした奴に被害が
降りかからないか心配してるんだろ？俺がそっちの立場だったら何
するかわからないぜ？」

半ば呆れながら言ってるんだと思う。ボクだって自分が優しすぎ
ることくらい承知してる。ううん、優しいなんて綺麗なものじゃな
い。ボクは甘いんだ。ベタ甘、砂糖にメープルシロップかけて食べ
た時の口の中みたいに甘いんだ。激甘・・・想像しただけで胃もた
れが・・・。

「ボクは優しいわけじゃないよ。ただ、甘いだけ。裏切られても、
その人を放っておけないんだよ」

「そういう自己犠牲の精神というか、他人中心とか、あんまり好か
ないな俺は。少しは自分を大切にした方がいいぜ」

言いながら橘くんは席を立った。あれ、どこに行くんだろ。

「どこ行くの？」

「んあ？もう相談は終わりだろ」

それ以上何も言わずに橘くんは図書室を出て行った。

背中からは異様なまでにハッキリ感じ取れる殺気が出ていたんだ
けど・・・何もないといいな。

ボクも橘くんの背中が見えなくなってから図書室を出た。

放課後。

どういいうわけか昼休みから橘くんとソラくんの姿が見当たらない

んだけど、まあ2人で仲良くやってるならそれでいいや。ボクが水差しちゃ悪いし。

カバンを持ちながら教室を出る。いつも使う階段を降りて、右に曲がったところだ。

「・・・・・・」

ボクはみかんへアーと鉢合わせした。

「何？あたしの顔に何かついてる？」

みかんへアーは挑発するのでもなく勝ち誇るのでもなく、友人に接するような口調で言った。

それって、ボクもみかんへアーの友人として認められた・・・・と受け取ってもいいのかな？

「う、ううん。別に何も付いてないよ」

ボクも極力感情を押さえ込みながら返答した。

そのまま立ち去ろうと歩き出す。ゲタ箱で自分の靴に手を掛けた瞬間だった。

「男装女・・・・じゃなくて、長門さん。一緒に帰らない？」

みかんへアーが微笑みながら一緒に帰ろうと誘ってきた。

どうという風の吹き回しかな・・・・。これは罠なの？そんなボクの訝しげな視線に気が付いたのかみかんへアーはにこりと柔らかく笑いながら、言った。

「大丈夫だよ、心配しなくても。あたしはあなたに伝えておきたいことがあるだけだから」

彼女が伝えたいこと。

具体的な内容を言われなくてもそれが何なのかわかる。

「わかった。帰ろっか」

ボクとみかんへアーという異色のコンビは揃って学校を出た。

電車で揺られて30分。ボクとみかんへアーは電車を降りた。ち

なみにだけど、電車の中では隣の席だったけど一言も会話をしてない。すつごく重い空気だったから、口を開けなかった。

駅からしばらく歩くと、小さな公園がある。きつとみかんへアーはそこで決着をつけるつもりだね。ボクだって負けないんだから・・・！みかんへアーは中学からの付き合いだつて橘くんは言つてた。ボクは高校からだしその点ではとても不利になっている。でもそんなのは勝負に関係ない、大事なのは想いの大きさなんだから。その人をどれだけ想っているかが大切なんだから。

だからボクは負けない。

前々から思つてたんだよね。16才つていう難しくて複雑な年頃の異性が一つ屋根の下に暮らしてる。しかもその男の子がすつごくカッコよくて、優しく、真面目で、一緒にいると温かい気持ちになる。

これほど好意を抱きやすいシチュエーションはきつとない。

ボクは幸せものだったんだ。長い人生の中で、こんなに大切に想える人と出会えて、常に顔を見ることができて・・・。

そしてボクは一つのことを頭に引つかかっている。

それはあの人とソラくんが同一人物ではないかということ。

荒唐無稽な妄想かもしれない。自分を慰めるための妄想かもしれない。

でも、捨てきれない想い。

「・・・じゃあ、単刀直入に言うわね」

公園の目の前（公園の中には入っていない）でみかんへアーは神妙な面持ちで話し出した。

「あたしは、ソラのが好き。大好きなの。悪友とか親友とかそういう距離じゃ我慢できなくなっちゃったの」

みかんへアーはどこかの恋愛シミュレーションゲームのとあるヒロインの告白のセリフを一部引用しながら言葉を紡いだ。これって

著作権大丈夫かな……。

と、そんなことを考えている場合じゃない。ボクも何か反撃しない……っ。

「ボクも、ソラくんのこと大好きだよ？でもね、どうしてなのかわからないけどソラくんはボクと距離を置こうとしてる。その理由が知りたくてしょうがないの」

ボクが深海家に下宿した初日からだ。ソラくんはボクからちよつと離れた距離でボクと接してくる。ボクが少し冷めてるっていうのもあるかもしれないけど、それは純粹に傷ついた。

「その想いに、そのセリフにウソはある？」

みかんへアーは真つ直ぐボクの視線を見つめて問いかけてくる。

ちよつと前までこんな感情を抱いたことはなかった。ソラくんから告白されてから、こんな感情を抱くようになって、ソラくんの顔を直視できなくなった。それで確信できた。

ボクはソラくんをただの男の子として見ていない。

それだけが結論。これ以上の表現方法は思い当たらない。

「あなたはウソを吐いてる。あなたはソラのことを好きだなんて思っ
てないでしょ？まだ『気になる』って状態でしょ？それじゃああたしが奪っちゃうわよ？」

図星だったから反論はしなかった。

「好き」というところまでまだ行き着いていない。ボクの中にはあの人はずつと輝いている。何度その輝きを汚そうと思っただかわからない。何度その輝きを捨てようと思っただかわからない。

けれど、あの方は捨て切れない。ボクは約束した。あの人と、決して解けない約束を。

あの方はどうしても汚れない。輝きを絶やしてくれない。

だったら、ボクはどうすればいいんだろう。無理矢理でもソラくんに告白すべきなのか、それともソラくんを諦めてあの方の輝きに服従すべきなのか。

「わかったよ。ボクはボクの思うように動く。形勢逆転しても知ら

ないよ？」

最後に小悪魔的な笑み（自分じゃ見えないから不安だけど）を残してボクはその場から立ち去った。

自宅。ドアを開けて真っ先にソラくんがいるリビングへと入り込む。

「……水希？どうしたの……」

困惑してるけど問題ない。昼休みの用事をすっぽかしたけど問題ない。

ボクはソラくんに詰め寄る。

真っ直ぐに目を見て、ボクは囁いた。

「ボクだって……ソラくんのこと、放っておけないんだからね……？」

7月：告白 ・ 中編（後書き）

どうも、後期試験を終え卒業式を終えた七色アゲハです。

今回もこの駄作にお付き合いましたきありがとうございます。

今後ともよろしくおねがいます。

ツイッター始めました。フォローして欲しいです。お願いします。

<http://twitter.com/nanair008>

「ボクだってソラくんのこと放っておけないんだよ？」

オレに囁くように水希は言った。

この頃は何だか色々と慌しい。別にオレが望んだワケじゃないけど。

美春に告白され、危ない現場を水希に目撃され拳句のあてには水希にまで意味深な台詞を言われる。これは神様がオレに与えた試練なんだろうか。答えてください神様。

息がかかるくらいに近づいていた水希は、悪戯っぽく笑うとそのまま2階へ上がっていった。認めたくないけど、今の出来事でオレはかなり動揺している。水希の顔がすごい近くにあって、下手すればそのままキスなんて事故もありえるし、息が唇にかかってものすごく興奮してるわけで……、

ま、まあいいや。オレはそんなことで水希に襲い掛かるようなやわな精神の持ち主じゃないし、決して水希を傷つけたりはしない。でも、今のはちょっと……。

「……」
さっきの台詞の意味は何だったんだろう。オレのことを放っておけないって、別に水希はオレのことが好きというわけでもないし……。

キッチンで水を飲みながら呼吸を整えていく。ダメだ、未だに胸がバクバクいつてる……。

当然だけれど、その日の夜はまったく眠れなかった。

寝不足のままの翌日。

オレは昨日と同じく家に侵入していた美春と電車に乗って学校へ向かっていた。車内での美春は終始テンションマックスだったけど昨日一睡もできなかったオレにとっては正直迷惑だ。さっきから頭がガンガンする。

「それでねー、あのクライマックスは最高だったわー！」

美春は昨日の夜にテレビ放映されていた話題の映画について熱く語っている。そんなことはどうでもいいから少し静かにしてくれよ……。明らかに話を聞いていない態度に不満を持ったのか美春は唇を尖らせて、

「もー、ちゃんと聞いているの？」

んー、「それでねー」までは聞いてたよ？ちゃんと聞いてたよ？けど、それから何を言っていたのかは覚えてない。だって寝不足で頭がガンガンするから……。

そりゃ、自分が好きな女の子から急に放っておけないんだからね？なんて言われたら深読みしちゃうに決まってる。水希はオレを否定したけれどオレは想いを捨てきれない。どうしても、何があっても水希と一緒にいたい。今ここで別の女の子といるオレが言えた台詞じゃないけど……。それでも水希の事が好きだ。

水希が好きだと、美春にも言わなくちゃならない。

その時美春はどんな顔をするだろうか。きっと傷ついた顔をするに決まっている。

それでオレは後悔しないだろうか。

「ん？あたしの顔何かついてる？」

美春の目を真っ直ぐ見つめる。

「……そ、ソラ？こ、こんな大勢の前でキスはちよつと……」

その可愛い仮面の裏に何が隠されているのか知らない。でも、美春にはいずれ言わなければならぬ。

その時は遠くない。言いたくないけど言わなければならぬ。こ
ういう状況になったのも全て自分が悪いからだ。二兎負うものは一
兎を得ず……ここまでできて両方を失うのは耐え切れない。

「いや……ここでキスなんてオレでもできないよ……」

さて、今日の放課後……思い切って言ってみようか……。

放課後への決意を改めながら教室に入ると、騒がしい喧騒と怒鳴
り声が聞こえてきた。多分オレのクラスじゃないだろうと安心しき
って入ったのが今になれば間違いだっただのかもしれない。

「んだとてめえ！もういつペン言ってみろ！」

「何度でも言つてやるよ！」

「もういいよ橘くん！」

……。

オレの本能が今すぐ引き返せと告げているけど……ここでは
どうしたらいいものなのか……。

ユツキがひとりのクラスメイトに詰め寄り、今にも殴りかかりそ
うな雰囲気だ。その横には動揺しながらユツキを止めようとしてい
る水希の姿もあって……。これは間違いなく水希が何かやらか
したのかクラスメイトが水希に何か言ったのをユツキが聞きちゃっ
て喧嘩に発展したのかのどちらかだろう。まあ、あいつが自分から
手を出す辺りを見ると水希を庇おうとしているみたいだしひとまず
安心だ。

「……あ、ソラ」

教室の入り口で右往左往していると丁度登校してきたのぶながと
遭遇した。

「あれ、のぶながは一緒じゃなかったの？」

いつもならユツキとのぶながはオレと一緒に登校するんだけど、

美春の告白を受けてからは気を遣っているらしく別々に登校している。それにしてもユツキとのぶながまで別々に登校しているなんてちょっと意外……。

「ユツキは日直らしいので、一緒じゃありませんでしたよ？それにしても……」

一息ついて、のぶながは険悪な雰囲気をかもし出している教室に目を向けた。

「……どうしたんですか、これ」
「オレにもわからない……」

いくら長年の付き合いだといっても、ここまで荒れているユツキは中2以来だからなあ……。てつきりもう落ち着いたと思ったんだけど……。

「とりあえず、ユツキをとめるのが先ですね……」

のぶながも珍しくやる気だ。この流れだとオレも巻き添えをくらいそうだけど……。まあ、仕方ないか。

「そうだね……。やってこようか」

鞆を入り口近くの机に置いて、オレとのぶながはユツキにとびかかった。

「ユツキ落ち着いて！」

「そうですよ！」

2人で押さえつけたのにも関わらず、ユツキは止まろうとしない。逆に怒りを更に燃え上がらせてしまったようだ。

「うるせえ！事情も知らねえのに出しゃばるな……！」

ユツキは両腕からラリアットを繰り出し、オレとのぶながの喉元にクリーンヒットさせた。

……。

さて、これはどうしたらいいものか。

オレだって外見は女っぽいかもしれないけど、男だ。殴られて黙っているわけがない。

「……まあ、仕方ないよね。のぶなが」

「そうですね……あれだけ怒り狂ってるユツキを抑えるにはこれしかないですもんね……」

のぶながはいつもと違う瞳をしていた。

のぶながの目を見ただけで作戦は決定した。オレにユツキを確実に抑えつつ、被害を最小限に抑えられるような高度な戦略は考えられないけど、被害の矛先が自分たちに向けば第三者の被害を抑えられる。今はそれしか手がない。ユツキが暴走していて話ができそうにないときはいつもこうやって止めてたっけ……。

ユツキに攻撃をしかけよう

そうと決まれば突撃だ。人にラリアット食らわせといてただえ済むと思うなよ……！

「うらあああああああああああああ！」

「……は？何しやがるお前ら！！」

流星にちよつと動揺したのかユツキは1歩後ろへ下がった。

……。

「それが狙いだよバカユツキ」

一応、柔道の段を持っているのぶながが華麗にユツキを投げた。

「……っ！」

がっしゃーん

ユツキは狙ったとおりに気絶していた。

「……んで、何があったの？」

ユツキが目覚めてから、屋上で話を聞きだした。最初は口を固く閉ざしていたユツキも何回も問ううちに口を開く。

「・・・・・・・・バカにされてたんだ・・・・・・・・」

バカにされてた？ユツキが？こいつがバカにされたって事実だから仕方がないと思うけど、それだけであんなにキレるような奴じゃないんだよねこいつは。

「誰が？」

重々しい空気の中、ユツキは告げた。

「長門が・・・・ある人を思い続けていることをあいつらは笑ったんだ・・・・・・・・！」

今にも床を殴りつけそうなユツキ。

驚いた。何に驚いたかというのと、ユツキがそのことを知っていたことに一番驚いた。二番目にバカにされていたことに驚いた。オレって結構空気読めてないのかな？

「・・・・・・・・そっか」

状況を理解していくごとに怒りと情けなさが湧き上がってくる。

水希の夢をバカにしたことへの怒りとそんな夢を抱かせてしまった自分への反省。今更反省したところで何も変わらない事はわかってるんだけどそのせいで水希が嫌な思いをしたのならそろそろ考え直してみないといけない。

通りで義理人情に厚いユツキが怒るわけだ。

「・・・・・・・・ソラ？どこへ行くんですか？まさかあなたも・・・・・・・・」
のぶなが心配そうな視線を送ってくる。大丈夫だよ、心配には及ばない。

オレは少しだけ笑って、

「大丈夫だよ。だけど・・・・・・・・しばらく1人にさせてくれるかな・・・・・・・・少しだけ気持ちの整理をしたいんだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」
チラッとユツキを見ると訝しげな表情をしていた。

勘が鋭いコイツなら、すぐに見破られてしまうかも知れない・・・

。。
オレは静かに屋上を去った。

階段を降りながら、オレは考えた。

オレは美春の告白を受け入れた。けれど、水希の気持ちも知っている。

そして昨日の意味深な発言。

正直言つてオレは悩んでいた。このまま美春と付き合っていていいのだろうか。水希を断れば美春は変わらないが水希との関係が変わってしまう。彼女の夢は叶わないものになってしまう。美春を断れば水希の夢が実現して美春を傷つけることになる。かといって両方を断るわけにもいかない。それが一番平和で平等で無血開城的な手段だけどこまでしておいてそれは無責任だ。そこまで責任感が強いわけでもないオレが無責任だと思っくくらいだから多分相当無責任なんだろう。

オレはどうすればいい？

某人気探偵アニメのように偽名を名乗って追跡メガネをかけてボイスチェンジャー搭載のネクタイをつけキック力が倍増する靴を履くしかないのか。。。でもオレは薬で小さくなってるわけじゃないし、顔見れば多分バレるし。。。。

「というか、何を考えているんだオレは。。。。」
自分の不測の事態への対応力の弱さに驚いた。途中から全く関係のない方向に逸れてるじゃないか。

。。。。。。。。

でも、実際どうすればいいのかわからない。どっちを傷つけて、どっちの気持ちを受け入れるべきなのか。

ハッキリ言つてオレは犯罪者より性質悪いんじゃないかな？

「。。。。。。あっ」

前方から小さな声が聞こえた。スカートをはいている辺りからして女の子だろう。オレの後ろに何かあるんだろうか。

視線の行き先を確認するために、ゆっくりと顔を上げた。

「　　」

水希と目が合った。

オレが目を逸らして通り過ぎようとした瞬間水希はオレの手を引いた。

「ちよつと時間あるかな・・・ソラくんに知っておいてもらいたい話があるんだけど・・・」

何の話か大体想像はつく。オレは黙って頷いた。

水希に手を引かれてやってきたのは屋上だ。ユツキとのぶながは既に出て行ったらしく、今の屋上にはオレと水希の2人しかない。普段ならこういうシチュエーションは大歓迎なんだけど今回は話が違つから逆にお断りしたくらいだ。

水希はフェンスに寄りかかりオレはただ呆然と立ち尽くす。そこには恥じらいや甘酸っぱさなど微塵も存在していない。あるのは沈黙だけ。2人が通じ合うのを阻もうとする大きな壁、誰も破ることはできない壁。

オレたちはいつからこんな風にすれ違ってしまったんだろうか。

「あのねソラくん。ボクにはずつと想い続けてる大切な人がいるんだ」

「・・・」

「初めはね、ただ寂しそうだから一緒に遊んでたんだよ。でも一緒に居ると楽しいなとも思ってたの」

オレは何も言えない。

「いつの間にか惹かれてて……もうずっと一緒に居られるんだ
と思ってた。このままずっと一緒に居られたらいいなって思ってた」

「……それで？」

続きをわかっているのに聞きたがる自分がいる。

「その人はね、引越して行っちゃったんだよ。そのときにあの人はボクと約束をしてくれた。だからボクも約束をした。……あれから10年経ってもボクはあの人を忘れられない。あの人がボクを忘れていたらしょうがないけど……でも、ボクは約束を果たせたらあの人が幸せになるのを願うだけ。それだけでいいんだよ。言えなかったことを言う、それだけでボクたちの約束は果たされる。その後は好きにしてくれればいい、ボク自身そう思ってるんだ」

オレはそれじゃイヤだ。水希は本心を隠してる。……根拠はないけどそう思える。

「だからね……あの人絡みのことになるとどうしても周りが見えなくなっちゃうんだ。だから今朝もあんな騒ぎになっちゃうって……」

「……水希」

自分でも気が付かないうちに声が出ていた。当然、首をかしげている水希。今更、何を言えと言うんだ。オレは水希を断って美春を受け入れたんだ、そんな男が今更何を……。

でも、止まらない。今までため続けてきたものがあふれ出してきてどうしようもない。

「今ここで、水希の約束を果たせるとしたら　お前はどつする」

一瞬の静寂。

そして水希は儂げに笑った。

「無理だよ……。約束が果たせるなら果たしたいけど……それが終わればボクは……」

一呼吸。

「約束を果たせたら、ボクはソラくんと一緒にになりたい」

息が止まった。ぶっちゃけこの返しは予想外だった。てつきり前みたい怒らせてしまうんじゃないかと思っていただけだな……。
「ボクは過去に固執しすぎてると思うんだよ。そろそろ別の人を見て、自由に過ごしてもいいんじゃないかなって……」

まあ……。それはオレも一緒だから何も言わないでおこう。

「ソラくんと一緒に過ごすようになってからさ、心の中のあの人がだんだんと薄らいでいくんだよね。もつと違う言い方をするとソラくんとあの人が重なっていく。だんだんソラくんとあの人が同一人物じゃないのかなんて思ったりすることもあるんだけどさ……。それは流石に思い過ごしかなって思うんだけど」

何かを言おうとしたのに声にできない。

「水希……」

「ははっ、笑ってくれてもいいんだよ？ソラくんとあの人が同一人物だなんてあるわけないのにね」

そういう水希の顔は少しだけ悲しげだ。

さて、重要な選択肢だ。ここでオレが『秋谷岬』だと明かすのか、このまま放っておくのか。仮にここで明かしてその後どうするのか、悩みに悩んだオレは意を決して前者を選ぶ。

「もし……もし、その約束がここで果たせるとしたらお前は信じられるか？」

「ここにあの人はいない……。約束は果たせないよ……」

「もしもの話だつてば」

水希は更に悲しげな表情をする。空は快晴なのにどうしてこの場所はどこよりしてるんだ。

「じゃあ、質問を変えよう。もしお前の言うあの人の本名が別にあるとしたら……」

「……………」

そこで水希は息を呑んだ。

「あの人　　秋谷岬という名前が偽名だったら……お前は どう思う?」

「まさか……岬くんが言いたかったことっていうのは……」
話が早くて助かる。

「そのことだと思うよ……オレは。秋谷にも事情があったみたいだし」

どうしてここでスパツと言えないのだろうか。オレと秋谷が知り合いだと認識してくれたみたいだけど……まあ、いいか。
後々わかってしまうことではあるからね。

夕暮れ時の学校。

誰も居ない教室。

目の前には不安そうにオレを見る美春。

「ソラ……?どうかしたの……?」

オレだってこんなこと言いたくなかった。
でも言わなければいけない。

「何か重要なことなの……?そんなに押し黙っちゃって……」

水希と美春。どちらがいいかなんてオレには選べない。だけど、
水希があんな夢を抱いてしまったのはオレの責任だ。

言っなら、これは贖罪。

「言いたいことがあるなら言ってよ……」

「どうやら美春もこちらの考えを察してくれたらしい。
ならば、慎重に言葉を選んで美春を……」

「

」

「……そっか……。でも、それがソラの気持ちならあたし
は何も言わないよ……」

目に涙を浮かべながら美春は去っていった。

1人だけの教室。

夕日が差し込む中。

オレは涙を流した。

普通なら振られた方が泣くのだろうが、今は自分が情けなくて頼
りなくて責任感がなくて……。
また大切な人を傷つけてしまった。
あの頃からオレはちっとも変わってない。

そんな自分が腹立たしくて仕方がなかった。

8月：告白 ・ 後編（後書き）

どうも七色アゲハです。

活動報告にも書きましたがこの投稿からしばらく活動休止になります。詳しくは活動報告をご覧ください。

どうにも三編じゃ収まりませんでしたね……。多分次の話はテキストにサブタイトルをつけることになるでしょう。

次回の投稿まで長くなると思いますが、どうかよろしく願いします。

あ、途中の空白の会話文は某大人気ラノベより参考にさせていただきますました。

勝手に使ってしまったてすいません。

それでは、これからもこの駄作にお付き合いください。

以上、七色アゲハでした

8月：告白 ・ 完結

実を言うと、この結末はわかっていた。

ソラにはあの子がいるってこと・・・知らないわけじゃなかった。

ただ、ソラはあの子に気が無いということを確認したかっただけ。あたしはそれだけのために想いを打ち明けた。なのに・・・なのに

どうしてこんなにも悲しいんだろう。

ソラに好意を抱いていたのは事実だった。けれど、断られて否定されてここまで悲しくなるなんて思いもしなかった。あたしは自分でも知らないうちに溺れていたのかもしれない。ソラの優しさに甘えていただけなのかもしれない。

あたしは・・・バカ野郎だ。あ、女だからバカ女って言ったほうが正しいのかな？

どーでもいい疑問にあたしは小さく笑った。

オレは美春を断った。

理由は簡単。どうしても水希の夢を無駄にしたくなかった。ただそれだけだ。あいつにあんな夢を抱かせて10年もあいつの自由を奪ったのは紛れも無くオレの責任。これは贖罪なのかもしれない。自分への慰めなのかもしれない。まあ、ぶつちやけ言えば贖罪という印象が強い。これで水希の約束が果たされればオレも過去の束縛から解放される。そうすれば・・・オレも水希に想いを伝えられるんだ。

でも、1つだけ心に引つかかるものがあつたりする。

あいつの夢を叶えたいという自分勝手に自己中心で幼稚なワガママのために美春の想いを無駄にした。オレは10年前の過ちをもう一度犯そうとしているのかな？ そうなればオレはあれから全く成長していないことになる。

そんな、ワガママで美春を傷つけたのは事実。

その裏にどんな理由があつても、揺らがない事実。

オレはなんてバカ野郎なんだろうか。

そんな自分に落胆しながら玄関のドアを開ける。

「ただいまあ〜」

キッチンから何かいいにおいがする。今日はカレーかな？

.....

あれ.....？ 誰も返事を返してこない。普段なら姉貴が返事を返してくれるのに。何かあつたのかな.....？

「姉貴ー？ いるんでしょー？」

リビングに向けて声をかけても返事は返ってこない。キッチンからにおいがするってことは誰かがいるはずんだけど.....

と、ここでオレはとある疑問を抱いた。

姉貴は料理スキル0で、家事炊事など絶対にやることはない。というか、姉貴がそんなものに目覚めたら深海家は食中毒に見舞われて全滅してしまうだろう。それほど姉貴の料理スキルはひどい。では料理しているのは一体誰なのだろうか.....。恐る恐るリビングへ入っていき、キッチンの方を向いた。

そこには.....

薄いピンクのエプロンを着て可愛らしく味見をしている水希だった。

「うーん.....もうちょっと薄味の方がいいのかな.....」

何を作っているのかは知らないが、匂いからすると危ないものじ

やないらしい。それにしても・・・うちにきて水希は夕食を作ったのは今日が初めてだ。何かあったのかな・・・？

こちらの視線に気が付いたのか水希は顔を上げてオレの方を見た。「ふえ・・・！？ソラくんいつの間にな・・・！」

顔を真っ赤にして料理を隠そうとする水希。まあ、隠れてないから意味はないけど何か無性に可愛く見える。オレだって男なんだからこういう展開にちょっと興奮してしまうわけで・・・

「えーっと・・・」

何を言っただけ誤魔化そうか必死で考える。いつもなら恥ずかしさのあまりオレを追い出すかメチャクチャな罵詈雑言でオレの精神をズツタスタにする。いつもなら。今回の水希の行動はオレが予想していないものだった。

「ソラくん・・・」

水希が頬を染めながら懸命に何かを言おうとしている。水希がこんな風になるなんてかなり珍しい。ホントに何かあったのか気になる。

「・・・どした？」

すると、急に水希は真剣な目でオレを真っ直ぐ見つめた。ホントにどういふ風の吹き回しなのかわからない。・・・オレって実は鈍感だったり・・・。

「ボク、どーしてもソラくんに伝えなきゃいけないことがあってね・・・」

水希が真剣な目でどういふ声で何かを言うときは大体過去のことが絡んでいる、と一つ屋根の下に住み始めてからわかった。貴重な進歩を大切にしたい。

「あ、ああ・・・」

そしてどういふ時には上手に笑えなくなるのがオレだ。昔からホントに何も変わってないな・・・。星園学園に転校してきた時も、こんな感じで顔が引きつってたんだろう。自分が情けなくなってくる。

「前にボクが『ソラくんのこと放っておけないんだよ?』って言ったの覚えてる……?」

忘れるわけが無い。うん。あんなに色っぽい水希は初めてだったから。

「その言葉の意味……知りたくない?」

珍しいことだ。あの水希が、ここまで積極的だなんて。

挑発するような瞳、声。

その裏に隠されている不安。

オレはそれをその一言で読み取ってしまった。

「……」

とはいえ、返答に困る。これは一応チャンスだ。ここで水希を刺激させるようなことを言ったら完全にゲームオーバー。オレも水希も本当のことを知らないまま時間は流れてしまう。正直オレ自身そんなオチはいやだ。

オレだって水希と一緒にいたいという思いはある。だが思いをどう伝えるかがわからない。

「ボクはずっと……あの人のことだけを見てきたつもりだった。あの人以上の男の人には近づかないようにしてきたつもりだったのでもね、こっちに転校してソラくんと一緒に暮らしてきて少しか心が変わってきたの。ソラくんといると何だか安心して、楽しくて……あの人以上にこんな感情を抱くなんてって最初のほうは思ってたんだけど最近になって思い直してみたの」

今まで一番穏やかで嬉しそうで晴れ晴れとした表情で、水希は続けた。

「そろそろ近くにいる男の子を好きになってもいいんじゃないかな……って」

何を言われているのかわからないほど鈍くはないつもりだ。オレは黙って聞き続ける。

「あの人は、いつか会ったときに約束を果たせばいい。あの人が
ってそこまでボクに固執はしていないと思うし、一方的な感情は却
って迷惑なんじゃないかなって思えてきたんだよ」

「……………」

黙っていることしかできない自分が悔しい。ここでさりげなく一
言言えればカッコいいんだろなあ……。だが生憎オレにそんな器
用さはない。

「だから……ここで自分の気持ちをハッキリさせておきたいの」

一呼吸。

間違いなくオレの目を真っ直ぐ見つめ、

はつきりとした口調で、

堂々と言った。

「ボクは、ソラくんのことが好き」

一瞬、心臓が止まるかと思った。

「他の誰でもなく、岬くんでもなくソラくんが好き。『今』のソラ
くんが好き。今までは岬くんのことを気にしててちよつと距離を置
いていたけど、もう我慢できない。ソラくんと一緒にいたいのに」

堰が壊れたように言葉を吐き出す水希。彼女が今までそんな気持
ちを抱きながらすごしていたことに1番驚いた。それともう1つ驚
いたのは秋谷の呼び方が『あの人』から『岬くん』に変わったこと。
これはどういう意味なんだろうか。……何か深い意味があるのか
な？

そんなことより、オレはこの告白に答えなければならぬ。つい
さっき、美春を断ったのにも関わらず水希の告白を受けて動揺して
いる。傍から見れば女たらしの遊び人だと思われそうだけど……。

「水希……オレは……っ」

緊張していて声が震えている。

あんなに待ちわびたセリフなのに、
あんなに求めていたセリフなのに、
あんなに欲しがったセリフなのに、
どうしてオレは声が震えているんだろう。

まあ、理由は簡単だよ。．．．言いたくないけど。一瞬視線を泳がせてから再び水希の方を向く。そして、水希は再び口を開いた。「ホントは、ソラくんが『岬くん』だったんだよね？あの時は．．．名前を隠してるのにボクと友達でいたんだよね？」

どうやら水希は事の顛末を全てわかつていたらしい。まあ、オレも気付かせるように今まで動き回っていたわけだから、一応目的は達成したことになる。でもなぜか胸の奥で何かが引つかかる．．．。「．．．．．」

当然ながらオレは水希の問いに何も答えられない。何だか自分の罪を再確認されているみたいでものすごく居心地が悪い。

「ねえ．．．それはどうしてなの．．．？それを聞かなきゃボク、ソラちゃんと一緒にいられないよ」

いずれこうなるとはわかっていたのに、その状況に陥ると何もできない。彼女の言う、一緒にいられないというのは、隠し事があるままじゃすつきりしないからだろう。水希は昔から真っ直ぐで純粋な人だったし。今ではそれが仇になってるよ助けて神様。

とはいえ、これは自分ではじめをつけないといけない。ちゃんと理由はあるんだから恥じることはないじゃないか。ちゃん

「．．．．オレは．．．．」

） 中 略 ）

オレは自分の母親に問題があつて、名前を知られたら母親のことで水希が離れていってしまうのではないか、と思ひ偽名を使ったという旨を伝えた。それにしても長かった。それを説明するだけなの

に、心拍数はあがるし舌は回らなくなるし視線は宙を泳いだ。．．．
どんだけプレッシャーに弱いんだオレは。しばらく沈黙が続いた。
水希も事実を知って少しシヨックなのだろうか俯いたまま何も言
うとしない。オレはオレで重圧から解放されたので、だいぶ精神的
に疲れていて何も言えない。

「ソラくんは．．．」

先に沈黙を破ったのはやっぱり水希だった。

「ソラくんはそんなことでボクが君を嫌うと思ってたの．．．？」
探るような視線から逃げる。

当時のオレは、それが原因で友達が少なかった。みんなあ
の母親の存在を知ると、オレを避けるか集団で罵倒や暴行を加え
た。あの頃は服が汚れない日なんてなかった。物が壊されない
日なんてなかった。傷つかなかった日なんてなかった。あの母親と
同じ名字だと水希に知られれば、彼女もオレを傷つけるんじゃない
かと怖くなっていった。だから、名前を隠した。そうすれば彼女は
ずっと一緒にいてくれると思った。初めての友達でいてくれると思
った。あの日、あの場所で手を差し伸べてくれなければ、オレはず
っと1人のままだった。もし水希と出会ってなかったらと想像すると、
今でもゾツとする。未来に希望をくれた水希が離れていくのを怖
れていた。

幼かったとはいえ愚か過ぎる。

大切なものを手放したくないために自分を隠した。隠したまま、
心を開いて接してくれていた水希と一緒にいたのだ。なんと愚か
だったのだろう。

「思ってた．．．あの母親の子供だと知られれば水希も離れて
いくと思ってた」

オレは正直に事実だけを伝えた。

「そう．．．」

水希は一瞬悲しげな表情を見せた。

「でも、ボクはそんなの関係ないって思ってたよ？ ソラくんはソラくんだし、お母さんがどんなに変な人でもソラくんには非はないはずだよ」

「……そんなの関係ないなら、どうして他の連中はオレから離れていったのかな？」

思わず声が低くなってしまった。水希は硬直したままこちらを見ている。怯えてくれたって構わないしこれで嫌いになってくれても構わない。

「……ただ、これだけは言わせてもらおう。」

「……オレの事情を何も知らなかったのに、わかったようなことは言わないでくれるかな……？ 言ってくれない方がオレもこんなこと言わないで済むし、水希にも嫌な思いをさせないで済む。今回はこれくらいにしておくけど、次は怒るよ……？」

いつものような高い声は出ない。出す必要もないんだけどね、女に間違えられちゃうから。

「ごめん……そんなつもりじゃ……」

「わかってるけど、オレには禁句かな……。そのセリフは」
一呼吸。

「あ、それともう一つ……」
人差し指を立てながら言う。

「……ずっと火かけっぱなしだけど、大丈夫なの？」

キッチンからは料理のものだとは思えない匂いが漂ってきている。

……話に夢中になりすぎて忘れてたけど、料理してたんだもんね。

「きゃあ　　っ！ボクがせっかく作った料理があ

っ！」

水希の悲鳴は近所中に響き渡ったことだろう。

1つ後悔があるとすれば、水希の手料理が食べられる貴重な機会を逃してしまったことだ。

オレってついてないな……。

翌日、教室に入ったオレを待っていたのは鞭や鈍器を手にして明らかに正気ではないクラスの連中だった。……オレ何かしたっけ……？

「深海イ……お前はなんて羨ましいものを手にしたんだ……！」

よくよく見ると、武装集団の先頭に立っていたのはユツキだった。何やってんだコイツは。

「……言ってることが理解できないし、その格好にも理解できないんだけどどうすればいい？」

「とりあえず、血祭りにあげる」

「質問の答えになってないんだけどわかってる？」

ダメだ……完全にアッチの世界に行っちゃってる。

「……血祭りにあげたあと、メイド服に着替えてもらってご奉仕してもらうことを希望しますっ！」「」

「いいだろう。どういふ経緯でああなったのかたつぷりと聞かせてからは好きにすればいい」

……今オレの本能が危険を察知した。間違いなく察知したよ。つか何してんだ女装部の変態ども。

まずは鞭をもった連中がオレに迫ってくる。まあ、正直鞭より縄が好みだったんだけど今はそんなことどうでもいい。早く逃げないと命が危ない。

「あれ？何してるんですかこれは」

逃走を図ろうとしたところで、オレの後ろからのぶながが登場。

おかげで出入り口が封じられてしまった。

「何してんのぶなが！早くどいてよ！」

「だからこれはどういふ状況なのかを説明してくださいよりアじゅ・

・ソラ」

今リア充って言いかけたよこの人！もしかしてグルなの！？のぶ
ながのことは信じてたのに！

「今お前が考えたとおりだ。既にこの教室にお前の仲間なんかいね
えんだよ！」

「さらつとひどいこと言わないでよ！シヨックなんだけど！」

そんなことを言っている間にも鞭集団は近づいてくる。どうやっ
てこの危機を乗り越えようか……。ない知恵を絞って辺りを探っ
てみる。でもユツキの言ったとおり、仲間はずいもないみたいだ。
。そんな絶望のどん底にいたオレに、一筋の光が差し込む。

「あんたたち何やってるの……？」

この勝気で透き通った声は……。美春！

「美春！助けに来てくれたんだね！」

喜ぶオレとは対照的に、顔を歪める武装集団。これは効果観面だ！

「ソラ……？」

オレと目が合った瞬間、顔を赤らめてそっぽを向いてしまった。

あれ……。？助けに来てくれたんじゃないの……？

「まあ……。あんなことがあったあとじゃ助けられないだろう
な」

哀れむような視線でユツキがつぶやく。……。え？あんなことっ
てどんなこと？

「大人しくつかまっとけ」

言いながら片手を挙げたユツキ。その瞬間オレの意識は途絶えた。

「よし、つかまっただな」

「しかし、ユツキ。本当にこんなことをしてもいいんですか？」

「心配すんな。拷問なんかしねえよ」

「では、何を……？」

「ソラが水希ちゃんを裏切らないで過ごすように言い聞かせる。誓約書も書いてもらうつもりだ」

「……流石ですね」

「何が？」

「ユツキはソラのことをしっかり見ています。ソラの長所も短所も全部わかっていますし」

「まあ……そうだな」

「本当に仲がいいんですね」

「最初がケンカだった分、心の距離が近いんだろう」

「くす……っ」

「だから、ソラを全力で応援したいと思う。自分のことは二の次でいいんだよ」

「……今のユツキ、カッコいいですよ」

目が覚めると、なぜか屋上にいた。空は晴れていて、夏特有の刺すような日差しがオレの顔を直撃する。これはあつつい……。

「あつつ……」

日差しから逃げるように寝返りを打つと、底にはユツキとのぶなが立っていた。

「よお、気が付いたか」

飄々と尋ねるユツキ。主犯が誰だったのか覚えてないのかコイツは。

手を動かすと、自由に動いたので縛られてはいないようだ。とりあえず、貞操は守られた。

「これはどういことなのか説明してもらえるかな？」

起き上がり、ユツキを下から睨みつける。しかしユツキは臆することも無く口を開いた。

「お前に1つ誓ってもらいたいことがある。そのためにここに呼んだ」

呼んだというか、無理矢理連れて来られただけなんだけどそこら辺をユツキはしっかり理解しているのかな？でも、ユツキの目は真面目だ。ちゃんと話を聞いておいても悪くはなさそうだし、聞いておこう。

「誓い？何を誓えばいいの？」

オレの問いにユツキはもったいぶるように間を空けてから言った。「お前が、水希ちゃんを絶対に泣かせるようなことをしないってことをだ」

「・・・はっ！？なんで・・・っ」

コイツ、何で知ってるんだよ！まだ誰にも言っていないのに！

「ソラなら守れますよね？」
にこりと微笑むのぶなが。今はそれどころじゃないでしょ！なんでユツキが知ってるんだよ！

オレが今の状況を理解できずにいると、呆れたような顔でユツキが言った。

「実は、今朝お前が登校する前に水希ちゃんから相談されたんだ。ソラとうまくやっていけるかってな。まあ、何を言ったのかは知らないが相当傷ついてみたいだぞ」

・・・あのことが。水希に悪気はなかったんだろうけど、あれだけは受け入れられなかった。少し言い過ぎたかなとは思っているけどオレが謝る必要もないのでそのままにしてある。だからなのか、今朝は顔すら合わせずに家を出て行ったけどね。

「・・・オレにも譲れないところがあるわけで、決して水希を傷つけようとして言ったわけじゃ・・・」

「それもわかっている。お前に色々あったことも知ってるし、傷つけるような言ったことを咎める気はない。だが、これだけは約束しろ」

ユツキはポケットから一枚の紙を取り出し、オレに突きつけた。
何これ・・・？

「これ以上水希ちゃんを傷つけないと誓ってもらおう。ほら、さっさとサインしろ」

・・・正直言わせてもらおうと恥ずかしい。なんとというか・・・こ
う、恥ずかしい。オレはのぶながから渡されたペンで名前を書く
と誓約書をユツキに返した。書いてあることを再三確認したユツキは
満足したように誓約書をポケットに戻した。

「これでお前は水希ちゃんを傷つけることはできなくなったわけだ。
誓いを破ったら何が待ってるかわかってるよな？」

口元は笑っているが、目がマジなのでとりあえず頷いた。これを
破ったら何をされるのか・・・想像しただけでも寒気がする。

とはいえ、

こんな風に、思ってくれる友人がいるのも悪くはないしむしろあ
りがたいくらいだ。放置せずにこうやって応援してくれる。こんな
素敵な友人が2人もいてくれるなんて、オレは幸せ者なんだろう。
昔の心配が馬鹿らしく思えてくる。ユツキにもぶながにも母親の
ことは話してある。最初に話すときは本当に緊張したのをよく覚え
てる。打ち明けても、この2人はずっと一緒にいてくれた。

そして、美春も。

今回の一件で一番傷ついたのは美春だ。オレの自分勝手な理由で
断って、傷つけた。美春もオレとずっと一緒にいてくれていたのに。
「・・・美春にもあとで謝っておけよ」

オレの考えを見抜いたのか、ユツキがそんなことを言った。流石
は悪友、オレの考えそうなことは全部わかっているんだね。

「わかっているよ。丁寧に謝っておく」

「しこりが残らないといいですね」

のぶながはいつも微笑んでいる。ここまでその表情を続けられる
と、何か裏があるんじゃないかって逆に疑っちゃうじゃないか。で
も、のぶながの言うとおりでもある。これで美春との関係が悪化し

てしまったら『大切な親友』をなくしてしまうことになる。それだけはなんとしても避けたい。まあ、どうフォローすればいいのかさっぱりなわけだけど。

「美春にもちゃんと話せば通じるだろ。あいつもバカじゃないからな」

「ですね。美春もちゃんとわかってくれますよ」

「そうだね……。オレが悪いんだからちゃんと謝らないと……。空を仰いだ。どこまでも青空が広がっていて、太陽はキラキラと輝いている。気温も高く、しかも直射日光を直に受けているために汗が止まらない。

夏。

7月は終わってしまったが、あと2週間で夏休みだ。もちろん夏休みは海に行ったり祭りに行ったりと予定はたくさんある。今まではユツキとのぶなが、美春とオレの4人だったけどこれからは水希も一緒に連れて行けるかな……？

新しくなった関係に喜びを感じた瞬間だった。

その日の放課後。珍しく水希と一緒に帰ろうと誘ってくれた。これも関係が新しくなったことの影響なのかな……？

「あれ？何か用事でもあるの？」

「うん、ちよつとね……。すぐ終わるから先に校門に行つて、すぐ行くから」

水希は何も疑わずに従ってくれた。

オレだって早く帰りたいのはやまやまだ。けれど、今日のうちにやっておかなければならないことがある。

小走りで教室に戻ると、席で呆けている美春の姿があった。

「あ、ソラ……」

こちらの存在に気付いたらしく、首だけをこちらに向けた。この

時点で既に空気が重いことは感じている。でも言わなくちゃ。振り回したことを謝らなくちゃ。そうでないとオレは自分が許せない。傍から見ればただの偽善かも知れない。自己満足かも知れない。それで美春の心の傷が癒えるとは思ってないし、許されるとは思っていない。今までの関係が崩れてしまいかも知れないけど、どうしても言わなければならぬ。

「美春・・・その、悪かった」

何も言い訳はしないで頭を下げた。頭を下げることを暫し、美春は儂い声で呟くように言った。

「もういいよ」

その言葉を聴き終わってから頭を上げる。美春の目には少し涙が溜まっているように見えた。

「あたしは、ソラが好き。だけどあの子もソラが好きだった。どっちの想いを受け入れるかはソラの自由だしそれで謝ることはないのよ」

そうは言うけど・・・こんなことを言える美春はとても強い人なんだろうな・・・。

「でも・・・」

美春は涙を浮かべながら、懸命に笑った。

「これからもいつもどおり、友達でいてよね？」

迷うわけが無い。

「当たり前だよ」

美春が教室を出るのを見送ってから、オレも教室を出た。夕焼けを眺めながら廊下を歩き、下駄箱で靴を履き替える。

空はやっぱり晴れていて、窓からじゃわからなかった綺麗な夕焼けが広がっていた。

校門から伸びる、1つの影。

「全然すぐ終わって無いじゃん！遅いよ！」

「あー……ごめんごめん」

オレは適当に謝っておく。

「これじゃあ、電車間に合わないよー……」
言葉とは裏腹に嬉しそうな声の水希。

「しかたない……。次の電車で帰ろうか」

「そうだね……。それまで時間あるし、駅前で何か食べていこうよ」

どうせ奢れというんだろう。お金いくらあつたかな……。

「ほら、早く行こうよ！」

オレの手を引っ張る水希は、最高の笑顔で笑っていた。

「わかったって！だから引っ張らないでよ！」

これからどんな日々が待っているのか、オレは楽しみでたまらなかつた。

8月：告白 ・ 完結（後書き）

お久しぶりです。七色アゲハです。

怪我を理由に、少しばかり更新をしていませんでしたが怪我の具合がよくなってきましたので、また少しずつ書いていきたいと思いません。

久しぶりに書いたので、ワケのわからない部分がたくさんあるかと思いますが怪我に免じて見逃してやってください。

これからもこの駄作にお付き合いよろしく願います。

以上、七色アゲハでした。

8月：もつともいいですか？

「えー、高校生活最後の夏休みとなる3年生については、努力を怠らずに精一杯夢に向かって」

一学期終業式。校長はどーでもいい話を延々と続けている。

「それから1、2年生は、星園学園の生徒だということを忘れずに真面目に生活していただきたい」

ほんとにどーでもいい話だなー……。面白みもないし、反応に困る。だんだん眠くなってきちゃったよ……。ふと、隣を見ると性別不明の絶世の美女(?)である結城のぶながが天使のような寝顔ですやすやと寝ていた。か、可愛い……。もし今が終業式中じゃなければ何してるかわからなかった。襲ってたかも知れない……。

(あふ……。オレも眠くなってきたな……)

欠伸を噛み殺しながら、校長の話聞き流し続ける。まあ、聞き流していると声が丁度いいBGMになって寝ちやうわけなだけどさ。でも寝ちやったら先生に見つかると、それで生活指導室に連行されるのはイヤだ。でも眠い。

「……。ソラ？」

のぶながの声を最後にオレは眠りに落ちてしまった。

夏休み。サマーバケーション。

星園学園は1ヶ月ほどの夏休みがある。まあ、長い分課題も多く出ちやうわけわけなだけどそれについては触れないで置く。なんでかって？憂鬱になるからだよ。のぶながはともかく、ユッキとオ

レは勉強はからつきし。ユツキほどバカじゃないけど勉強の出来ははつきり言つて悪い。

そして、夏休みの初めの1週間を使って学力強化合宿というものがある。余計なものを企画してくれた、とオレやユツキは忌々しく吐き捨てるしかできないんだけど要は泊り込みで勉強する地獄の合宿ってこと。1週間も一日勉強漬けだなんて・・・オレ生きて帰つてこれるのかな・・・？今日が終業式だから、出発は明後日になる。一日休養だか準備に回せとのことらしい。大体の生徒はその一日に遊びまわったり好きなことをして過ごす。オレも例外ではなく、明日は一日中寝てようと思つてるんだけど・・・

「ねえねえ、明日どこか遊びに行こうよ」

水希に誘われてしまった。いや、「誘われてしまった」と言うより「誘つてくれた」と表現するべきだろう。あれだけ望んだ関係が築けているんだからもつと大切にしないとダメだしね。

というか、最近の水希は妙にスキンシップをとってくる。なんとなくか、男の理性を吹き飛ばしそうで吹き飛ばさないような微妙な意身体接触……。オレにとってはこっちの方がよっぽど耐え難い。「んー・・・」

少し考える。右腕に柔らかい感触があるけどそれはないものとして考える。別に行きたいところとかないし、女の子が喜びそうな場所にも詳しくない。それに、暑い。暑いのは嫌いだし汗を掻くのも嫌い。だから夏の間はできるだけ家にいることを心がけている。

「水希が行きたいところとかある？」

「どうしても自分じゃ思いつかなかったので、水希に振ってみた。」

「別にボクもどこかへ行きたいってわけじゃないんだけどなあ・・・」

「じゃあどうして誘つたりしたんだろう。オレの考えが読めたのか水希はいたずらっぽく笑つて言った。」

「ソラちゃんとラブラブなんだってみんなに見せたかっただけだよ」

意外と可愛いところもあるんだね。てっきりもう大人なのかと思つてた。

「あれえ？ソラくん顔赤くなってるよー？」

くすくすと楽しそうに笑いながら水希が顔を覗いてくる。

「急に変化球投げてくるから・・・っ」

顔を隠すようにそっぽを向いた。こんなんで赤くなるなんて情けない・・・。どれだけ女子への抵抗力がないんだオレは。

「さ、早く帰ろうよー」

「わ、わかつたから手を繋いで帰るのはやめようよ・・・！」

ここ数日で、本当の水希に近づけた気がした。

翌日。

水希は合宿の準備を全くしていなかったということであー・・・。外出は中止。どういうわけかオレまで準備を手伝わされる羽目になつてしまった。ちなみにオレはしっかりと準備してある。水希はここ数日浮かれまくっていたから準備のことなんて頭からなくなつていたんだらう。ホントに可愛い奴だなあ・・・。

「ソラくん、下からバスタオルと歯ブラシ取ってきてー！」

まあ、オレが動かされるわけですが。水希は自分の部屋もしくは2階にあるものだけを準備し、1階にあるものは全てオレに任せている。だからオレは1階と2階を何往復もしなきゃいけない。

「ちくしょ・・・なんでオレが・・・」

苦々しく呟くと偶然姉貴が通りかかった。

「水希ちゃん、嬉しそうね」

「・・・そうだね。前よりも高校生っぽくなってきたのは確かかも」

水希の告白を受ける前は、冷たくてどこか近づきたい雰囲気をも

出していた水希も今は普通の女の子って感じがしてる。

「あんたのおかげよ。秋谷岬くん？」

「もう終わったんだから、その話は掘り返さないでよ……」

「あらそう？ごめんなさいねー」

謝る気のない謝罪を受けて、オレは階段を上がっていく。今日これで14往復目だ。いい運動になるけど……明日筋肉痛とかになったらどうしょ。そんなことを思いながら水希の部屋の扉を開ける。

「はい歯ブラシとバスタオル　え……？」

水希は下着類の準備をしていたらしく、部屋に入ったオレの目に真っ先に飛び込んできたのは淡いピンク色の可愛いパンツだった。

……流石にこれは気まずい。どう対処するべきなのか……明らかに重くなった空気の中、水希は動き出した。

「どうしたの？そんなにカタクなっちゃって」

恐る恐る水希の顔を伺うと、そこにはS気質全開の女王様スマイルが浮かんでいた。速く逃げると本能が叫んでいるけど、ここで背を向けたら最後だってことは今までの経験でわかっている。仮に背を向けたとすると、目にも留まらぬ早業で全身を縄で縛られたあと水希に蹂躪されるだろう。別に悪くはないんだけど……そう何度もやられると癖になっちゃうから　なんて言うなよオレっ！決してオレはMじゃないし、水希に縛られるのが好きなわけじゃないっ！

「えっと……その……」

「怒らないから言ってみて？誰もソラくんを虐めようなんて思っていないからさ」

ダメだ！完全に女王様モードだよこの人！で、でもとりあえず正直に言ってみようもしかしたら助かるかも……！

「パンツを見ちゃったからマズイと思いました」

しゅばっ！

ほら。やつぱりこうなつたじゃないか。

「別に見たからつてカタクなることないんじゃない？どこがマズかったのか教えてくれる？」

荒縄で縛られて水希のベッドの上に転がされた。更に動けないオレの上に水希が馬乗りしてるわけで……

「見てはいけないものを見てしまったと思ったのでその場で止まりました」

「カタクなってるのは身体だけじゃないでしょ？」

だめだめだめだめ！これ以上きつく縛ったりなんかしたら……それこそもう……っ！

「あん……！やめて……っ！」

いけない……勢い余つて変な声出ちゃった……。ショックを受けたりいいのか水希の縄を縛る手が止まる。

「これ以上やつたら……もうだめ……だよ？」

「……」

あ、今日が光った。

「でも、悦んでるんでしょ？ソラくんはボクにこういうことされてウレシイわけでしょ？」

水希の顔が近づく。今度は何をされるんだろうか。

「べ、別に嬉しいわけじゃ……」

「顔真つ赤だよ？身体は正直だね」

荒縄で縛られたオレのおなかを水希はエロい手つきで撫でていく。「んああ……っ！」

ダメだ。自分でも抑えられない……と観念して目を瞑った時だった。

「ん……っ」

唇に柔らかい感触が伝わってきた。

「……んんん」

目を開くと水希との距離はゼロだった。

え・・・？これってどういう状況？縄で縛られて、エロい手つきでおなか撫でられて、どうステップ踏んだらこうなるんだ・・・？

オレから離れた水希は、小悪魔みたいに色っぽく笑った。

「ボクのファーストキス、ソラくんにあげたからね」

唇に手を当てながら言うその姿は今ままで一番可愛い姿だった。

どうしてこういう所で一番可愛くなっちゃうかな・・・。まあ、これも水希の可愛い顔なんだよね。他にももっと可愛い顔があるんだよねっ！オレはそう信じてるから！

「浮気とかしちゃだめだよ？」

その心配はない。水希がいるのに他の女子に目がいくわけないじゃないか。オレがうなずくと水希はまた可愛く笑った。

・・・それはいいとして。

「早く解いてくれるかな？ちょっとヤバいんだけど・・・」

早く縄から解放されないと、理性が飛んで行っちゃいそうだ。

色々とハプニングがあっただけど、とりあえず準備は終わった。本当なら今日は休養に充てるつもりだったのに・・・なんでこんなに疲れてるんだろ。

ベッドで大の字になりながら今日の出来事を思い出してみる。階段を合計で20往復したことや水希のパンツを目にしまったことよりも、キスのことが印象深く残っちゃってる。男だから仕方ないことだとは思っただけど・・・どうにも納得できない。オレからキスはしたかったのに、縄で束縛したところにされたからちょっとだけ後悔があったりする。後悔するなんて柄でもないんだけど、今日だけは悔いが残った。というか、水希のファーストキスは10年前にもらってるはずなんだけど・・・

さて、明日から1週間は学力強化合宿。何かが起こりそうで心配

なんだけど・・・まあいつか。

興奮して眠れないと思ってたけど、すんなり眠りにつくことができた。

そんなこんなで、今は電車の中。学園から目的地までは4〜5時間かかるらしく電車の中で殆どの生徒が眠っていた。ちなみにオレの隣はユツキで向かい側がのぶながと美春、そして後ろが水希。偶然とは思えない座席だ。

「あーヒマだー！」

ユツキがいきなり叫んだ。確かにヒマだけど何も持ってきてないし、ヒマを潰そうにも潰せないんだよなー。

「どんなところなんだろ。ちょっと楽しみかも」

どうやら美春は今回の合宿が楽しみだったらしい。オレからしてみれば一日中勉強っていう地獄の合宿だけだね。どういつ心の持ち方をしたら楽しみに思えるのか逆に知りたい。

「・・・・・・・・・・」

向かいののぶながはずっと口を開かず窓の外を見ている。多分、オレやユツキと同じように合宿がイヤで仕方がないんだろう。ずっと見ていると、のぶながって肌は白いし髪は黒くて綺麗だし口元は色っぽいし本当に男なのか不安になってきた。

「・・・・・・・・・・（ぺろっ）」

突然舌で唇を舐めた。・・・認めたくないけど、今のちょっとキタ・・・。なんでこんなに色っぽいんだよコイツ。

観察を続けていると、頬が仄かに赤らんでいることにも気が付いた。

（さっきから何を考えているんだろう・・・。ちょっと気になる）唇を舐めたり、頬が赤くなっていたりと不可解な行動が多すぎる。

ずっと無口なのも気になるし。

「おいソラ。何かないか」

「あるわけないでしょ」

オレ即答。

今持っているのは財布とケータイだけ。そのほかのものは没収される可能性があるので全部置いてきた。この学校ってそういうとこにちよつと厳しいからね。

「じゃあ、のぶなが。何かないか」

「・・・・・・・・」

窓の外を眺めたまま反応を示さないのぶなが。どうしたんだろ、らしくないな。

「のぶなが！聞いてんのか？」

少し大きな声で言うつと、のぶながはこちらを向いた。

「そんなに大声で言わなくても聞こえてますよ」

微笑みながら振り向くとはコイツは一体何者・・・・・・・・。

「何かヒマを潰せるもの持ってないか？ヒマでヒマでしょーがないんだが」

ヒマそうにしているユツキに対して美春は特に退屈といった表情は見せていない。2時間は乗ってるのになんで退屈にならないのか不思議。

「何も持ってませんよ？没収されたくないんで持ってきてないです」
のぶながもオレと同じ考え方らしい。

「オレと同じ考え方だね。没収されたくないから持ってこないのつて」

そう言うつと、のぶながは頬を赤らめて俯いてしまった。・・・あれ？変なこと言ったかな？

「・・・・・・・・そう、ですね」

「のぶながどうしたの？さっきからぼーっとしてたりして」

異変に気が付いていたのはオレだけじゃなかったようで、美春も不審に思っていたらしい。

「そうだな・・・ちよつとらしくない」

ユツキもだ。気付いてたなら早く聞けばよかったのにこのバカユツキが。

「ソラも十分バカだけどな」

「なにいつ!？」

どうして人の心の中を読めたんだ!？もしかして顔に出てたとか・・・。

そんでもって、今の叫びで起こしてしまったたらしく次々と頭を上げるクラスメイトたち。起こしちゃったのは悪いと思うけどそれ以前に人の心の中を勝手に読んで、心の中と会話したユツキが悪い。誰だって心の中を読まれたら驚くだろ。それなのにどうしてオレだけが非難の目で見られなきゃいけないんだ・・・。理不尽すぎる。根源であるユツキは涼しい顔して「何やってんだお前は」って顔をしているのが一番腹立たしい。一発ぶん殴ってやるうか。

オレは起こしてしまったクラスメイト全員に謝らなければいけない。なくなった。

それから2時間、オレたちは宿泊場所に到着した。空気もおいし、景色も綺麗なんだけどこんないい場所ももうすぐ地獄に変わる。そう思うととっても残念な気分になるのはオレだけじゃないはずだ。んで、宿舎はどんなものかというところまた地獄に似合わないほど綺麗で部屋は広いし、お風呂は温泉で露天風呂。食事も結構上のランクらしい。今は午前10時だから昼食まで時間が空く。食事が豪華だと聞くと昼食が待ち遠しくなる。

「ほおー、結構いい部屋だな」

ユツキの第一声。確かに3人で使うのはもったいないくらい広かった。ちなみに、この部屋はオレとユツキとのぶながのいつものメンバーで使うことになっている。まあ、殆どユツキが強引に決めた

らしいから他の生徒はランダムで決められた人たちと一緒に。今回はかりはユツキの力に感謝せざるを得ない。

「こんな広い部屋を3人で使ってもいいのかな・・・？」

感謝してるけど少しだけ罪悪感。

部屋を見回すと、大きな液晶テレビに高原からの景色を一望できる窓や、個室での浴槽があった。多分これも温泉なんだろう。更にその浴室からも景色を一望できるのでリラックスやリフレッシュにはもってこいの設備だ。

「このお風呂、2人で入れますかね・・・」

のぶながは浴室でそんなことを呟いていた。2人で入るって・・・誰と入るんだろ。

そんなのぶながは放っておいて、近くの座布団に腰を下ろす。長時間電車に乗ってたから体中が痛い・・・

「ん・・・っ」

背伸びをしてみると、何か悩ましげな表情で部屋を見つめるユツキが目に入った。ユツキがあんな顔するなんて珍しいな・・・ろくでもないことを企んでるのかな？

「どうかしたの？」

気になったので訊いてみた。

「この部屋もうちょっと綺麗に片付くんじゃないかって思ってな・・・」

忘れてたけど、ユツキは料理と片付けは超人レベルでこなしてしまふ。確かお父さんが有名なシェフで今はイタリアにいるらしいし、そのお父さんも片づけが上手だったと聞く。ちなみにユツキの住んでる部屋にはゴミ1つすら落ちていない。部屋も綺麗に整頓してあるから遊びに行くときはいつもユツキのそこへ行く。オレの部屋ははつきり言って散らかってるし、家には水希もいるから最近友人を入れる事が少ない。

「別に散らかってないと思うけど・・・」

「いや、そういうことじゃなくて物の配置だ。スペースがあるのに

そこに何も入れないってのは、そこに入るべき物が違つところに出てるって事だろ？」

うん。ユツキと同じ部屋だとめんどくさくなるのが今わかった。綺麗好きも度を越すとただうざつたいだけだね。

部屋をどう片付けるか真剣に考えているユツキと浴室で呆けているのぶなが。2人ともどこか譲れないものがあるらしい。

午後は自習で終わり、夜。

勉強漬けで疲れ切つた表情を見せながら自分たちの部屋へ戻る人たちの中、2人だけ別のオーラを放つ人がいた。しかもオレのすぐ近くに。

「おつしゃ、これから風呂だな・・・！」

ユツキは目をギラギラさせながらそんなことを言っていた。覗きでもする気か。

「これから本番です・・・っ！」

そしてユツキの如く目をギラギラさせたのぶながもワケのわからないことを言っている。

部屋に戻るなり、いきなり布団にダイブするユツキと掛け布団を抱きしめて顔を埋めているのぶなが。のぶながの布団を抱く姿はちよつと可愛かつたけどユツキのダイブは下の階の人に迷惑になるだけで誰も得しない。するとしたら本人だけだ。

「2人とも何考えてるの？そんなにテンション上がっちゃってさー」
1人だけ取り残されてることが一番面白くない。何かやるならオレも混ぜてもらいたいところだよ・・・。

「いやいや、学校での宿泊といつたら覗きだろ？テンションが上がらないわけがねえよ」

そんなことだろうと思った。このエロユツキが。

「それで？のぶながも覗き？」

のぶなががエロいという噂は聞いたことないし、そういうイメージはない。顔を埋めながらのぶながは答えた。

「そんな不埒なことするわけがないじゃないですか。女性の裸なんが見て何が楽しいのかわかりません」

歯に衣着せぬ物言いに流石のユツキもグサリときたらしい。

「お前は男じゃないのか！？本当に覗きと聞いて何も思わないのか！？」

立ち上がってまで言うことかなそれ……。

「何も思わないですね。自分が好きになった人以外の裸なんか見たって何とも思いませんよ？　　ですよね、ソラ？」

「え……その……」

何でだろ、のぶながの目がこっちを向いた瞬間得体の知れない寒気が……。

「オレだって男なんだから少しは……ねえ？」

「じゃあお前も覗き班に加わるか？そろそろ出撃するがどうする？」

そりゃオレだってできるものなら参加したい。　　できるものなら。

どういうわけか、オレとのぶながだけ大浴場は一番最後まで使えない。まあ、2人だけで貸切っていうメリットもあるんだけど何かオレたちの性別を誤解されてるようでヤダ。

「出撃以前に、次ユツキたち入浴じゃなかったっけ？」

「バカ、露天風呂の上から覗くんだよ」

恐ろしいほどベタな覗き方だ。ユツキのことだからもうちょっと凝った方法でもとるのかと思ってたけど。

すると、

こんこん

とノックの音が響いた。

『そろそろ順番だよー』

親切に教えに来てくれたらしい。

「おう」

ユツキは片手を挙げながら答えた。そして、ドアが閉まった瞬間に目の輝きが増す。おー・・・結構怖い。餌（色欲）に飢えた獣みたいだ。

「んじゃ行つて来るわ」

「健闘を祈ってるよ」

「頑張ってくださいね」

ユツキがいなくなった途端、急に静かになった部屋の中。のぶなは相変わらず布団を抱いてるしいつもと雰囲気が違うから話かけにくい・・・。

「ねえ・・・ソラ？」

唐突な呼びかけにちよつとびっくりした。

「な、何？」

何でだろう、今日の　今の　のぶなが　が怖くてたまらない。

「ソラって長門さんと結ばれて幸せな生活を送ってるんですよね？」

「まあ、そうだけど・・・それがどうかしたの？」

「長年の想いが叶ったらいいですね。おめでとうございます」

布団を抱いたまま顔が見えない状態で言われると怖いんだけど。

「は、はあ・・・。ありがとう」

オレの脳内では「早く逃げろ」という危険信号が鳴りつ放した。

でもこの空気の中走り出すなんてできない・・・っ！今オレが座ってる場所からのぶながが寝ている場所までの距離は近いから少しでも変な動きを見せたら何をされるのかさっぱりわからない。

「なんだか今日ののぶながちよつと変だよ・・・？どこか具合でも悪いの？」

心配していると装つてのぶながに近づいてみる。向こうも動かないから、とりあえず当たりを引いたんだらう。そして、のぶながの肩に触ろうと手を伸ばした時だった。

「ソラ・・・っ！」

「ちょ……えっ？ええっ！？」

のぶながに押し倒された。え？何この状況。のぶながは完全にオレの上に乗っていて身動きが取れない。顔も赤いし息も荒い。このぶながを見るのは初めてだ……。

「布団の上で2人きりなんですから……こういうことしてもおかしくないですよね」

そう言いながら顔を近づけてくるのぶなが。何だか最近こんなのが多い気がするんだけど。

そんなこと考えている間にのぶながとの距離はあと数センチ。吐息が唇にかかるほど近くなってきてる。何を考えたのかのぶながは舌を出して近づいてきた。

「ちょ……っと！何考えてるの！？オレ男だよ！？」
そう言ったのが最後。

口を封じられた。

正確には唇を舐められて、硬直した瞬間に舌を入れられた。当然唇も触れ合っている。

まあ、俗に言うキスだ。どうしてオレとのぶなががキスなんかしてるのが全く理解できない。

「んん……っ」

のぶながから色っぽい声が漏れる。

「んんんっ」

こっちはオレの声。傍から見たら（認めたくないけど）美少女2人が同性愛に目覚めちゃった瞬間的な感じで認識されるんだろう。

「んぱぁ……っ」

のぶながはようやくオレから離れ、濡れた唇を愛おしそうに指で撫でた。

「……何なのこれ……」

ちなみにオレは今に至っても状況を理解できていない。

「ねえ・・・ソラ？」

もうその言い方が怖い。

「な・・・何か・・・？」

「もっとしてもいいですか？」

ダメだと言う前にまたキスされた。もうホントわけがわからない。誰か助けてよ・・・！

息すらできない極限状態でものぶながは離れようとしなない。そろそろ酸素が足りなくなってきたら意識失つてくるんだけど・・・っ！

「・・・んっ」

自分で自分の声が信じられない。ホントに女の声みたいだ・・・。ちよつとシヨック。

「の・・・のぶながぁ・・・」

・・・ホントに自分の性別がわからなくなってきた。オレって男だよな？

（も、もう耐えられない・・・っ！）

「・・・っ!？」

オレはのぶながを突き飛ばした。そして胸いっぱい空気呼吸を吸い込む。あとちよつと続いてたら意識失つてるところだったよ・・・。まあ、それはともかく。

「どうしてこんなことするのぉ・・・」

突き飛ばされたのぶながは、とぼけたような顔をして首を傾げた。「どうしてって・・・好きだからに決まってるじゃないですか」

「誰のことを・・・？」

数秒の静寂。

そして告げられた衝撃の事実。

「ソラのことをです。初めて会ったときからずっと好きでした」
当然オレは何も言い返せない。もう何が何だかわからないと言つ表現がピッタリだ。

のぶながは四つん這いでこちらに近づいてくる。

「ユッキは当分帰ってきませんし、もう少し楽しんでもいいですか

「？」

オレは首を振りながら後ろに下がる。

「でも、逃げ場なんてありませんよ？どこへ逃げるんですかね？」
ふふふ、と楽しげに笑うのぶなが。こちらら絶体絶命の危機だつて言うのに何で笑えるんだよ・・・っ！背中に壁の感触が伝わる。
ついに追い詰められてしまった。

「ひえ・・・っ」

頬に両手を添えられて、間近でのぶながの美貌を見つめる。やっぱり顔が赤くて息が荒い。

「可愛いですね。そんなに怯えちゃって」

これで本日3回目のキス（性別は問わない）。もう抵抗するのがメンドーになったからそのまま身を委ねることにした。息が苦しくなったらまた突き飛ばせばいいんだし。

「・・・？」

のぶなががおれから離れた。離れたっていつても距離はほぼゼロだけだ。

「もう逃がしませんよ」

囁かれた恐怖のセリフ。もうダメかもしれない。

「んんっ、んあ」

「もうダメえ！」

という不可解な叫び声と共に目が覚めた。どういうわけか、額に汗を掻きながら寝ていたらしい。

「・・・？どうしました？」

隣でのぶながが不思議そうな顔をしている。・・・ってのぶなが！？

「い、いや別に・・・」

顔を見た瞬間に全身を得体の知れない恐怖が襲う。

「変な叫び声を上げてたので、かなり周囲から注目されてますけどいいんですか？」

言われて周りを見ると、クラスメイトが不思議そうな顔をしてオレの方を見ていた。一部、目をキラキラさせながら見てる奴らもいたけど。

あれ・・・？確か学力強化合宿に行つて、そこでのぶながにあんなことをされてたんじゃなかったっけ？

「あれ・・・？合宿は？」

「合宿？何のことですか？」

のぶながはやっぱ不思議そうな顔をしている。

ここは教室でクラスメイトがそれぞれのことをしている。ユツキと水希の姿が見当たらないけど、どこかに出ているんだろう。そんなわけでオレの隣にはのぶなががいる。

「もしかして・・・夢でも見てたんじゃないですか？」

くすつと笑うのぶなが。

・・・夢？

全部夢だったの・・・？のぶながの衝撃カミングアウトもアレも全部夢・・・？

何この残念でホツとした気持ちは。うまく表現できない・・・。

「結構寝言が多かったですよ？どんな夢を見ていたのか知りませんが、苦しそうでした」

そりゃそうだ。悪友のあんなカミングアウトを受けてあんなことされたら誰でも寝心地悪いに決まってるでしょ。

でも安心した。あれが現実に起こってたらのぶながと会話すらできなくなってた。

「よかったぁ・・・」

ほつつと長い息を吐く。ホントに助かったあ……。

「終業式からずつと寝てるし、先生からも目をつけられてましたけど呼び出しはなさそうですね」

終業式から寝てるって誰が教室まで運んできてくれたんだろう？

そんなオレの疑問を読み取ったのかのぶながは微笑みながら言った。

「僕ですよ。いくら声をかけても起きなかつたので、おぶつて連れてきました」

……妙な違和感が残るけど気にしないでおこつ。

時計を見ると既に放課後だ。今日は終業式だけだったから早く帰れる。暑いからクーラーの効いた部屋でゆっくりしてよう。

「あら？帰るんですか？」

鞆を持って立ち上がる。

「うん。別に予定もないし、家でごろごろしてようかなーって」

笑いながら答える。

「あ、それと」

気になったので訊いてみる。

「明後日から合宿とかってあったりしないよね……？」

まだ完全に目覚めていないのか、自分でもバカな事を訊いたと思う。

のぶながは笑いながら、

「まだ寝ぼけてるんですか？そんなものありませんよ。明日から夏休みですしね」

「そう……よかった。それじゃ、帰るね」

「ヒマだったら連絡してください。夏休みはいつでもヒマなので」

「はいよー」

教室を出ると、ムツとした熱気が全身を包んだ。それだけで体力が奪われていくのはオレだけじゃないはず。

「あ、ソラくん」

階段の上から水希の声が聞こえた。そーいや教室にはいなかった

っけ。

「どっか行つてたの？」

流れるように階段を駆け下りて、オレの隣にびったりと密着する。正直暑い……。

「ちよつと頼まれてた資料を届けてたんだー」

オレといるだけでそんなに楽しいのか水希は上機嫌だ。

「あ、そうだ！」

何かをひらめいたように水希は手を叩いた。

「ねえねえ、明日どこか遊びに行こうよ」

水希が手を引きながら走りだす。ちよつと……そんなに走ったら危ないってば！

でも明日は家でゴロゴロしてようと思つてただけだな……。誘つてくれると断りにくい……。

「んー……」

少し考える。右腕に柔らかい感触があるけどそれはないものとして考える。別に行きたいところとかないし、女の子が喜びそうな場所にも詳しくない。それに、暑い。暑いのは嫌いだし汗を掻くのも嫌い。だから夏の間はできるだけ家にいることを心がけている。

「水希が行きたいところとかある？」

どうしても自分じゃ思いつかなかつたので、水希に振ってみた。

「別にボクもどこかへ行きたいってわけじゃないんだけどなあ……」

「じゃあどうして誘つたりしたんだろう。オレの考えが読めたのか水希はいたずらっぽく笑つて言った。

「ただソラちゃんとラブラブなんだってみんなに見せたかっただけだよ」

よくそんなセリフを真顔で言えるよな……とオレは半ば呆れて溜息を吐いた。

ふと、そこであることに気付く。

「あれ……なんかデジャヴ……」

8月：もっとしてもいいですか？（後書き）

こんにちわ、七色アゲハです。

今回も勢いに任せて書き上げてしまいました。一部、バテの影響を受けたものもありますけどどうか目を瞑っていたいただきたい。リハビリ途中ですので、文章とか話の切り替わりなどがメチャクチャかも知れませんがお許しください。

それでは、これからもお付き合いよろしく願います。

以上、七色アゲハでした。

番外編：ちよつと息抜き？

こんにちは、七色アゲハです。

今回もユル〜くテキトーな話を書きたいと思います。何かこの頃本編が重い内容だったりするので疲れちゃいました。

ユルくてテキトーなお話ですがお付き合いください。

雪時「んで、これはどういうことなのか説明してもらおうか」

ソラ「筆者がリハビリしてて更新できないから、その間に何か面白そうなことやれって」

のぶなが「またですか・・・」

美春「筆者も無責任ね・・・」

雪時「疲れてんだろ。怪我したり色々大変だったらしいからな」

ソラ「まあ、それはともかく。どうして毎度毎度オレが司会を務めなくちゃいけないのかわからないんだけど」

のぶなが「主人公だからですよ。僕たちはレギュラーですが、主人公じゃありませんし。それにソラには不思議なリーダーシップがあったりするって嬉しいですね」

美春「そうよ、ソラには不思議な魅力があると嬉しいんだから」

ソラ「全部願望じゃないか」

雪時「まあ、事実だからな」

ソラ「ユツキだってリーダーシップないだろー」

のぶなが「ユツキには暴君のような強引さがあるからいいんじゃないんですか？」

ソラ「暴君のようかっていうより暴君そのものだね」

美春「ソラにもそれくらいの世界さがあればいいのに・・・」

雪時「つまりオレはワールドでカッコいいってワケだ。方法はとも

かく人をまとめられるからリーダーシップはある」

ソラ「・・・納得できないけど、今回だけは許してやる」

のぶなが「それで、何をすればいいんですか？こうやって雑談してもつまらないです」

美春「はいはい！女装コンテストとかしたいっ！」

ソラ「個人的な嗜好は意見は認められてないよ。それにお題は渡されてるし、さつさとやつちゃおう」

雪時「お題・・・？そんなもん渡されてたのか？」

ソラ「さつきね」

美春「何をやるの？」

ソラ「えっと・・・『第1回カラオケ大会』だって」

雪時「却下だな」

のぶなが「ユツキは歌とか苦手ですもんね」

美春「あたしは別にいいけど・・・」

ソラ「あ、でも『その場に応じて変更してもいい』って書いてあるよ」

雪時「変更だ」

のぶなが「でも何をすれば・・・」

美春「やっぱり、女装コンテスト・・・」

ソラ「だから地の文がないから無理だったの」

雪時「お、こんなところにメイド服が」

ソラ「ないから安心してね。ていうか、好き勝手やつちゃダメだよ」

美春「こつちにスク水があるわよ？」

ソラ「だからないよ。地の文ないからって暴れちゃいけないからね」

のぶなが「あら？こつちには浴衣が」

ソラ「だからないからねっ！？それ全部オレが着なきゃいけないんでしょ！？」

のぶなが「他に誰が着るんですか？まず、ソラにはメイド服の下にスク水を着てもらって僕と美春にご奉仕してもらいます。ユツキは浴衣でいいですよね？」

雪時「何で俺が女装したソラにご奉仕されなきゃいけないんだ」
美春「じゃあ浴衣はあたしで」

ソラ「勝手に決めるなよお前ら・・・っ!」

雪時「『誰が一番女装が似合うか』を議論すればいいんじゃないかねえの？」

美春「ソラがダントツで優勝しちゃうじゃない」

のぶなが「案外ユツキも似合うかもしれないよ?」

雪時「俺みたい男らしさ溢れるような人に女装なんて似合うわけが」

ソラ「こんなところにメイド服とスタンガンがあつたからとりあえず試してみよう」

雪時「んな・・・っ!一番好き勝手やってるのお前じゃぎゃあああああああっ!」

く 着 替 え 中 く

のぶなが「・・・結構似合ってるじゃないですか」

美春「ユツキにこんな才能があるなんて知らなかったわ・・・」

ソラ「ポニーテールっていうのが一番の敗因だね」

雪時「何だよこれは!俺はただ髪が邪魔だったから束ねてただけなのに・・・っ!」

美春「・・・じゃあ、髪も解いてみてよ」

雪時「はあ!?冗談じゃねえ!」

ソラ「もう失うものもないんだし、やってみれば?」

のぶなが「そうですね。スク水の上にメイド服を着てネコ耳を着けている時点で何も失いませんし」

雪時「読者が困惑するような発言をするな!あと俺はネコ耳も着けてないしスク水も着てないっ!」

美春「ポニテのメイドもいいけど、ストレートも悪くないわね」

ソラ「早く解いてよ。いつもオレを弄ってるんだからそれくらいで

きるよね？」

のぶなが「僕も見てみたいです」

美春「はやくー」

雪時「ああ！もうわかったよ！やりやいいんだろやりや！」

ソラ「美春&のぶなが「おおっ！」

雪時「な・・・なんだよ・・・」

美春「あたし・・・女なのに何この敗北感・・・」

のぶなが「何か複雑です・・・」

ソラ「ユツキも十分女装してもイケると思うよ。これで新しい仲間
ができたね」

美春「それバニーガールの格好した人がいうセリフじゃないわよ」

ソラ「誰もそんなもの着てないからね」

美春「のぶながもそんなに露出度の高い服着て・・・。そんなのも
う胸と×××しか隠してないじゃない」

のぶなが「・・・？別に着てませんけど・・・というか、それって
もはや服じゃないですよね」

ソラ「美春は逆に男装でもしてみれば？」

雪時「おい、もう着替えていいか？」

美春「あたしそういうの趣味じゃないからなー」

雪時「もう着替えても・・・」

のぶなが「女装姿に惚れたのに？」

雪時「着替えて・・・」

美春「だって初めてソラに会ったときはホントに女の子かと思った
んだもん」

雪時「俺 の 話 を 聞 け え っ ！ 」

ソラ「私の歌を聴けえっ！」

のぶなが「ソラ、それはパクリになっちゃいますよ」

美春「何か歌ってくれるの？」

雪時「華麗にスルーすんなよコラ」

ソラ「ごめんごめん・・・。もう時間だし、着替えてもいいんじゃない

ない？」

美春「あれ？もう終わり？結構短い時間だったわね」

のぶなが「ユツキの隠れた才能を発掘できたし、よしとしましょうか」

雪時「結局、美春の要望どおりになっちまったな・・・」

美春「みんなが楽しめたんだし、いいじゃない」

ソラ「言っておくけど、これ活字だからね」

のぶなが「想像が一番いいんですよこういうのは」

雪時「結局俺が損をしただけじゃねえか」

ソラ「損をしたのはユツキだけだから大丈夫だよ」

美春「それフォローになつてないよ」

雪時「ちよつと決闘しようぜ。俺が鉄パイプ使うからお前はメリケンサックな」

ソラ「明らかにオレが不利でしょ」

のぶなが「はいはい。そろそろ授業始まりますよ。そこら辺にしておいてください」

美春「ほら、行くわよ」

ソラ「メリケンサックでもお前を葬ってやる・・・」

雪時「望むところだ・・・」

再び七色アゲハです。

ホントに何も考えないで書き上げました。少しでもユルい雰囲気
が伝わればいいと思います。

どうしてもこのメンバーに水希を参加させることができません・・・
。なんかこう彼女は書くのが難しいんです・・・。
それでは、次回まで暫しお待ちください。

以上、七色アゲハでした。

8月：橘雪時

それは、小さな出来事だった。

夏休みの初日、オレと水希はちよつとした買い物で近くのスーパーに来ていた。まあ、具体的に言えば夕食の材料の買出しだ。品物をレジ袋に2人で詰めているとき、それは起こった。

「あれ・・・？橘くんがいる・・・」

水希のその一言で、全てが始まった。

視線を追うと、そこには可愛い女の子を連れて気だるげに歩いていくユツキの姿が確かにあった。

「それに、可愛い女の子も一緒だったよ？」

「ふーん・・・」

表面上は気にしていないようにしていたが、心の中では怒りと復讐の炎が燃え盛っていたわけで・・・。

それにしてもあのユツキに彼女がいるなんて聞いたことがない。毎回積極的にアピールはしていくけど大体が不発に終わってるユツキに・・・。

(つまり・・・そういうことか)

「ソラくんどこ行くの？」

「ん？ちよつと買い忘れたものがあつたからもう一回買いに行つてくるね」

オレの頭にはあの女の子を救うことしかなかった。これ以上ユツキに近づいているとろくなことが起こらないからな。

「ちよ、ちよつとソラくん！？ネギ持って行ってどうする気なの！？」

見た目なんて関係ない。とりあえずユツキを潰し、あの女の子が無事ならオレはどうなったっていいんだ・・・！

オレはネギという武器を片手に、女の子を騙す悪人のもとへ急い

だ。

「はぁ・・・」

と、俺は溜息を吐くばかりだった。ただ普通に夏休みの初日を過ごしていただけなのにどうしてこんな目に遭わねえといけないんだよ。

「」

俺は彼女に着いていくしかない。なんでそんなにご機嫌なんだよお前は・・・！

「あ！雪時、あれおいしそう！」

何かを見つけたらしい。それ全部俺が払うんだろ？

指の先にはプリンの上に溢れるばかりの生クリームがトッピングされたカロリーの高そうなデザートだ。見てるだけで胃がもたれてきそつだ。

「お前・・・さっきも食べたばっかだろうが・・・」

「えーっ！デザートは別腹でしょー？」

コイツはついさっき俺の家で昼食を食べたばかりだ。それなのにもう腹が減ってるとは・・・女子の胃袋とは思えないね。

「それにあたし今なら何でもおいしく食べられるんだよー？」

「さぞかし幸せだろうなお前は」

コイツの能天気さに呆れる。

「だって、雪時と一緒に食べられるならどんなものでもご馳走になるんだもん」

「・・・」

こちらを上目遣いで見つめる彼女の目を俺は真っ直ぐ見た。相変わらず、昔から言うことは変わらねえな・・・ホントに。

「ご馳走なのはいいけど、全部俺が買わなきゃいけないんだろ？」

半眼で彼女を見る。すると、首を傾げて、

「えー？そんなわけないでしょー？昔のあたしとは違うんだよ」

いたずらっぽく笑う彼女の顔は、昔と全く変わってなかったりして。容姿はあとけなくせにどこか大人っぽいなんだよな……。

「ささ、早く食べよー」

「わかったから引つ張るなつての！」

いつも彼女の動かされる俺は昔と変わってるんだろうか。時々不安になる。

手を引かれて、例の胃もたれプリンを2つほどカゴに入れた。正直甘いものはあんまり好きじゃないからできれば食べたくなかったけど、コイツの笑顔見てたら食べざるを得なくなっちまうじゃねえか。

「っ」

ふと、そこで俺は何かを感じ取った。

殺気のようなものだ。誰かが背後から俺の命を狙って拳銃を構えている、そんな感じだ。

「……」

辺りを見回してみても、殺気の根源らしきものは見当たらない。

ふむ……何が俺を狙っているんだ……？

(ま、考えてもしょうがないか)

と、溜息混じりに視線を前に戻したときだった。

「その女の子に手を出すなああああああああああ！」

怒鳴り声と共に、脳天から鋭い痛みが全身を駆け巡った。

「へふう！」

「ちよつと……雪時！？大丈夫！？」

一瞬フラツとしたが、大したダメージではなさそうだ。俺を攻撃した奴はさつさと逃げたらしく、視界が回復したときにはいなかった。逃げ足の速い奴だな……。いや、臆病なだけなのか？

「大丈夫だが……誰がこんなことしやがった……」

「すごい可愛いネイビーの髪の人だったよ？何かネギ振り回してたけど」

ネイビーの髪・・・可愛い人か・・・考えるのがバカらしくなるほど、犯人はすぐに判った。俺の周りでネイビーの髪をしてるやつなんか1人しかいないからな。ましてや「可愛い」なんて犯人を特定できる証拠があるんなら、絶対に間違えるわけがない。

「ソラの野郎だな・・・」

深海ソラ。

アイツしかいないだろ。ここにアイツがいるなんて珍しいな・・・、買い物にでも来てるのか。

「・・・雪時？」

隣から凍りつくような声が聞こえてきた。

「んあ？」

「今の女の人・・・誰？」

目が・・・目が・・・！

目の前の幽霊のように気を失った彼女がゆっくり歩み寄ってくる。いつもならすぐに逃げ出すのに目をまっすぐ見つめられているから身体が硬直して動かない。頭の中では危険信号がガンガン鳴り響いているのに身体が動かない・・・！こえー！

「や・・・だから今の奴は女じゃなくて・・・」

こういう時にあいつの外見は非常に厄介になる。女じゃないって言っても初対面の人には信じてもらえない。実にめんどくさいことになった・・・。

「あんなに可愛い人が男の子なわけないでしょ？で、誰なの？」

「ホントに女じゃないんだよアイツは・・・」

壁際に追い詰められた。無数の冷や汗が額を伝っているのが彼女からも見えるはずだ。誰かに助けを求めたいが周りには誰もいない・・・。くそつ、ここで俺は終わるのか。

と覚悟を決めたときだった。

「あれ？橘くんじゃん」

凜々しい声と共に現れたのは水希ちゃんだった。

「おお・・・！助かった・・・！」

彼女は俺の目の前から離れ、水希ちゃんをマジマジと見つめる。

「どーしたのこんなところで」

「どーしたって・・・スーパーにいるんだから目的は皆一緒だろ？」

「それもそうだね」

可憐に笑う水希ちゃん。やっぱり可愛いな・・・。微笑んだまま、俺の隣に視線を移した。

「で・・・そちらの可愛い子は橘くんの彼女？」

素でなんてこと言いやがる。

「い、いえ！決してそのような関係ではございませぬ！」

なんでコイツはわけのわからない言葉遣いになってんだよ。あ、まさか・・・。

「妹かな？こんにちは」

「あう・・・こんにちは・・・」

何か様子が変だな・・・。顔も真っ赤だし。

「どした？顔が真っ赤だぞお前」

俺が指摘すると、腕を振り回しながら

「言うなーっ！」

何をムキになってるのやら。

水希ちゃんは誰かを探しているらしく、スーパーの中をずっと歩き回っているらしい。まあ、誰を探しているのか聞かなくてもわかるわけだが。

「ソラくん見なかった？さっき長ネギ片手にどっかに走っていつちやたんだけど・・・」

そいつはついさき俺の頭を長ネギでぶん殴って逃走したよ、とは言えない。あんな可愛い顔してネギを持ってらるならまさにカモネギじゃねえか。ポケモンかバカヤロー。

「長ネギ・・・ですか？」

ようやく落ち着いたので、隣からも質問が飛び出した。

「うん。ネイビーの髪の毛ですごい可愛い人なんだけど・・・」

「あ、その人ならさつき向こうに走っていきましたけど・・・か、彼女さんですか!？」

あー、やっぱりコイツこつちも間違っつて認識してやがる・・・。無理もないか。水希ちゃんはボーイッシュな服装で容姿も完全に美少年だからなー。全国のシヨタコンを奮い立たせるような絶世の美少年だしし、一目で女の子だと気付くのは難しいと思う。

「んーとね・・・」

水希ちゃんは苦笑いしながら、どう答えようか考えていた。

「まあ、一応・・・彼氏かな・・・」

「ええっ!？」

隣から聞こえた大声に思わず耳を塞いだ。うるさいなコイツは。

「えっと、あなたとさっきの人は・・・そういう関係なんですか!？」

そういう関係って何だよ。ここまで言われたんならあととはちょっと考えりゃわかりそうな気もするんだがコイツが予想を遥かに上回ったバカだった。

「ま、そーゆーことだからお前はちょっと静かにしてようか」

「でも・・・気になっちゃうでしょ!？」

「あは・・・あはは・・・」

未だに何かを問い質そうとするバカの頭を力でねじ伏せて、本題に戻った。

「ソラなら今頃水希ちゃんのところ探してんじゃねえの? あーゆーことしておきながら、心配性なところがあるからなアイツは」

「でも、どこにいるんだろっ・・・」

水希ちゃんが周りを見回すのと同時に俺は後方に視線をやった。

今は特に何の変哲もない通路と商品棚があるだけだが、俺にはわかる。このどこかにソラが長ネギを構えて隠れていることがな。そこ

で、一回フェイクをかけてみることにした。

「ちよつとそこら辺歩き回ってみるか・・・」

と、視線を前に戻して一歩踏み出したときだった。

「くたばれ雪時いいいいいい！！」

ま、ざつとこんなもんだ。

後ろには長ネギを振りかざしたソラが空中から襲い掛かってくるという異様な光景が広がっていたが、とりあえずコイツを釣り上げることができた。

「上等だコラ」

まず長ネギの動きを封じて、そこから手首をこちら側へぐつと引き寄せる。

「うおっ！」

んで、その勢いで一本背負い　　するはずだったんだが、

「お、

投げられる寸前で体勢を直したソラはそのまま俺の背中からスルリと抜けていった。くそつたれが、身のこなしだけは一人前だな。

「腕が落ちたんじゃないの？ユツキ」

着地して清々しく言うソラ。まあ、確かにコイツはもともと運動とか得意だしな。

「うるせー」

「もおっ！何してたの！？」

ぷんぷん、という擬音がちょうどよくあてはまるような感じで水希ちゃんが問う。

「見てわかるだろ。こいつは長ネギで人を殴ろうとしたんだ」

「ユツキが年下の女の子を侍らせていたのが異様な光景だったからね」

「長ネギを振り回す美少女のほうがよく異様だった」

「なんだと！オレは女じゃない！」

と、定番の件をやっていると、隣からもう一回変な声が聞こえた。
「えっと……ん？ネイビーの可愛い人が、このかっこいい人と付き合ってるの……？」

まあ、この性別逆転コンビを初めて見る人は大体こうなるよな。

ソラは完全に美少女で水希ちゃんは中性的な美少年……。メンドーなコンビだな。

「可愛い人？それってオレのことなの？」

ソラが意外そうな顔で聞き返した。

「はい……。同性から見ても惚れちゃうくらい可愛いです……。困ったな、という顔をしているソラを無視して話を続ける。目で誤解を解いてくれるように頼んできたのはわかってる。わかってはいるけど、あえて無視することにした。

「いや、一応言っておくとオレは男なんだけどなあ……」

「オレっ娘ですか！？そういうのも嫌いじゃないです！」

「オレの話聞いてた？オレはちゃんとした男だから」

「たまらないですっ！そんなに可憐な容姿なのにオレという一人称を使うなんてあたしもう……。っ！」

……。一瞬だが、美春に似てるな！と思った。

「それはもういいから、早く帰ろうよソラくん」

ついに耐え切れなくなったのか水希ちゃんが話題を変えた。

「あ、そーだね。それじゃあユツキ、その子に手を出さないようにね」

「誰が出すか」

「じゃあね、橘くん」

「ねえ、あのカッコいい人名前なんて言うの！？」

家に帰ってからが実にメンドーだった。

彼女はすっかり水希ちゃんに惚れてしまったらしく、さつきから執拗に名前を聞いてくる。名前を聞いたら女だつてわかってくれると思うが、正直不安だ。水希っていう男だつていると思うからな。それにしても、コイツは自分が同性愛に走っていることに気が付いているのだろうか。今の様子を見る限り気付いてはいない。そして後に気付いたときにコイツはどう反応を示すのだろうか。そのまま同性愛を受け入れるのか、本来の恋愛というものを取り戻すのだろうか。

「あんなカッコいい人見たことない！すごいカッコよかつた！」
ダメだな、今は無理だ。

「名前は？知ってるんでしょ雪時ー！」
「うるせーからちよつと黙ってるバカヤロー」

「雪時に一目惚れのトキメキなんて永遠にわかんないよ！この胸のトキメキは何年かに一回やつてくる特別なものだよ・・・！」
何を言ってるのかよくわからないが、1つだけ引つかかるところがあつた。

何年かに一回やつてくる特別なトキメキ。

この言葉が何を意味しているのか、俺は考えれば考えるほどわからなくなる。

「・・・・・・・・」
興奮した様子で部屋をゴロゴロと勢いよく転がってる彼女を黙って見つめる。こんな感情になるなんてホントに俺らしくない。

「雪時ー！」
急に名前を呼ばれてビクツとする。

「プリン食べたいっ！」
「はいはい、ちよつと待ってる」

さつき買った胃もたれプリンを取りに冷蔵庫へ向かう。
その時、耳に入った呟く声。

「雪時にも、もうちよつと自覚して欲しいなあ・・・」

途方に暮れたような声に俺は思わず足を止めかけた。何を言っているんだこいつは……。俺に自覚が足りないって何の自覚だよ。俺には彼女が何のことを言ってるのか全く理解できなかった。

ってという話をソラやのぶながに話したところ、大ブーイングを食らった。

「何が理解できないだよっ！鈍すぎるでしょ！」

「そうですね。ユツキだからそれくらいは理解できるものだと思っ
ていたんですが……」

「恋愛に鈍いわねーユツキは」

これはどういうことだコラ。急に「自覚して欲しいなあ……」
なんて言われてもわけわかんねえだろが！なのになんでこんなに言
いたい放題言われなきゃいけないんだよ！

「どこか鈍いんだよ！理解できなかったんだからしかたねえだろ！
「それだからユツキは連戦連敗なんだよ。もうちょっと自分のこと
理解したらどう？」

言い方！その言い方が一番癪に障るんだよ……！

「表面だけで近づこうとするから、失敗するんですよ。納得です」
「納得すんなコラ」

「言われたくないならその子のこと真剣に見てあげたらー？何か変
わるかも……」

なんで俺が真剣にアイツのことを見なきゃいけないんだよ。さっ
きからこいつらはワケのわからないことばっか言いやがるな。

「なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ」

そう俺が言つと、3人は呆れたように溜息を吐いた。なんで？

「そう考えてる間はユツキに彼女はできないね……」

「ですね……」

「なんだその哀れむような視線は」

解せぬ。俺のどこが哀れなんだ……。

俺の考え方の何がいけないんだよ！ただ周りの人間に興味がないだけで他に何も悪いところはないじゃねえか。

「あ、ここは1つオレが極意を伝授してあげようか？」

ソラが得意げに言う。更に腹立つな。

「10年間も放置して何の進展もなかった奴のご教授なんて役に立つわけねえだろ」

「え……」

ちよつと言い過ぎたかも知れないが、事実だから仕方がない。

「でも、ユツキにもそういう感情がないわけじゃないんですよね？」

「ああ？んなもんあるわけねえだろうが。俺が自ら他人に興味を持つようなタイプか？」

人に対して特別な感情を抱くなんて今までなかった……気がする。

ま、彼女との関係はいずれ変わっていくことだろうし今から慌てる必要はないだろ。

そう、この関係はいずれ変わっていく。

自分から変えていく必要はない。

本気でそう思っていた。

ユツキの話を聞く限り、あの女の子とは正式な関係らしい。女の子のためと思って長ネギで攻撃したのに……これじゃ意味ないじゃないか。何をやっていったんだろう……あの頃のオレ。

ま、それはともかく。ユツキも何か悩むことがあるらしいし、こは親友として温かく見守ってやるとしよう。ダルそうユツキはいつも見てるけど、悩んでいて冴えないユツキは見たことがないし見たことない。

恐らくあの女の子はユツキに好意を抱いているだろうし、ユツキも自分の気持ちに気付いていないだけであの女の子のことが好きなんだろう。ユツキは自分から関係を変えていこうとは思ってないらしい。何かオレにもできることがあればしてあげたい。

ようやく自分のやることが終わったと思ったら次は悪友が同じような境遇にいるみたいだ。

まったく、世話の焼ける奴だな・・・ホント。

8月：橘雪時（後書き）

こんにちわ、七色アゲハです。

今回はものすんごいグダグダだったりするんですけど、いつものように目を瞑ってくださいとありがたいです。

この頃はテストとかテストとかで忙しかったので、えーとえーと・

言い訳を必死で考えてる

とりあえず、です。

この駄作を読んでくださってありがとうございます。

これからもよければお付き合いよろしくお願いしますねっ

夏休み：田井中キャサリンって言いますっ

夏休み ああ夏休み 夏休み

一句作れるほど優雅で楽しい夏休みだ。まあ、宿題やら課題やらいっぱい出ているわけだが、そこは気にしないで置こう。少しでも考えるだけで憂鬱になっちゃうからね。そして肝心な夏休みの初日と2日目は補習という意味不明な用件で呼び出され、1日中勉強させられる羽目になった。でも、そのおかげでユツキの悩みも聞けたから全部が全部悪かったというわけじゃない。いい面も十分にあった。

補習の内容については全く覚えていないわけだが。

それで今日は夏休み3日目。今日からは完全にフリーなので、好きなことをしていようと思っていた。好きなことといっても、暑いのは嫌いだし、涼むためにプールにも行きたいけど女子更衣室で着替えるのはイヤだし・・・オレの容姿と声質はどうしてこうも美少女のそれなんだろうか。ホントに不思議でならない。そもそもこんな風になったのは全部母親の遺伝なわけで・・・いや、あの人のこととは思いつかないで置こう。

それより夏休みだ。思いつきりエンジョイしないとつまらないじゃないか。

「やっぱ夏はこれに限るよね・・・」

オレは自分の部屋に閉じ籠り、クーラーをガンガン効かせて、ベッドに横になっていた。暑くもなく疲れないという一石二鳥のこの過ごし方は、中学生からのオレの夏休みの定番だ。誰に注意されようともオレはここを動く気は無いつ！

と、意気込んでいたのにも関わらず。

「ソラクーんっ！」

「うお・・・っ！ちょっと・・・ダイブしてこないでっ！狭いんだから！」

ノックもせずにドアを開け放つて水希がオレの上にダイブしてきた。ダイブしてくれたことは嬉しいんだけど、そのついでに肘を鳩尾に入れるのはやめて欲しい。

「ヒマだからどっか遊びいこーよー」

オレの上でバタバタと動き回る水希のせいで、膝や肘が全身に打ちつけられる。誘ってるのか暴行を加えているのかハッキリしろよホント。まあ、当たって嬉しい部分もあるわけだけどね……。全身のあらゆるところに攻撃を終えた水希はそのままオレの背中へと手を回した。こら……。そんなに強く抱くから胸と胸が当たってるじゃないか……。っ！耐えてくれオレの理性……。っ！

「どっか遊び行かない？」

吐息がかかるくらいの至近距離でそう言われたら首を縦に振るしかないじゃないか。

むー……。急に色っぽくなって……。

「別に遊びに行くのはいいんだけどさ、そろそろどいてくれないかな？ 苦しいんだけど」

それにドアも開けっ放しだから冷房の効果が薄れる。ようやくオレの上から降りた水希は、不満そうに唇を尖らせていた。そんな表情も可愛いと思ってしまうオレはもう重度のバカだろう。

「で、どこ行きたいの？」

個人的な意見を述べさせてもらうと、オレはどこにも行きたくない。何でかって？ 暑いからさ。

尋ねてから数秒、水希は一番怖れていた言葉を放った。

「プール」

これはザキだ。そうでないならマハムドオンだ。生憎今はホムンクルスを持ってないから、高確率で即死してしまう……。っ！

「あのね、水希。オレは今ホムンクルス持ってないから、その攻撃食らっちゃうとゲームオーバーなんだけど……」

「大丈夫だよ、ディアラハンやってあげるから。すぐに回復するよ」
それはオレが生きてないと効果ないんだけど……。まあいいか。

つか、この会話理解できる人とかいるのかな？そっちの方も不安ではない。

それにしてもプールか……。あのプールの従業員には既にマクされているので迂闊には入れないんだよね……。きっと「男子の裸を見たがる変態女子高生」と認知されていることだろう。もう一度あそこの従業員に女子更衣室はイヤだと抗議したら確実に警察に通報される・っ！

「完全に女子高校生だと間違われてるから、あそこに行ったら女子更衣室で着替えなければならぬことになっちゃうよ……」

着替えるくらいならまだいい。男物の水着なので、上半身裸になつたら確実に男だとバレる。男子更衣室着替えたいと言い張つて通報されそうになり、着替え終わったあと男だと言われて通報されそうになる。どちらを選んでも結末は一緒か……。なら最初から選択肢なんて用意しないで欲しい。

「女子更衣室で着替えるくらいどうつてことないような気もするけど、それがイヤなの？」

真顔でとんでもないこと言うな。

「イヤに決まつてるでしょ！着替えてる間、ずっと煩惱との戦いを続けなきゃいけないんだよ！？」

「それなら、ボクと一緒に個室で着替えればいいじゃん」

ホントにこの子はオレが男だと言つてことを知っているのだろうか。今になって不安になってきた。

「そういう問題じゃなくて……水着が男物だから結局はバレちゃうんだよ！」

「だったら……」

真顔で、

真面目に、

彼女は言った。

「女物の水着を着て泳げばいいじゃん」

心の奥底で、もう彼女はダメなんだと感じ取った。ごめんね・・・全部オレが悪いんだよね・・・。

「ボクこの間水着新調したから、前に着てたのでも着ればいいよ」「ごぶっ」

前に着てた水着つて、あの淡いピンクのビキニ？あれをオレに着ると言うのかっ！？ま、まあ、嬉しいと言えば嬉しいんだけど、これだとオレが残念な人になってしまう・・・っ！

落ち着け、落ち着くんだオレ・・・！

オレにそういう趣味はないんだ！ブル　ラシヨップになんか興味はないっ！

「な、なんてことを言い出すの！？オレに胸はないんだから絶対に見つかっちゃうよ！」

「なら、パッドなり入れて、水着を着ているときだけは『あたし』っていう一人称で文言葉を使えば絶対にバレないと思うよボクは」「それはオレに男を捨てると言うのかな？」

水着を着ている間だけ女子を演じるって・・・そんなの・・・！「あ、でもそれだとカップルじゃなくて友達同士で来た女子高生になっちゃうなあ・・・」

頼むから、考えを改めて欲しい。

「ま、いいよね。その時だけだから我慢しよっか」

「え・・・マジで・・・？」

立ち上がった水希はオレの手を引っ張った。

「さ、行くと決まったら早く行くよー」

「え・・・まだ心の準備が・・・」

最後の抵抗も意味を成さず、オレは水希に連れて行かれた。

無事に帰ってこれるのかすごい不安だよ・・・。

そんなこんなで、例のプールに着いた。夏休みだからか、入り口からでも中が混雑している様子が窺える。この混雑だったら、ドサクサ紛れに男子更衣室に忍び込めるんじゃないかってくらい混雑してる。どうやらこの時期は夏休みということで子供は入場料無料ということになっていてらしく、背も容姿も高校生より幼いオレと水希は中学生だと言ったら疑われずに無料で入場できた。受付嬢の目が節穴だと思えない。

（んー、思ったより混んでるな・・・）

周りを見渡すと人しか見えない。人ごみが得意ではないオレにとつては結構苦しい場所だったりする。

「・・・」

ふと、視線を感じたので辺りを見回すと更衣室への入り口に前回男子更衣室に向かおうとしたオレを引き止めてくださった従業員の姿があつた。この人ごみの中でもオレを見つけられるとかどういう視力してんだ。オレは人の影に隠れてその場をやりすごしたけど、やっぱり背後からは視線を感じた。

「さて、ソラくんこつちだよー」

水希が手を握ってオレを女子更衣室へと誘導する。本来なら嬉しい状況なのかも知れないけれど今のオレにとつては死地に等しい。死地に赴く戦国武将みたいな心境だよ・・・。

彼女に手を引かれて堂々と女子更衣室に入っていくオレ。もう何が何だかわけがわからなくなってきた。

「個室は開いてるかな・・・」

入った瞬間、内臓が口から飛び出すかと思つた。

普通の男子高校生なら涙を流して喜びそうな光景が360°広がっていた。

ここのプールは普通に着替える場所と、カーテンで仕切られた個室がある。個室で着替える人が圧倒的に多いらしく、早めに占拠しないと入れないらしい。そしてその個室というものは、人1人分の広さしかなく、2人で一緒に入つて一緒に着替えるのは無理がある。

「水希・・・これは無理があるんじゃないや
恐る恐る尋ねてみる。」

すると彼女は満面の笑顔で、

「いいのっ！密着したまま着替えるんだから、覚悟しててね？」

何その罰ゲーム。

「それはいくらなんでもダメなんじゃないの？」

言ってるそばから彼女はシャツを脱ぎ始めた。うわわ・・・真つ
白な腹が露になってるし、それ以前に胸！男の前で平然と下着にな
れる女の子って何だよ！

「本気なのっ！？ちよつとそれはダメだつてば！」

慌てて違う方を向く。ダメだ・・・今水希の顔を直視できない・
・っ。

「そんなに慌てなくても大丈夫だよー？だってボクとソラくんは付
き合ってるんだから」

「理由になつてないけど・・・」

「どんなことしても大丈夫でしょー？うふふ」

あ、女王様モードになった。

水希はオレの服を掴んで、捲り上げた。

「ひゃあああ!？」

急に変な声が・・・。

「こついうことが好きなんでしょ？逃げることないじゃん」

目が、目が・・・！獲物を食らう前の肉食獣みたいになつてるよ!？

オレに顔を近づけて色っぽく囁きかける水希には到底敵いそうも
ない。ラスボスですねこれ。それにしてもこの顔の近さじゃちよつ
とでも動いただけで唇が・・・

「落ち着こつか・・・こんなところでしちゃだめだよ・・・」

既にオレの息が上がつてる。何もしてないのに・・・。

「別に逃げることはないよね？ボクはただソラくんをメチャクチャに
したいだけなんだけど？」

結局、女王様モードの水希を止めるのに結構な時間がかかってしまった。

『おー、あの娘たち可愛いな・・・』

『美少女2人組みか・・・超可愛い・・・』

『何かに目覚めちゃいそうっ』

周囲からそんな声が聞こえてくるのが腹立たしい。ふざけてんのか？2人のうち1人は男なんだよ！

「ソラくんがあまりにも可愛いからみんな見惚れちゃってるよー？」

女王様モードから元に戻った水希が楽しそうに笑いながら言う。

お前は楽しいかもしれないけどオレにとってはただの羞恥プレイだ。なんでビキニなんか着せられて泳がなきゃいけないんだよ。

「う、うるさいっ」

「きゃー！そういうツンツンしたところも可愛い〜！」

「・・・っ!？」

もうこの人に反抗するのはやめておこう。

さて、今のオレの格好を今一度確認してみると、

・ 淡いピンクのビキニ

・ 髪がポニーテール

・ (自分で言うのも何だけど) 真っ白なおなかと脚。

これじゃあ完全に女の子じゃないか・・・。自分の容姿を嘆くのは何度目か数え切れないが、こんなに自分を変えたいと思ったのは今までにない。

逆に水希はどんな格好なのかというと、ピンクのフリフリがついた可愛いビキニで髪はそのまま。水着よりも先に目が食いついてしまうのがやっぱりおなかや脚だった。真っ白で抱きしめたくなるほ

どの・・・いや、違うよ？オレは決してそんな変態じゃないよ？

「なんでオレがこんな目に・・・」

「ソラくん、今は『女の子』なんだからあたしって言わなきゃ
どーでもいい注意をされた。」

「別にいいでしょ。水希だつて一人称ボクなんだから」

まあ、ボクっ娘はアリだと思うけど。

「ボクは別だよ。ソラくん・・・ソラちゃんはあたしって言った方が可愛いし」

可愛さの問題なのか。あとソラちゃんって呼ばれたけど、もうメ
ンドーだから突っ込まないことにしよう。

「ほら、早く行くよ！」

「えー・・・正直この格好イヤなんだけど・・・」

なんとかというか、脚にと腹部に違和感が・・・。人前でここまで身
体を露出したことがないからかな。

水希の後ろについて歩き、そのまま流水プールに飛び込む。

「ひゃあっ！」

「???? ソラくんどーしたの？」

「ちよつと、水が冷たくて・・・」

「プールなんだから当たり前でしょ？」

おなかと脚を出してプールに入ることがなかったから、感覚の違
いに驚いたただけだつて・・・。もう何がなんだかわからない
助けて欲しい。マジで。今ここで大声で叫んでもいいくらいにオレ
の精神は追い詰められていた。

「それにしても、すごい混雑だね・・・」

水希が溜息混じりに呟いた。

そりゃそうだ。入り口であれだけの人がいたんだからプールはも
っと混雑しているに決まってる。特にこの流水プールは水に入つて
いるだけで、全く泳げない。何のためのプールなんだか・・・。

「これじゃあ全然泳げないじゃん」

「あれだけ入り口で混んでればこうなるでしょ」

そんなこともわからないくらいオレの水着姿に一生懸命だったのか。もうだめかもしれないこの子。

「泳ぐつていうより水に入ってるだけだな……」

流水というより、人ごみに流されて移動してるだけだ。

げんなりしているところに、後ろから声がかかった。

「あれ？水希ちゃんじゃないか」

後ろを見ると、幸か不幸かユツキと前の可愛い女の子がそこにいた。

「こんなところで会うとは奇遇だな」

「そうだねー。橘くんたちはデートなの？」

「……そんなわけないだろ。言うこと聞かないとまたメンドーなことになるからな」

「……。ちよつと待て……」

「前のカツコいい人が……女の子だった……？」

ユツキの隣で呆然とする彼女。水希を男だと思っていたらしい。

「そうだよ？ボク結構中性的な顔してるけど女の子なんだよ？」

驚愕の新事実を受け入れられないのか、呆然としている。水希を美少年だと勘違いしていたってことは、オレを女だと勘違いしている可能性も十分にありえる。

「ねえ、雪時。これって新しい恋愛感情なのかな？」

「しらねえよ」

「騙しててごめんね……」

オレをスルーして話に花を咲かせている3人。まあ、今のオレにとってはありがたいんだけど。なんでこんなところでユツキに会うちやうのかな……。今は女装してるし、一人称だって変えなきゃいけない。

（待てよ……？つてことはこのままやりとおせるんじゃない……）

「んで水希ちゃん、その可愛い子は友達か？」

「あ、あれは」

よしっ、オレだと気づいてないっ！

「あ、あたしは水希の中学時代の親友の田井中キャサリンって言いますっ！よ、よろしくねっ！」

自分でも思った。田井中キャサリンって誰なんだ。ハーフにしたってもうちょっとマシな名前があったはずだ。自分の判断力が不安で仕方がない。

「へー、キャサリンちゃんかー……」

若干、ユツキの視線が訝しげになったけど何とかなるだろう。帰るまでオレは田井中キャサリンだ。頼んだぜキャサリン！

ちらつと水希を見ると、なんとというか呆れたような目をしていた。

「田井中さんも可愛い……」

「そうだなーお前より数倍可愛いな」

ユツキがそう呟くと、女の子はユツキの膝に鋭い蹴りを入れた。

水の中だから痛みはなさそうだね。

「俺は橘雪時。好きなように呼んでくれ」

営業用スマイルのユツキ。ホントにコイツは……。

「うんっ！あたしはルーシーって呼ばれてるからそう呼んでねっ！」
オレってバカだな。なんでキャサリンなのにルーシーって呼ばれるんだよ。

（ソラくん？そんな杜撰なネーミングじゃすぐにバレちゃうと思うんだけど……）

水希が小声で耳打ちした。そんなことオレだってわかってる。

「ルーシー……また変わったニックネームだな……」

もうダメだ、フオローしようがない。ここまでメチャクチャになつたら最後まで演じきるしか……。

「それと、橘くんの隣にいるその子名前はなんていうの？」

「あー……わすれ」

「七瀬姫奈ななせひめなって言いますっ。よろしくおねがいますっ」

七瀬ちゃんは礼儀正しく頭を下げた。

「姫奈ちゃんは中学生？」

「はい。今年受験なんですけど、勉強ばっかじゃ息苦しいので気分

転換がてらに雪時とプールに来ました！」

へボ作者の割には可愛い名前考えたな。姫奈ちゃんか・・・名前のようにお姫様みたいに可愛い。

「それで、橘くんとはどういう関係なの？」

珍しく水希が踏み込んでいった。いつもならこんなこと聞かないのに。今日はなんだ、機嫌が悪いのかな？

七瀬ちゃんの横でユツキが何やら慌てているけど・・・弱味でも握られてるのかな？

「えっと、それはですね」

一呼吸。

「あたしは雪時の許嫁です。最初から結婚を約束されています」

「じふっ」

盛大に咽るユツキ。啞然とするオレ。なぜか目を輝かせている水希。

「ひ、姫奈？いきなり何を言い出すんだ・・・？俺とお前はただの腐れ縁であつてだな、決して許嫁などという関係では・・・」

お、ユツキが慌ててる。珍しいな。

「許嫁かー。そういうの羨ましいな・・・」

「・・・」

オレも咽るべきなのだろうか。

「はい。雪時のお父さんとあたしのお父さんが古い友人らしくて、小さい頃から雪時とは兄妹のように育て上げられて・・・」

「バカ！俺は一度もお前を妹だと思ったことなんざねえ！でたらめ言うな！」

「昔は一緒に寝たり、1日中一緒に遊んだりしてました」

「それは親父が言うから・・・仕方ねえだろ！」

「一緒にお風呂だつて入ったことあるんですよ？」

「姫奈　　っ！！！！？？？」

ユツキが完全に七瀬ちゃんのペースに乗せられてる。この子、可愛い顔して結構できる……。

3人が会話で盛り上がりつつある中、オレはというと特に話すこともないし、余計なことをしたらユツキにバレてしまうので笑いながら3人のやりとりを眺めているだけだ。ホント、最悪のタイミングで現れてくれたものだ。

「橘くんも愛されてるんだね」

水希が何気なく言った一言が、ユツキに止めを刺したらしい。

「別に俺は何とも思っていない……」

そろそろ空気が重くなってきた……。この状況で笑顔でいるのは姫奈ちゃんと水希だけだ。ユツキはとっくにノックダウンしてるしオレもこういった話題は苦手だ。どう話題を切り替えるか……。辺りを見回すと、ちょうどいい具合にウォータースライダーが真上にあつた。よし、これだ。

「あ、あのさあ」

「ん？どうしたのルーシー」

こつちを見つめる水希の視線が怖いのは何故だろう。笑ってるんだけど、目が笑ってない……。多分オレがキャサリンなんて意味不明な名前を使ったから機嫌が悪いんだろう。ごめんね、でもオレは男を捨てるわけにはいかないんだ！

「あのウォータースライダー面白そうじゃない……？」

上を指差すと、残りの3人の視線も上を向いた。

ここのウォータースライダーは全長100mあるらしく、結構長い間楽しめる評判だと聞いたことがある。オレは一回もやったことないからよく知らないけど。

「ほー、ウォータースライダーか！楽しそうじゃねえか！早く行くぞぜ！」

あれ？急にユツキが元気を取り戻した……。ウォータースライダー好きなのかな？

「へえー結構面白そうだね。姫奈ちゃんもこういうの好きなの？」

水希が七瀬ちゃんに話題を振ると、彼女は少し青ざめた顔で首を縦に振った。

「あれ？七瀬ちゃんはウォータースライダー嫌いなの？」
女っぽい声を演じながらオレが尋ねた。

「いや・・・だ、大好き！何回やっても飽きないですよね！」
ふむ・・・何か違和感あるな。

「だよな！そうと決まれば早く行こうぜ姫奈！」
ユツキが強引に七瀬ちゃんの腕を掴んで引っ張っていく。

「そ、そうね行きましょ雪時・・・！」

ぎこちない動きでそれに応じる七瀬ちゃん。むー、なんか変だよな。2人が流水プールから上がって、ウォータースライダーへの階段を上っていく。全長100mもあるから、結構高いところまで上るしそこから滑るんだからかなり速くなる。あれだけ高いところからかなりの速度で滑り降りるのはオレには多分無理だと思う。

「水希、オレたちはどうするの？」

「オレも正直滑りたくないんだけど。」

「さあ？ルーシーの好きにしたら？」

水希はツンと跳ね返すと、そのまま2人のあとを追うようにプールからあがった。それにしても、何で機嫌が悪いのかさっぱりわからない。別にキャサリンだっていいじゃないか。

「仕方ないか・・・」

1人でいても暇なので渋々オレも水希についていった。

「うわー・・・思ってたよりもずっと高い・・・」
階段を上りきったところで水希が呟いた。

まあ、確かに高い。普通のプール施設には必要ないんじゃないかというくらい高かった。ここはちょっととしたスペースになっている。当然地獄の入り口もあるわけウォータースライダーで・・・。滑る前は楽しそうに笑って

いた人も滑り出したら、水の流れに抗おうと必死で足掻き、悲鳴をあげていた。ウォーターライダーなんだからどう足掻こうが滑り出したら最後まで滑るんだよ。

「すごいな・・・正直ここまで高いとは思わなかった・・・」

『雪時い・・・こわいよお・・・』

『そうか？俺は楽しくてたまらないんだが』

地獄への入り口の近くで涙目になった七瀬ちゃんと晴れやかに笑っているユツキがいた。

「橘くん・・・」

水希が感情のこもってない声でユツキに尋ねる。それに対してユツキはというと、

「いや、実はコイツ極度の高所恐怖症なんだ。それなのに意地張って滑るなんて言うからさ」

笑いながら言った。ユツキの腕には七瀬ちゃんがぴったりとくっついて涙目になっている。そんなにこわいのか・・・。

「七瀬ちゃん、高いところダメなんだね」

自分は女だと言い聞かせながら、会話に参加する。

「まあ、コイツはこうなるとだめだ。んー、ちよっと楽しみにしてたんだけどな」

ユツキが残念そうに溜息を吐く。本気で滑るつもりだったのかコイツは。

「それじゃあ・・・」

なにこの悪寒。

「ルーシーと一緒にやってきたら？この子こいつの好きだから・・・っ！」

「んあ？そうなのか？」

今日の水希は何を言い出すかわからないのでちょっと怖い。

「ま、まあ・・・嫌いじゃないし面白いから好きなだけなんだけど

さ・・・あはは

やばいやばい・・・冷や汗が止まらない・・・。

「ルーシーさんさえよければ、一緒に行くか？」

紳士的な仕草でオレを誘うユツキ。このあとルーシーさんがオレだとわかったとき、コイツはどんな顔をするんだろうか。

でも、身体接触さえ避ければどうにかなるだろう。さっさと滑ってきちゃえば・・・。

「うん、一緒に行こうか」

「むー・・・何か気に入らないなあ・・・」

「そうですね・・・何か気に入りませんね・・・」

（本物の）女子2人はなぜか忌々しげな目でこちらを見つめていた。特に水希なんか自分から一緒に行けって言ったくせに。

これから100m分の地獄が始まるわけだが、それを目の前にしてユツキだけは楽しそうにしていた。もしかするとコイツは、普段は他人に興味を持たず、自由奔放に過ごしているだけでホントは少年らしいところもあるんじゃないかってふと思ったりした。結構長い付き合いなのに今更発見があるなんて、人間てのは奥が深いものです。ホントに。

そんないい雰囲気は、一瞬にして掻き消された

「きゃあ つ！！！！！！」

これはオレの悲鳴。

「おーおー！こいつはすげえや！」

こっちは喜ぶユツキの声。

何だこの格差は。

滑り出した瞬間に、加速して大きなカーブが待ち構えている。なんとというか、夏にやる流しそうめんの麺になった気分が味わえた。

速度を殺さないままカーブするので遠心力も尋常じゃない。下手すればコースアウトしちゃうんじゃないかってくらい。

(ちよ…これは流石にやば…!)

水の勢いが強すぎて、水着の紐がほどけかかっていることに気がついてしまった。どうして今日はここまで不運なんだろう。とはいえ、後ろにはユツキがいるしこの速さじゃ落ち着いて紐も結べない。やばい…ここで水着が取れて、男だということがバレたら…! 「ルーシーさん大丈夫?」

あたふたしているオレに気をかけてくれたのか耳元でユツキが囁いた。ごめん…まったくときめかないんだけど。

「う、うん…ちよっと速すぎるかなって…」
ここまでくると速さなんてどうでもよくなってくる。

「うお…」

「きゃ…」

急に身体が宙に浮いた。スライダーの一部が段差になっていてそこで身体が弾んだ。これくらい速くなるってわかってんならそういう危ないものをつけるなよって建設した奴に言っteryたいね。ホント怖い人には怖いよこれ。

「あ…」

そして着地したときに、完全に紐が解けた。抑えてないと落ちちゃう。オレは身体を抱きながら残りの数メートルを滑っていく。

「どうしたルーシーさん、おなかでも痛いのか?」

ああもう! こういう話しかけて欲しくないときに限って話しかけてきやがって! 何だお前は! 天邪鬼か!

「い、いや大丈夫だから心配しないで…」

「え、でもおなか痛そうにしてるし…」

「大丈夫だよ、あともう少しだから…!」

オレが切れるまで。

そして目の前に現れる最後のコーナー。よしっ、これさえ乗り切れば…っ!

と、意気込んでいたのだが、ここで最悪のハプニングが起こった。
「・・・・・・・・」
水着が落ちた。

そのまま流れていった水着はオレたちよりも早く最終コーナーを
曲がり、ゴールしたらしい。

「あれ？この水着・・・・・・・・」
「ん？どーかした？　　ってその水着・・・・・・・・！」

下のほうで微かに声が聞こえる。ああ、もうダメだなと悟ったと
きだった。

「ちよつと！？ルーシーさん、水着が・・・・・・・・！」
「うるさいうるさいうるさー！ーい！ー！ー！」
最終コーナーに突入する。

「え、何そのセクシーなポーズは・・・・・・・・」
「もうっ、お願いだから黙っててよー！！」
「でも目が離せない・・・・・・・・っ！」
「こんの・・・・・・・・へんたあああああいつっ！ー！ー！」

じゃっばーーん

その直後何があったかは、ご想像にお任せします。
もう絶対、こんな悪行は犯さないからな・・・・・・・・っ！

そんなこんなで、帰り道。何とかキャサリンがオレだとバレずに済んだけど、その代わりオレは必要のない心の傷を負った。というか、何が原因でオレが女物の水着を着なければいけなかったんだろうか。そんなことですらもはや思い出せない……。はぁ……。少し前を足早に歩いていく水希を見る。今日水希はずっと不機嫌だったけど、なんで不機嫌だったのかはわからない。もうキャサリンは役目を終えたんだし、そろそろ普通に会話してくれてもいいはずなんじゃ……。

「ねえ、水希」

「……………」

ダメだ、まだ怒ってる。

「なんでそんなに怒ってるの？オレ何かいけないことしたかな……？」

身に覚えがないので聞いてみた。本来ならオレが怒ってもいい立場なのに、なんで水希が怒ってるんだろう。

「その顔は、自分が何をしたのかわからないって顔だね」

不機嫌ながらも水希は話し出した。

「したも何も身に覚えが……」

すると、こちらを真っ直ぐに見据えた水希は鋭い声で言った。

「ソラくんは、また偽名を使って自分を隠したよね？」

息が止まった。

なるほど、そういうことだったのか。

「10年前から今まで、偽名1つだけでどれだけ苦労したのかわかっているはずだね？あんなに悩んだのに、もうそのことを忘れちゃってる」

凶星だから何もいえない。

オレはたった1つの「違う名前」で10年もの月日悩んで来たというのに、その悩みが解消した途端にそのことを忘れていた。確かに水希の誤解が解けて（正確にはどうなのかわからないけど）浮かれていたのも事実だ。

自分を示す大切な文字をオレは2回も偽った。自分を隠した。人を騙した。

状況が違ったとはいえ、同じ愚行をオレは繰り返した。

「ボクはそのことが気に入らなかつただけなんだけどね」

微笑みながら水希は言った。でも、その笑顔はどこか寂しげで儂かった。

「あ、それと」

再び歩き出した足を止めて、こちらを向かずには彼女は呟く。

「あんまり成長しないと、嫌いになっちゃうかも」

ふざけてんのか真面目に言ってるのかわからない。こういうのは言葉の真意を理解するのに時間がかかるからイヤだ。

「・・・ごめん」

「別に謝らなくても、こういうことをしなければいいし、直らなければその時はその時だから」

これは本気だな・・・。

これからの時間に田井中キャサリンが出てくることはない。今日だけでもよく頑張ってくれたキャサリン。オレは君を忘れないよ。

とはいえ、何かこの罪を償わなければならない。何をしたら水希の機嫌が直ってくれるだろうか。

「ねえ、水希」

「んー？なあに？」

あれ・・・声がいつもと違う・・・。

「今日こんなことしたから、何かお詫びをさせてくれないかな？自分でやっというてあれだけど、このままだと腑に落ちないっていうか・

「・・・」

「なるほど、罪を償いたいわけだね・・・」

あれーホントにオレの聞き間違えじゃないなら、この声はいつもと声が違っただけど・・・。なんというか、いつもより色っぽい

もしや・・・。

「じゃあ、ボクがソラくんに『今日の夕食と明日の朝食作って』って言ったたら何も言わずに作る?」

「うん」

「じゃあ、ボクがソラくんに『1日メイド服でご奉仕して』って言ったたら何も言わずにメイド服着てボクに仕えてくれる?」

「うん」

「じゃあ、ボクがソラくんに『今晚、ボクの言うこと全部聞いて』って言ったたら文句言わずその身体差し出してくれる?」

「・・・・・・」

それは了解し難いんだが・・・。

「身体を差し出してくれる?」

「・・・・・・」

やっぱりそっちに入ってたんだ。もうダメかもしれない。

「差し出してくれるよねえ?」

あ、目が光った。

これ以上抵抗しても仕方がないので、仕方なく頷いた。これも全部オレが悪いんだ、憎むのだったら田井中キャサリンを憎め!

「そう。ならいいよ、今回だけは許してあげる」

邪悪で妖艶な笑みを残して水希はまた歩き出した。

はあ・・・今夜は何をされるんだろうか。荒縄はデフォだとして鞭とか棒とか出てきて殴られるんだろうか。想像するだけでも恐ろしい。明日の朝、オレが生きているのかもわからない。

まあ、ともかく身体1つで罪が償えるんだからそれでいいか。

「今回は、たっつっつっつぱりサービスしてあげるからそのつもり

「でいてね？」

前言撤回。身体1つじゃ足りないかもしれない。

その後、帰宅。

姉貴は帰っていないらしく、家には誰もいない。

本来ならばそれなりにイイシチュエーションなのかもしれないが、今は逆だ。

水希は洗濯機に水着やらを放り込んで、スリもびつくりの手際でおレの手を掴んで部屋に連れて行く。

オレをベッドの上に放り投げ（投げたんだよ。柔道家もびつくり）、そしてドアに鍵をかけた。

ベッドの上に仰向けになっているオレの視界の中に水希の顔が映る。

夏だと言うのに奥歯がガタガタ震えている。

目に映る水希は妖艶に笑っていてその手には荒縄が。

そして、その笑みのままオレを地獄へ突き落とす一言。

「今日は、ボクが満足するまでたっぷりイジメてあげるからね？」

地獄が見えました。

夏休み：田井中キャサリンって言いますっ（後書き）

こんにちは。七色アゲ八です。

今回から夏休み編に突入しようと思っってこんなタイトルにしました。8月編が終わっているのにどうして夏休みなんだという質問は黙殺させていただきます。

新しいキャラを登場させたんですが、私自身登場人物は少ないほうがいいかななんて思っています。だって、動かすのがメンドーじゃないですか。

まあ、そんなこんなで今回もお楽しみいただけると幸いです。そしてこれからもお付き合いよろしくお願いします。

以上、七色アゲ八でした。

これは、遠い昔の出来事だ。

あるところにそれはそれは美しい夫婦がいた。

その夫婦は順調に愛を育み、とても幸せな生活を送っていた。

ある日、子供ができた。

2人を知る人々は、「両親がこんなに綺麗なんだから、子供もきっと綺麗な子なんでしょう」と他人であるのにも関わらず、子供の誕生を心から待ち侘びていた。

それから数ヶ月、ついに第一子が誕生した。

しかし、その子供の容姿は醜かった。

どう見ても2人の子供だとは思えないほど、醜かった。

夫婦はその子供を周りの目から隠した。

周囲には「病気で外に出られない」と言い、存在を隠した。

そんな生活を5年の間、ずっと続けた。

子供は5歳になり、容姿こそ醜かったものの、元気いっぱいのやんちゃ盛りだ。

もう家には押し込められない。

そう思った夫婦は、家族で山へハイキングに出かけた。

生まれて初めて外へ出る子供にとっては、未知の世界が広がっていてさぞかし楽しかったことだろう。

子供がはしゃぎまわる中、2人は恐ろしいことを考えていた。

長年、隠す生活を続けてきたストレスからかも知れない。

途中の休憩場所、目の前は崖になっておりそこからの眺めは絶景のいい休憩場所だった。

当然、子供は崖に歩み寄り、身を乗り出して下を眺める。

その時。

父親がその子供を崖から突き落とした。

子供は悲鳴を上げながら落ちていく。

その悲鳴が聞こえなくなったと同時に夫婦は逃げるように来た道を戻っていった。

そしてまた月日が流れ、母親には子供ができた。

今度こそは、と意気込む2人の頭の中に前の子供にしたことの罪悪感など微塵もありはしなかった。

今度の子供は、とても可愛らしい顔をしていた。

夫婦は喜んだ。

「これで、胸を張って子供を見せられる」と。

周囲からは褒められた。

「やっぱり夫婦が綺麗だと子供も綺麗なのね」と。

5年後、夫婦と子供はいつか訪れた山へとハイキングに出かけた。子供は生まれて初めての光景にはしゃぎ回っていた。

そして、いつか訪れた休憩場所。

相変わらず絶景が広がっており、子供は崖から身を乗り出してその景色を嬉しそうに眺めていた。

ふと、子供を見るとはしゃいでいた先程とはどこか様子がおかしいことに気が付いた。

気分でも悪くしたのかと心配した両親は子供に歩み寄る。

子供の顔を見ると、

今まであんなに可憐で自慢だった子供の顔が、

ここから突き落とした一人目の子供の醜い顔に変わり、ぞっとするような低い声で、

両親の目を見つめて、

こう言った。

「お父さん、お母さん」

両親はただ信じられないものを見るような目で子供を見つめる。

「今度は落とさないでね」

「きゃあ つつっ！！！！！！」

てな話をしたら、美春と七瀬ちゃんとのぶながが一斉に悲鳴を上げた。

「ふーん・・・別に怖くないような気もするんだけど・・・」

水希は眠そうな目で話を聞き流していた。

「そんなことする親が悪いに決まってるんだろ」

ユツキが珍しくもつともなことを言った。

今日はユツキの「夏だから何かしないか？」というものすごい適当な提案で、オレとのぶながと水希とユツキと七瀬ちゃんまで美春の家に来ている。これは蛇足なんだけど、美春のお父さんは大手企業の社長らしく、家はものすごい豪邸だ。7人同じ部屋に入っても十分にスペースが余っているくらい広い。広すぎて逆に寂しくなるくらい広い。家政婦もいるらしいが料理は美春と母親が作るの、主な仕事は掃除洗濯だけだという。家政婦がいるのに自分たちで料理を作るし、家政と一緒に食事をするなんてどれだけお人好しなんだろうか。

んで、今は九重邸の一室で怪談話を披露していたところだ。あの話は結構有名だからオチ知ってるかな？って思ったんだけど思いの外知らない人が多かったの、とりあえず怖がらせることはできたみたい。あれと同じような怪談をもう1つ知ってるんだけど、それは話す必要がないみたいだ。

「べ・・・別に怖がってなんかないから!!」

さつき悲鳴を上げていた美春が必死に誤魔化そうとしている。美春がこういうの苦手だったことは昔から知ってるからオレら相手にその見栄っ張りは無意味なんだよね。

「べ・・・別に怖がってなんかないですから!!」

こちらもさつき悲鳴を上げていたのぶなが。いつもポーカーフェイスのくせにこういう話は苦手なんだよな・・・。はっきり言っっては悪いけど、こいつは変わってる。

「雪時い・・・今夜眠れなかったらどうしよお・・・」

ユツキに泣きつく七瀬ちゃん。ホラーに強いユツキはそれをめんどくさそうに聞き流している。そして、もう1つ驚いたことがあった。

「水希は怖くないの・・・?」

「え?」

キョトンとした表情でこちらに目を向けたのは水希。彼女は女子陣の中で唯一悲鳴を上げていない。結構ホラーには弱そうなイメージがあっただけだ・・・。

「別に?どこも怖くないんだけど?」

「そういうの弱いと思ってたけど、実は強かったんだね」
意外な一面を発見できた。

「好きじゃないけど、怖いって思うツボが違うんだよねボク」

「ほー・・・」

そう言われると、怖がらせてみたくなるのが人間の性なわけで・・・。よし、意地でも水希を怖がらせて見せる!こう見えてもオレはとっておき怪談を多く持っている男なんだ!

「じゃ、もう1つ話そうか」

暗幕で真っ暗になっている室内に、うつすらと不気味に輝く一本のロウソク。心なしか肌に触れる空気も冷たい。

「もういや・・・」「もういやです・・・」

美春と七瀬ちゃんが揃ってオレの怪談を拒否した。まあ、この2

人はホントに怖がっているのだからここで退場させてもいいかも知れない。

「なら、外に出てるといいよ。ここからはオレも隠し玉を披露するつもりだから」

「そ、そうね。じゃあ、お言葉に甘えて退散させてもらいましょう。・・・」

「わかりました・・・。美春さん早く出ましょう・・・！」

ガール2人が退場。この部屋に残ったのは語り手であるオレと、青ざめた顔で必死に聞こうとしているのぶながと平然としている水希とユツキだけ。のぶながは既に震えているしユツキは別に標的じゃないからどつちでもいいんだけど水希だけは怖がらせない。本人曰く人と怖さのツボが違うらしい。だからさっきの話とはちょっと違う怖さが必要になる。・・・何かあるかな。

しばらく考えていると、自分で話してても怖くなった話が1つだけあった。それで攻めてみるか。

これは、ある小学校で起きた事件だという。

ある女の子がトイレで用を足していた。

すると、どこからともなく聞こえてくる不気味な声に気が付いた。

「かみをくれ・・・かみをくれ・・・」

耳を澄まして聞いていると、声は便器の中から聞こえてくることわかった。

女の子は怖くなって、息を潜めた。

便器の中にいる何かに自分の存在を気取られないように必死に息を殺した。

「かみをくれ．．．かみをくれ．．．」

ここでようやく聞こえてくる声が何と言っているのか聞き取れた。どうやら紙が欲しいらしい。

普段から困っている人を見捨てられない性分だった女の子は耐え切れず口を開いた。

「紙が欲しいの．．．？」

静かなトイレにこだまする声。

そしてまた聞こえてくる声。

「かみをくれ．．．かみをくれ．．．」

しかし、その個室のトイレトペーパーは女の子が使った分で終わってしまった。

「もお、紙はないよ．．．」

女の子ももう必死だった。

その時、

女の子は得体の知れない恐怖を覚えた。

「かみ」という単語に違和感を覚えた。

そして、違和感を覚えた頃には既に手遅れだった。

便器から出てきた人間のものとは思えないほど歪な腕。

「その紙じゃない．．．」

女の子の違和感は当たった。

「お前のその美しい髪が欲しいんだよ！！」

その歪な腕に髪を掴まれた女の子は悲鳴をあげる暇もなく便器の中に落ちていった。

あとで話を聞くと、女の子の使ったトイレは昔虐められていた子が髪を干切られてた場所だという。

そしてその虐められていた子は、女の子がトイレを使う3日前に自殺していたのだ。

て、話だ。

正直最初知ったときはちょっと怖かったりしたんだけど、この話なら水希も震え上がること間違いなしだ！そう期待しながら目を開けると目の前にいたのは、

「・・・へー」

またもや眠そうな水希と

「それは虐めていた子供たちが悪い」

冷静に突っ込むユツキだった。

え・・・なんで？

「怖くなかったの？オレでもちょっと怖かった話なんだけど・・・」

「あんまり興味ないかな・・・そういうベタなやつは」

「なら、次で最後にしよう」

ふふん、オレにはもう1つ隠し玉がある。

「今度こそ怖がらせてやるからな・・・っ！」

「ソラくんはボクを怖がらせることなんてできるの？」
「俺がこういうのに興味ないってわかっててやってるのかお前は」
2人は余裕の表情を見せている（暗いからよくわからないけど）。
見てろよ、その表情すぐに恐怖に変えてやる。

～ 中 略 ～

話が終わって、もったいぶるように間を作る。今度こそ水希を怖がらせることができたかな？

「ほー、それも結構ありきたりな話だな」

ユツキが何か言っているけど無視する。何度も言っけど今回の標的はユツキじゃない。

そして肝心の水希を見ると・・・

「ふーん・・・」

やっぱり眠そうな顔で聞いていた。

なんでこんなに耐性が高いんだこの子は。今のはホントにオレの知ってる中でも最高級の怖さだったのにそれを聞いても眉一つ動かさないとは・・・。これは完全にオレの負けだ。

「水希ホント強いんだね・・・もうネタ切れだよ」

「だから、怖さのツボが違うだけだって言ってるじゃん。ソラくんがそのツボを探し当てるのが下手なだけだよ」

今のオレには水希の怖さのツボが全く理解できない。あのお話を聞

いて普通にしていられるなんておかしすぎる。まあ、ユツキは最初から人としておかしいけど。

「怪談つてある程度パターンが決まってきたからな……。オチが読めたりすることもある」

「だけど今は正直怖かったでしょ？」

「特に怖いところは見当たらなかったが……」

ダメだ。コイツはやっぱり普通じゃない。ああ、ホント悔しいな……。あとでネタを新しく仕入れてリベンジに備えよう。

「今日はこれくらいのところにしとこう。そろそろ時間だし」

暗幕を開けて遠くのほうにある時計を見ると、長針は7時をさしていた。話し始めたのが1時くらいだから6時間近くも怪談パーティーを開いていたことになる。なんというか、時間の浪費って感じがするなあ……。

「おー、もういい時間だし夕飯を作らなきゃいけないしな」

あれ、そーいや七瀬ちゃんと美春はどこに行ったんだろ。退場したつきり見てないな。

「ねえ、ユツキ残りの2人はどこ行ったの？」

「そこら辺にいるだろ、多分」

ホントに関心ないんだな……。ユツキの薄情さを改めて知った。

「まあ、家の中にはいるよね。こんなに広いから探すの大変そうだけど……」

長時間座りっぱなしだったので、腰が痛い。背伸びをしていると水希の様子がどこかおかしいことに気付いた。なんというか、考え込んでるようなそんな感じ。ただ一点を見つめて呆然としている。

「ほら、水希？帰るよ」

声をかけると、我に返ったように水希は顔を上げた。

「あ、うん……。ごめん」

んー……。変だな……。何か悩み事でもあるんだろうか。でもオレは女心とかよくわかんないし、理由を聞いたら逆に怒らせちゃ

いそう。だから黙ってる。異論は認めないよ。

「それにしても、この家は広すぎてどこから入ったか覚えてないんだが……」

「あ、それオレも。来た道全然覚えてない」

さて、どう帰る。美春はどこにいるかわからないし、家政婦らしき人も見当たらない。

ん、待てよ？のぶながなら、記憶力いいし（根拠はない）、もしかしたら覚えてるかも知れないっ！そんな期待を胸に抱き、のぶながを見ると……

「……」

可愛く微笑んだまま気絶していた。そーいや、のぶながはこういうのダメだったんだ。それなのにこの部屋に残って悲鳴も上げずに話を聞いていたのは不思議だなーと思っていたんだけど……気絶してれば何も言わないはずだ。なるほどね。

「のぶながはそつとしておいてやれ……」

ユツキは呆れたように呟くのだった。

のぶながは九重家の人が目覚めるまで看病してくれるとのことので置いてきた。

8月は異様に日が長く、7時を過ぎても外は暗くなかった。明るくなく暗くないこの微妙な明るさって逆に不気味だったりするんだよね。んで、そんな微妙な明るさの中、オレと水希は歩いてきた。美春の家から水希は元気がないけど、ホントにどうしたのか気になる。さつきから一言も話さないし……。

「ね、ねえ水希。どこか具合でも悪いの？」

野暮だと思いながらも聞いてみた。

「えっ？別にどこも具合悪くなんかないけど……」

じゃあなんで黙ってるんだろっ。

「それとも・・・オレ何か怒らせるようなことしたかな・・・？」
自分はホントに鈍いから気がつかない間に水希を怒らせていたかもしれない。自分が何をして怒らせたのか知らないより、知ってほしい怒られたほうが楽と言えば楽だ。

「してないと・・・思うけど・・・」
むー、ホントに謎だ・・・。

まあ、考えてもわからないことを考えるのは時間の無駄なのでこれくらいにしておこう。それに、早く帰らないと姉貴がおなか減ったと連発してくるから帰って夕飯作らないとね。

オレは少しだけ速く歩き始めた。

家に帰ってからというもの、水希の様子がよくなることはなかった。夕飯を食べているときも何か思いつめたように虚空を見つめてたし、入浴中も何だか変な様子だった。あ、別に入浴中の水希を覗いてたつてわけじゃないからねっ！？ただ風呂場の近く通ったらそんな感じがしたつてだけだからねっ！？ま、そんな弁解はどーでもいい。

(何があつたんだろ・・・。ホントに気になるな・・・)

オレはベッドの上で仰向けになりながら考えていた。最後の話の途中から様子がおかしいのはわかっていたんだけど、怖くないっていつから続けて話した。

あれ・・・もしかして・・・。

「話が怖かった・・・とか」

怖くないとかツボが違うとか言ってたけど、ホントは怖かつたんじゃないかな。話が頭から離れなくてあんな風になってるのかな？だとしたら、オレは水希を怖がらせることに成功したということになる。なんだー、ホントは怖いのに怖くないなんて意地張ってただけか。意地張ってないで、七瀬ちゃんや美春のように退場してれば

よかったのに……。多分、水希は美春に負けたくないっていうぐらいでもいいプライドがあったから残ったんだろう。

本当のことがわかったわけじゃないけど、考えがまとまったら急に眠くなってきた。今日は半日語り続けてたからな……。

「ふぁ……」

大きな欠伸が出る。いつもなら寝てる時間だし、そろそろ寝るかな。

やっぱり身体は疲れているらしく、電気を消して10分も経たないうちにオレは睡魔に負けた。

人の気配を感じて、目が覚めた。

オレはよく覚えてないけど、シュークリームいっぱいのある部屋で無我夢中に一心不乱にシュークリームを頬張っていたところだった。

あとちょっとでおなかいっぱいになったのに……誰だこんな夜分に人の部屋に侵入してくるやつは……

目をこすりながら、ドアの方を見る。暗くてよくわからないが人が立っているのがわかった。ノックもしないで入ってくるなんてどこまで非常識なんだ……。

「ねえ、何の用かな？オレ眠いんだけど」

「……」

返事がない。

「聞いている？眠いつて言ってるんだけど」

「……」

返事がない。

おかしいな。オレの部屋は美春の家の部屋よりも狭いんだから、これくらいの声を出せば聞こえるはずなんだけど……。

そこで、1つ疑問が浮かんだ。

というか、アレ人なのかな……。？そう思った瞬間、頭はフル回転。全身をあっという間に恐怖が支配していった。

「・・・・・・・・・・」

人影はゆらりゆらりとこちらに歩み寄ってくる。どうせ来るんだつたら一気に来て欲しいものだ。ゆっくりこられたら恐怖を感じる時間が長くなっちゃうじゃないか。オレは既に身体が動かず、ベッドの隅で震えていた。ついにはベッドの上にまで上がってきて、そろそろ終わりかなと本能が感知したのか意識が遠のいていくところだった。

「ね、ねえ・・・ソラくん？」

声が聞こえた瞬間、ファアラウェイだった意識が光の速さで帰ってきた。

「水希だったのか・・・よかつたあゝ」

安堵の息を吐くオレに、水希はこもこもと話し始めた。

「あ、あのさ・・・」

「ん？」

「い、一緒に寝てもいいかな・・・？」

「は？」

思考が追いついていけない。何の話かさっぱりわかんない。どうしてこんなことを急に言い出すのか理解できない。助けて女神様が弱い男の子が目の前にいる狼に食べられちゃいそうです。

「だから、一緒に寝てもいい？」

枕を抱えながら恥ずかしいのを堪えながらそんな男殺しのセリフを紡ぐ今の水希が可愛くて仕方がない。なんならこのまま食べちゃいたいくらい・・・。あれ？どっちが狼でどっちが弱い女の子なのかわかんなくなってきた。

「急にどうしたの？一緒に寝たいなんて・・・」

理由を尋ねると、

「・・・ったの」

よく聞こえない。

「ごめん、聞こえないんだけど」

「昼間のソラくんの話が怖くて眠れないのっ！だから一緒に寝ても

「いいっ!？」

半ば逆ギレされながら頼まれた。何だかむちゃくちゃなような気もするけど、これは水希が敗北を認めたとしたことだ。オレの勝利。大勝利だ。

「オレと寝るって・・・オレも男なんだけど・・・」

だけど、一緒に寝るのはちょっと問題がある。男子高校生なら、異性の身体には興味津々であるのが普通だ。まあ、オレはそういう点から見て問題はないんだけどね。ん?だったら問題ないじゃないか。さつきからワケのわからないことばっか思いつくな。寝ぼけるのかな・・・。

「姉貴と寝てきたら?」

オレの部屋の隣の物置の隣が姉貴の部屋だ。姉貴の部屋の方が若干広いし、同性だから何の問題もない。

「こんな時間に起こしちゃったらミナトさんに悪いし・・・」

だったら何でオレは起こしたんだ。オレは起こしてもいいと思っただのか。

「それに、ソラくと一緒に寝たいの・・・」

消え入りそうな声でホントに意味不明なことを言った。大丈夫かなこの子。

「ちなみに、オレと一緒に寝てどうするの?」

聞いてはいけないと思いつつ、聞いてしまった。

「・・・」

「え、何で俯きながら黙り込むの?」

怪談より今の水希の方がよっぽど怖い。

「い、いいから寝てもいいね!おやすみなさいっ!」

「考え直してって・・・ああっ!」

オレが引き止める前に水希はベッドに入り込んだ。困ったな・・・このベッド、シングルなんだけど。2人で寝るとなるとかなり窮屈になる。窮屈になるということは、必ず身体のどこかが触れ合っていることになる。

そんな状態で寝るなんてオレには無理だ。

呆然と水希の寝るベッドを見つめる。タオルケットを抱きしめて顔を埋めている水希はホントに可愛らしかった。

「…………ソラくんの匂いがする」

「……………っ!!」

もうダメだそんなこと言われたら正気を保っていられないっ！

「ねえ水希。ベッドは水希が使っていていいから、オレ床で寝るね」

「ダメ……。ボクと同じ布団で寝て……………」

「いや、それには色々と問題があつてね……………」

「寝てくれないの……………」

「それシングルだから2人で寝るととっても窮屈になるんだよ」

「だつたら尚更……………」

これは敵いそうにない。

携帯で時間を確認すると、もう一時間で草木も眠る丑三つ時だ。

この時間帯の方が怪奇現象が起こりやすかつたりするんだけどね。

もしかして、これも一種の怪奇現象なのかな？

「え…………ちよつと本気？」

水希に腕を掴まれて強引にベッドへ引きずり込まれた。ああ…………

オレはここで生涯を終えるんだ。短い人生だつたけど色々と楽しか

つた。今までの出来事が走馬灯のように廻る。

「これでいいの」

腕から手を離し、今度は腰に手が回る。

「何をする気なのかな？」

どうしてだろ。そんなに暑くないのに汗が…………。

隣からはすやすやと寝息が聞こえ始めた。この状況で寝られるなんてどんな神経をしているんだよ。

(このままじゃ絶対に眠れるわけがない…………)

どう脱走するか必死で考えている最中、腰にある水希の手に力が入った。

そして、聞こえてきた小さい声。

「もう・・・絶対に離さないから・・・」

寝言なのか真剣に言ってるのかわからないけど、オレはその言葉をただの寝言だと思えなかった。

翌日、どういいうわけか寝不足のユツキと会った。なんでユツキが寝不足なのかは知らない。ユツキの家は一人暮らしのはずなのに。

「ねえ、ユツキ。ユツキはどうして寝不足なの？」

「あん？昨日は姫奈が『ソラくんの話が怖くて眠れない』とか一晩中電話かけてくるから、寝たくても眠れなかった」

なんだ、ユツキも同じような境遇にいたわけか。

「くそ・・・なんで携帯買うときに通話料無料なんかにしたんだ・・・」

苦々しく吐き捨てるユツキにはいつもの覇気は全くない。背中から負のオーラが出てるね。

「それはそうと、お前はなんで寝不足なんだ？」

「オレも水希が怖くて眠れないって寝かせてくれなかった」

「なんだ、お前も同じような羽目に遭わされてるんだな」

初めてユツキに同朋意識が芽生えた気がする。

さて、そんな茶番はどうでもいいわけだ。今日オレがユツキと会ったのはひとつ重大な頼みがあったからだ。きっと今夜も水希は眠れないとか言っておレの睡眠を奪うだろうし、ユツキも置かれていく状況は一緒。まあ、ユツキには悪いけど今夜はユツキの家に泊めてもらうつもりだ。うちにいたら完全に睡眠時間は消えてしまう。せつかくの夏休みを寝不足で過ごすのはとてもあれなので、ユツキの家に避難しようと思いついた次第だ。

「ねえ、ユツキ」「なあ、ソラ」

2人の声が重なった。考えてることはどっちも同じか……！なら、先手を取るまで！

「今日ユツキ（お前）の家に泊めて……！」
くそつ、遅かった！

「ユツキの家は一人暮らしなんだから、一人くらい泊めてくれたっていいじゃないか！」

「一人暮らしでも、一晩中電話がかかってくるっつってんだろ！」

「オレは寝られるからいいんだよ！ユツキなんか一晩中起きてる！」「んだと！？お前なんか水希ちゃんと一緒に住んでるんだから幸せだろ！むしろそっちに泊めろ！」

声が大きすぎたのか、周囲から変な目で見られている。やば……あんまり大声で言うത്『同性愛に走った男子たちの痴話喧嘩』に見えてしまう……っ！同性愛するんだったらユツキとなんかするわけがない。のぶながとならいいかも。

『こんな所でそういう話するカップルいるんだ……』

『しかも美男美女じゃーん。こういう展開燃えるかも』

今、オレを女だと思ってる奴は何人いるんだろうか。そいつら全員にお仕置きして回りたいところだがそこはグツと堪える。

「ま、まあそんなことはいいから、ユツキの家行くね……？」

「絶対認めねえ……！」

お互い声を押し殺して、勝負を続ける。ここで退いたら負けだ！

「頼むよユツキ！オレは今とっても困ってるんだ！」

「困ってるのは一緒だバカ！」

（数分後）

「……やめよう。俺らが争うのは無意味だ」

ユツキの降伏（ここ重要）でこの論戦は幕を閉じた。

「だから、オレをユツキの家に泊めてくれればこんな無駄な争いしなくてもよかつたんだよ」

ただでさえ疲れてるのに、これで余計なエネルギーを消費しちゃうじゃないか。

「お互いが生んだ状況だからな。自分たちでどうにかしよう」

「ユツキはまだ電話だからいいかも知れないけど、オレなんて同じベッドで寝てるんだからね・・・」

電話だったらどれだけ楽なことか・・・。

「それもお前が生んだ結果だ。自分で処理しろよ」

それだけ言い残して、ユツキは踵を返して帰っていった。

さて、オレも帰るかな。全然寝てないからものすごい眠い・・・。

「あ、そーいや醤油が切れてたような・・・」

こういう時に限って普段忘れてるようなことを思い出してしまう。

オレの頭はオレが嫌いなのか？幸い財布だけは持って出てきたので、このままスーパーで買い物をして帰ればいい。行き先を変えて、駅前のスーパーへと歩いていく。

(今日も水希と寝ることになったらどうしよう・・・)

2日も不眠で生活するとどうなるんだろう。逆に興味はある。やらないけど。

(まあ、眠いんだから今夜は普通に眠れるよね)

自分にそう言い聞かせることで、不安を打ち消す。そうするしかない。

「あれ、ソラ？」

途中で名前を呼ばれた。人と絡みたくない日に限って絡まれるな。表面には出さなかつたけど、半ばうんざりしながら声の方向を向く。

「美春・・・」

そこにはすごい可愛い服を着た美春がいた。

「なんか、すごい疲れてるみたいだけど・・・何かあったの？」

美春に「水希と一緒に寝てた」なんて言ったら恐らく半殺しだ。

「ちよつとね・・・」

言葉を濁す。

「ふーん・・・ならあんまり追求はしないけど」

美春が物分りのいい人でホント助かった。もうね、追求されたらどうしようかと。

「ねえ、今からどこか行く予定だったの？」

服装から気合が感じられるから、恐らくデート・・・？でも、いつの間に彼氏が・・・。確かに美春は可愛いし、いつ告白されてもおかしくはない。誰と結ばれたってオレには関係ない。でも・・・。別に？ただ暇だったからフラフラしてただけよ」

怪しいな、美春が理由もなくフラつくなんて。

「あ、そうだ」

急に思いついたように手を叩く美春。一体何を思い出したんだろう。

「ちよつとソラにお願いがあるんだけど・・・」

「ん？お願い？」

「そそっ」

お願いって何だろ。オレができる範囲でなら付き合えるけど・・・。水着を選んで、とかそういう頼みは無理だな・・・。男のオレが女性の水着売り場にいたら即刻通報される。お先真っ暗だ。

「今からちよつと付き合っつてよ」

可愛らしい笑顔。

嬉しそうな声。

そして、何かを企んでいそうな目。

でも、美春を疑う必要はないしここは疲れているけど付き合っつとするか。

「いいけど・・・どこか行くの？」

「それは行ってからの楽しみ」

美春はオレを手を引つ張って足早に駅へと歩いていく。え・・・
電車使つてどこか行くの・・・？

「・・・美春？」

急に立ち止まった美春は、いたずらっぽく笑って本気が冗談なのかわからないような口調でこんなことを言った。

「今日は、あたしだけのソラになってもらつからね」

オレは何も言い返さず黙って美春についていった。

夏休み：お願い ・ 前編（後書き）

こんにちわ、菊地陽です。

今回もお付き合いただき、ありがとうございます。

先日「七色アゲハ」から改名しました。

それにしても暑いです。夏バテしてるときに書きました。

いつものようにメチャクチャで理解できない文章や言葉の使い方が
あるかも知れませんが、お許しください。努力しますから・・・。

これからも、この駄作にお付き合ってください。

以上、菊地陽でした。

美春に連れられて、電車に乗ること1時間。オレと美春は海に着いた。海と言っても海水浴場じゃないようで砂浜に人の影はない。人がいないから砂浜も綺麗だし、なんととっても波の音が心地いい。でも今水着は持ってないし海には入れない。これだけ綺麗な海に入れないのは少し残念だ。

「綺麗な海だね・・・」

なんでこんなところに来たのかわからない。美春が何を考えているのかオレにはさっぱり理解できない。急に人気のない海に来るなんて・・・。

「でしょー？あたしのお父さんが困ったときとか、悩んだときはいつもこの海を見に来るんだって」

言いながら海を眺める美春。

「ふーん・・・」

他に返しようがないから、黙って流した。時々だけ美春はこういった一面を表に出すことがある。

「オレに付き合っしてほしいとこってここなの？」

「ソラに付き合っしてほしいとは場所じゃなくて、時間なのよね」

「・・・ますます理解できない。美春は今日何をしたいんだろうか。」

「ふふつ、何もわかってないような顔してる」

楽しそうに美春が笑う。でも、オレにはその笑顔の裏にどこか悲しげな感情も読み取れる。

「わからないものはわからないからね・・・仕方ないよ」

微妙にバカにされてる感は否めない。

ざざーん、と波の音が聞こえる。しばらくお互い何も話さない沈黙の時間が続いた。いくらよく知っている人でもこの空気は色々キツイ。

それにしても暑い。砂浜に立っているオレとちょっと離れた日陰に座っている美春では体感温度が大分違うことだろう。オレには日光直撃で、海から生暖かい風が身体を包み、砂浜からの地熱もある。めっちゃくちゃ暑い。熱中症で倒れそうなくらい暑い。帽子でも持つてくれればよかった。

「・・・ソラ、暑いのか？」

そんなオレの様子から察したのか、美春が声をかけてくれた。

「めっちゃくちゃ暑い」

「こつち来ればいいじゃない。日陰だし、涼しいよ」

美春が少しスペースを空けてくれた。んー、いつもなら遠慮なく隣に座るんだけど今日はなんか美春が

色っぽく見えて、ちょっと座りにくい。最近こんなのはつかだ。そういう時期なのかな。まあ、断るわけにもいかないし、お言葉に甘えて座らせてもらおうとしよう。

「あ、涼しい」

日陰は恐ろしいほど涼しかった。風が冷たく感じるし、座っている石も冷たくて気持ちいい。

「いつ見ても綺麗ね・・・」

美春が耳を澄まさないと言えないような小さい声で呟いた。途方に暮れたようなその声がなぜか頭に残る。ホント、今日の美春はいつもと違う。

「ねえ、ソラ」

唐突に呼ばれてちょっとビックリする。

「初めての人のことを諦めきれない人って、おかしいかな・・・？」
何か別の意味を孕んでいそうなその言葉に、オレは息を呑んだ。
というか美春の顔はとて悲しげで迷っているような表情だった。

こんな顔の美春は見たことがない。そもそも、美春からこんな言葉が出たことが珍しい。

「おかしくないと思うけど・・・それがどうかしたの？」

オレの言葉を聞いた美春は安心したように微笑んだ。

「そう？よかった・・・」

でも、その笑顔はやっぱり見たことないような悲しい笑顔だった。

「それじゃあ、次行きましょ」

勢いよく立ち上がる美春。え？まだどこか行くつもりなの？涼んでいたオレの手を強引に引っ張り、美春は駅へと戻り始めた。また電車使つてどこか行くのか・・・財布の中身が心配でならない。今月ピンチなんだけどなあ・・・お嬢様にはわからないか。

「次つてどこ行くつもりなの？」

未だに引っ張られ続けるオレは前を見たまま足早に歩く美春に問う。

すると、美春はさつきとは対照的にすごく楽しそうな笑顔で振り向いた。

「次はねえ・・・シヨッピングにでも付き合ってもらおうかしら」

「今月ピンチなんだけど・・・」

「大丈夫よ、奢らせたりしないから」

ならよかった。シヨッピングモールにでも行くつもりらしいんだけど、ここから一番近いシヨッピングモールなんて全然知らない。

多分、美春が知っていていてくれると思うんだけどね。電車で隣町に来てしまった以上、オレの土地勘なんて全く役に立たない。

あれ・・・？隣町・・・？

妙な胸騒ぎを覚えた。

発射時間ギリギリに駆け込んだ電車の中は、冷房のおかげでひんやりとしていた。車内は空いていてオレたちが乗った車両には4人しかいなかった。

「平日だからかしら・・・人が少ないわね」

美春が訝しげに車内を見渡す。別に少なくなつていいじゃん。むしろ少ないほうがいい。

「涼しいし、人もいないんだからいいことしかないような気もするけど……」

座つてるとだんだん寝てしまいそうになる。

「2つ目の駅で降りるから、寝ちゃダメよ?」

2つ目の駅つて、別に電車で移動することなかつたんじゃないかな。寝ちゃいけないつて……オレ寝不足で少しでも目を瞑ったら寝ちゃいそうなほど眠いんだけど、とは言えない。さっきはスルーしてくれたからよかつたけど今度理由を問ひ質されたら終わりだ。

窓に流れる景色を見つめると、幼少期の嫌な思い出が次々と掘り起こされる。殴られたり、避けられたり、あの母親のこととか。……思い起こすたびに憂鬱になつちゃうんだから思い出さなきゃいいの。

「ソラ……ソラつてば!」

揺すられて慌てて起きた。どうやら考えこんでいる間に眠つてしまつたらしい。

「ん? ああ……ごめん……」

「寝ちゃいけないつて言ったのに何で寝ちゃうのよ……」

呆れたように美春は溜息混じりに言った。理由を言つてもいいんだけど、聞いたら多分変な誤解を招くから言わない。美春に避けられるのはイヤだ。これ以上友達が少なくなつたらどうしてくれるんだ。

「で、もう着いたの?」

目をこすりながら外の景色をしてみる。数秒見てもどこなのかさっぱりわからなかつた。

「次の駅で降りるのよ。さっさと準備しなさいっ」

……? 美春妙に張り切つてるな。何があるんだろう。

まだ醒めきつていない頭で電車を降り、駅から出る。駅名を確認

してみると知らない地域に来たわけじゃないということがあったのでとりあえず一安心。というか、ここはあまり訪れたくない地域だ。来るたびに嫌な思い出が掘り起こされるのはもう我慢するしかない。トラウマというか、フラッシュバックしてくるのはどうやっても抑えられないからね。

「ここからどれくらいかかるの？」

知っている地域とはいえ、何年も訪れていないので何ができていいのかさっぱりわからない。ショッピングモールができたことも知らない。

「んーとね、確か駅の近くだったから10分くらいで着くんじゃないかしら」

「着くんじゃないかしら」って知らないのかよ。無責任だなおい。

(何年も来てないうちに、大分変わったなー・・・)

辺りを見回してみても、数年前から残ってる建物は数少ない。そんなに人の多い地域じゃないんだけどねここは。

「ここら辺って来たことないからよくわかんないなあ・・・」

「だったら何で来たのさ」

「一回来てみたかったのよ。すごいとこだって聞いてたから」

誰だ美春にそんな適当な情報を吹き込んだ奴は。

「でも詳しい場所はわからないと」

「そういうことになるわね。だって一回も来たことないんだし仕方ないじゃない」

結局、オレの中に残ってる少ない記憶だけでその目的地まで行かなくちゃならないんじゃないか。

「しょうがないなあ・・・駅のどの辺にあるの？」

「駅の近くってことしか聞いてないからわからないわ」
優雅に言われても困る。

「・・・駅の周辺歩き回っていれば見つかるかも」

「なんでそんな効率の悪いことしなきゃいけないのよ」

「誰のせいだと思ってるんだ」
美春が地図とか持ってきていればさっさと着いたものを……。
当てもないのに歩き回るのは好きじゃないけど、この際仕方ない。
見つけるまで歩き回ろう。

そして、目的地に着いたのが駅前でのやりとりの1時間後。美春
が想像以上に方向音痴だったので必要以上の時間がかかった。ホン
ト無駄なタイムロスだ……。

「結構時間かかったんじゃない？」

「……………」

反論する気も失せた。時計を確認すると時刻は12時前だった。
そろそろおなかが空く時間だな。

「美春、何か食べない？歩き回ったせいでおなか空いたんだけど」

「そうね……あたしもちょうどおなか空いてたし」

ここには飲食する場所も結構豊富に揃っているそうなので、そこ
で休憩させてもらおう。できればパフェなんかも食べたいなーなん
て。店内に入ると、視界にはチャラチャラしたような高校生がウヨ
ウヨいた。傍から見ればオレたちもそういう人たちの部類に入っ
てしまうのだろうけど、自分ではここまで変な趣味は持っていないと
思ってる。

「えっと……最上階ね。いっぱいお店あるから、どこ行こうか迷
っちゃいそうだな」

「あはは……今度は迷わないようにしてね」

あれほどの方向音痴だったんだから、ここでも迷子になりそうだ。
「……………」

あと1つだけ気になるのが、周りの人間は確実にナンパを狙う目
でオレたちを見てるんだけど……そのうち1人が男だつてこと知
ってるのかな？知ってるよね、これだけ男らしい人他にいないよ。

エレベーターに乗って最上階を目指す。個人的な意見だと思うん

だけど、エレベーターが動き出すあの浮遊感がどうしても嫌い。何回乗っても慣れない。そういうのってオレだけじゃないよね？

「ソラは何食べたいの？」

浮遊感の気持ち悪さに耐えているところに声が聞こえた。

「今食べたいのはお好み焼きとかラーメンとかオムライスとか・・・」

言い出したらきりが無い。今なら何でも食べられそうな気がする。
「うえ・・・」

止まるときにも変な感覚が襲う。止まるときも動き出すときも気持ち悪くなる・・・。ブランコでも気持ち悪くなるオレにこれはキツイ。

「さ、行きましょ」

先に出てった美春を、オレは気持ち悪いのを堪えながら追いかけた。

「おいしかった」

おいしいものをおなかいっぱい食べた美春は満足そうに言った。確かにオムライスもおいしかったし、この店を選んだのは正解だったかもしれない。

「あ、そうだ」

またろくでもないことを思いついたのか、美春は手を叩いた。

「ここにあるお店に、可愛いストラップを売ってるところがあったのよね。そこでストラップ買って帰ろうよ」

ストラップか・・・。まあ、いくらあっても困らないし一つくらい思い出に買ってもいいかもしれない。

思い出？

その単語にオレは不安を抱いた。どうして急に美春がこんなところまで付き合っただけだと頼んできたのか。なぜあの時駅前を歩い

ていたのか。どうしてあんな気合の入った服を着ていたのか。一回不安を覚えると今まで見てきた全ての行動が疑わしくなってくる。もしかして、美春は……

「ちよつと、聞いてるの？」

「あ、ああ……。ストラップでしょ？そこまで高くない値段だったら買ってもいいかも」

顔が引きつった。きつと上手に笑えてないなこれは。

「おそろいの買おうねー」

ますます怪しくなってきた。オレの考えすぎかも知れないけど……
・一抹の不安が残る。

その後、料金を支払ってその店を出た。店に入る前とは違って、足取りがなぜか重い。

美春は何を考えているんだろうか。何を隠しているんだろうか。今のオレには何もわからない。

来たときのように、エレベーターの浮遊感に耐え、4階のフロアに到着した。扉が開いた瞬間、オレは血の気が失せた。

「ちよつと待つて……ここは一体何？」

目の前に広がる淡いピンク色の壁や天井。しかも天井からは大きなぬいぐるみがつるされている。なんだか別の世界に来たみたいな感覚だ。

「何つて……どう見たつてファンシーショップでしょ。女の子向けのものがたくさん売られてるの」

「そんなことはわかってるけど、どうして男であるオレがこんなところに立ち寄りなくちゃいけないの？」

客は殆どが女性だし、男性がいるとしたらカップルくらいだ。どうやらこのフロアでの男性は希少価値らしい。その希少価値の中にオレも含まれていると考えるととても複雑な心境……。

「別に男の人が来たって普通でしょ？それにソラは一目で男だなんてわからないから大丈夫よ」

「それもそれで複雑なんだけど」

「なんなら、女装して行く?」

「邪悪な光が宿った瞳がこちらを見つめる。オレが話した怪談にもこんなような話があった気がする。」

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。多分バレないから」

男だとバレることを心配しているわけじゃないんだけど。

まあ、ここまでできて美春の機嫌を損ねてしまうのはあまりにも惜しいのでここは恥辱に耐えながら買物物を済ませるとしよう。

ピンクばっかの衣装の中、真っ直ぐ行ったところに例のストラップの店はあったらしい。早く見つかったよかったです……。

「そんなに縮こまらないですよ……。恥ずかしいことじゃないですよ?」

「オレは男だからな。こういう場所は慣れてないんだよ」

慣れてないどころか1回も来たことがない。怯えながら周りを見回してみると、360。ぬいぐるみやアクセサリーなんかで埋め尽くされていた。中には髑髏のすげー派手な財布とかもあった。今時の女子ってこういうの使うんだ……。

「あつた!これよこれ!」

美春の指差す先には、オムライスに顔と手足がついた奇怪なぬいぐるみのストラップがあった。え……。?これが可愛いのか……?

「何これ……」

「知らないの?今すごい流行ってる『フーズ』ってやつなんだけど、見てわかるとおり食べ物擬人化したストラップなの」

フーズ……。ありがちな名前ですね。

「ソラはどれがいいの?」

そのフーズとやらのコーナーには、オムライスとパフェとパンやスパゲッティとか古今東西あらゆる食べ物にシユールに擬人化されて並んでいた。その中にはドリンクを擬人化したのもあったけど、液体を擬人化するものどうかと思う。

「ん……。どれもおいしそう……」

「あたしはパフェのがいいなあ……。なんか可愛い……。」
物欲しそうな目でパフェのフーズーを見つめる美春の背中に、少しだけ寂しさを感じた。

パフェが欲しいなら、パフェでもいい。ちょうど2つしか残っていないし、取られないうちに買ってしまおう。

「じゃあ、このパフェのにする。おいしそうだし」

「あたしもー」

2つ取って会計へ持っていく。もちろん会計の人も女性だった。

どういうわけか会計でも男だと疑われなかったらしく、スムーズに用事は済んだ。なんでこんなに男らしさが溢れてるのに男だつて気付かれないんだろうか。そのままショッピングモールを出ようとしたとき後ろから声がかかったので足を止めた。

「君たちかわいいねー」

あー……。絶対いると思ったよナンパ。暑すぎて頭壊れちゃったりしたのかな？ここに男気溢れる人がいるっていうのに、その人も可愛いなんて言うとは頭が壊れているとしか思えない。

「何なの？今忙しいんだけど」

美春はこういうのに慣れていくらしく、ツンと言い返した。

「まあ、そういわずに、俺らと遊んでいこうぜ」

バックに仲間がいるらしい。つくづく腐った連中だ。

「あたしたち、これからデートなんです。あなたたちと遊んでる暇はないんです」

オレは自分をあたしと呼び、何とかしてかわそうと試みた。

「デート？彼氏持ち？だったらなおさら」

「いい加減にして。あんたたちみたいな低俗な人たちと付き合えないの」

ホント強いな……。でも、それ以上言ったら危ない気がするんだけど。

「そういう罵倒も業界だとご褒美になるんだぜ？」

なんだこの人たち。頭も腐ってるし性癖も腐ってる。

「そんなの知りません。早く帰してください」

単刀直入に要求だけを述べた。これで引き下がってくれるかな・
・？しかし、オレの予想とは裏腹にナンパ集団はにやりといやらし
く笑うと、今度は腕を伸ばしてきた。

「・・・っ！？離してっ！ホントにこれからデートなんですっ！」
腕を掴まれた。男の手に握られるのはホントに気持ち悪いもので
。。。

「そんな汚い手であたしに触れないでくれる？洗うの大変じゃない」
腕を掴まれても平然と言い返す美春。危なっかしくて仕方がない。
「暴れても無駄無駄ー このまま遊びにいつちゃうよー」

抗う美春を連れたまま、どこかへ行こうとするナンパの腐った連
中の行動に我慢も限界に達した。

「離せつつつてんだろ・・・」

自分でもびつくりの男の声が出た。

「あん？何だつて？」

どうやら耳が遠くて聞こえていないらしい。じゃあ、今度は身体
にも教えてあげよう。

「手を離せって言つてんだよ！」

オレの手を掴んだ奴の脛を思い切り蹴飛ばし、腕から解放される
とそのまま美春を掴んでいる奴のところへ突っ走る。オレがどうな
ろうと構わないけど美春に手を出すのだけは見逃しておけない。こ
こは一発ずどーんとかましてやらないとね。

「なんだ！？この子・・・ええ！？」

オレの変貌に驚いたのか、美春から手を離れたナンパの1人。け
ど、今更離したって遅い・・・っ！オレは全体重を左足に乗せて、そ
こからあのユツキも黙らせた必殺の右ストレートをそいつの顔面に
思いっきり叩き込んだ。

「ぶべらあ！！！」

オレより速いよあの人！

「うわあああああ！！！！」

絶叫をあげながらオレは閑静な住宅街を完走した。

店員を何とか撒いたらしい。あんなに本気になって走ったのは久しぶりだったからすごい疲れた……。足なんかもうガクガクしてるし。息を整えながら歩いていると、あの公園の前に着いた。我武者羅に走っている間にこんなところに来てしまったらしい。

海に行ったときにした胸騒ぎの正体はこれだったのか。まさかここまで来ることはないと思っていたけど……。

「……………」

公園にいる子供のお母さんと目が合った。オレの記憶が正しければあの人は小学校のクラスメイトの母親だった気がする。その母親はオレを見るなり、子供を連れて公園を立ち去っていった。

……………。

未だにそういうことをされるのか。

別にオレは何も悪くないのに。オレが何かしたわけでもないのに。全てが母親が原因だというのに。どうしてオレがこんなことをされなければいけないんだろうか。幼少期の記憶が掘り起こされるたびに胸が締め付けられて、息が苦しくなる。

オレは公園の入り口で呆然と立ち尽くしていた。ここが公園でなければそのままうずくまって泣いていたかもしれない。

「やっと見つけた！」

これ以上、堪えきれないと思ったときに後ろから美春が現れた。恐らくこの公園を探すのにはいっぱい歩き回っていたことだろう。

「もう店員は追ってきてないわよね？」

「あ、うん。さっき撒いたからもう追ってこないと思うよ」

「よかった……………」

ほつと胸をなでおろす美春。美春なんて真つ先に逃げたんだからつかまるわけないじゃないか。店員の標的にされてたのはオレだったわけだし。普通店員が追ってきているかどうかを心配するのはオレの役割なんだけどな。

「それにしてもあのナンパ何だったのよ。気軽に腕なんか掴んで・
」

ぶんぶんしながら美春は砂場の横のベンチに腰掛けた。どうやらオレとあの砂場は切っても切れない縁らしい。オレも続いてベンチに座った。

「どこ行ってもあーゆーのっているよね……。すごい疲れた・・・

」
「それ男の人がいうセリフじゃないわよ」

そこは問題じゃない。ナンパされてるんだから一応事実じゃないか。

「・・・・・」
「どうかしたの？元気なさそうだけど・・・」

美春がオレのテンションが低いことに気付いたらしく、問いかけてきた。

「何でもないよ」

笑えているかわからないけど、一応笑顔で答えたつもりだ。今笑顔になれるわけがない。10年も経つたのに未だに避けられたり、敵意のこもった視線を向けられるとは思っていなかった分今回の精神的なショックが非常に大きい。というか10年経つてもオレの顔をオレだと認識できたあの母親がすごい。男の面影がどこかに残っているのかな。

「・・・・・」

数秒の沈黙の後、急に美春は真面目な声で話し始めた。

「あのね、ソラ」

なんだこのシチュエーションは。オレがテンション低いつてわかっててそういう重そうな話を始めるのか。

「今日、付き合ってもらったのには理由があるの」

「理由・・・？」

ただごとではないような声音にオレも背筋を正す。

「あたしね、告白されたんだ」

一瞬思考が追いつかなかった。それは今まで（美春にされるまで）告白されたことのないオレへの嫌味なのか？自分の容姿の端麗さを誇示しているのか？オレだって中学の頃はよく男子から告白されていたけど・・・うわっ、思い出すだけで吐き気がする。まあ、それはおいといて。美春が告白されることくらい普通のことだと思っただけで、どうしてオレにそんなことを言うのかわからない。

「それでね、その人と付き合おうと思ってるの」

「そっか・・・。それはいいことだね」

そんな軽はずみな返答が美春の癪に障ったらしい。美春は勢いよく立ち上がってオレの目の前に立ちふさがると、上から怒ったような鋭い目つきでオレを睨みつけた。

「え・・・？美春？」

「ソラは何にもわかってないっ！！」

いきなり怒られた。一体何をわかっていないと言っただろう。

「あたしがあの日からどんな気持ちで過ごしてきたのか、どれだけ悲しかったかソラは何にもわかってないっ！あたしの想いがどれほどのものだったかソラは何にも知らないくせに・・・っ！」

感極まって涙目になりながらも訴える美春。あの日というのは恐らくオレが美春を断ったときのことだろう。それとこれが何の関係があるのやら・・・でもこれ以上何か言ったら火に油を注ぐだけなので黙って美春の怒鳴り声を聞いていた。

「ソラは楽しいからいいわよ。でも、断られたあたしの気持ちを一度も汲んでくれるようなことはしてくれなかった。自分がうまくいってるからって、過去の人になんて目も向けてくれなかった」

「それは誤解だって。一度も美春を忘れたことなんてない」

このままだと言いたい放題言われそうなので、早速反論した。確

かに美春の気持ちを汲んでやれなかったのは事実かもしれない。実際、美春を断つた日に水希の告白を受けたんだから人の気持ちを考えない軽はずみな男だと言われても仕方がない。

「だけど、美春もオレのことを知らない。」

いくら中学からの付き合いだと言っても、オレが過去に水希と一緒にいて約束をして別れたことや偽名を名乗っていたとかそういうことは美春は知らない。それなのにオレの水希への想いを否定することなんていくら美春であつても許せない所業だ。

「言い訳なんて聞きたくないの。」

そろそろオレも我慢の限界が……。今日は2回目だな。やつぱりこの町にくるといいことがない。

「結局何を言いたいの？」

これ以上の論議はメンドーなので、結論を求めた。美春が何を言いたいのかオレにはさっぱりわからない。すると美春は、涙声のまま言葉を紡いだ。

「ソラはあたしが変わっちゃってもいいの……？」

必死だつたらしい。言い終えた途端美春の目から大粒の涙が落ちた。

「告白を受けたら、今日みたいにソラとも一緒にいられなくなるし、ユツキヤのぶながとも一緒にいられる回数が少なくなるかも知れないのよ？そんな風になったら、あたしはきつと変わっちゃうと思う。ソラたちとも遊ばなくなるし、仲のいい親友もいなくなっちゃう。ソラはそれでもいいの？」

んー結構難しいところをついてくるなあ……。言い方から察するに告白を受けたのはうちの学園じゃない人からだろう。放課後もその人に会うとなればいつものように遊ぶこともなくなる。オレたちと付き合いが途絶えるってことは美春にとって親友がいなくなるということと同じ意味なんだろう。きつと美春はそれが怖かっただけ

だ。ということは今日オレを誘ったのも、「変わる前に思い出を作りたい」とかそういう理由があったに違いない。これで謎は解けた。オレは正直こういうのに鈍い。そんなこと自分でも十分わかってることだ。鈍いオレでも美春を安心させられる一言は言えるのだからか。……多分無理だな。ここで適当なことを言っただけで更に怒らせたら可哀相だ。

オレは静かに立ち上がり、美春と真正面から向き合う。やっぱり見ても美春は可愛い。はっきり言わせてもらえば、これは未練だろう。まだ決心できないからオレと1日遊んだ。これで終わりにしようと思っていたに違いない。でもそれが逆効果だったんだろかね。「そ、ソラ……？」

美春は怯えたように上目遣いでオレを見る。

オレは未だに何を言っただらいいのかさっぱりわからないでいる。さつきも言ったとおりオレはこういうのが苦手だ。

「美春……オレは、お前が変わってしまったおともずっと親友でいる。あんなこと言っておいて今更何を、と思うかもしれないけどオレは美春の親友でいる。付き合いが途絶えた方がいい。言葉を交わさなくなっただけいい。学校で見かけたときに笑って挨拶してくれるだけでも構わない。だから」

そこまで言っただけ、言葉が詰まった。自分でも理由はわからない。何を言おうとしたかはわかってる。けれども言葉にできない。

「……？」

不自然に言葉が途切れたのを不思議に思ったのか、美春は首を傾げている。

「どれだけ言おうとしても、声に出せない。オレは俯いた。」

「……もういいわよ」

ついに怒らせてしまったか、とビクビクしながら美春に視線を戻す。オレの予想とは裏腹に美春の顔はすっきりしたような、晴れやかな顔だった。

「……どうやら今回は当たりを引いたらしい。」

「今言ったこと、ホントなの？」

「当たり前だよ。どんなに付き合いが少なくなっただけでずっと親友でいる。それだけは約束する」

『約束』か……。この公園に来ると毎回こういうことがある。今回は違うけど、毎回日が暮れて、空には星が瞬き始める時間に砂場の近くでこういうことは起こるらしい。ただ1つ違いがあるとすればあの日以来、オレが助ける立場になっていているらしい。

「じゃあ、絶対に破られないようにしっかりと約束の印を残しておくなくちゃね」

いたずらっぽく笑う美春。印つて、傷とか大きな火傷とか痛々しいものを残してくれるつもりだろうか。いくらそういうのが好きな人だからって傷を負わせるのはどうかと思うよ。縄で縛られるとか首輪とかならまだ我慢できるけど……。痛いのはいやだ。

とどーでもいいような変態思考を繰り返していたオレは、不意打ちを食らった。

「……………っ!??」

「ん……………」

美春との距離はゼロ。唇と唇は当然触れ合っている。

オレは顔が赤くなっただのを自分で感じた。しばらくしてオレから離れた美春はちょっと涙を浮かべながら笑った。

「今のが約束の印だから……。絶対に、忘れないでね……………」
どうしてここまでできてそういう涙を誘うことを言うんだろうか。

こっちまで泣きたくなってきたきちゃったじゃないか。とはいえ、今日は付き合っただけだった。色々と振り回されるのもこれで最後かもしれないと思うと、何だか切なくなってくる。今まで一緒にいるんできた親友としては、美春に彼氏ができることを祝福しなければいけないんだろうけど……。どういうわけか素直に祝福できない自分がある。え？彼女がいるのに他の女の子に手を出すのって？そんなわけがない。彼女とも約束したから、それを破ることはできない。

これは美春との『約束』

彼女との『約束』とは全く別の話であり、オレはそれを守らなければならぬ。どんな理由があっても約束は守らなければならぬ。そしてその約束を忘れてはならない。

まあ、そんなことをズラズラと並べても意味はない。要はオレが約束を守ればいいだけだ。

深海ソラ。

これが人生二度目の『約束』だ。

帰りの電車では重苦しい沈黙が流れた。

5時から1時間電車に乗り、帰ってきたのは6時だ。夏はやはり日が長く、まだ十分明るい。けれども山のほうには一番星が瞬き、太陽は沈み始め綺麗な夕焼けを作り出していた。

駅から出て美春と無言で別れた。歩く美春の背中はずいぶん小さく見えたけど、彼氏さんがいるんだからそんな感情もいつの間にか忘れる。きっと夏休み明けには最高の笑顔を浮かべる美春を見られることだろう。それにしても美春の彼氏ってどんな人なんだろう。・・かっこいい人なのかな？きつと背が高く優しくて文武両道の完璧な人だよな。・・。自分じゃとてもじゃないけど太刀打ちできない。レベル1の勇者が魔王に挑むような感じだ。勝ち目なんてあるわけがない。瞬殺だよ瞬殺。何もできないよきつと。

自分で勝手に妄想しておきながら、想像上の人物に妬けてきた。でもまあ、美春が好きになるってことは変な人じゃないのは確かだと信じた。

これからの彼女に幸せな日々が待っていますように。

七夕には遅れすぎたささやかな願い事だ。

そんなことを思っでしみじみしているとあることを思い出した。今日駅前に来た本来の目的が何かを忘れてただけで、たった今はつきりと思い出した。

「いけね。醤油買って帰らないと……」
オレは足を止めて、反対方向へと歩き出す。

そうだ。今日は醤油を買いにいくつもりだったんだ。せっかく醤油を買いに行くんだから、今日の夕食に冷奴でも出してみるかな。冷たいし夏にはぴったりだ。ついでに生姜も買っていこう。きつとすごいおいしいだろうなあ……。

そんな小さな楽しみにオレの足取りは軽くなった。

夏休み：お願い ・ 後編（後書き）

こんにちわ、菊地陽です。

今回もお付き合い頂きありがとうございます。

自分でも自覚しておりませんが、私は非常に文章力が劣っているので後半は何を書きたいのかよくわからなくなっております。

文章は下手ですが、雰囲気を感じ取ってくれば嬉しいです。

今回は出番の少なくなっていた美春さんの話を書いてみました。久しぶりだったので動かしくかったですねホント。

これからもお付き合い頂けたら幸いです。

以上、菊地陽でした。

夏休み：おかえりなさいませ、ご主人様

「なあ、ソラ」

「断る」

目の前に座るユツキが何かを言い出す前にオレはそれを拒否した。

「まあ、話を最後まで聞けよ。お前にとっても俺にとっても悪い話じゃねえ」

「オレにとつては性別が関わる危険な話なんだよ」

そう、ユツキが手にしているチラシには『急募：可愛いメイドさん』と語尾にハートマークがついたピンク色の文字がでかどかどプリントされていた。その時点で既にアウトだというのが悪くない話なんだろうか。

「俺はこれにメイドとして応募するわけじゃない。俺の目的はこっちだ」

チラシをテーブルの上に置いて、隅のほうに小さく書かれている文字を指差した。

「『ミスメイド服コンテスト』ってのが開かれる。それに優勝したらある高級ブランドのフライパンと鍋がもらえるんだよ・・・！」
目をキラキラさせながらオレを見つめる。テメエ・・・それ欲しいばかりに人を犠牲にしてるだけじゃねえかこの野郎！

「絶対イヤだ。そんなに欲しいなら自分で女装して出てこいよ」

「ふふん」

ユツキは何か含みのある笑いをした。まだ何かあるのか・・・。
「実は優勝賞品はそれだけじゃない」

もう一つはシステムキッチンだとかいうんじゃないだろうな。

ユツキはもつたいぶるように間を取って言った。

「世界に一つしか作られない『フーズー』のストラップだ」

「引き受けよう」

即答。

実を言つと、美春と一緒に買った食べ物で擬人化したストラップ、通称フーズーがオレの心を鷲掴みにしてあの日以来次々とストラップを買い込んでいる。シユールな可愛さがオレにはどストライクだったらしい。趣味まで女っぽくなるとは思わなかった。

「これに出て優勝すれば、俺はフライパンと鍋をもらえてお前はストラップをもらえる。皆が幸せになれる最高の方法じゃねえか」

確かに誰も損しない。オレが性別を偽るだけで皆が幸せになれる。オレがメイド服を着て、男としての意地を捨てれば皆幸せになれる。でも何か引つかかるな……。ユツキがオレにこんなことを言い出すなんて絶対何か裏があるんじゃないか……？

「実は何か企んでいるんじゃないの？ユツキが急にこんなこと言い出すなんてらしくないよ。だいたいメイド服コンテストだったら七瀬ちゃんに出てもらえばいいだろ？」

するとユツキは急に苦しそうに顔を歪めた。なるほどね。七瀬ちゃんも裏で糸を引いていたのか。そりゃユツキも渋々承諾せざるを得ないだろう。

「姫奈のやつ、シエフとして働く父親に新しいフライパンを贈りたいって言つてたんだ。でも自分のお小遣いを使うのはもったいないとか言い出しやがって……」

思いやりなんだかケチなんだかわからない。贈りたいのにお金使うのイヤだつてどんだけワガママなんだろうか。でも、七瀬ちゃんの父親を想う気持ちはいいことだと思う。オレなんてイギリスに単身赴任している父親に何か贈つてやろうとも思わない。

「そんなときにちょうどこの記事を見つけたんだ。優勝すれば高級ブランドのフライパンが手に入る。金を使わないで手に入れるのはこの方法しかないんだよ……！」

要は七瀬ちゃんのために何かしてやりたかったワケか。ユツキもたまにはいいことするんだね。

「それでオレにメイド服を着ると」

フライパンを手に入れるためにどうしオレがメイド服を着なきゃいけないんだろうか。そこは未だに謎だ。

「女装ならユツキでもできるじゃないか」

ユツキの顔は男らしいイケメンではなく、凜としたイケメンだから女装しても大丈夫だと思う。実際前に一度女装したことあるしね。

「なんで俺がそんな気持ち悪いことしなくちゃいけないんだ」

「オレは気持ち悪いことをお前の代わりにさせられるんだけど」

自分が汚れなきゃいいと思ってるなこの腐れ外道。

ジト目でユツキを見つめる。でもユツキの七瀬ちゃんへの思いやりは確かなものだし、方法は間違ってるけどしてあげたいことは至って真面目だ。今回だけっていうなら自分からメイド服を着てやつてもいいような気がする。

「お前が本気で女装して本気で女の仕草をすれば、絶対に優勝できるんだ・・・！頼む！」

両手を合わせてお願いされても色々と困る。

「じゃあ、優勝したら何か奢ってもらおうかな。それくらいのことにしてくれるんだよね？」

人にメイド服を着させるくらいなんだから。

「わかつてる。駄菓子くらいならいくらでも奢ってやるからここは俺のために女装してくれ・・・！」

「駄菓子でオレを買収できるとでも思ったのかお前は」

「だって金かからないし、いくらでも食べられるだろ？」

今思ったけど七瀬ちゃんとユツキはどうやら似たような思考をしているらしい。人に物事を頼むのにお金ももつたいたいとか言い出すんだから。ある意味2人はお似合いだ。ずっとお金をため続ける生活でも送ってあげればいいんだ。

「まあ、褒美くらいは考えといてやる。日時は来週の土曜日、駅前の『あつとほくむ』に朝8時。いいな」

「はいはい・・・」

渋々承諾して、ユツキを家から追い出した。これ以上いられると
ろくなことが起きない。それにそろそろ水希も帰ってくる頃だ。プ
ライベートでの2人の関係をあまり見られたくないからね。特にユ
ツキには。

来週の土曜日か……。特に何も予定はないけど、嫌な予感しか
しないのはどうしてだろう。

そんなこんなであつという間の土曜日。空は晴れ渡っていて、太
陽がキラキラとしている。どうしてこういう日に雨は降らないのだ
ろうか。どうせなら大雨で中止になってしまえばいいのに。という
わけでオレは今ユツキとメイド喫茶『あつとほむ』に向かっている
最中だ。本選に参加する前に男だとバレてはいけないということ
で姉貴から借りたカチューシャを着け、眩しい白のチュニックを着
ている。これもユツキの提案なんだけど、どうしてもこの状況を面
白がっていると思えないのが不思議だ。これじゃあ誰にも男だ
と疑われずに参加できちゃうじゃないか。

「なんでこんな気合十分で行かなきゃならないんだ……」

ぷつつと頬を膨らますオレにユツキは真剣な声で真面目にこんな
ことを言った。

「今日はお前が人間としてどうなるうが関係ない。目的のためなら
お前を脱がせることも厭わないからな」

「帰っていいかな？」

もうユツキとは絶交するべきなんじゃないかな。

「帰ってくれてもいいが、相応の代償が待ってると思え」

何をやる気なんだ。もうホント帰りたんだけどなあ……。さっ
きからそのコンテストを見に行くと思われる人たちがニヤニヤしな
がらオレのところを見てくる。その視線がすごく気持ち悪い。まあ、
気持ち悪い視線を送ってくるどんな人たちなのかは想像がつくと思

うから具体的には言わないけど。

「代償って？」

「お前が中学の修学旅行で撮った『あの写真』をみんなに公表する……え？あの写真公表するの？あれを？」

あの『もしも男の娘が本気でグラビア撮影したらどうなるのか』を？

中学の修学旅行。2日目の夜に起きた人生史上最悪の出来事だ。ちよつとした出来心で起こってしまった大惨事。あの時はたしか誰かが暇つぶしに王様ゲームなんかやるうって言い出したのが発端だった気がする。それでオレばっかり命令されて……

いや、これはまた別の機会にしよう。重要なのはその写真をばら撒かれるということだ。あんな写真ばら撒かれたらオレはもう引きこもるしかなくなってしまう。

「……その写真まだ持つてるの……？」

「当然だろ。こんなにエロエロなソラは滅多に見られないからな」
ユツキが卑怯な笑みを浮かべている。この外道！地獄に落ちろ！そんな脅迫されたらやるしかなくなっちゃうだろ！まあ、あの写真をばら撒かれるくらいだったらメイド服着たほうが遥かにマシだ。

「ばら撒かれなくなったら今日は大人しく女の子になるこつた」
く……っ！手段を選らばなすぎだろこのバカ。

そんなこんなで脅迫されながら例の喫茶店に到着した。喫茶店の前にはついつい見惚れてしまうような美少女が集まっており、まさに楽園のようだった。

「ほー、これは壮絶な闘いになりそうだな」

感心したように呟くユツキ。お前は見るだけだから楽かも知れないけど、オレはこの女の子ばつかの中に飛び込んでいくんだからね？そこんとこちゃんとわかってきてくれるのかな。

「こんなランクの高い人と競うの……？」

はつきり言つて本物の女性に女装して勝てるわけがない。

「大丈夫だ、お前ならきつと勝てる」

自信を持って、と言わんばかりに背中を叩くユツキに怒りを抱かないわけでもない。ユツキは自信満々に言うけど、オレは男だ。男が本物の女性に、しかもかなり美人な女性に女装で勝てるとは思えない。

溢れんばかりの人の中、オレは受付へと辿りついた。店の入り口にポツンと置かれた長机に冴えない感じの男性がメモを取りながら座っている。あの人が受付の係の人だろうか。前後を美少女に囲まれながら並ぶこと暫し、やっと順番が回ってきた。

「えー・・・お名前と年齢を教えてください」

冴えない係員は眼鏡を押さえながら暗い声で尋ねてきた。何かあったのかなこの人。

「あ、はい。名前は深海ソラ。16歳です」

オレの顔を見た係員は急に目を輝かせた。

「16歳ってことは高校生だよね？どこの高校かな？」

そんなこと必要なんだろうか。でも、ここで答えなかつたら怪しまれるし、一応答えておくか。

「せ、星園学園ですけど・・・」

なるほど、と呟き熱心にメモを取り始める係員。あれ・・・もしかしてマークされちゃったかな・・・？このコンテストが終わったら、学校まで勧誘に来てオレはメイド人生を歩んでいくことになっちゃうのかな？そんなことになるくらいだったら水希に怒られてもいいから田井中キャサリンを復活させればよかった・・・！

「更衣室は301番を使ってください。これ鍵です」

男性から鍵を受け取る。へえ、一応多くの女性が着替えるからストレス軽減のために更衣室は個別にしてあるんだ。流石は全国チェーン店だ。

さて、ここからが地獄の闘いになるわけなんだけど・・・。とり

あえず、衣装を着るためにオレは更衣室へと向かった。

『おお・・・あの娘すげえ可愛いな・・・』

『優勝は絶対あの娘だな』

『ペロペロしたいにや・・・』

ひそひそと聞こえる気持ち悪い声の中、オレはユツキの元へと戻った。

「ほお、結構サマになってるじゃねえか」

メイド服姿で、スカートを押さえるオレを見つつ感情の籠っていないようなユツキの感想だ。着替えたのはいいものの、明らかにスカートが短すぎる。今のオレは頭に白いカチューシャ（姉貴から借りたやつ）をつけ、白を基調とした薄い青色の胸元を強調したエプロンドレス。簡単に言うとはよくテレビで見るとようなそのまんまのメイド服だ。そんなもって真っ黒のニーソックスを履いている。

何かがおかしい。

ニーソックスとスカートの間の太もも。アツチ系の用語で絶対領域と言うらしい。その太ももが自分のものとは思えないほど白い。誰の太ももだこれは。

「これなら確実に優勝を狙えるな」

「お前、自分が被害に遭ってないからって完全に他人事だと思ってるだろ」

「わかってないなお前も。これはお前にしかできない任務だ。世の中には『適材適所』という言葉があつてだな・・・」

「もういい。ユツキが腐れ外道だつてことはよくわかつたから」

このバカに付き合っていたらこっちの気が滅入ってしまう。

「まあ、そう拗ねるな。今回だけなんだからしっかり頼むぞ」

「はいはい」

『『『うおおおおおおお！！！！！！！！！』』』

ステージ裏にいても、会場の熱気が伝わってくる。野太い大歓声が聞こえてくるたびに悪寒が全身を這い巡るけどそこは気にしない。気にしてもしょうがないし、1番の番号札を引いてしまったからね。ここは覚悟を決めて一気にやり通すしかない。

『それでは、エントリーナンバー1番の登場でえええすつつ！！！！』

うわー、司会が異常なほどハイテンションになってるなー。とか思いつつステージに小走りで上がる。眼下に広がるのは残念な人たち群れ……。

『『『うおおおおおおお！！！！！！！！！』』』

なぜだ。なぜそこで歓声を上げる……っ！

「今年はトップバッターからレベルが高いようですっ！では早速お名前をどうぞ！」

いきなり振られて驚いたのか、それとも緊張していたのかわからないけど何か噛んだ。

「し、深海ソラです……」

声はいつもよりちょっと高めだ。いつもの声でしゃべるとクールな印象を持たれるらしいからね。誰が言い始めたのかは知らないけど。

「いやあ、真っ白なカチューシャが眩しいですね！」

という司会の目は太ももに釘付けだった。役割投げ出してどこ見てんだおっさん。

「あ、はい……ありがとうございます……」

思わず声のトーンが下がった。

「それでは質問タイムにうつりたいと思います。深海さん、今日こ

のコンテストに参加しようと思った理由をお聞かせください」

急に真面目な質問をしだすなんて・・・この司会者色々と持つてるんだな・・・。

参加した理由かぁ・・・別に参加したいと思っただけじゃなくて、脅されて参加してるだけなんだけど、それを正直に言ったら面倒なことになりそうだから・・・。なんかそれっぽいこと言っておけばいいか。

「えっと、どうしてもメイド服が着てみたくて参加しました。実際に着てみてすごい満足ですっ」

参加理由としては内容が薄すぎるかと思っただけど、今のオレにはこの程度の判断力しかない。

「メイド服を着てみたかったと・・・。ご趣味はコスプレだったりするんですか？」

バカかこら。そんなわけないだろ。

「いえ・・・別にコスプレが好きってわけじゃないんですけど、友人がメイド喫茶で働いていて、その人のメイド服姿を見てたら着たくなっただけです」

まあ、のぶながだっただけにしておこう。ごめんねのぶなが。悪気はなかったんだ。

「ご友人がメイドさんなんですか・・・。それで深海さんもメイドの道を進もうと思ったわけですね？」

「別の将来の夢があるので・・・メイド服を着るのはこれっきりなんですけど・・・」

「なるほど・・・。どんなメイドになるのが夢なんですか？」

「いやだから、メイドは夢じゃないって言ってるじゃないですか」

「深海さんだったらとっても素晴らしいメイドになれますよ」

そろそろキレルぞ？司会のくせに人の話ひとつも聞いてないじゃないか。

「では、将来メイドを目指している深海さん。最後に一言お願いします」

もういいや。この司会者は頭がアレなんだよね……。

これでやっと最後か。何か印象に残ることを言えばいいのかな？それともオーソドックスに頑張りたいですとか言えばいいのかな？考えるほどわからなくなっていくけど……何かテキストに言っておけば何とかなるでしょ。

「ここにいるみなさんが幸せになれるように、秘密の呪文を唱えまーす」

あれ……考えていたことと全然違うことが口から出た。

「みーんな幸せになあれ 萌え萌え〜きゅんっ？」

気が付けば手でハートマークを作り、足を色っぽくくねらせ、最高級の笑顔でそんなことを言っていた。

……

なんかもう色々と終わった気がした。

『『『うおおおおおおお！！！！！』』』

一気に盛り上がる会場。今までで一番大きな大歓声だった。

もう取り返しがつかないほど会場は盛り上がっている。なんでこんなこと言っただらうか。ホントに自分の頭が正常なのかどうか不安になってくる。

「最後に特大サービスをしてくれた深海ソラさん、それでは控え室で結果発表を心待ちにしてくださいっ！」

……このままだと優勝へ猪突猛進かも知れない。自分の可愛さに自信を持っているわけじゃないんだけど、この流れは完全に優勝獲得の流れだ……。

オレはフラフラしながらステージから降りた。

「助けてユツキ！」

ステージを降りてすぐユツキに泣きついた。これが泣かずにいられるか。

「よくやった。特に最後のアレで観客と審査員の心を掴んだな」

「全然よくないよ！周りは本物の女子なんだよ！？その女子に差をつけて圧勝するなんて男として疑問を抱かずにはいられないんだけど！」

だんだん自分の性別がどっちだったのかわからなくなってきている。これはテストで問題を解いている最中に「あれ、自分今何してるんだっけ？」っていうあの感覚と同じだ。女装して女のような声を出してあんなことをしてしまった。自分の性別を見失っても仕方がない。何が何だか全く理解できなくても仕方がない。

「忘れたのか？今日は優勝するために出場してんだぞ。優勝逃したらマジである写真ばら撒くからな」

ユツキの目が獣のように光っているので恐らく本気でやるつもりだろう。そんなことされたらオレの社会的地位は……！

「それが嫌ならこの時間だけ女になりきれ。そして優勝を掴んで来い」

そんなカツコよく背中を押されてもやってることは女装大会だからね。あんまりカツコよくない。

「もうホントに自分が何なのかわからなくなってきた……」

「誰だっけそういう時期はある。お前は今がそういう時期なんだよ！全ての元凶はお前なんだよ！お前が七瀬ちゃんのためにフライパンを贈りたいとか言い出すからっ！オレがこんな恥をかかなければいけないんだっ！」

と、泣き叫ぶオレの耳に会場のアナウンスが聞こえてきた。

『本選出場者が出揃いました！出場者はスクリーンをござらんくたさいっ！』

もう予選通過者が出揃ったらしい。結構早く終わるものなんだね。

もうちょっとかかると思ってた。

「ま、お前の優勝は約束されてるから当然本選出場だよな？」

「もうやめたい……」

泣きながらステージにあるスクリーンに目を向ける。どうやらエントリーナンバーだけが表示されているようだ。下の方からゆっくり上に向かって見ていく。オレは1番だったからエントリーナンバー順に表示されているなら1番上にあるはずなんだけど……。

「……あ」

1番上に大きく「1」と書かれていた。

「流石だな。この調子で優勝してくれ」

ユツキはそういうけど、もうオレの精神力はボロボロで倒壊寸前だ。このままだと完全におかしくなってしまう。それに本選は接客をするらしいから、ちゃんと自我は保っていたんだけどな……。

「あは……あははは……」

自然と笑い声が出てきた。別に自分で笑おうと思って笑ってるわけじゃない。既にどこがおかしくなってるみたいだ。

「おいおい、ここでドクターストップとかするなよ？本選は接客だ。聞いてるから、しっかりやってくれ。最終手段は身体を売るんだ。そうすれば大抵の人はお前に……」

「身体を売ったら男だつてバレちゃうでしょ……」

「背中とかなら別にバレないだろ。太ももとか」

ユツキはオレを何だと思ってるんだろうか。というか、そんなことしたら反則になっちゃうでしょ。いくら何でもそんなことしちゃいけないよ……。オレもしたくないし。ヴァージンはまだ取っておきたいよね。

「あれ……ヴァージン……？」

それは女性の言葉じゃないか。

そして始まった本選。オレは店内にいる1人のグループ客の席に配属された。ここで接客をしるということらしい。これは客からの投票で優勝が決められる方式なので、1人の客相手に接客するよりも大人数の接客のほうが有利になる。そういう点ではオレは有利だ。あとは、どうやってこの男たちの心を虜にするかが問題だ。やつぱりユツキの言ったとおりお色気路線で魅了するしか手はないのかな？まあ、それについてはやりながら考えればいいし、今は集中しようか。

「おかえりなさいませ、ご主人様っ」

満面の笑みでご主人様をお迎えする。ここまではよくテレビで見かけるやりとりだ。こっからが本番なわけであって、オレにこういった接客スキルは皆無だ。アルバイトなんてやったっことないし。

「うわぁ・・・ご主人様がいつぱいっ！一生懸命ご奉仕しますねっ」

こんなことを言った自分にうわぁ、と言いたい。何を考えているんだオレは。おそらく「ご奉仕」の単語に何かを覚えたグループ客は互いに顔を見合わせてニヤニヤしていた。うわぁ、気持ち悪い。

「ご注文は何にしますかー？ちなみにあたしのオススメは
とそこで思考が一瞬停止した。メニューを見て、最初になが留まったのが『びんくメイドの桃色ホットケーキ』と書かれた文字だった。桃色ホットケーキって何？桃の味でもするの？びんくメイドって何？そういう方面にも売り出してるのこのお店。色々わからないことが多すぎる。まあ、メニューなんて何見てもわからないからこれでもいいや。

「この『びんくメイドの桃色ホットケーキ』ですっ。よかつたら注文してくださいね、ご主人様」

とりあえず語尾に音符をつけておけばそれっぽいだらうというへボ作者の考えは無視してもらって結構です。文章力ないんで語尾で

勝負するしかないですしね。

「え、え？桃色ホットケーキ？」

男性客の1人が気持ち悪い顔でそんなことを聞いてきた。ひどく興奮しているようだけど・・・このメニューやっぱりそういうものだったのかな？

「じゃあ、それを4つ！いっぱいサービスしてね！」

「はいっ、かしこまりました！」

妙な違和感を覚えつつ、テーブルを離れて厨房のおっさんにメニューを告げる。メイド喫茶だって料理を作っているのはおっさんらしい。

「えっと、桃色ホットケーキを4つお願いします」

「ぶほっ」

厨房のおっさんまで嘔き出した。あれ？何で？

「きみ・・・コンテストなのにそんなものを勧めたのかい？」

哀れむような視線でおっさんは尋ねてくる。

「そうですね・・・このメニューなんか問題でもあるんですか？」

「このメニューは、名前からもわかるとおりメイドが客にちよつと色っぽいサービスをしなければいけないメニューなんだよ。まあ、殆どの客がギリギリのところを見せてくれと頼むようだけだね」

聞きながら血の気が失せていくのを感じた。そんなメニューとも

知らずにオレはなんてことをしてしまったんだ・・・！

「ギリギリって例えばどこら辺ですか・・・？」

恐る恐る聞いてみる。

「多くは胸元とか太ももだね。たまに特殊な趣味を持つ人は二の腕とか言ってくるけど」

もうダメだ。オレの人生はここで終わるんだ。鎖骨までならKだけど、胸元はちよつと無理がある。胸はないし、谷間もないから見たところで特に何も・・・。

「はいよ、ホットケーキ4つ。ねえちゃん、頑張っておいで・・・」
同情してくれたのか厨房のおっさんは慈愛に満ちた目で見送って

くれた。ここまできたら勝負するしかない。どんなことをされても抵抗はしちゃいけないんだ・・・！耐えるよオレ！

テーブルに着くと、客はさつきよりも興奮していた。

「お待たせいたしました、『ぴんくメイドの桃色ホットケーキ』ですっ」

4つとも男性客の前に置く。すると、男性客の1人はケーキに手もつけずオレに詰め寄ってきた。

「さあ、どんなことをしてもらおうかなあ・・・？」

「うええ・・・気持ち悪い・・・」

「そうだ、今日棒つきキャンディ持つてるんだけど、それをエロく舐めてもらおうかな」

怪しいものが詰まっているリュックからキャンディを取り出してオレに渡すへんた・・・男性客。これをエロく舐めるってどんな感じに舐めればいいんだろうか。よくわからない。

「えっと、どうやって舐めればいいんですか？」

「俺がキャンディを持ってあげるから、鳥のヒナのように口で舐めてもらいたいんだよ。わかるかなあ・・・舌だけでエロく舐めて欲しいんだけど・・・」

キャンディがオレに向けて突き出される。これを舌だけで舐めればいいのか。よくわかんないけど・・・こうかな？

ぺろっ

舌だけでキャンディを普通に舐めた。それだけでも客は歓喜している。さっさとホットケーキ食えよ。

「もっとこう色っぽく・・・っ！」

そんなこと言われてもよくわからないんだけど・・・まあ、やってみるか。

「ほつれすか？」

顔を横に倒して、横からキャンディを舐める。こんな感じがいい

のかな・・・？

「ん・・・」

急にオレから喘ぎ声が漏れた。何でだろう。

「じゃあ次は前屈みになって上目遣いで舐めて！」

客の1人が立ち上がり、キャンディを下に向ける。オレは言われたとおり前屈みで上目遣いで舌の先だけでチロチロとキャンディを舐めた。今気付いたけどこれミルクのキャンディか。この味は好きだからいくら舐めても飽きない。うん。

「いいよいいよ！もっともっと激しく・・・！」

激しく舐めるってどういうことなんだろうかね。さっぱりわからない。さつきから男性客らの視線がオレの胸元に注がれているような気がするんだけど・・・もしかしてそのために前屈みにしたのか・・・？どこまで残念な人たちなんだよ。

舌だけで舐めるのが疲れたから、そのままキャンディを口の中に入れる。そのまま前後に動いて・・・っと。

「やべ・・・もう我慢できないかも・・・」

キャンディを持つ客が小さな声で呟いた。

「ね、ねえ・・・キャンディはそこまでいいから、次はおれのアイスバー舐めて見ない？」

オレの口からキャンディをゆっくり抜くと、客はそんなことを言った。

「・・・流石にこの言葉の意味を理解できなくはない。これは生命の危機だ。同性のアレを・・・オレが・・・うわああああ！」

「ご遠慮しておきます・・・。ご主人様のアイスバーですので、ご自身でお楽しみください」

「そう言わずに、ペろってしてくるだけでいいからさ」

「あたしにそういう趣味はございません」

「あんなに貪欲にしゃぶっていきませんか？」

それは優勝を掴むためだ。お前らのためじゃない。

「他に要望はございますでしょうか？」

話の腰を折るように次の話題へうつる。早くしないとトンデモないことになりそうだ。

「じゃあ、今度はギリギリのところまで見せて！」

はい来ると思っていました。もう覚悟は決まっていますので、男たちの前でゆっくりとスカートを捲り上げる。それと同時に胸元のボタンもゆっくり外していく。

「あ、あの・・・そんなに見つめられちゃうと恥ずかしいです・・・」

顔を赤らめながら（つもり）上から4つ目のボタンを外す。スカートも太ももが全部露になるところまで捲り上げている。気付けば他の参加者が担当する客もオレの方に釘付けだった。

スカートはパンツが見えるギリギリまで捲り、ボタンは下着（ユツキの戦利品）が見えるところまで外し、恥ずかしそうにそっぽを向く。

「くくくくうへへへへ・・・」

これは勝ったな。

「よしよし・・・これでアイツも気が済むだろう」

日が沈み始め、綺麗な茜色に染まった空の下を歩いていた。

両手いっぱいフライパンやら圧力鍋の入った袋を抱えたユツキが満足そうに言う。

そう。オレは優勝してしまった。

最後の捨て身のお色気が効いたのか、他の出場者にかなりの差をつけて圧勝してしまった。客からは変な目で見つめられ、他の出場者からは敵意の籠った視線が送られた。別にオレだって好きで優勝

したわけじゃないんだから、そんなことされても困る。

「……これのためにオレはあそこまで頑張ったのか……？」
そしてオレの手元にはもう1つの賞品である限定版のフーズーがある。最初はどんなものかと期待していたんだけど実物は本選で客が注文した『ぴんくメイドの桃色ホットケーキ』にメイド服を着せて、恥ずかしそうに顔を赤らめている何とも言えないものだった。これはあまり嬉しくない。心の傷を抉っていると思えない。主催者側の悪意だろうか。どうせなら売ってしまいたいくらいだ。オークションで売っちゃおうかな……。

「今回ばかりはソラ様様だな。あれほど本気で女装したソラはもう女神にさえ見えませ」

「その女神様に身体を売れと言ったのはどこのどなただったかしら？」

自分のやったことは綺麗に忘れてるし。身体を売れなんていうから最後あんなことまでしたんだ。もうちょっと感謝してくれてもいいんじゃないかな？

「でも、本当に感謝してる。ありがとな」

足を止めて礼儀正しく頭を下げるユツキ。こんなに真面目にお礼を言ってくれるんだったら、やった甲斐があるかもしれない。

「はいはい、どういたしまして」

それなのに真面目なユツキを見てドキッとしてしまったのはなぜだろうか。

「まあ、お前もよかつたじゃねえか。限定版もらえて」

「正直いらないんだけどね」

ホント骨折り損の草臥れ儲けだ。あんなに頑張ったのにもらえるのがこんな低クオリティのマスコット。メインは多分ユツキが持っているフライパンとかなんだろうと思っただけ、実物を見ると悲しさが……。

「姫奈……喜ぶだろうな……」

幸せそうな顔で呟いたのは聞こえなかったことにしよう。

今まで人のために自分を犠牲にするのはちよつと受け入れ難かったけど、今回の件を通じてそういうのもちよつといいなあ、なんて思ったり。オレも父さんに何かしてあげようかな。

「あ、そうだユツキ」

そんなことより確認しておきたいことがあつたんだ。

「あの写真・・・ここで捨ててくれるかな？」

「『もしも男の娘が本気でグラビア撮影したらどうなるか』を公表してやる」をネタに脅迫されてたことをオレは忘れない。要求にはちゃんと応じたんだからその脅迫は無効になるはず。

「わかつたわかつた。公表はしないから安心しろ」

よかつた・・・あれが他人に見られたらどうしようかと思つた・・・。

「まあ・・・もう遅いけどな」

「え？何か言つた？」

ボソリと言つたユツキの言葉が聞き捨てならないものだった気がするけど、よく聞き取れなかつた。

「いや、こつちの話だ」

会話をしているうちに駅に着いたようだ。駅前には先程の大会の会場にいた変な人たちがうようよしている。下手に歩き回っているとまたメンドーなことになりそうだ。それにまだ服を着替えていないから姉貴の服を着たままだし・・・。

「うわあ・・・まだいるよ・・・」

ウンザリとしているオレと人ごみをダルそうに避けるユツキ。目立たないように動いたのがよかつたのか誰にも目をつけられず電車に乗ることができた。

電車に乗ること30分。駅を出てそれぞれの帰路についた。ユツキと別れたとたん、身体がずっしりと重くなり、フラフラしてきた。

自分でも気付かないくらい疲れていたらしい。まあ、仕方ないよね。女装して接客までしたんだから疲れて当然だ。既に姉貴から借りたカチューシャはバックの中だ。

「ただいま……」

周りの雑音に埋もれてしまいそんな声で帰宅を告げる。誰か聞いてくれたかな……。

「あら、おかえり」

真っ先に出てきたのは姉貴だ。しかも、かなり興奮している。

「そういえばさつきから水希ちゃんがソラの帰りを待ってたわよ？何かいいことあるのかも」

「……？水希が？今日はユツキと遊ぶって言うておいたはずなんだけど……。」

「……姉貴、何か企んでない？」

ジト〜と姉貴の目を下から睨む。さあ、さつさと吐け！

「何も企んでないけど……。あ、そうだ。水希ちゃんの様子が変わったような……。」

それを聞いた瞬間、オレは靴を脱ぎ捨てて2階へと駆け上がる。

様子が変だったって……。もしかして女王様モードに入っちゃっているとか？いやいや、誰も相手がないのになるわけがない。じゃあ何で様子がおかしかったんだらうか。

水希の部屋のドアをノックもせず思い切り開ける。

「……？？」

中には不思議そうに首を傾げた水希がいた。

「あれ……？帰ってたの？」

見た感じどこにもおかしな点は見当たらないけど、姉貴はどこがおかしいと思ったのだろう。いつものように可憐な水希じゃないかでも、1つだけおかしいと思ったところがある。

「水希……何の写真見てるの？」

「ああ、これ？」

水希は柔らかな笑みを浮かべたまま、写真に目を落とした。

「ね、ねえ・・・その写真は何・・・？」

さつきから本能が逃げると警報を鳴らしっぱなしだが、ここは訊かなければいけない。自分の命が危ないと知っていて逃げるのはよくないし、愚かだ。

水希の手にある写真がどこかで見たことあるものにしが見えない。何というか、中学の修学旅行の時に撮られた写真のように思えてならない・・・。

「これは、どこかの可愛い男の娘がすごい大胆な格好で写ってるレアな写真なんだけど・・・」

水希が妖艶な笑みを浮かべ始めた。

「へ、へえ・・・どんな写真なのかな？ちょっと見せてよ」

ゆっくりと水希の方へと歩み寄って写真を覗く。

・・・。

写真には女装したオレとしか思えない人物が写っていた。

「ソラくん、覚悟はいい？」

このあとオレがどうなったかは言うまでもない。

夏休み：おかえりなさいませ、ご主人様（後書き）

こんにちは、高熱で1週間ほど寝込んでいた菊地陽です。

今回もお付き合いいただきありがとうございます。

遅くなってしまいました。放置していたわけではありません。

先日心霊スポットめぐりをした帰りに、急に発熱してしまい1週間も寝込んでしまいました。

やっぱり、そういうところには行かないほうがいいですね。

小さな女の子の笑い声がっぱい聞こえる場所には行かないほうがいいです。ホントに。

今回も拙い文章で書き綴っておりますが、よければこれからもお付き合いください。

以上、菊地陽でした。

9月：体育祭 その1

9月。長月。セプテンバー。

秋です。秋と言えば読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋……。星園学園の秋には学園祭と体育祭が開催される。まあ、多くは一緒にやっちゃうんだろうけどこの学園はその2つを別々に行う。分けたところで執行委員の仕事量が増えるだけなんだけどね。

さてさて、今日はその2大行事のうちの1つ、体育祭が開催される日だ。これまた不思議なもので学園祭よりも早く体育祭が行われる。どこかで聞いた話だと晴れてるうちにやっておきたいだとか。体育祭なんかメンドーなだけなんだからいつそのこと中止になっちゃうえばいいのに、と強く願いながら当日を迎えた。そして、今の空模様はというと……

雲1つない青空。

さんと輝く太陽。

鳥はオレを嘲笑うかのように綺麗な鳴き声を響かせている。

どうということだこれは。てるてる坊主を赤いマジックで血まみれにしたやつを15個も作って全部逆さまに吊るしておいたのにどうしてこんなに晴れ渡っているんだ……！

「はあ……」

オレはそんな空の下を歩きながら溜息を吐くのだった。

「お前は毎年こういう学校行事だとテンション低くなってるよな」

横を歩く茶髪ポニーテールの男、橘たちばな雪時ゆきじ 通称ユツキにそう

言われた。ユツキとは中学校から一緒だからオレのことをよく知っている。中学でも文化祭やクラスマッチがだいっきらいだったからな……。何が1番嫌いかってその日のために時間を削って練習する

ことが嫌いなんだよ。文化祭なんだから楽しめばいいじゃないか、クラスマッチなんだから楽しめばそれでいいじゃないかというオレの持論は未だ誰にも理解されていない。

「だってメンドーじゃん……。あの生徒たちの熱気だけで溶かされそうなんだけど……」

あと文化祭でテンションを上げる生徒たちも嫌いだ。オレも別に楽しみたいくないわけじゃないけどそういう人たちがいるとなんか冷める。

「まあ、学園祭よりはいいだろ。身体動かしてればいいんだから」「そうですよ。そこまで嫌わなくてもいいじゃないですか」

前者がユツキのセリフ。ユツキは運動神経もいいし、足も速いからいいけどさ……。オレはユツキほど運動能力が高くないからね・

後者は絶世の美少女である結城ゆいぎのぶながのセリフ。のぶながもおっとりした外見だけど運動能力はかなりのものだ。たしか剣道だか空手で段持ってるとか。のぶながとも中学校から一緒だからよく知られている。

「2人は運動できるからいいけどオレなんてただのお荷物にしかないんだよ」

オレもホントに運動が苦手な人たちよりは運動できる。小学校の頃は毎年リレーの選抜に残ってたし、中学でも陸上部のお手伝いとして走っていたことはある。それでも、ユツキとのぶながには敵わなかった。そこから人間には才能というものがあるんだなあ、と思い始めたんだっけ。オレだって100mは12秒で走れる。ハードルは苦手だったけど。

「種目が種目ですからね……」

のぶながの言うとおり種目のチョイスがおかしい。まず定番の4×400mリレー。これはクラスで選抜された4名のオーダーで行う競技だ。次は全員参加の借り物競争。どうせあの生徒会長が仕込んだからワケのわからないものが書いてあるはずだ。例えば……

トリユフ、とか。学園内で探せるわけがないものを書いてくるから困る。その次は学年対抗の騎馬戦。これは唯一無難な競技だ。というか高校生が本気で騎馬戦なんかやったら絶対怪我人が出ると思う。それからどうでもいい競技が5つほど続いて最後の競技が思わず唾然としてしまうものだ。それが学園の生徒全員で行う「鬼ごっこ」。鬼ごっこだよ鬼ごっこ。ルールは遊びの鬼ごっここと変わらないけど、ヴァンパイアルール（要するに増え鬼）で鬼がどんどん増えていく。その中で最後の最後まで逃げ切つて1人だけ生き残った人が優勝となる。優勝者の学年に20ポイント加算されて所属クラスに50ポイント加算されるからもし生き残れば大逆転できる。執行委員は何を考えてこの競技を選んだのだろうか。姉貴に聞けば姉貴が入学して初めての体育祭にも鬼ごっこがあったという。

「だよな・・・リレーとか借り物はわかるけど、鬼ごっこはな・・・」

ちなみにユツキは4×400mリレーのメンバーに選抜されている。コイツは確か100m11秒台だったかな？のぶながもそれくらいの速さで走る。オレとは1秒も差があるのだ。

「でも楽しそうですよ。去年もすごく面白かったですし」

去年の鬼ごっこは、のぶながが最後まで逃げ切つて優勝した。足が速いだけでなく体力もすごいらしい。

「それはお前が最後まで逃げ切つたからな」

「そうだよ。普通の人間じゃできないことだよ」

全校800人くらいから逃げ切つたのぶながはすごいと思う。

そんなことを話しているうちに、もう学校だ。校門の脇には《星園学園体育祭》と書かれた看板が置いてある。はぁ・・・ついに始まってしまったのか・・・。

「ま、楽しめばいいんだろ？」

「楽しめば結果なんかどうでもいいんですよ」

「・・・」

絶対にかかわれてるな・・・これは。

オレは頬を膨らませながら学園に入った。

「えー天候にも恵まれ、今回もとても素敵な体育祭になる・・・そんな予感がします」

校長の話は長いしどーでもいいのでスルー。

「宣誓！僕たちはスポーツマンシップにのっとり、正々堂々と戦うことを誓います！」

選手宣誓も興味ないので聞き流す。

そして・・・

『第一種目・・・クラス対抗玉入れを始めます！出場クラスは競技場へ入場してください！』

高らかと執行委員のアナウンスが響く。

「おーおー、もうゲツソリしてるじゃねえか」

オレはグラウンドの隅に作られたクラスのスペースに戻るなり倒れた。開会式の時点で生徒のボルテージが最高潮に達していたのでそういうのがダメなオレには地獄だった。みんなテンション高すぎでしょ・・・。

「ちょ・・・ソラクん！？大丈夫なの！？」

水希も心配して駆けつけてくれた。放っておいてくれればいいのに・・・。

「ちょっと貧血が・・・」

オレも起き上がって心配ないことを伝えた。

「そーいえば長門さんはどの種目に出るんですか？」

「えっとボクは4×400mリレーと玉入れと騎馬戦だった気がするよ？」

「最初は玉入れだぞ。早く行かないと」

玉入れという競技もどうかと思う。高校生が全力で玉入れをする姿はある意味シニールかもしれないけど。

「とうるかソラくんも出場することになってるんだけど・・・」
「え・・・？オレも・・・？玉入れには希望してなかったはずなんだけど・・・」

うん。事前の種目希望調査で玉入れとは書いていない。何かの手違いじゃないのかな。

「そのことなんだけど、クラスの執行委員の子がどうしても玉入れの人数が足りないからって勝手にソラくんを加えちゃったんだって」
「ねえユツキ、執行委員で誰だったかな」

「んあ？確か・・・宮坂みやさかじゃなかったか？」

宮坂か・・・。きつと宮坂は今、執行委員の仕事で忙しいはずだからお昼休憩中にも問い質そう。絶対に許さないからな・・・！
「それよりソラ、早く行かないと始まつちやいますよ」

「うん・・・」
のぶながの微笑みについ頷いてしまった。仕方がない・・・。決められてしまった以上、参加するしかないか。オレはよろよると立ち上がって競技場へと歩いていく。

「おーい深海ー」

向かう途中で誰かから名前を呼ばれる。ん、この声は・・・
「悪いな・・・こつちのミスでお前に玉入れ出してもらわないといけなくなつちやつたんだ」

「はいはい、出てくればいいんでしょ？」
でも、と一拍間を空けて低い声で言う。

「お昼休みに、ちよつとお話を聞かせてもらってもいいかな？」
どうしてオレを勝手に参加させたのか、じっくり聞き出してやる。

「・・・お、おお」

宮坂はこちらの思いを察してくれたのか、ちよつと怯えていた。
よし、これですつきり。

「ソラくん、早く行くよー！」

玉入れ。各クラスから5名選んで行うクラス対抗の競技だ。でも正直玉入って高校生がやる種目じゃないよね……。高校生になればみんな背も高くなるし、小学生用の籠じゃ入りすぎて勝負にならないってことに気付いてなかったのか真ん中の執行委員が持っている籠の高さはハンパじゃなかった。グラウンドの周りに生えている木と同じくらいの高さの籠を執行委員は持っている。腕震えてるし。

『それでは、第一回戦を始めます』

ばぁんっ

スターターピストルが甲高くなったのと同時に向かい合う相手と自分たちが一斉に落ちていく玉を取りに行く。オレは若干出遅れたけど、端から興味ないから別に問題ない。勝とうとは思ってないし、足元に転がっている赤色の玉を拾って適当に高く放り投げる。投げられた玉は高く弧を描いて……。お、入った。もう1個拾って投げる。これも入った。また1個拾って放り投げる。おおっ！また入った！なんか楽しくなってきた！

と、勢いに乗ってきたところでオレの顔に玉が当たった。

「いった……。」

相手の籠の周りを見回してみてもこちらに投げたような素振りを見せる人はいない。まあ、多分投げた玉が外れて落ちてきたんだろう。なら仕方がない。オレはちょっと前に落ちている玉を拾おうと身体をかがめた。

ばしっ

もう一度顔面に玉が当たった瞬間、オレの頭の中で何かがブツンと切れた。

拾った玉を相手側に向かつて思い切り投げた。誰に当たるかわからないけど、誰がやったかわからないんだから誰でもいい。とりあえず誰かに当たればそれでいいんだ。オレの投げた玉は一直線に伸びて向こうのクラスの男子生徒の顔面に直撃した。

「今投げたの見えたぞ深海！てめえいい度胸してんじゃねえか！」
「どうやら投げていたのが見られていたらしい。」

「うるさいなあ！先に投げてきたのはそっちだろ！」
玉を拾って再び投げる。今度は避けられた。

「ちっ」

「てめえ……今度は隠れもせず投げてきやがったな……！」

男子生徒……確か井ノ川いのがわと言ったはずだ。井ノ川は大きく振りかぶって野球部顔負けのフォームで玉を投げ返してきた。ふん、そんな遅い玉を避けきれないほどオレの動体視力は悪くないっ！

「馬鹿め！まんまと引つかかりやがったな！」

一発目を投げた後間髪入れずに2個目を投げてきた。このままじゃ当たる……と思っていたんだけどその玉は大きく狙いを外して別の生徒の後頭部に直撃した。

「あ……」

しかも井ノ川が当てた生徒は同じクラスの男子でこの学園の野球部のエースだった。エースはゆっくり振り向くとオレたちを交互に見てにやりと笑った。

「お前らに本物のピッチャーってのを見せてやる」

エースが玉を拾い、投球モーションに入る。流石にこれはやばい……。でも、オレと井ノ川は別々の場所に立っているから狙うとしたらどちらかしかない。

（どっちに投げる……！）

オレは既に回避行動に移っていた。どんな球が投げられるのかわからない。直球じゃないかもしれない。

「ソラ！コイツを使え！」

観客席からユツキが何かを投げ込む。

「これは……」

「野球部の部室から盗んできたバットだ！それでエースの球を打て！」

「いやいや無理でしょ。野球の経験なんかないんだから。しかも相手は野球部のエースだよ！？闇雲に振ったって当たるわけがないじゃない！」

「だけど、これしか対抗する手立てがないならやるしかない。オレはエースと向き合い、軽くバットを振り上げる。」

「よしこい！」

「野球部をなめるなよ！！」

腕を大きく振って風を切るようにボールが投げられた。ふむふむ・
・見る限り内角低めのストレート。これなら素人のオレでも打てる！ボールをよく見てバットを振り始める。あの球速なんだからちよつと早めに振り始めるくらいで丁度いいはずだ。

（よつしゃ・・打てる！）

エースをちらりと見やると今度は井ノ川に向けて投げようとする姿が見られた。完全に勝利を確信しているんだろうか。オレの方は見向きもしない。

肝心のボールはというと、当たる寸前でちよつと変化したらしく鋭い音を発しながら大きく頭上上がった。本当の試合ならこれをキャッチャーが捕ってアウトなんだけど今は野球をしているわけじゃないしキャッチャーもない。打ちそびれた打球は頂点に達すると真つ直ぐ下に落ちてきた。オレの狙いはこのボールを思い切り打つことだ。そしてエースの顔面に打球が当たればいい。

球が丁度手元に落ちてくるタイミングを計算してバットを振る。

カキンッ！

金属音と共に打球はエースのいる方向へ飛んでいく。そのままエースに当たるかと思っただけど……

「あいたつ！」

エースには当たらず、相手の籠を持つていた執行委員に当たった。体勢を崩された執行委員は籠を支えきれなくなり、そのまま倒してしまう。当然籠の中に入っていた玉は全部外に流れ出し、必死に投げ入れた生徒の努力は水の泡になった。

「お前ら・・・玉入れだつっのになんで野球やってんだよ・・・」
倒してしまつた執行委員は怒っているらしい。

「執行委員の苦勞を返せ！」

そういう割には彼も玉を3つほど拾つて無差別に投げまくつた。

そしてその全てが別々の生徒に当たり、当てられた生徒も無茶苦茶に玉を投げまくる。

・・・もうこれ玉入れじゃないじゃん。

雪合戦の雪じゃないバージョンみたいになつてるじゃん。

「い、いや・・・オレは悪くないからね・・・」

一応、そう言つてオレは玉を籠に向かつて投げた。

相手はオレの打球を避けたことによつて、籠が倒れ採点不能となつたので玉入れはオレたちのクラスが勝利。最初から勝利を飾るなんて好発進だ。

「・・・あれ玉入れじゃなかつたぞ」

呆れながらユツキが言う。言つちや悪いけどあの場にユツキがいたらもつとトンデモないことになつてたと思うよオレは。

「まあ、喧嘩を仕掛けてきた相手も悪いですし、それを遠慮なく打ち返すソラも悪いです」

のぶながに優しく叱られた。優しい分とっても傷つく。オレだつて打ちたくて打つたわけじゃないのに・・・。エースがボールを投げ

てくるから血が騒いでバットを振っちゃっただけなのに・・・。

「まあそう落胆するな。勝ったんだしいいじゃないか」

「それもそうだけど・・・」

「次の種目に集中しましょう。そちらの方が大事です」

そうだよ。世の中「勝てば官軍、負ければ賊軍」なんだよ。

どーでもいい競技を眠ったり昼寝したりして過ごして、次は4x400mリレー。ユツキとのぶながが出場する種目だ。このリレーは体育祭のメインイベントだったりする。毎年かなりハイレベルな勝負を繰り広げるので地元の人にも面白いと好評だ。リレーはクラス対抗で1年、2年、3年の順番で行われる。そしてその中で各学年1位のクラスが決勝戦ということでもう一度走り、頂点を決めるのだ。これほど燃えるシチュエーションがあっただろうか。もしオレのクラスの選手が1人怪我でリタイアすれば、その時は迷わず交代要員として立候補するつもりだ。オレだって走りたいもん。

「橘さんと結城くんって足速いの？」

いつの間にか隣に来ていた水希が興味深そうにトラックを見つめながら訊いて来た。

「うん。あの2人はかなり速いよ。多分、そこら辺の陸上部員とやら互角に張り合えるんじゃないかな」

一応言っておくが、オレも張り合える。

「ソラくんは・・・そこまで速くないみたいだね・・・」

「オレだって中学時代は準陸上部みたいなものだったんだけどなあ・・・」

基本走るの好きだったし、陸上部での助っ人も楽しかった。それなのにオーダーから外されるっていうのはちよつと信じられない。大会記録だって出してるのに。

1年のリレーはあるクラスにいる大型ルーキーがアンカーで3人

を一気に抜き去り逆転優勝。アンカーまでは後ろから2番目だったのにバトンが渡されてから数秒で3人抜いた。このときは素直にすげえと思ったけどね。やっぱり才能って大事だな。

続いて2年のリレー。順番を見る限り、ユツキが2走でのぶながが3走だ。アンカーはクラスの陸上部員で1走が執行委員の宮坂だった。あれ、あの大陸上部だったのか……。そして走るのは4レーン。バトンさえ落とさなければ優勝狙えるんじゃないかな。

スターターピストルがなり、第1走者全員が一気に地面を蹴る。

「『『『うおおおおおおおおお！！！！』』』」

グラウンド中が一気に盛り上がる。それだけこの種目は注目されているし生徒にとつて楽しみなものなのだ。

宮坂はと言うと現在3位。速いわけでもなく遅いわけでもない普通の選手らしい。コーナーを抜けると宮坂は一気に加速した。バックストレートを全力で駆け抜けるが1位2位との差は縮まらない。

「へえ・・・宮坂くんも速いね」

隣の水希は感心したように呟いた。オレだったら2位には食い込めたね。そのまま最終コーナーに入る。まだ3位だ。このままユツキとのぶながに渡れば、恐らく1位は取れるだろう。あの2人の足の速さはハンパじゃない。宮坂は順位を落とさずにユツキへバトンを繋ぐ。

「『『『は、速え！』』』」

次の瞬間会場中から驚嘆の声が聞こえた。

「うわあ！橘くんはやーいっ！」

水希も興奮したように手を叩いていた。そう。ユツキがとても帰宅部とは思えない速度で走っていたのだ。あいつ中学もまともに部活やっていないはずなんだけど。不良だったし。

さっきの1年のルーキーほどじゃないけど、コーナーで1人抜いた。まあ、多分アイツのことだから1つ順位上げてあとはのぶながに任せようとか思ってるんだろうな。でもユツキは勝負中に絶対手を抜かない人だから安心して大丈夫だ。オレの予想通り、バックストレートは追いつかれず前を抜かずくらいの絶妙な速さで走ってコーナーに入るとちょっと加速した。そのままバトンを繋ぐんだろうなと思っていたんだけど・・・

『ここでまた抜くのか!?!』

『なんだあの2組のポニーテールは!』

ホームストレートに突入した瞬間、ユツキの脚の回転数が跳ね上がった。どんな筋肉してるのか知りたい。コイツはバトンパスのことを考えているのだろうかというくらい加速してついに1位と並ぶ流石に1位を走っている選手も負けたくないらしく対抗して加速してくる。

「橘くん、元々陸上部だったの?」

「いや・・・ただの不良だったけど・・・」

その不良がどうしてここまで運動能力が高いんだろうか。

ユツキはその速度を殺さないまま第3走者ののぶながにバトンを渡す。

『おお!あの3走の子も速い!』

「結城くん、ホント不思議だね・・・。あんなに物静かなのに」
ギヤップに驚くのも無理はない。オレだって初めてののぶながと走ったときは驚いた。最初のコーナーだけであっさり前の走者を抜いたのぶながはそのままバックストレートで引き離し、最終コーナーも追いつかれることなくアンカーへバトンを渡した。

そしてアンカーも順位を落とすことなくゴール。オレたちのクラ

スは決勝戦へと駒を進めた。ちなみに2位との差は4秒。

「すごいなあ、1位になっちゃうなんて」

「オレも走リたかつたなあ・・・」

「次があるよ。そんなにへこまないで・・・」

来年こそは絶対に・・・！

さて、リレーは最終的に2位という結果に終わったけど決勝進出のボーナスで15ポイント追加されたからオレのクラスは現在学年トップで全体3位といういい位置にいる。全体1位のクラスとの差は50点。3位のクラスとは10点差だ。これは4×400mリレーで2位を取ったのが大きい。

「次は・・・鬼ごっこだな」

最後に最大の種目、鬼ごっこ。鬼は執行委員会の正副委員長が最初の鬼を務める。それからつかまつっていった人たちが鬼となっていて最終的には1人を除く全員が鬼になるまで続けるもはや遊びではない鬼ごっこだ。でもこの種目で少しでも長く生き延びれば、1位を抜くことができる。というか体育祭とかどうでもいいと思っていたのにいつの間にか熱中している自分に気付いた。

「こっからは単独行動だ。全員が敵になるぞ」

ユツキは鬼ごっこも制覇するつもりなんだろうか。

「わかつてますよ。ここから先は自分だけの世界ですからね」

去年の覇者であるのぶながも意気込んでいる。

今回オレは玉入れをメチャクチャにしたことと騎馬戦で無双したことではしか活躍してないからフラストレーションが溜まりまくっている。ここで発散させてもいいんじゃないかな？

そう思うと急にやる気が出てきた。久しぶりに本気で走ってみるか。体力には自信ないけど。

「そうだね。ここらで一発見せ場を作らないと、なんかすっきりし

ないし頑張っちゃおうかな」

すると2人は目を丸くしてこちらを見た。

(ユツキ、ソラは騎馬戦であんなにえげつない戦法で相手側を壊滅させたのにまだ懲りてないんでしょうか?)

(知らねえよ。コイツもストレス溜まってんだろ)

(そうですか・・・欲求不満なんですかね)

(それはないな。水希ちゃんて発散してるだろ)

何やら小声で話し合っているけど・・・全部聞こえてんだぞお前ら。騎馬戦ではちよつと凝った作戦を使っただけだ。決してルールを破ってはいない。ただ、騎馬の上で立ち上がって相手の手の届かないところから攻めていったってだけなのにどうしてえげつないなんて言われなきゃいけないんだ。

「ソラ・・・長門さんを大切にしてあげてくださいね・・・」

「だから、発散なんてしてないしそもそも欲求不満なんかじゃないからね」

誤解されている気がする。

『これより、最終種目鬼ごっこを開始します。生徒の皆さんは10秒以内に逃げてください』

範囲は学園の敷地内だ。狭いと思うかも知れないけれど、この学園はかなり大きい。校舎内も有効(女子トイレや更衣室、職員室などを除く)なので逃げるには十分すぎる。でも逃げる人数が多いからちよくちよく隠れようとする場所がカブるんだだけだね。重要なのはどこに逃げるかどう逃げるの2つ。オレの頭でどこまで上手に逃げられるかはわからないけどやるだけやってみよう。

「行くぞ。健闘を祈る」

ユツキが校舎に向かって走り去っていく。カウントは既に8秒を過ぎている。

「それでは、僕も逃げ始めます。頑張りましょう」

最後にニコツと笑ってのぶながはグラウンドの隅へと走っていった。

さて、オレも逃げるとするか。カウントが0になる前にオレは校舎の中へと入る。

『鬼ごっこ開始ですっ！』

ピストルの音と同時に、鬼である3人がそれぞれ別の方向へ走っていくのが窓から見えた。

9月：体育祭 その1（後書き）

こんにちは、絶賛スランプ中の菊地陽です。

今回もお付き合い頂きありがとうございます。

自分で言うのもあれですが、現在スランプです。どんなに考えても話のネタが思いつきません。

どなたかスランプ脱出方法を知っている方はいらっしやいませんか？
しょうか。

駄文ですがこれからもよければお付き合いください。

以上、菊地陽でした。

9月：体育祭 その2

オレは真ん中の校舎の2階の1番奥にある視聴覚室から鬼である正副委員長が走り出したのを確認した。

星園学園には4つの校舎がある。北側の校舎は1年と2年が使い、真ん中が主に文化部が使う教室や倉庫がある。3年は1番南側で職員室や校長室がある校舎、4つめの校舎は東側に飛び出ている運動部の部室棟となっている。その真ん中の校舎の奥にある写真部だか映画部が使う視聴覚室の中にオレは身を潜めていた。ここは暗幕もあるし、グラウンドから肉眼で人を見つければかなり難しい。それにオレの他に隠れている人はいないし、身を隠せる棚やら怪しげな機材がいっぱいあるから見つかる可能性は低いと思う。でも見つかったら逆にピンチになってしまう。ここは校舎の4階の1番奥にある教室だから隠れてやり過ぎすしかできないからね。まあ、ここがマークされることはないでしょ。足音も聞こえてこないしね。

（全員捕まるまでここにいられるかな・・・？）

そんなことはまずない。鬼が多くなるほど行動も考えられたものになってくるし、的確に逃亡者を追い詰めるために連携だつてしてくる。去年もそうだったから。ちなみに去年のオレは341番目に捕まった。鬼が異様に高度な戦略を使ってくるから逃げ切れなかった。

（鬼が多くなる前に、下に戻らないと・・・）

理由は最上階にいと、最終的には逃げ場がなくなるからだ。そうになったら隠れる以外ないんだけど、逃げ道を全て塞ぐことができる人数で来られたらいくらなんでも凌ぎきれない。

辺りの状況を確認するために足音を立てないように歩きながら廊下に出る。下の階からも人の声は聞こえてこない。

（でも油断は禁物）

この鬼ごっこでは一瞬の油断が命取りになる。味方はいないし、

次に出会った人が鬼かもしれない。

『う、うわあああああ!!』

「……………!!」

すると下の階から男子生徒の絶叫と慌しい足音が聞こえてきた。

(誰もいないと思ってたのに……………!)

オレは転がるようにして視聴覚室の中に戻り、扉の陰に身を隠しながら様子を窺う。

「……………」

しばらくしても音は聞こえてこない。うーん……………これじゃあ捕まったのか逃げ切ったのかわからないじゃないか。

こつ、こつ、こつ

今度は足音だけが聞こえてきた。しかも、足音の主はこの階にいるようだ。

(誰だ……………?)

そーつと廊下を見てみるとそこには鬼であることを示す赤いビブスを着た男子生徒がいた。今はこちらに背中を向けているけど、ここに来るのは時間の問題だ。まあ、1人くらいなら隠れていられるから心配ない。あとはいつ隠れるかだ。こつちを見ている時に隠れても無意味だから……………今隠れちゃえ。オレは視聴覚室の入り口のすぐ脇にある機材の後ろに身を隠す。ここは機材が何個か置かれていて、四方を囲むようになってるから見つかっても逃げるための時間が稼げる。

『おい、誰かいたか?』

廊下から声が聞こえる。1人じゃなかったのか……………。

『いや、この校舎は探し回ったが誰一人いないぞ。別のところ行って

みるか？』

『まだ視聴覚室は見えてない。そこを探してからにしよう』

そう言って徐々に大きくなっていく2つの足音。それと同時に早くなっていく心臓の鼓動。オレは息を殺してできるだけ身を小さく丸める。もう見つかるか見つからないかは運次第だ。

「ん・・・誰もいないみたいだな・・・」

最初に入った方の生徒がざっと辺りを見回して言った。よし、そのまま帰れ！

「ここは隠れる場所が多いから、もしかしたら隠れてるかも」

次に入った方がガサガサと機材を弄る音が聞こえてくる。まずい・

・・・このままだといずれはここも・・・！

教室内にある機材を全てどかして次はオレの隠れている場所に生徒がやってくる。

(落ち着くんだ・・・まだ活路はある・・・！)

この状況でオレはもう片方の生徒の位置を確認した。教室の中央で明後日の方向を見ている。これなら何とか逃げ切れるかもしれない。

「よし、最後はここだな・・・」

そう言って生徒が機材に触れた瞬間・・・！

「ていやっ！」

「おおおっ!?!」

思いつきり機材を突き飛ばして、鬼を転ばせた。機材も一緒に派手に転がったけどまあ・・・何とかなるでしょ。

突き飛ばしたのと同時にオレは教室を飛び出した。逃げる当てはないし、逃げている途中で別の鬼に遭遇するかもしれない。でもその時はその時だ。今は背後の鬼から逃げることだけを考えよう。

『ちいっ！逃がしたか！』

『追っぞ！』

もう後ろの2人は体勢を立て直したらしく、こちらを追い始めた。でもでも残念なことにごこの廊下は一直線。いくら相手が3年だか

らってオレの足に敵うわけがない。オレは本気で廊下を駆け抜けた。
『は、速い……!』

『そつち回れ! 挟むぞ!』

ええっ!? まさかの挟み撃ち!? だから言っただよ、鬼が多くなる前に下に行かなきゃって。

背後を確認すると片方が階段で下の階に行ったのがわかった。へえ、それで前の階段に回って挟もうって魂胆だね。んー、でも困ったなあ……。最終的には行き止まりだしどうやって回避しよう(だったら、いつそのこと3階に行っちゃおうかな)

鬼とオレとの間には10m近く差がある。下に行ったやつとの差もそれくらいあるだろう。

「待てよ……。? 下の奴が増援を呼んできたらどうなる……」

4階で今いるのは2人しかいないから、逃げ切ることができるけど下に行って別の鬼を呼ばれたらどうしようもない。開始早々早速ピンチじゃないか。

ここから先は美術部が使う教室が3つ並んでいる。美術室、美術部の部室、展示室という配置で真ん中にある部室は双方を歩き来できるような設計になっている。逃げる方向を変えるには部室を使わせてもらうしかない……!

オレは部室へ飛び込み、一度身を隠した。美術室への扉がオレのすぐ背後にある。美術室から来られたらもう終わりだ。

息を殺して、周囲を見る。鬼ごっこでこんなに緊張するとは思わなかったよホント。

ぎい……

部室の扉が開けられて、先程の鬼の片玉が入ってくる。近づくとを気取らせないためか足音は小さい。バカめ……。既にお前が入ってきたことは知っている!

オレはミロのヴィーナスを模した彫刻の裏にヴィーナスと同じ格

好で隠れていた。ちよつとでも動けば身体の一部が見えるけど、この彫刻自体見つけにくい場所にあるから多分大丈夫なんじゃないかな。

背中に美術室への扉を感じながらオレは鬼を見つめる。このまま何もしないで終わればいいんだけどな・・・。

と、ちよつと気を抜いた時だった、

バタン！

「え・・・ちよ・・・っ！」

背中の扉が開いた。

「ん？そこか！」

それと同時に鬼に見つかる。誰だ！この状況で扉を開けたバカは！全部台無しじゃないか！

どうして開いたのかは知らないけど、もう美術室へ逃げるしかない。オレは美術室にホントに転がり込んだ。あそこからはヴィーナスの彫刻があるからすぐには来られないはずだ。それも頭に入れて隠れていたんだつたらちよつとカッコいいよね。

すぐに体勢を立て直して走り出す。背後を確認すると鬼が部室の出入り口から出て行く姿が見える。やつぱり頭は切れるようだ。鬼のくせに。きつと美術室の出入り口から入ってきてオレを袋の鼠にするつもりなんだろう。

だが、詰めが甘い。

全ての校舎には緊急時の避難用に階段が設置されている。もちろん、この校舎もだ。たしかに鬼の考えでは廊下へ逃げることはできなくなるけど、非常階段には逃げられる。何ならテラスから下の階に飛び移ったって構わない。

一瞬で考えをまとめるとオレは反対方向へ走り出す。

(間に合え・・・！)

窓を勢いよく開けたとき、誰かに手を引かれた。

「おお・・・？」

どこかに引きずり込まれた。すごい窮屈なんだけど・・・今は逃げるほうが大切だから黙ってた。その状態で鬼が教室に入ってくる。窓が開いているってことは・・・非常階段を使われたか・・・」
苦々しく呟く鬼。窓の外をしばらく眺めると諦めたように溜息を吐いた。

『あともうちよつとだったのに・・・ついてねえな』

遠ざかる足音。どうやら逃げ切れたらしい。立ち上がって大きく背伸びをする。窮屈だったから腰とか膝とか痛い。

「はぁ・・・間一髪だったね・・・」

聞こえてくる声。この聞き覚えのある凜とした声は・・・

「・・・水希？」

「やつほー」

手をひらひらさせた水希がいた。オレの手を引いたのは水希だったらしい。

「どうしてここにいるの？」

「それはボクのセリフなんだけど・・・ソラくんのせいでボクまで見つかったちゃうところだったじゃないか」

別にオレは悪くないような気もするんだけど。見つかるか見つからないかは水希の責任でしょ。

「それじゃ、オレはこれで行くから。捕まらないように気をつけてね」

さつさと次の隠れ場所に移動しようと歩き出したとき、また水希に呼び止められた。

「ねえ、ソラくん。それはちょっと酷いんじゃない？人を巻き込んでおいて置き去りにして行くの？別にボクは1人でも構わないけどさ、ソラくんの常識が問われる行為だよ。もつとしっかりした人だと思っただのに自分の都合に巻き込んだ人を普通に置いていくなんてそれは理解しがたい行動だとボクは」

「・・・要は「ボクも連れてって」と言いたいんだろう。それな

ら素直にそう言えばいいのに。すべてを言い終わって期待した目で見てくる水希。しばらく見つめあったあと、オレはゆっくり口を開いた。

「・・・じゃあ、一緒に逃げる？」

「うんっ」

こうしてオレは水希と一緒に行動を開始した。

俺は3年2組の教室で鬼の出方を窺っていた。ここは南校舎2階で3年の教室と特別教室がいくつか並んでいるフロアだ。どうして俺がここに隠れているかと言うと、この学園の校舎の配置は南校舎が最南端にあり、他の校舎が全て北側にあるからだ。南校舎の2階からは全ての校舎の動きが見える。見晴らしのいい校舎で上にも下にも逃げられる2階、更に右にも左にも逃げられる真ん中の教室

3年2組の教室に隠れていた。まあ、挟まれたらその時に解決策は考えるが、その危険性もない今はゆっくり時が過ぎるのを待たせていても問題ない。

『くそ・・・橋はどこだ・・・』

『こっちにもいないぞ』

『3階の奴らと交渉して来い。これ以上探すのは無意味に思えるからな』

廊下に響く複数の声。俺はそいつらから逃げている最中だ。

星園学園の鬼こっちはいくつかのローカルルールが存在する。

それは「グループ」を作っていいというものだ。「グループ」は複数の鬼で結成される簡単に言えば、特定の人を徹底的にマークするための特殊部隊のようなものだ。そして俺は4×400mリレーでかなり目立ってしまったため、陸上部で結成されたグループにマークされている。いくら俺でも専門の奴ら相手に逃げ切る自信はない。

多分捕まったら陸上部に勧誘される。部活とか面倒臭いからやりたくないというのが本音だ。のぶながもきつと別の陸上部員で結成されたグループに追われていることだろう。1時間は軽くかかるこの鬼ごっこをずっと走りきって逃げるのは不可能に近い。それに俺にはのぶながのような強靱な体力はないから、極力かけっこは避けたい。

(ま、せいぜい頑張って探し回ってくれや)

俺は窓の外の様子を見る。南校舎の裏側はグラウンドになっているのでグラウンドの様子も簡単に把握することができる。

「……?」

外を見ていると廊下から気配を感じた。もう居場所が割れたのか？息を潜めて辺りを見てみるとそこにはグループの1人がこの教室に入ってきた。やばいな……。ここは普通の教室だから見つかったら逃げ場は作りにくい。どうせなら机を動かしてバリケードでも作っておけばよかったな。

「どうだ？見つかったか？」

別の部員が入ってきた。これでこの教室にいる鬼は2人。ますます不利な状況になっていく。別に不利になっても困らないように策はあるんだが、まだ披露する時間じゃない。早く披露して対策を練られたら秘策の意味がないからな。

「ここから橘の匂いがするのは確かなんだけどな……」

何だお前は犬か。それとも変態か。鬼ごっこじゃなければ側フルボッコだが、ここはグツと堪える。

(……隠れてたら更に不利になるんじゃないか?)

突然俺はそんなことを思った。ここで集合されたら逃げ場は完全になくなる。今隠れている教壇の陰だっけいつ見つかるかわからない。

もし、ここにグループが集結するのだったらさっさと姿を現して連携を崩してやればいい。

大人数で搜索されたらさすがに隠れられない。だったら、包囲網

が完成する前に動けばいいんだ。裏の裏まで読んで行動しないとこの勝負は生き残れないぜ。そうと決まれば、さっさと動くまでだ。

「よお、もしかして俺を探してる？」

立ち上がって余裕たっぷりの表情を作りながら部員の2人を見る。一瞬動揺した表情を浮かべたがすぐに目的を思い出したらしく、声を上げた。

「橘雪時がいたぞおおおおお！！！！！！」

うるさいなコイツ。

俺は教団の上に飛び乗り、高らかと宣戦布告する。

「俺を捕まえたいんだつたら、本気で追っ駆けてきてみる。陸上部なら捕まえられるかも知れないぜ？」

「いつまでそんな余裕でいられるかな？」

「そういうお前もこれから陸上部になるんだよ！」

ほぼ同時に俺に向かって走り出す2人。なんつーか、周りの見えていないバカつて感じた。ここは教室なんだから進行を阻害できるものはいくらでもある。例えば・・・机とかな。

「うらああー！」

俺は近くにあつた机に飛び移る。そして2脚のイスを掴みそれぞれの部員に向かって投げた。これは進行を妨害するものであつて決して人体を狙つたわけじゃない。当たつたらそいつがマヌケなだけだ。

「う、うわあ！」

「卑怯だぞ！それでも陸上部のホープか！」

俺はまだ陸上部に入ると言っていない。それに・・・

「俺が卑怯だつて？はっはーお前らまさか俺の中学時代を知らないわけじゃないよなあ？」

自慢じゃないが、俺は中学生の頃かなりの不良だつた。学校に行つては気に食わない生徒に喧嘩を売り圧勝して帰る。それだけの日々を送っていた。そんなある時ボコボコにした奴がたまたま高校生の兄貴を持つてて、その兄貴が高校にまで話を持ち上げちまつた。

そんなんだから俺と同級生じゃなくても俺のことを知ってるやつらは山ほどいる。こいつらだって一度は聞いたことあるだろ。

俺は机から飛び降りて今度は机を豪快に蹴飛ばす。これで完全に通路は封鎖できた。部員どもが机をどかしている時間で廊下に逃げることが不可能じゃない。ましてや、俺の足なら完全に振り切れるだろう。俺は教壇側の入り口から廊下へ駆け出す。そのまま1階に逃げて連携を完全に崩してやろう、と思っていたんだがここで計算外の出来事が起きた。

『いたぞ！ここで挟め！』

前方には数人の部員が階段への通路を完全に塞いでいた。急いで方向を変えると

『よっしゃ！これでお前も陸上部だ！』

後方にも同じようなやつらがいた。

「ちっ」

これは困った。ジリジリと俺との距離を詰めてくるグループ。かなり用心してるみたいだな。教室への入り口も完全に塞いでやがる。

「今度こそ捕まってもらうぞ橘……！」

リーダーと思われる3年の男が緊迫した様子で言う。人捕まえるのにそんなに緊張するもんなのか？捕まえられる側の俺は全く緊張していないんだけど。

逃げ道を探しているのを気取られないように辺りを見回す。前後には迫り来る陸上部のグループがいて教室への入り口は机やイスで封鎖されている。用意周到だなオイ。そしてそのまま左側に視線を移したときだった。

「………！！」

中校舎4階のあれは……美術室だったか。の窓が1つだけ開いていることに気が付いた。大方誰かが追い詰められて非常階段に逃げるときに開けっ放しで出てきたんだろう。

(……一か八か)

俺はここ2階から4階の美術室へ飛び移ろうと考えた。まあ、い

くら俺でも4階まで跳ぶことはできない。だからせめて向こうの校舎の2階に着地したい。そして、ここから左に数メートル進むと中校舎と南校舎を繋ぐ渡り廊下がある。渡り廊下まで進めば、あとは逃げ切れるんじゃないか？

(やってみつか。でないと捕まりそうだしな)

俺は窓をゆっくりと開けた。

「何する気だ？そんなところを開けたって何もできないのは変わらないぞ」

部長が嘲笑う。わかってないな・・・3年なのに、何にもわかってないぞ。

「はあ？変わらないって？あんたも視野が狭いな」

だからこっちも嘲笑う。

「逃げ道がないなら、作ればいい」

言い残すと俺は全身のバネを遺憾無く使って窓の外へ降りる。屋根は平らでこれといった障害物も無いから走りやすい。でも、周りの奴らから見つかりやすいっ！欠点もあるが・・・まあ、問題ないだろ。

「あばよ、陸上部」

窓を勢いよく閉めると同時に俺は駆け出した。屋根の上はちょっと滑りやすくて危なかったが、何とかバランスを保ちながら渡り廊下へと走る。

「何だアイツ・・・人間じゃないのか！！」

人間だバカ。

そのまま走り、ちょっとだけ盛り上がっている屋根の一部分を使って大きく跳躍する。失敗すれば全身を渡り廊下の壁にぶつけて呆気なく捕まる。そんなマヌケな結末は死んでも迎えたくない。

頂点に達したところで廊下の屋根に手が届く。そのままよじ登り、屋根の上をもう一度駆けた。今度の目標は非常階段。あそこから4階の美術室まで上って、中校舎に逃げるつもりだ。そのあとのことあまり考えていないが・・・その時になったら考える。今は逃げ

ることが最優先だ。

茶髪ポニーテールが屋根の上を駆けるといふ奇妙な光景を見ながら、オレと水希は茂みに姿を隠していた。

中校舎は鬼が増えだしたので非常階段から外へ避難した。ここは南校舎と中校舎の間にあるちよつとした空間だ。ここはお昼休みに弁当を食べる人たちで結構賑わうんだけど、今はあまり人がいない。だから鬼の姿もない。1番安全な場所みたいだ。

「ここなら誰もいないっばいね・・・」

横の水希は疲れたのかぐでーっとしていている。これっくらいで疲れでもらっちゃ困るんだけどなあ・・・。

「はっはっは！ついに追い詰めたぞ深海ソラちゃん！」

頭上から気持ちの悪い声が聞こえてくる。

「えー・・・『女装部』のみなさんだったのかあ・・・」

女装部だった。名前からもわかるとおり、女装を嗜む不健全で不健康で陰湿な奴らが集まる部活だ。どうせ部内でグループを作っておレだけを狙いに来たんだろ・・・。

「今日こそは堕天使エロメイドになってもらうぞ！」

「それ某人気ラノベのパクリだろ！怒られるぞ！」

エロメイドになるなんて絶対に嫌だ。そんなものを着るくらいならさっさと捕まっちゃる！

「水希・・・逃げるよ　　ってあれ？」

隣を見ると既に女装部の部員に捕まった水希がいた。い、いつの間・・・！

「ソラちゃん、お着替えの時間ですよ」

「く、来るなああああ！」

絶叫と同時に走り出す。いやだ！ついこの間メイド服を着て優勝したばつかなのにまた着るなんて死んでも嫌だ！！

駆け出すと周りからぞろぞろとメイド服を着た男子生徒が数名現れた。なんだこの地獄絵図は！コイツら自分の姿確認してきたの！クオリティが酷いことになってるんだけど！

「ソラちゃああああんんん！！！！」

気持ち悪い声で自分の名前を大合唱される。これは嘔吐レベルの代物だ。今まで数々の女装部の強襲を逃れてきたけど、これほどに気持ち悪いのは初めてだ。くそ・・・今日は本気ってワケか・・・！

自分たちで着たスカートが走っている最中に捲れたり、ハイヒールで走るから次々と足首を挫くバカが続出している中でオレは再び中校舎へと逃げた。追っ手は女装していなかった部長とその側近4人。てつきり運動不足かと思っていたけど、普通に走れるじゃん！結構速いし！

「逃がさないからな。ここで絶対に捕まえる・・・！」

「そして、メイド服を着させて・・・」

「ご奉仕！！」

「ぜつつつつつたいに嫌だ！！！！」

コイツらにご奉仕するって・・・うえ。メイドコンテストでの一件が思い出されて吐き気を催す。あんなのはもう嫌だ。

勢いに任せて3階、4階へと駆け上がっていく。つか、こっちが疲れてきた・・・。あ、逃げるのに夢中で考えてなかったけどこの先は屋上しかない。さて・・・どうやって逃げるかな・・・。

窓の下の中庭をのぶながが通り過ぎた。アイツも別のグループにマークされていることだろう。

俺は中校舎4階の美術室で息を整えていた。流石に屋根を走ると言うのは無理があったらしく、俺の身体に甚大な疲労を残している。

どうやら伏兵のようだ。2人の部員は俺に向けて真っ直ぐ右手を伸ばしてくる。

「くそが・・・！」

俺は走りながら突き出された右手を受け流すように身体を捻る。

「うお・・・」

そのついでにバランスを崩して、一気に減速してしまう。

「今だ！一気に囲めえ！」

「こうなったら・・・！」

これがさつき言った秘策。ここには武器も相手を妨害する障害物もないが、俺には2本の腕と脚がある。何も使えるものがないなら元からあるものを使えばいい。

「おうぐっ！」

「いえ・・・げ・・・っ！」

前方に回った2人の腹に蹴りを入れて、

「ぶべらっ！」

後ろから近づいていた1人の顔面の（手加減して）殴り、

「ぶほっ」

「いげっ」

左右に広がった奴らの足を掬って転ばした。これで再び逃げ道は作られた。あとは倒れながらのタッチに気をつけてジャンプしながら部員の上を越えるだけ。それでまた走ればいい。

「お、鬼ごっこでここまでするかあ！」

「うるせえ！お前らだって鬼ごっこをネタに陸上部に勧誘しようとしてんじゃねえか！人のこと言えるんかこらあ！」

ジャンプで足元に倒れている部員を飛び越えながら階段へ向かう。2つ飛ばしで階段を上りながら気付く。

「あ・・・この先、屋上じゃねえか・・・！！！」

背後からは生き残りが怒涛の勢いで追って来ている。例えるなら・・・あれだ。思い出せないけど。

とにかく上は屋上。逃げ場はない。ここまで来たらもうどうに

もなれという感じだ。ここまで逃げていけば結構上位の方に食い込んでるんじゃないか？

中校舎屋上。

迫り来る女装部。

その手に握られているのはどこからか取り出したメイド服とチャイナ服とバニースーツとスク水。それ全部オレに着ると言うのかお前は。ま、まあ・・・チャイナ服なら着てみたいかなあ・・・。

「ここまでだ深海ちゃん。大人しくこの服を着てもらおう」

オレを捕まえるのが目的なんじゃなくて女装してもらったのが目的なんだ。だったらさっさとご注文の服を着て退散してもらったほうが楽なんじゃ・・・。

「わかった。要求には応じるけど、着るのは一着だけだからね」

「・・・きたああああ！ツンデレソラちゃああん！！」「」

叫ぶな。誤解されるでしょ。

部員からチャイナ服（やけに肌の露出度が高い。胸元とか）を受け取り、物陰に隠れて着替える。時々覗きに来ないか確認しながら服に足を通していくけど・・・。

「ね、ねえ、これちょっと露出度高すぎない・・・？」

何か最近女装することに対して恥じらいがなくなってきた気がする。全部ユツキと出たメイド服コンテストが原因だ。恨むぞユツキ・・・！

もじもじしながら女装部の前が出る。

「・・・いやあああああああ！！！！」「」

歓喜の絶叫を上げてカメラで撮影する部員を蹴り飛ばしたあと、部長と正面から話し合う。

「さ、これで退いてくれるんだよね？」

「まさか。ここまでエロい深海は貴重だからな。捕まえて縛って弄

ぶつもりだ」

捕まえて縛って弄ぶ・・・？それって最こ　　じゃないよ！ぜんっぜん！

「その白い胸元やむっちりとした太ももは女性にも勝る代物だ。更にそのあどけない容姿と高すぎず低すぎない声は男女問わず見る者を全て虜にし」

「もういいよ！そんな自分の魅力に目覚めたくないっ！」

なんでこんな奴に自分の女装姿についての魅力を語られなくちゃいけないんだ。

ばんっ！

すると突然屋上のドアが開け放たれ、その向こうからポニーテールを揺らしてユツキが走ってきた。

「ユツキ!？」

オレが言うと、

「誰だお前は！こっちは今忙しいんだ！お前みたいな美女に構ってる暇はねえんだよ！」

「誰が美女だ！よく見てみる女好き！」

コイツは追い詰められるとすぐ取り乱すらしい。

ユツキの後ろからは大勢の鬼が雪崩れ込んできている。

「ねえユツキ、君は後ろの鬼の軍団が見えているのかな？」

「見えてるに決まってるだろ・・・。くそつたれ、お前がこんなところでチャイナ服なんか着てるから俺まで呼び込まれたじゃねえか」別にオレのせいじゃないはず。隣で鬼の軍団の対峙するユツキはかなり消耗しているようだ。

「橘・・・今度こそ追い詰めたぞ・・・！」

「こっからじゃ逃げられないもんな！」

「観念しろ・・・!!」

じりじりと歩み寄ってくる鬼の軍団に対してユツキはつまらなそ

うに鼻を鳴らした。

「言つたる。逃げ道は元からあるんじゃない、作るモンだつて」「ここは屋上だ。いくらお前でも飛び降りて無事でいられるわけがない」

その言葉に対してユツキは反応せず、無言でオレの目を見つめてきた。もしかして・・・コイツやる気か？

(ここは黙って協力しろ)

ユツキはそう目で訴えてきた。なら、オレも何も言わずに協力してやろう。今のユツキは高校に入ってから1番楽しそうな顔をしているからね。こんないい表情することなかったのに。

オレは屋上の柵ギリギリまで下がる。ユツキとの距離は5mちょっと。でも、ユツキの運動能力ならこの距離でも十分トップスピードに乗れるだろう。

「何をやる気だ・・・」

オレはユツキと呼吸を合わせる。これでオレが失敗すればユツキは転落して死んでしまう。たかが体育祭でそこまでやるかと笑われなくても仕方が無いけど・・・悪友の信頼には応えなきゃいけない。

「行くぞソラあ！」

オレも大声を張り上げる。

「よっしゃ来いっ！」

ユツキのスタートダッシュと同時に後ろの軍団も駆け出す。だけどユツキの速さに追いつける者は誰一人おらず、誰も近づいていない。

順調にスピードに乗ったユツキはオレの目の前で跳躍する。ユツキの右足がオレの手の上に乗った瞬間、オレはその手を一気に持ち上げる。要は2段ジャンプだ。ゲームとかで見たことあるあのジャンプ。それを利用してユツキは背後にある南校舎の屋上へと飛び移ろうというのだった。

手から足が離れた瞬間、後ろを確認する。もちろんユツキがどうなっているかを確認するためだ。

ユツキはエアジョーダンのあのマークさながらの跳躍を見せた。足を大きく前後に開き、ポニーテールは風になびく。手はあのマオまんまだったけど、無事にジャンプできたようだ。空中を飛ぶユツキを見ている間は時間が止まったように思えた。ドラマとか映画でしか見たことの無いような大跳躍が目の前で見られることに感激していたのかもしれないし、ユツキの才能を羨ましく思っていたのかもしれない。それにしてもバランスを崩さないなんて、大した体幹の持ち主だな。着地は難しかったようで、足を着いたと同時に前方に転がった。

「ユツキ！」

思わず声をかけてしまった。

それでもユツキは怒鳴り返すことなく、黙って親指を立てた手を上げた。

「……あ」

そこで自分の置かれた状況に気が付く。目の前には鬼の軍団が迫ってきている。

もう逃げ場は無い。

オレはそこで鬼に捕まった。

結局優勝は校舎間を飛び移ったユツキのものとなり、鬼ごっこは幕を閉じた。

体育祭の総合優勝はオレたちのクラスが圧倒的点数で勝ち取り、ユツキとオレは閉会式が終わったあと即職員室へ行った。

ちなみに、連覇できなかったのぶながは不機嫌そうに頬を膨らま

せていた。

9月：体育祭 その2（後書き）

こんにちは、菊地陽です。

正直この体育祭編はボツですね。あまり感情移入できずに書き上げてしまいました。

あと、私ってシリアスな話とか書けないんですね。うすうす感じていますけど・・・。

次回からはしっかり書きますっ！よければお付き合ってください！

以上、菊地陽でした。

9月：すれ違う2人

「あいつ、深海先輩っ！」

廊下を歩いていると緊張した声で誰かがオレを呼んだ。

「えっと・・・どちらさまですか？」

後ろの振り向くと、セミロングの茶髪でウェーブしたパフィーヘアが印象的な可愛い女の子が立っていた。オレよりも身長が低く、制服のカラーが赤いから多分1年生の子だろう。でもその子がオレに何の用なのかな？

「あ、いきなり名乗りもせずにはすみませんっ！私、1年3組の七草ささく陽さやうと言いますっ！今日は深海先輩に渡したいものがあったて来ました！」

・・・かなり緊張しているようだけど、オレに何を渡すつもりなんだろうか。この頃は後輩の女子からもメイド服とかゴスロリを渡されることもあるから、もしかしてこの子もそういう類の・・・

「き、汚い字ですが、よかつたら読んでくださいっ！」

そう言っつて両手をオレに向かって突き出す七草さん。その手には淡いピンク色の封筒があり、可愛いハートマークのシールが貼られていた。

・・・ちよつと待てよ？これつてもしかして、ラブレター・・・？

いやいやいや、オレには水希がいるんだしここまで来て水希を裏切るわけにはいかない。でも、この子の手紙を読みもせずに返すのも悪い気がするし・・・いけない、考えれば考えるほど何をしたらいいのかわからなくなってきた・・・！オレは一体どうしたらいいんだ！

「あの・・・もし迷惑だったらこれで帰りますけど・・・」

七草さんの表情が悲しげなものになる。いやいや、別にあなたが

迷惑だなんて微塵も思っ てません！大歓迎です！

「全然迷惑じゃないよ。むしろ嬉しいくらい」

にっこりと笑いながら手紙を受け取る。すると七草さんは零れんばかりの笑顔を見せた。顔もちよつと赤くなつてゐる。この笑顔が見られるんだつたら、あとで受ける刑罰なんて軽いものに思えてくるなあ……。でも……。いいのか深海ソラ、軽はずみでそんなことしてあとでどうなつても知らないぞ。

「あ、あと、早めにお返事聞きたいので、できれば3日以内には……」

さつきより顔を赤らめて俯きながら言う七草さんが可愛くないと言えは嘘になる。めっちゃ可愛い。今までオレの周りにはボーイッシュな髪型の水希とツインテールの美春がいたからか、セミロングでふわふわした髪型の女の子がとても可愛く見える。はあ、何か癒されたな……。

「あら？こんなところで何をしているんですか？」

ぽーっとしていたところに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「の、のぶながか……」

「む……何か気に入りませんねその言い方」

のぶながにしては珍しく、頬を膨らませて怒つたような表情を作つた。のぶながも十分可愛いけどさつきの七草さんよりは……

「……ね、ねえ、のぶなが」

頭の中を過ぎつた嫌な予感。気のせいかさつきから冷や汗が止まらない。

「ん？何ですか？」

にこにこ柔らかな微笑を浮かべながらこちらを見るのぶなが。

その表情の中に邪悪さを秘めているような気がするのオレだけだろうか。

「もしかして……見てた……？」

今のやり取りをのぶながに見られていたとしたら……これはかなりマズイ展開になる！

のぶながはやっぱり笑顔を崩さず、更につこりと笑いながらオレを地獄へ突き落とす一言を口にした。

「はい？」

「あの・・・長門先輩」

ボクが日直を終えて、職員室から帰ろうとしたところで1人の男の子がボクの名前を呼んだ。

「僕、1年の小鳥遊雪村たかなし ゆきむらって言います。今お時間いいですか？」

さわやかな顔で髪の毛はちゃんと整えられていた。紳士のような雰囲気きんしを漂もよほわせる小鳥遊くんはニコリと柔和な笑みを浮かべている。なんか・・・大人っぽくてカッコいいなあ・・・背も高いし。

「んー・・・別に構わないんだけど、今ここじゃダメ？」

「ちょっと、個人的で自分にとって大事な話なので無理です」
うーん、今日はボクが夕食の当番だから早く帰らないといけないんだけどなあ・・・それにこの子ダメって言っても退いてくれそうにないし・・・。

彼に連れられたのは中庭。この間の鬼ごっこでボクが捕まった場所だった。

「長門先輩・・・」

「ん？何かな？」

できるだけ気付いていないような素振りを見せる。だいたい何を言いたいのかわかってるよ。

「ずっとあなたのことが気になっていました。体育祭でも見事な走りを見せ、僕は更に長門先輩のことが好きになっていきました。もうこの気持ちは抑えられません。先輩がどう受け取るかはご自由ですが、とりあえずこの手紙で伝えさせてもらいます。どうか受け取

ってください」

ボクは彼が差し出した手紙を受け取った。受け取ると彼はもう一度礼儀正しく頭を下げた。

ボクを好きでいてくれることに対しては嬉しいと思うけど、それを受け入れられるかは別問題なんだよね。第一、ボクにはずっと想い続けてきた人が傍にいるわけだし。それに小鳥遊くんのルックスならボクなんか狙わなくても十分モテるんじゃないのかな？

しばらく間を空けてからボクは言う。

「ありがとね……。でも、この手紙は」

「待ってください。その先は、また後日お聞かせください。実は緊張が解けてもう膝が笑ってるんです」

苦笑いしながら自分の膝を指差した小鳥遊くん。

「あはは。そんなに緊張しなくてもいいのに」

ボクもとりあえず笑っておいた。

「それじゃ、返事はまた後日ってことでいいんだよね？それまで考えさせてもらうよ」

それだけ言い残すとボクは踵を返して校舎の中へと戻る。

と、校舎に足を踏み入れたときだった。

「流石です水希姫」

茶髪でポニーテールの橘くんがいた。

「あれ……。？まだ学校に残ってたの？」

「おう。体育祭からちよつと陸上部の勧誘がうるさくてな」

橘くんの走りはすごかったからね……。陸上部が欲しがるのも無理ないと思うよ。

「どこかの女装癖男とは違って、しっかりしてるな。なんというか、自分の想いをしっかり持つてる感じがする」

「何それ……。別にソラくんは女装癖なんかじゃ……。」

否定できないからそこで言葉を止めておいた。

「それに、手紙のもらい方と最後の『考えさせてもらうよ』ってセリフ。流石だなあと思った」

その言葉にちょっとだけ危機感を覚える。あれ・・・もしかして・

・
「橘くん、もしかして・・・見てた？」

恐る恐る尋ねると、橘くんはゆっくりを首を縦に振った。

「当然。対応に慣れてるってことは、きつとモテモテだったんだな。水希ちゃんは」

んー・・・否定はしないけどね。てへっ

帰宅したオレは、水希に見つからないように部屋に入って手紙の封を切った。淡いピンクの封筒の中には、水色の手紙が入っていた。生まれてこの方ラブレターなんてもらったことは一度もない。だから今はとつてもハッピーな気分なのです。手紙には丸っこい可愛らしい字で、言いたいことだけが簡潔に綴られていた。

《あなたのことが好きです》

この一文を見るだけでどれだけ癒されるだろうか。でも、この子がオレの性別をちゃんと認識していないという可能性もある。そう考えると興が削がれるな・・・。そんなことはないか。オレだって学校内では男子用の制服着てるし、仕草だって男のものだ。どっからどうみても女子と見間違えることはないだろう。

でも、断らなければいけないのはわかってる。

オレは水希を泣かせないと約束したからだ。これでオレが二股でもかけたら水希にはつられ、ユツキにはボコボコにされて姉貴からも侮蔑の眼差しで見られてのぶながにはキツイ精神攻撃をされることだろう。どう足掻いてもその地獄からは抜け出せない。それに、オレは10年もの間抱き続けた気持ちを忘れることはできない。最初水希が星園学園に転入したときは正直驚いた。運命さえ感じた。

それからどうにかしてオレが秋谷くんだと信じさせようとしたあの気持ち。こっちはわかってるのに向こうはわかっていないというもどかしさ。あの気持ちを忘れたら人間終了だと思ってる。だから七草さんには悪いんだけど、この話は断らないといけない。それがオレのけじめだ。

「ソラくん？ご飯できたけど・・・」

「うわぁっ！」

急に声がかかったからびっくりして思わず叫んでしまった。2階に上がってくる足音とか全然聞こえなかったんだけど！わざわざ物音を立てないように歩いてきたの！？

「え？何かあったの？」

まずい、この状態で入ってこられたら完全に怪しまれてしまう・・・！

「ちよつと、イスごと倒れちゃっただけだよ・・・。大丈夫大丈夫・・・。あはは」

紛らわすように最後に笑いを入れたのがいけなかったのか、ドアの向こうで水希の声が急に真面目なものになった。

「ねえ、前にも言ったと思うんだけどさ、ソラくんて何か隠してるときすぐ顔に出るんだからね？」

「は、はい・・・わかっております・・・」

「今の最後の『あはは』って言うのもかなり怪しい笑い方ではあったけど・・・何か隠してる？」

ドア越しで顔が見えないから余計に怖いっ！今ドアの向こうで水希がどんな顔してるかわからないから怖い！

「な、なな何も隠していませんわよっ！？」

しまった、焦りすぎて女口調を喋っちゃった。

「んー、今はそれくらいで許しておくけど、万が一何かあったらその時は許さないからね」

あれ・・・？今日は妙にすぐ退いていったぞ？いつもなら「うふふ、あとでいっぱい虐めてあげるから」とか言って去っていくはず

なのに……。

……水希も、何か隠してるな？

でも、それについて問い質したらこっちのこととも言わないといけなくなる。水希に何もしないのにこっちだけが痛い目に遭うのは御免だ。

「ま、いつか」

オレは手紙を折らないように引き出しの奥に入れた。

聞いてこないかと思っていたけど、案の定拷問にかけられた。

「ほおら、こっとういところ弱点なんでしょ？早く言わないともっと責めるからねえ……うふふ」

「ひえっ！や、やめてくらひゃいみじゆきしゃまあ〜！ひゃん！」
久々の女王様モード全開にオレの身体も歓声　悲鳴を上げている。今オレは全身を縄で縛られて（服の上からだからね）、筆で首筋をくすぐられている最中だ。この子……どこで縄の縛り方とか筆で弄るテクニクを覚えて来たんだろう……。

「ちょ……いい加減そろそろやめてくれると……」
すると、水希はサド気質全開の笑みを浮かべて首を傾げた。

「え？何言ってるの？ソラくんが自白するまで、絶対に逃がさないからね」

今夜は長くなりそうだ。

翌日、朝の朝礼から教室へ戻ろうとしている最中だった。

「あ、深海先輩」

昨夜傷ついたオレの心身を癒してくれる天使の声が背後から聞こえてきた。

「おはようございますっ。今日もいい天気ですね」

礼儀正しく頭を下げる七草さんに、オレも頭を下げる。

「おはよ。今日も校長先生の話長かったよね」

他愛もない世間話でもして、少しでも手紙のことを忘れさせようとする。昨日家では断るとは思ったけれど、このオレと話している時の笑顔を見ているとその決心が揺らぐ。断らなきゃいけないのはわかってる。でも、この笑顔を傷つけることはできないというオレの良心だかワガママが邪魔をする。

けれども、オレは七草さんや水希のことはこれっぽっちも考えていない。オレの本心は

「あ、そういえば……」

七草さんが何かを思いついたように手を叩く。ついに思い出してしまうたか……。

「あの、深海先輩……。昨日のお手紙の返事、いつ聞かせてくれますか？」

顔を赤らめて上目遣いで言うなんて反則でしょ。うーん、あんまり延ばすとあれだからなあ……。

しばらく考え込んだ結果、今日の放課後に言うことに決めた。早くはじめをつけないと、色々と危ないからね……。

「じゃあ、今日の放課後でいいかな？」

どこに呼び出そう……。

「ベタだけど屋上にでも……」

そういうと七草さんは昨日のように満面の笑みを浮かべて

「はいっ」

と嬉しそうに言った。

あとはオレが断る決心を固めればいいだけだ。まったく傷つけな
いで、なんて無理に決まっているんだからできるだけ負う傷を軽く
するようにながけよう。

「では、これで失礼します。放課後楽しみにしてますね」

教室へ走り去っていく、七草さん。あ、そうだ。どうしても聞い

ておきたいことがあったんだっけ。

「ちよつと待って！」

足を止めた七草さん。向こうに何かを言わせる間を与えずにこっちが続ける。

「七草さんさ・・・オレのこと女だと思っただけ？」

放課後「ごめん」って言ったなら「えーっ！深海先輩にこの服似合うと思っただのにー！」とか言われなかったための保険だ。コスプレ目的で近づいてきたのかも知れないしね。

「そんなわけないじゃないですか。深海先輩はとっても魅力的な男性ですよ」

・・・不覚にもその笑顔にドキツとしてしまった。

「それと、私のことは『七草さん』じゃなくて『陽』って呼んで下さい。私も深海先輩の迷惑じゃなければ『ソラ先輩』って呼ばせてもらいますから」

だんだん取り返しのつかないことになってないか・・・？

「ああ、そう・・・それじゃあ、また放課後にね陽ちゃん」

「はいっ。楽しみにしてますねソラ先輩」

七草さん・・・陽ちゃんはそのまま校舎の中に消えていった。はあ・・・年下の子の笑顔にドキツとしてしまうなんて、オレもダメだな・・・。しかも何この正統派学園ラブコメの流れ。この物語そういう話だったっけ？この話は非日常的な人たちが送るイレギュラー作品じゃなかったのかな？というかオレが美少女に見間違えられるって時点で既にイレギュラーでしょ。

「おいソラ。なんだそのエネルギーギッシュに血走った目は」

お昼休み、お手製のお弁当を食べていると急にユツキにそんなことを言われた。

「誰がエネルギーギッシュに血走ってるって？やだなあー、オレがそん

な目をするわけじゃないじゃないかー。あはは、ユツキは変な奴だなあー

「のぶなが、これソラじゃねえぞ」

「そうですね。ここまでご機嫌に笑っているソラはソラじゃありませんね」

隣にいるのぶながにまで否定された。別にどこも変わってないよね？いつもどおりのオレのはずなんだけど。

「お前なんかいいことでもあったのか？」

ユツキの目がスツと細くなる。この目は探りを入れている目だな。長い間接してきたからユツキの些細な表情変化は既に研究済みだ。こつこつ目をしてきたユツキは確実に何かを探ってくる。

「別に何も無いけど・・・？どうして？」

だがその手には乗らない。どうせ誘導尋問するんだから。

「お前が露骨に笑うときは大体何か隠してるからだ。今までお前が普段の日常で大声で笑ったことがあるか？」

「・・・ないね」

なかった。

「いや、でもオレにも心境の変化というものがあってもおかしくないんじゃない？」

誤魔化すようにから揚げを1つ口に運ぶ。ふむふむ・・・味付けは悪くないな。流石は冷凍食品だ。

「ソラ、本当は心当たりがあるんじゃないですか？」

「だから何も無いって言ってるじゃん」

「そうですね。だったら昨日の放課後のあれは一体何だったむぐっ」

全てを言われる前にのぶながを物陰へと連行する。あのユツキの前でそんなことをベラベラと話されたら一環の終わりだ。

（のぶなが？あのことは黙っておいてくれると嬉しいんだけどなあ・・・）

（何ですか？何か疚しいことでもあるんですか？）

(ないけど・・・万が一水希に聞かれたらオレの立場がなくなるんだよ。だから黙って欲しいな)

(わかりました。長門さんのためというなら、ここは協力してあげましょう)

のぶながが物分りのいい男(女)でよかった。

「ただし、今度1日僕のメイドになつてくれたらですが」

くそ・・・条件付きか・・・！仕方がない、もうメイド服は慣れたからいくらでも着てやる。

「わかった。今度ね。約束するよ」

するとのぶながは優しく微笑んだ。

『ほお・・・。2人とも同じような境遇ってわけだな・・・』

遠くでパンをかじりながらユツキが何か言っただけど、よく聞こえなかった。

ユツキの妙な視線を感じながら午後の授業を終えて放課後。待ちに待った放課後だ。オレは妙な連中に追跡されないように早めに仕度を終えて教室を出ようとすする。

「あれ、ソラくんどこ行くの？」

廊下に足を一步出したところで水希に声をかけられた。何だつてこんな悪いタイミングで話しかけてくるんだ！授業中でさえ一言も話しかけてこないくせに！

「えっと、ちよつと職員室にね・・・あはは」

しまった！つい癖でまた笑っちゃった！笑ったままの顔で水希を見るとその目は昨夜オレを縛りつけた女王様と同じ目をしていた。いやいや・・・学校でそつちのモードに入るわけじゃないよね？

女王様モードにはならなかったけど、代わりに無言でオレに歩み

寄り胸倉を掴みそうな勢いで睨みつけてきた。

「・・・これで最後だからね。ホントに何も隠してないの？」

いつもの水希じゃないってことは昨日からわかった。学校でオレに話しかけてこない水希がクラスメイトの視線が集まる中でオレに声をかけるといふのはとても不自然だ。

「何も・・・隠してません・・・」

この瞬間オレはバカだと思った。水希を傷つけないためにウソを吐いて、結局は第三者にも水希にも傷を負わせてしまう。何度その愚行を犯したら気が済むだろうか。

「ふーん・・・」

納得していない様子だったが、水希はそのまま教室を出て行った。それにしても・・・

それにしても、あんなに寂しそうな水希の目は初めて見た。

美春に告白された時だって、オレが秋谷岬だと名乗っていたと告白した時だってあんな表情をしたことはなかった。オレの『もしも男の娘が本気でグラビア撮影したらどうなるか』を見た時だって、蔑みの目では見られたけどあんな表情はしなかった。

「・・・」

水希の去ったあとの誰もいない廊下を見つめる。オレの決意は固まった。陽ちゃんには悪いけど、今回は断らせてもらおう。

彼女の信頼に応えるため。

彼女が悲しみに涙を少しでも減らすため。

彼女が負う傷を少しでもなくすため。

水希を悲しませない選択肢が1番ベストだってわかっていたはずじゃないか。だったらもう迷わない。10年前から想い続けた水希と昨日知り合った陽ちゃんを同じ天秤に掛けるつもりなのか。そんなわけがない。水希の方が大事に決まっている。

ここまで来たらあとはメンタルの問題だけだ。陽ちゃんに押され

ないで、ちゃんと自分の意思を言えるかな・・・？

それでもって約束の時間の屋上。まだ陽ちゃんは来ていないようだ。

ちゃんと自分の想いを言うことができるだろうか。そればかり心配してしまう。

(そーいえば・・・)

空を見上げると、日が短くなつたのか既に太陽は沈みかけている。残酷なほど綺麗な夕焼けが頭上に広がっていた。

(オレは夕方に縁があるのか・・・)

今までこういったイベントは全て夕方に起きている。初めて水希と会った時だつて日は沈んでいたけど夕方だった。そして美春と公園で約束したときだつて夕方だった。

ぎい・・・

背後でドアが開いた音が聞こえる。

「お待たせしました・・・」

陽ちゃんがソワソワした様子でこちらに歩み寄ってくる。さて・・・オレはちゃんと言えるのだろうか。それだけが心配でならない。

「あ、あのさ・・・オレ」

ここから先の言葉が出ない。まだ迷っているらしい。この先のセリフで必ず誰かが悲しむ。水希か陽ちゃんかのどちらかが悲しんでしまう。2人を悲しませることはしたくない。

でも、そんなのは言葉でしかない。いくら「悲しませたくない」と言ったところでオレの本当の気持ちは変わらないのだ。

オレは誰かが悲しむことを嫌っているんじゃない。誰かが傷つくことを嫌っているんじゃない。オレの本心は・・・

オレが 自分自身が悲しんで傷つくのを嫌っているだけだ。

だから、水希の前では偽名を使っていた。名前がバレてオレから離れていかれるのが怖かったから。決して水希のことなんて考えてはいなかった。悲しませないなんて言っただけで結局は自分が可愛いだけなんだ。なんてワガママで自分勝手な奴なんだろう。

今だってさつさと「ごめん」と言えばいいのに、その3文字がどうしても言えない。それは陽ちゃんが悲しんだ顔を見て自分が傷つくのが怖いからだ。

優しさは捨てる。自分の想いに正直になれ。何度この言葉を言い聞かせたことか……。

「……………」

陽ちゃんは不安そうな表情で言葉の続きを待っている。早く……言わなきゃ！

「オレは……………」

「オレは、まだ陽ちゃんのことよく知らないからお友達からってことでいいかな？」

またやってしまった。言えなかった。そんなこと言ったら進むしかなくなるじゃないか。

でも、これが今のオレに言える精一杯だった。情けないと笑われるかもしれないけど……。

自分で言うのもあれだけど、オレは女性に対してかなり過敏になっているらしい。無理もないよね。あんなことがあったのに気にするなという方がおかしい。

「……………はい。よろしくお願いします……………」

陽ちゃんは微妙そうな表情を浮かべながら軽く頭を下げた。…………

その表情を見ただけでちよつとだけ傷つく。

「では、条件をつけちゃいましょう」

打って変わって弾んだ声を出す陽ちゃん。今度は何を考え付いたんだろうか。

「私が・・・いつか私がソラ先輩に認めてもらえるようになったら、その時は先輩の方から告白してくださいね。　　ずっと、待つてますから」

「・・・・・・・・・・」

もうダメだ。なんだこのオレを取り巻く複雑な人間関係は！神様はオレが嫌いなのか！

すると陽ちゃんの表情が一瞬悲しげなものになった。よくわかんないけど、多分オレの言葉の裏に何があるか悟ってしまったんだろう。ウソを言つてあとで傷つかれるのと事実を言つて目の前で傷つかれるのどっちが本人にとって辛いのか、オレは考えたことがあるのだろうか。

今だつてそう。

陽ちゃんの顔はさっきオレに詰め寄つたあとの水希の表情とよく似ていた。寂しげで儂げなあ顔。あの顔は多分、今までウソも吐いてこなかった人に隠し事をされたつていうことから来てると思う。その顔を陽ちゃんもしている。

つまり、オレが何かを隠していることに気付いてしまった。

はは・・・このままオレはどんな人生を歩んでいくんだろう。断れず、色々なものを抱えて最後に手元には何も残らない。

「私・・・頑張るから」

そう言った陽ちゃんの言葉は聞こえないふりをした。

「それじゃ、行きましようか。下校時間も過ぎてますしね」
にこつと笑つて踵を返す陽ちゃんの背中を追つた。

「・・・・・・・・・・頑張る、かあ」

誰に言い聞かせるわけでもなく、オレはさっきの言葉を反芻していた。

オレは優しいわけではない。自分に甘いだけだ。

「……んで、相談ってのは」

「うん……ソラくんのことについてなんだけど」

「またあのバカは水希ちゃんを傷つけるようなことをしたのか？」

「まだ定かではないけどね……。昨日からちよつと様子がおかしいんだよ」

「それはわかるな。今日の昼休みも笑ってたし」

「ソラくんって学校じゃ笑わないの？」

「俺たちの間では見慣れない姿だな。アイツが人前で笑うなんてかなり珍しい」

「それはわかる気がするなあ……。ソラくん家でも何か困ったような表情ばかりしてるし」

「……そうか」

「ソラくんは人の気持ちを断れない人なんだよ。どんなに自分が辛くても、相手の気持ちを考えちゃう。だからいっつも何かを抱えているんだよね」

「だとしたら……アイツは何か抱えているんじゃないか？」

「え？」

「さつき水希ちゃんが言ったみたいに、誰かの気持ちを知って、それで自分がどうしたらいいのかわからないとかな」

「・・・誰かの気持ちを知ったって、まさか・・・」

「そっから先は言わないでおく。他人が人の関係に首突っ込むのは野暮だからな」

「・・・ボクはソラくんを信じるよ。何があつたってあの人はボクの王子様なんだから」

「ふん、ソラは幸せ者だな。こんなに可愛い女の子と結ばれやがって・・・」

「橘くんにだって姫奈ちゃんがいるでしょ？」

「アイツとはただの腐れ縁だ」

さあ、どうする深海ソラ。ここから先は

戦場だぞ・・・。

9月：すれ違う2人（後書き）

こんにちは、菊地陽です。

今回は今までで1番短い期間で投稿できたんじゃないかなあと思います。

そしてちゃんと感情移入して書けたんじゃないかと思えます。

よければこれからもお付き合いください。

以上、菊地陽でした。

9月：先輩とのデートが楽しみで・・・

告白を受けた日の週末。

オレは陽ちゃんはどこかに出掛けることになってしまった。いや、なってしまうたという表現は失礼かも知れないけど・・・なってしまうた。仕方ないよね？あんな無垢な笑顔で「今度の週末、どこか行きましょうよ！」なんて言われたら誰も断れないもん。断れる人がいるならぜひ名乗り出てもらいたい。

・・・水希にウソを吐かなければいけない辛さはわかっているはずなのに。もう一度お前はウソを吐くのか？前にウソを吐いてあれだけ苦労したのにまたウソを吐くのか？と心の中がチクチクと痛むしかも、あんな純粋な笑顔を見るたびに一層と罪悪感が増す。

んで、そんなこんなで今は午前10時。陽ちゃんとの待ち合わせの時間だ。家を出る際に水希が妙な視線を送ってきたのがまた辛かった。場所は駅前の広場。まだ午前中だというのに辺りは人で溢れている。

ここで歩く人たちは、大切な人にウソなんか吐かないんだろうなあ・・・と根拠のない妄想をしてしまうほどオレは悩んでいた。いつか言わなければいけない・・・自分には大切な人がいるんだと。そのとき陽ちゃんがどんな表情をするかどうかはわからない。でも、どんな表情をされたって、どんな罵詈雑言が飛んできたって言わなきゃいけない。

「あ、ソラ先輩！」

遠くから嬉しそうな声と弾むような足音が聞こえてきた。

「おはよ。晴れてよかったね」

「はいっ。それにしても・・・ソラ先輩の私服って、若干女っぽいですよね・・・？」

陽ちゃんがオレの姿を見てちょっと驚いている。私服が女っぽい

ってどういうことだよ。オレだって自分で服買ってるんだから、性別を間違えるわけがない。今日は白を基調とした緑の七分袖、下は寒いけどまだちよつと暑いからスリークォーターパンツ。色はよく見るあの色だと思ってくれればいい。

「えー・・・どこが女っぽい？」

そういう陽ちゃんの服装は淡いピンクとチュニックブラウスとミニキュロットという下半身は太ももがちらちら見えそうな刺激的な服装でした。見てないからね、断じて見てないからね。

「なんとというか・・・私が見た感じ、元から細い体型ですし、細身の服着たらなんかえつちな感じですね」

「え、えつち・・・？」

想像もしない言葉が飛び出した。

「身体のラインが出るので、ちよつとえつちかなあ・・・って」

この子、純粹なんだね。まだ何も知らない子なんだね。なら女装で汚れたオレと一緒にいるのはかなり悪影響なんじゃ・・・。

「ラインが出るって・・・オレ男だよ？」

胸とかはないんだけど。

まずは、陽ちゃんの希望で映画を見ることになった。正直、人がいっぱい集まる場所とか嫌いなんだけど断るのも大人気ない。どうやら恋愛モノの映画らしく、期待の新作と評判だったやつだ。俺も興味がないわけじゃないから、テレビや雑誌でちよくちよくチェックするんだけど、今回見る映画は期待度ランキング3位くらいに入っていたものだ。

「これ見たかったんですよね」

と早くもうつとりしている陽ちゃんを見ながら、オレは辺りを見回す。なぜか知らないけどさっきから誰かに見られているような感じがする。

「……………」
人混みの雑音の中、微かに聞こえる聞き覚えのあるようなないような声。

『ほら……早く行くよ……!』
『ちよつと待て!もう少しだけでも……』

まあ、気のせいだろう。声が似ている人なんて世界にいくらでもいるんだから。

「ソラ先輩?早く行きましょうよ」
陽ちゃんに手を引かれて奥へと進んでいった。

～ 鑑賞中 ～

「っはあ……私もあんな恋してみたいなあ……」
やっぱりうつとりしている陽ちゃんがそんなことを呟いていた。

映画は、とある事情によって離れ離れになってしまった幼馴染が月日を経て再会し、そこからまた愛を育んでいくのを男性視線で描いた作品だった。どうしてこの状況でそういう映画をチョイスしたのかがとても気になるけど、まあ偶然だろう。たまたまこういう映画だったんだ。別にオレを刺激しているわけではない。それこそ自己意識過剰じゃないか。

「陽ちゃんは、ああいう恋とかしたことないの?」
野暮だと思いつつ訊いてみた。

「遠距離だとか、告白できずに別れて再会とかっていうのはしたことはないですね……。殆ど告白される側だったものですから」
……さりげなく自慢したなこの子。

まあ、陽ちゃん可愛いしモテるのも頷ける。オレも一瞬だけど誘

惑されかけたからね。

「自分から告白したのはソラ先輩が初めてなんですよ？」

そう言っていたはずらっぽく笑う陽ちゃん。

「・・・そっか」

多分笑顔は作れてない。

陽ちゃんを傷つけまいという思いと水希を裏切ってはいけないという責任がごちゃ混ぜになってる今、普通の笑顔を作れるわけがない。

「そういうソラ先輩はどうなんですか？」

「何が？」

一呼吸。

「ソラ先輩の恋愛経験値はどうなのか、気になります」

この子可愛い顔してるのに、しつかりと探るとこは探ってくる。

なんていうか、ユツキみたいな子だ。さて、どう答えようか。したことないって言うのも情けないし、テキトーにあしらっちゃえ。

「オレは、中学時代なんて毎日告白されてたけど・・・」

「ええっ！？ソラ先輩ってそんなにプレイボーイだったんですか！別にプレイボーイだとは言っていない。」

「男子にね」

「・・・そうですか」

若干肩を落としているけど、そんなにオレの恋愛経験値について知りたいの？教えてもいいけど、その代わり君には・・・

「確かにソラ先輩女の子みたいな可愛い顔してますもんね・・・同性が惚れるのも無理ないです」

「それ褒め言葉になってないからね。この顔がどれだけコンプレックスだったことか・・・」

男だけじゃなく女の子から告白されたこともあったのは秘密だ。

「そんなこと言わないでください。私が好きになったソラ先輩はどうなるんですかっ」

・・・男殺しだなあ。そんなセリフを素面で言えるなんて。意図

的にやってるのか、それとも素なのかわからないから可愛い半分怖い半分。

「あはは、ありがと」

相手が陽ちゃんじゃなくて水希だったら・・・きつと笑ったことを指摘されるだろう。

ふとそんなことを思った。

映画館を出て、再び歩く。ちなみに目的地はない。このあとどうするかも決まってる。

「次どこ行きますでしょうか・・・」

次も何かをするつもりなのか、陽ちゃんはやる気満々だ。オレは人混みにエネルギーを根こそぎ持っていかれたからゲツソリしてる。「そう言えばおなかも空いてますし・・・」

ケータイで時刻を確認すると既に12時を過ぎていた。今日の朝食は確か、トーストとかで軽く済ませちゃったからそろそろ昼食でもいいかも知れない。

「どっか寄ってお昼でも食べようか」

「そうですね。なら、あの店にしませんか？」

言いながら指差した先には《メイド喫茶：あつとほぐむ》の看板があった。

「・・・ウソだろ？」

「ごめん、ああいうの無理なんだ」

「違いますよ、メイド喫茶じゃありません。その1つ向こうのお店です」

よかった・・・。今度あの店に行ったら確実にスカウトされてしまう・・・！

改めて指差された方向を見ると、ピンク色の看板の向こうに別の看板があった。あそこなら普通そうだ。でも、例の店の前を通ると

きは油断しない。なるべく店の中にいる人と目を合わせないように前を歩く。陽ちゃんは終始不思議そうにオレを見ていたけど、そこは気にしない。そんなことよりスカウトされてナンバーワンメイドになる方がよっぽど怖い。

「あの・・・ソラ先輩？なんでさつきからコソコソしてるんですか？」

「えっとね、人には言えない悩みを抱えてるからだよ」

「メイドさんに何か恨みでもあるんですかね・・・」

そこはノーコメントで。

無事、メイド喫茶の前を通り過ぎて目的のお店の入り口に立つ。《食事処流水亭》と書かれている店は何とも和風な感じだった。暖簾はかかっているし、入り口は引き戸で中の従業員はみんな割烹着？着物？を着ていた。つか、ここ高校生がデートでお昼を食べる場所じゃないよね？完全に浮いてるよオレたち。

「ね、ねえ・・・ここって高校生が来るようなお店じゃないよね？」
小さな声で陽ちゃんに耳打ちする。

「大丈夫ですよ。結構若いカップルにも人気ですし、若い客層に狙いを絞ったメニューもあるんです。私よく来たりするですよー」
「へ、へえ・・・」

この子ちゃっかりカップルって言った。

店員に案内されてテーブルに着く。和風なのにテーブルだった。メニューを見ると、蕎麦やうどんとかの麺類が殆どだったが、捲っているうちに目を疑いたくなるようなメニューがあった。

「・・・え？」

リゾット風蕎麦。うどんグラタン。チーズ豚汁。

何じゃこりゃ。

「んー・・・前はチーズ豚汁定食食べたから、今日はリゾット蕎麦にしようかなあ・・・」

オレだけか？このメニューがおかしいと思ってるのはオレだけなのか？まだチーズ豚汁は許せる。でもリゾット風蕎麦とうどんグラ

タンは許せない。もはや蕎麦でもうどんでもないじゃん。イメージの写真には見た目はリゾットなのにご飯じゃなくて蕎麦。見た目はグラタンなのに中にうどんがいつぱい詰まっている。

「・・・もしかして、これは若年層を狙ったメニューなの？もしそうだとしたら、店主のセンスが疑われる。」

「陽ちゃん、この奇怪な麺類が若い人たちを狙ったメニューなの？」「え？そうですけど・・・どこがおかしいですか？」

首を傾げて不思議そうな顔をする陽ちゃんが不思議でならない。

「こちら辺のメニュー頼むくらいなら、普通の蕎麦やうどんとか食べたほうが数倍マシな気がするんだけど」

「ソラ先輩も変なこと言いますね。おいしいかどうか分からないものに挑戦するのが楽しいんじゃないんですか」

「君もおいしいかどうか分からないって言ったよ。やっぱり不安なんじゃないか」

「あ、すいません。このリゾット風蕎麦セット2つください」

「いや、勝手に注文されても・・・」

大声では断りきれず、結局オレもその面妖な麺料理を食べることになってしまった。

しばらく待っているとついに、テーブルの上にリゾット風蕎麦が置かれた。野菜とソーセージと魚介類で彩られたリゾットのようなものが香ばしい匂いを漂わせている。匂いだけならおいしそうだと思うんだけど・・・

「うわぁ・・・これがリゾット風蕎麦・・・」

「・・・何この不摂生な食べ物・・・」

何と言うか、天蕎麦とか山菜蕎麦のトッピングがイタリアンっぽくなっただけじゃないか。思ってたより普通の食べ物だった。

「よかった・・・普通でよかった・・・」

オレがほっと胸をなでおろしている間に、陽ちゃんがパクツと物怖じせずに麺を口に運んだ。いくらオレでもこんな怪しい食べ物豪快に食べることはできない。

「あ……おいしいですよ？これは新感覚ですっ
えー……。」

そんな輝く笑顔でおいしいなんて言われたらオレも食べるしかないじゃないか。食べないと非難の目が向けられそうな予感がするの
で、オレもゆっくりと麺を口へと運ぶ。さっきも言ったけど、匂い
は普通の食べ物ものだ。味は知らないけど。

「……はむっ」

……あれ、意外とおいしい。

食感は蕎麦、味はイタリアン。例えるなら、スパゲッティの麺が
蕎麦に変わったような感じだった。不味くはないけどちょっとダメ
な人にはダメな料理かも知れない。

「……おいしい」

そう言いつつ、何回も食べる。うんうん、オレが好きでよか
った。これでもしも変な味だったらどうしようかと思っただよ……。
「ソラ先輩、ちょっとこっち向いてください」

夢中で食べていると陽ちゃんの制止がかかった。あ……おいしか
ったからついつい……。

「ごめん、意外にもおいしかったからさ……」

その言葉への返事は返ってこなかった。

代わりに、陽ちゃんの色白で可愛い顔が近づいてきた。

「……?」

「ほっぺについてますよ」

ぺろってされた。ぺろって。

頬を舐められたと認識するまでに時間がかかったけど……

「……」

認識したら身体が硬直した。

「そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。料理は逃げたりしませんか
ら」

にこっと笑う陽ちゃんの顔は僅かに紅潮していた。自分でも恥ず
かしいと思うならやらなきゃいいのに……。

せつかく新感覚の味を見つけたのに、その後の2人の空気は気ま
ずいものとなった。

それから、ショッピングしたり、歩き回ったり、ゲームセンター
で遊んだりとそこそこ楽しい時間を過ごした。しっかり者だと思っ
ていた陽ちゃんにも、可愛い物好きな一面があったり、積極的過ぎ
る一面があったり、無謀なチャレンジをする一面があったりと色々
な側面を発見できた。

そんな楽しい時間も過ぎて現在午後7時。これ以上連れ回すと厄
介な連中に絡まれそうだから帰ることにした。

「ありがとうございます。今日は楽しかったです」

礼儀正しく頭を下げる陽ちゃん。

「こちらこそ」

オレも頭を下げる。

「また、先輩と遊べるのを楽しみにしてます」

と、頭を上げた陽ちゃんがフラついてその場に座り込んでしまっ
た。

「ど、どうしたの？どこか具合でも悪い？」

「いえ．．．ちよつと寝不足で．．．」

「寝不足？」

寝不足か．．．。眠いの無理して出てきたんだったら、ちよつ
と悪いことしちゃったな．．．。

「それなら言ってくればよかったのに．．．」

すると予想外の返事が返ってきた。

「先輩とのデートが楽しみで、ちよつと眠れなかつたんですね．．
．．．」

．．．．．．．．．．揺らがないぞ、鉄の心を持つ深海ソラは決し
て揺らぎはしない。動かざること山の如し。絶対に揺らがない。こ

の子にオレには別の大切な人がいることを伝えなきゃいけないのにこんなことで揺れてどうするんだ。

「でも、それで1日乗り越えるのは無理みたいでした」

さて、ここでどうするかだ。選択肢は3つ。家まで送り届けるか、オレの家で休んでもらうか、ここで解散か。まあ、普通に考えて3つめはない。オレに失望してもらうのが目的なら3つめでいいのかも知れないけど。

「それじゃあ、今日はここで」

フラついた足取りで歩いていく陽ちゃんを無言で見送る。

これでいい。

少しでもオレへの興味が失せれば、彼女は自らオレから離れていくことだろう。

翌日。

教室に入った瞬間、向かい側からものすごい形相で歩いてきたユツキに首根っこを掴まれて屋上へと連行された。

「ちよつとユツキ!? 一体何のつもりだ!」

アスファルトの上に転がされながら、ユツキを睨む。

「何のつもりだったか。それはこっちのセリフだバカ」

いつもとは違うユツキに気付く。説明はできないけど、どこかいつもと違う。目つきといい、声のトーンといい・・・何かあったのだろうか。

「お前、この誓約書覚えてるか?」

そう言ってユツキがオレに突きつけた1枚の紙。そこにはオレの名前と、二度と泣かせない云々みたいなことが書かれていた。

この誓約書を覚えてるか? 覚えてるに決まってるでしょ。忘れるわけがない。

「覚えてるけど・・・それが何?」

「白を切るってんなら単刀直入に訊くぞ」

ユツキが獣のような目でオレを睨みつける。

「昨日の昼間、お前はどこで何をしていた？」

「・・・・・・・・・・」

返答に困った。

「ついでに訊くと、お前と一緒にいたあの女の子は誰だ」

「な、何のことかな・・・？オレが別の女の子といるワケがないじゃないか。ユツキも変なこと言うなあ・・・あはは」

立ち上がりながら、ユツキと目を合わせずに言う。こいつにバレたら口クなことにならない。もしかしたら、水希に話が伝わるかも知れない。そうなったらオレはどうなるんだ。

「お前は知らないと思うが、お前が珍しく大声で笑った日の放課後に俺は水希ちゃんの相談を受けている」

・・・・・・・・

「お前の様子がおかしい、何か隠してるんじゃないかってな」

流星は水希だ。オレのことをよくわかってる。

「しかも、お前のことを信じてるとまで言っていた。あの人は自分の王子様だから、ともな」

「・・・・・・・・・・」

「ここまで聞いてまだ何も思わないほどのバカじゃないよな？」

これ以上誤魔化すことは無理そうだ。今日のユツキは恐らく真面目だし、こういうユツキに歯向かったらどうなるのかも知ってる。

オレは今までの成り行きを全てユツキに話した。

「・・・オレだって、こんなことするつもりはなかった」

「こんなことするつもりはなかったって言えば許されると思ってんのかコラ。反省しろ」

反省してます。ユツキにバレるとは思ってませんでした。

「そんじゃ、今日限りでその関係を断ち切ってもらおうか。お前が断りきれずに、友達からなんて言ってしまった女の子との関係を完全に断ち切ってもらおう。それくらいできるな？」

最後の言葉は質問じゃなく、確認だ。もはやオレに抗う余地はなさそうだけど・・・

「ちよつと待つて・・・」

「まだ何かあるのか？」

別に反抗するワケじゃない。オレにもちゃんとした理由がある。

「オレも最初は断るつもりだった。けど・・・あの子が傷ついた顔を見るのが嫌で、どうしても断れなかったんだ」

「だから？そんなもん、一言言えば終わる話じゃねえか」

こちらに背を向けたまま言うユツキ。

言われた言葉が頭の中でグルグルと回り続ける。これは許してもいい言葉なのだろうか。確かに今回はオレが悪い。バカみたいなことをしたのも事実だ。でも・・・この言葉だけは許せない。

そんなもん。

一言言えば終わるじゃねえか。

そして、それと同時にオレの中で何かが切れた。

「ユツキには・・・きつとわからないよ・・・」

思い出したいくない記憶が蘇る。

水希に出会う前の自分。誰一人として近寄ってこなかった孤独な自分。

「んあ？」

ユツキに、あの孤独は絶対にわかりはしない。

「自分から誰かが離れていくことの悲しさが、ユツキにはわからないって言うてるんだよ・・・！」

「・・・」

断れなかった理由として、自分が傷つくのが嫌だというのもあった。だけど自分から人が離れていくのも怖かった。せつかくオレと関係を築けたのに、それが一瞬にして崩れるのが怖かった。そして何より、もう一度あの孤独を味わうのが怖かった。

バカだと思われても仕方がない。1人に自分の正直な気持ちを伝えただけで、孤独になるとか大袈裟だと言われてもオレは何も言い返さない。それでも怖かった。

「オレがどんな目に遭ってきたか知らないから、そんなこと言えるんだろ・・・」

「まあ、そうだな」

さして動揺した様子もなく、ユツキは言う。

「お前がどんな目に遭ってきたかは知らないし興味もない。だがな、お前がそんな過去のトラウマを引きずっているだけで不安になったり傷つく人もいるってことを覚えとけ」

それだけ言い残すとユツキは屋上から出て行った。

朝方の冷たい空気の中、1人取り残されたオレ。

今日は朝からブルーだな、なんて思った。

「あ、小鳥遊くん」

「・・・はい」

「あの・・・手紙の返事なんだけど・・・」

「はい。不肖小鳥遊雪村、心して聞きます」

「・・・ごめんなさい」

「・・・そうですか。でも、どうして?」

「えっとね、こんなこと言うのも恥ずかしいんだけど・・・」

「はい」

「ボクには、信じてる人がいるんだ」

ブルーな1日が終わってやっと帰宅。玄関の靴の数を見る限り、姉貴はいないようで水希はいるみたいだ。何と言うか、ユツキにあ

んな指摘をされたあとじゃ合わせる顔がない。リビングを確認して、水希がいないとわかったら中へ入る。バックをそこらに放り投げてソファにダイブ。

(……どうしたらいいんだ)

頭の中はそのことについてばいだ。他の事が入り込む隙間もない。このまま今の関係が続ければ2人のうちどちらかの傷ついた顔を見なければいけなくなる。どっちの方が傷が浅く済むか　なんてことは考えていない。どっちでもオレの心に残る傷は大きなものになる。

だからと言って、何もしないわけにはいかない。

自分に問え深海ソラ。大事にしたいのはどっちだ。裏切りたくないのはどっちだ。

「……………」

そんなもの問うまでもない。

今度こそ……今度こそ、陽ちゃんに本当の気持ち伝える。

この決意は絶対に揺らがない……といいよね。

オレは水希に見つからないように自分の部屋へと上がった。

「あ、水希さん」

今から1時間前のこと。ボクが学校から帰る最中、たまたま姫奈ちゃんと会った。

「今帰りですか？」

「そうだけど、姫奈ちゃんお家こっちなの？」

歩きながら聞いてみる。

「違いますよ。今日の夜は雪時の家でお世話になるだけです」

舌を出しながら嬉しそうに姫奈ちゃんは言った。

「平日なのに？明日の学校とかどうするの？」

「雪時の家から通います。電車で20分くらいの場所だし、大して

問題ないんですよ」

「へえー、やっぱり許嫁って普通のカップルとは違うんだねー」
許嫁つてのにも懂れたりはしてる。でも、ボクには縁のない話なんだけどね。

「またまたそんなこと言つてえ、水希さんにもあの可愛い人がいるつて雪時が言つてましたよ?」

本当なら、照れ笑いでもするはずだったんだけど今日はできなかった。逆に表情が曇っちゃったみたい。

「……………」

「あ、そういえば」

元氣な姫奈ちゃんはどうどん話を進めていく。

「昨日、映画館で水希さんの彼氏を見たんですけど……………」

心なしか声もちよつと小さくなっている。そんなにヒソヒソしくたつていいじゃないか。

「知らない女の子と一緒にいましたけど、水希さんそれ知つてました?」

姫奈ちゃんに悪気がないことはわかつてるけど…………ちよつとだけ腹が立つた。ごめんね、ボクつたら余裕ないみたいなんだ。

ソラくんがそんなことするわけないと思うんだけど…………

「誰かと見間違えたとかそういうんじゃない?」

「はい、雪時も一緒にいましたから間違いないと思いますよ。あたしも見ましたし」

……………うそ?

怒りというより、悲しさと寂しさの方が先に現れた。ボクが何も隠していないかと聞いた時、ソラくんは何も隠してないと言つてたのに。これつて、裏切られたと取つていいのかな?

「み、水希さん?あの、あたし別に責めようとした言つたわけじゃ……………」

ボクの顔を見て慌てたように姫奈ちゃんが弁解しようとしてくれる。

「大丈夫だよ、姫奈ちゃんは何も悪くない。悪いのはソラくんだからさ」

泣いてるかも知れないけど、笑顔を作る。笑った瞬間、堰が壊れた。

「うわわ・・・大丈夫ですか!？」

「うん、何ともないよ。教えてくれてありがとね」

そんなことがあって帰宅、ソラくんがいないことを確認するとボクはすぐに部屋に閉じ籠った。泣きたかったわけじゃない。でも、裏切られた気がして・・・。

ソラくんを信じていた分、ショックは大きい。

もしかしたら・・・姫奈ちゃんたちは見間違えたのかもしれない。ただの女子グループをソラくんで見間違えたのだったら・・・うん、きっとそうだよ。ソラくんがそんなことするわけない。本人に聞いてみよう。さつき帰ってきたみたいだし。

とん、とん、とん、

誰かが静かに階段を上がる足音が聞こえてくる。

いいタイミングで帰ってきたね、ソラくん。君はボクの彼氏なんだから、もうちょっと自覚してもらわなきゃね。

ボクはソラくんが部屋に入った瞬間、部屋のドアを開けた。

9月：先輩とのデートが楽しみで・・・（後書き）

こんにちは、菊地陽です。

最近疲れてるみたいです。何書いてるかワケわかんなくなってきましたね・・・orz

でも、頑張ってるのでよければお付き合いくださいっ！

10月：世界中の誰よりも大好きな人

がちやり、

と部屋のドアノブが鈍い音を立ててゆっくりと開いた。ドアの向こうから入ってきたのは……

「……ソラくん、ちよつといいかな？」

少し目元が腫れている水希だった。……あれ？何か、泣いてたの？入ってきた水希は何も言わずに座布団に正座する。その姿からいつもとは違う何かを感じ取ったので自然とオレの背筋も伸びる。

「で、用事っていうのは……？」

恐る恐る尋ねると、水希は無感情な目に僅かながら涙を浮かべてこう切り出した。

「昨日、何してたの？」

その瞬間、オレは頭から冷水をぶちまけられた様な感覚を覚えた。頭の天辺から身体が冷えていく感覚……こんな感覚は久しぶりだ……。

「ねえ、教えてよ……」

既に水希の頬には一筋の涙が伝っている。これはマズイ……ここまできてウソは吐けない。陽ちゃんには悪いけど、全てを洗いざらい吐かせてもらおうかな……。

というか、水希の一言で全てを吐こうとした自分の弱さに泣けてくる。

「……実は……」

そこで、あることを考えてしまう。この先の言葉を伝えたら、水希はどんな顔をするんだろうか。今でさえ涙を流しているのに無表

情と言う見たくもない顔をしているんだ。この先の言葉でどんな顔になるかなんて想像もつかない。

「教えてよ・・・ボクに何も隠してないって言ってたんだから、すぐ言えるんでしょ・・・？」

もうダメだ、水希は既に堰が壊れている。この言葉を言いながら泣き出してしまった。

さて、このまま黙っていたら彼女はどんな行動に出るか知れたものじゃない。流石にこの状況で荒縄を持ち出すことはないと思うんだけど・・・今はそんなことを考えている場合じゃない。

水希は泣きじゃくりながらオレを見る。このまま、ウソを吐き続けるのは嫌だ。けれど、ここでこれ以上水希の泣く顔は見たくない。「何も隠し事はないんでしょ・・・？」だったらすぐに答えられるんじゃないの・・・？なんでそうやってずっと黙ってるの・・・！！」

だんだん水希の言葉が語気が荒くなっていく。まあ、怒鳴りたくなる気持ちもわかるけど・・・。いくら怒鳴ったってオレは多分口を割らないだろう。それだけオレはヘタレなんだ。この数日間痛いほど実感した。

自分の彼女へと表現しても許されるのだろうか）が、泣きながら問いかけてくるのに自分は別の人のことを思い、彼女の傷ついた顔を見たくないというバカみたいな理由で本当のことを話せないでいる。

「ボクはソラくんは絶対にボクにウソは吐かないと信じてた」

ピタリと泣き止んだ水希は、毅然として、オレに侮蔑の眼差しを向けながら、凜と声を張った。

「でも、君はそんなボクの心を踏み躪ってくれた。これ以上ないってくらい」

「待って・・・オレはそんなつもりじゃ・・・」

やっぱりこうなった。相手の言葉に小さく反論するだけ。前まではこれでも言うことを聞いてくれる相手だったけど・・・

「言い訳なんか聞きたくない。君にどんな理由があったって、壊されたボクの気持ちは変わらない」

会話が進んでいくことに水希の口調が再会した当初のようになっていく。これはもうダメだな・・・。

「・・・ごめん」

水希に聞かせるかどうかもわからない小さな声で謝るとオレはそのまま部屋を出た。嬉しいことに水希はあとを追ってはこなかった。リビングに入ってソファにうつぶせに倒れる。

「・・・」

もう嫌だ。こんなことになるんだったら、最初から陽ちゃんを断っておけばよかった・・・なんて言うのはズルイ。あれだけ迷って出した結論が今に影響しているんだ。後悔しても意味はない。

(やっちゃったなあ・・・)

瞼の裏には涙を流す水希の姿がくつきりと焼き付いていて、頭の中には水希の言った言葉が飛び回っている。

ここでやっとと思う。オレはどうしたらいいのか。

この問いかけが何回目なのかはもうわからないけど。

「ソラ、起きなさいっての・・・!」

誰かが強く身体を揺する。

「いつまで寝てる気なの?早く晩御飯作ってよ」

寝返りを打つと頭上には制服をだらしなく着崩した姉貴の顔があった。この制服の着方の姉貴はだらだらモードだ。学校じゃ絶対にそんな格好しないくせに。

まだ覚めていない頭で時計を見ると、既に8時を過ぎていた。どうやら2時間近く眠っていたらしい。何というか、寝方も悪いし寝覚めも悪い・・・。何なんだ今日は・・・。

「晩御飯・・・?今日は水希が当番のはずじゃ」

「

そこで再びあの言葉と姿が思い出される。一気にテンションガタ落ちだ。

姉貴は困ったように頬に指を当てながら言う。

「それがね、水希ちゃん一向に部屋から出てこようとしないのよ・・・おかげであたしっいたら腹ペコよ。早くご飯食べないと倒れちゃいそうかも」

「だったら自分で作ってくれ、と言い返す気力もない。姉貴だって来年からは1人暮らしするんだっいたら少しでも自炊スキルを身につけておいた方がいいんじゃないの？」

「あんだ、水希ちゃんの何かあったの？」

小声で尋ねてくる姉貴に、オレは視線を合わせた。

「・・・別に」

不貞腐れたような声に姉貴はすぐに状況を見抜いたらしい。

「あらそお？なら深くは訊かないけど」

姉貴が賢い人間でホントによかった。家の中では自堕落自由奔放で料理はできないけど、成績優秀で頭はいい。何で姉貴ばかりと嫉妬することもなくはなかったけどね。

「何があつたかは知らないけど、1つだけ忠告しとくわ」

姉貴はオレに背を向けてキッチンへと向かいながら呟く。

「もうあんな思いをしたくないなら自分の心に正直になりなさい」

そんなこと百も承知だ。それなのに決断できない。

「・・・姉貴の言葉はありがたかったけど、もう手遅れっぽい・・・」

「で姉貴、キッチンで何する気なの？」

「何って・・・晩御飯作るんだけど・・・？」

それはダメだって！姉貴が料理したあとは片付けすごい大変なんだから！

それから数日の間、水希はリビングに顔を出さなくなった。帰っ

てきても真つ直ぐ部屋に入って晩御飯も出てこない。風呂には入っているらしいけど、オレが寝てからとか遅い時間みたいだ。ちなみに姉貴とは顔を合わせているらしい。学校では姿は見るけど絶対にオレの方に視線が向けられることはない。

んで、昼休みの屋上。

いつもなら生徒で賑わっている屋上も、今日は曇っているから人が少なかった。

「詳しくは聞かないが・・・大丈夫か？」

珍しくユツキが心配してくれている。

「この頃のソラは生気を失ったような顔してますね。目も虚ろですし」

のぶながは平和そうに卵焼きを食べながらのコメント。もうほっといて欲しい。

好きな人に目の前で泣かれて、あんな言葉を言われて普通な方がおかしいだろ。オレは購買で買ったパンを食べながら思う。

「まあ、全部お前の責任だからな。自分でどうにかしろよ」

珍しく心配してくれてると思ったけど、やっぱりいつものユツキだった。

「だよね・・・どうしたらいいんだろう・・・」

どうしたらいいのかさっぱりわからない。今は水希のことを考えていても、陽ちゃんを目の前にしたらきつと自分の本当のことを言えなくなっちゃうんだろう。

ホント・・・どうしたらいいんだろう・・・。

「つたく、浮気なんかするからいけねえんだろうが」

溜息混じりにユツキが言う。のぶながも大体の事情は察してくれたようで、何も言っではこなかった。

「浮気なんかしてない・・・」

「でも、キスはしたんだろ？」

あれはキスじゃない。ほっぺだから断じてキスではない。

「そんなことまでしちゃったんですから、もう言い逃れはできません

んね」

「き、きすなんて・・・してないっ」

ホントにしてないんだってば。口と口じゃないんだから。

幸いまだこのことは水希には伝わっていない。これが伝わったら完全に終わりだ。どうにかして隠蔽しないと・・・。

「お前どうにかして隠蔽しようとしてるだろ」

「はっ!?!?どうして・・・!」

ユツキはたまに心を読むことがあるから困る。

「つか、もう言っても言わなくても結果は変わらないだろうけどな」

「言わないでよ!まだオレにも勝機があるさ!」

ただかなり絶望的な状況に置かれてるけどね。

「でもソラが浮気するなんて・・・ちょっと意外ですね」

「だから別に浮気をしたわけじゃなくて、ただのお友達だから・・・」

「異性の友達にキスする女がいると思うか?」

むう・・・言われてみればそうかも・・・。

「実は欧米の人だったとか・・・」

「んなわけねえだろ」

告白された時、オレは「お友達から」と言っただけだ。勘違いしてキスするような子じゃない。勘違いじゃないとすると・・・もしかして、本気だった?だとしたらますます断りにくい・・・。

「どうするつもりですか?」

改めて訊かれると困る。断ることは既に決定済みだけど、どうやって断ろうかは決まってる。上手に断ればそれでいい。けれども生憎オレにそこまでの器用さはない。

「うーん・・・上手に断ればいいんだけどねえ・・・」

「お前そついうのダメだもんな」

「自分の気持ちをはっきりと伝えるべきじゃないんですか?今まで騙してごめん、とかどうでしょう」

騙しててという表現はいかなものかと。オレは一度もあの子に

はウソを吐いてない。

「めんどくせえからごめんだだけでいいんじゃないの？」

「・・・そうだね、それでいいかも・・・」

ユツキのありがたいんだかありがたくないのかわからない提案を採用することにした。余計なこと言わなくて済みそうだし。

遠くからチャイムの音が聞こえる。

「あ、早く行かないと授業始まつちゃう・・・」

まだ半分も食べてないパンを袋にしまうと、そのまま屋上をあとにした。

放課後、オレは陽ちゃんがオレの教室に来る前に向こうの教室へ行った。もしこっちの教室に来て、水希と鉢合わせなんてことになったらオレは終わってしまう。まさに二兎を追う者は一兎も得ずですね。

教室前の廊下で待つこと数分、陽ちゃんはオレの前を小走りで通り過ぎていく。行き先は・・・言うまでもないだろう。そんな陽ちゃんをオレは呼び止める。

「陽ちゃん、ちょっと・・・」

声に気付いた陽ちゃんの顔は、こちらを向いた瞬間にぱあっと輝いた。その顔を見るとやっぱり決心が揺らいでしまう。

「先輩どうかしたんですか？顔色が優れないようですけど・・・」

その理由を今から君にお話しするつもりです。

「・・・まあ、そんなことはどうでもいいからとりあえず屋上に行こうか。ちよつと大事な話があるから」

一瞬訝しげな表情をした陽ちゃんだったが、何も問い返してこなかった。彼女も彼女なりに何かを察してしまっただろう。ごめんね、オレがこんなヘタレだから君に悲しい思いさせちゃって。

どういいうわけか屋上まで2人とも何も言葉を発しなかった。無言

で淡々と階段を上り、いつもよりも重く感じる屋上の扉を開く。

「オレ・・・いや、オレと陽ちゃんの目に黒いセミロングでボーイツシユな少女の姿が映った。2人である時に絶対に遭遇したくない人物と、最悪のタイミングで遭遇してしまったのだ。」

「・・・っ」
驚いたような悲しむような表情を作って数秒だけ、部屋で問い質された日以来初めてオレの目を見た。

「・・・み、水希？」

恐る恐る声をかけてみる。すると水希は再会した当初のような毅然とした表情をした。彼女は無言でオレの目を真っ直ぐ見つめるとそのまま屋上を出て行ってしまった。

「あの・・・今の人誰なんですか？」

陽ちゃんが不安そうな顔で質問してくる。正直、今はそんなことなんてどうでもいい。

さっき水希は無言で何も言っていなかったけど、オレにはとある一言が伝わってきた。普通なら「その子誰？」と問うのが普通の女性（なのかな？）だけど、水希はそんなこと一切言わず、目でこう伝えてきた。

ボクよりその子の方がお似合いなんじゃない？

オレにとつては困る一言だけど、この場面でオレが困らないようにと水希がくれた最後の優しさかも知れなかった。ホントなら今すぐ水希を追って弁解したいところなんだけど・・・きっと今のオレとは話すらしてくれないと思う。うん。

「聞いてますか先輩。あの人は誰なんですか？」

これで決心は完全についた。

「ん？さっきの人？」

「はい・・・。すごい綺麗な人でしたけど・・・」

もう、悲しむ顔を見たくないとか傷つけないとかそんな戯言は言わない。今の一瞬のやりとりでオレが誰を大事にするべきなのか、はつきりとわかったからだ。元からわかつてはいたんだけど・・・まあ、年下マジックっていうのもあるからさホラ、つい忘れがちになっちゃった。

でも、オレが10年もの間思い続けて来たのは誰だ？

人生初めての親友を大切にしたいと思っていたのはウソだったのか？

そして何より　オレを孤独から救ってくれた大好きな水希と、まだまだ一緒にいたい。ここまで人を好きになっただことなんてない。そんな人生最大の『初恋』をこんな結末で終わらせてもいいのか？

「・・・ちようど、そのことについて話そうと思ってたんだ」

「えっ・・・」

しつかりと陽ちゃんの間を見て言う。
「オレは、さっきの女の子が好きなんだ。だからその・・・陽ちゃんとは付き合えない」

予想通り傷ついたような顔をする陽ちゃん。でも、もう揺らいだりしない。

「・・・じゃあ、どうして私を期待させるようなことしてたんですか？」

いつもよりも低い陽ちゃんの声。その質問はもっともなんだけど・・・改めて訊かれると非常に答えにくい。本当のことを言ったらきつと怒るだろうなあ・・・。

「それは・・・オレがヘタレだからだよ」

陽ちゃんは目を丸くした。どうせならこのままオレのイメージを粉々に砕いてしまおう。

「はい？」

「オレは・・・自分のことをちゃんと見えなくて、相手にばかり合

わせちゃう。それで何度も人を傷つけてきてるのに治そうとしない。オレってそういう情けない一面があるんだよ。そのせいで陽ちゃんが傷ついちゃったならオレはいくらでも謝る。本当にごめん」

深々と頭を下げる。これで陽ちゃんが許してくれるかどうかかわからないけど、とりあえず謝る。

「……あの人は誰なんですか？」

特に表情を変えなかった陽ちゃん。もしかして……我慢してる？それにしても、水希のことを訊いてくるなんて思いもしなかった。まさか、ここで名前を言ったら復讐しに行くとか？

「えーっと……」

「復讐するとか、そういうドロドロしたことは好きじゃないので大丈夫です」

「あ、そう？」

よかった……。これで水希が襲われる心配はなさそうだ。

「それで、あの人はソラ先輩にとってどういう存在なんですか？」
オレにとって水希とは。

今まで一度も考えたことなかった。オレを孤独から引っ張り上げてくれた救世主だとは思ってるけど、具体的にどういう存在なのかはわからないままだった。

でも、今は違う。こんな手遅れっぽい状況になってからやると水希のことがわかってきた気がする。未遂とはいえ浮気をしたんだ、こんなことを言う資格はないのかも知れないけれど……これだけは言っておきたい。もう縊りを戻せないかも知れないけど、彼女の最後の優しさには報わないといけない。

オレにとって水希は

「昔の孤独なオレを救ってくれた恩人で、とっても大事な人。そして、オレが人生で1番好きになった女の子だよ。……こんなに人を好きになるなんて思っても見なかったけどね……」

ここまでバツサリ言っちゃっていいんだろうかと思っただけど、ここまで来たらもう止まらない。

「悪いけど、オレはこの先どんな女の子に想いを伝えられても変わらないと思う。その度に誰かを傷つけちゃうかもしれないけれど、彼女だけはもう絶対に傷つけない。何があっても悲しませない。彼女」
水希だけは、絶対に泣かせたくない。もう泣かせてるのに、こんなカツコいいこと言っちゃいけないんだろうけどさ・・・とりあえず、水希は世界中の誰よりも大好きな人なんだ」

大好きで好きでもうおかしくなっちゃいそうなくらいね、という言葉は言わないでおいた。そうだ、それがオレの本当の気持ち。やっと気付いたオレの本心。今まで一度も面と向かって「好き」の二文字を言ったことはないけれど、心の内ではそう思ってた。もう手遅れかも知れないけれど、もう一度水希と話せる機会があったら伝えておきたいなんて思いにも気付いた。

「なんか、私バカみたいですね」
陽ちゃん小さく笑った。

「先輩に大切な人がいるってことは、最初から何となくわかってました。それなのに・・・勝手に舞い上がったりして・・・」

へえ、最初からわかってたんだ。女のカンってヤツですかね？

「そんなに大切に想える人がいるって、すごく幸せなことですよね・・・先輩がその人をそこまで好きなら私はもうこんなことやめます」

「・・・っ」

ダメだ、何も言うな。ここで何か言えばまた何かを背負うことになつてしまう。良心がズキズキしてるけれど、まあ我慢だ。

「短い間でしたけど、ありがとうございます。先輩と一緒にいられてとても楽しかったです」

「・・・ホントにごめん」

「謝ることないじゃないですか。先輩には別の人がいたつてだけです。私の気持ちを受け入れてくれるかは先輩の自由じゃないですか」
この状況でも笑っていられる陽ちゃんはホントに強い人だと思う。オレだったらきつと泣き崩れてるか無言で立ち尽くしてる。そのま

ま陽ちゃんは頭を下げるとオレの横を歩いて屋上を出て行った。横を通り過ぎるときに涙を浮かべている目に気付いてしまった目敏さを恨むべきか褒めるべきか……。

「はぁ……」

空を見上げて安堵の息を吐く。安堵と言つより溜息かもしれない。茜色に染まった空。やつぱりこういうイベントは夕方に起きるのが定番らしい。空を仰いだままこれからのことについて考えてみる。今から水希との関係を修復するのはかなり難しいことかも知れない。また再会当初のような関係が続くかも知れないけど、自分が生んだ結果だ。その末路も受け入れることにしよう。

でも……今抱いている気持ちを全部伝えられれば、それだけでいいかも。

そんでもって帰宅後。

リビングに入った瞬間、得体の知れない緊迫感が全身を包み込んだ。テーブルに水希と姉貴が向かい合つて座っていてテーブルの上には一枚の紙切れが置いてあった。あれは一体何の紙だろう？

「あ……ソラ……」

姉貴が困った顔でオレの方を見る。何だ、今度はどんな災難がオレを待ち受けているんだ。

「それじゃあ、ソラくんも帰ってきたので本題に入ります」

水希が淡々と話し出す。オレはあえて席にはつかず、立ったまま聞いていた。

「来週末、父親がボクを迎えに来るのでそのまま実家に帰ろうと思つています。ちょっとソラちゃんと揉めちゃって落ち着くまで距離を置いたほうがいいと思って」

へ？帰る？落ち着くまで距離を置くって……それってもう二度

「お前・・・ホントにそれでいいのか・・・」

額に手を当てて呆れるユツキと、

「もう救えませんか」

にこにこ柔らかない笑みを浮かべたまま言うのぶなが。これはこれでキツイ・・・。

「そんなこと言わずに、せめて知恵だけでも恵んでくださいっ！」

恥も外聞もかなくなり捨てたオレの捨て身の頼み。ここまでしても無視するやつなんてオレの親友にはいないはずだ。

「やなことつた」

「嫌です」

「・・・君たち2人は親友だと思ってたのに・・・」

もうダメかもしれない。

「お前が蒔いた種なんざ知ったこつちゃねえんだよ。自分でどうにかしろ」

それだけ言うとユツキはダルそうに上履きを鳴らしながら教室を出て行った。なんだよ・・・薄情なヤツ・・・。

「まあ、親友だから余計なことはいないだと思ってください。ユツキもきつと同じ気持ちです。特にユツキなんかはこういうの敏感なんじゃないんですか？」

「え・・・？ユツキにも何かあったりしたの？」

「僕はよく知りませんが・・・」

こついうのだったらオレの方がかなり敏感だと思っただけだ。どな・・・。ユツキにもそういう思い出したくもない過去があるらしい。

「たしか、力を貸して欲しいんですよね？」

のぶながの顔が真顔になった。やっぱり真顔も綺麗で見ているだけでも飽きない・・・と、今は見惚れてる場合じゃない。

「うん。どんな些細なことでもいいからさ」

「些細なことと言うより、これが原点であり頂点だと思うんですけど・・・とりあえず、もう一度本気でぶつかってみてはどうです

か？何を言われるかわからない、怖い、じゃなくて思いつきり本気でぶつかつたらどうでしょうか。特にソラにはうってつけの手段だと思えますよ」

思いつきり本気でぶつかると。今は口も利いてもらえないような状況にはなっているけど、本気だつてことが伝われば彼女も耳を傾けてくれるだろうか。

「それに、ユツキだつて同じことを言うと思います。どんなに巧い話術を持っていても、本気の思いには勝てないと思いますから」

そう言つてさつきよりも輝かしく微笑んだのぶなが。んー・・・やっぱりのぶながはオレの親友だ。

「ありがと・・・ダメかも知れないけど、やるだけやってみるよ」
お礼を言つて自分の席に戻ろうとしたところで、のぶながに呼び止められた。

「あ、ソラ・・・」
「ん？」

もう一度のぶながの顔を見つめる。すると、徐々に頬が赤くなつていった。あれ？ちよつと待つて・・・これつてそういう展開なの？あれは夢だつたんじゃなかつたけ？

のぶながは恥ずかしそうに俯きながら、小声で言つた。

「・・・いつになつたらメイドになつてくれるんですか？」

「・・・これはやばい。他の男に聞かれたら嫉妬で殺されてしまひそうなくらいの威力だ。でも、のぶながのメイドになつたらどんなことを強要されるんだろう。そこが怖いところでもあるけど・・・」

「この事件が落ち着いたら、いくらでもメイドになるから。それまでちよつと我慢してて・・・ね？」

のぶながはこくと小さく首を縦に振つた。そういう仕草もまた可愛い・・・。もう水希じゃなくてのぶながを彼女（彼氏？）にしてもいいんじゃないかな。オレ的に未練はないかも知れない。

「・・・」

水希が教室に入ってきた。もちろんこちらを一瞬も見ずにそのまま席に座る。

「あとは自分の手で頑張ってくださいね」

最後にくっつくこと笑ったのぶながを見て、オレも席に戻った。

任務遂行は今日の放課後。どんなにカッコ悪くてもいいからとにかく引き止めないと。

さて、約束の日時まであと数日しかない。

のぶながに言われたとおり・・・と表現するとオレの意思でやってないように思われるからやめておこう。オレは自分の『今』の気持ちを水希に伝える。たとえ無視されたって、鼻で笑われたって構わない。

自分の本当の気持ちが伝えられたらあとはどうなっても構わない。まあ、ホントにどうなってもいいとは思ってないんだけど多分関係が前のように回復するとは思えないからね・・・。

まだ、「さよなら」は言いたくない。

もっともっと水希と一緒にいたい。

ただそれだけ。

それだけを言葉にして伝えればいいだけだ。何も難しいことなんかない。

問題は、すんなりそれを言えるかどうかなんだけどね・・・。

10月：世界中の誰よりも大好きな人（後書き）

こんにちわ、熱にうなされていた菊地です。

ちよっとテスト期間だとか風邪引いたりとかで更新が遅くなりました。

というわけで、今回もお付き合いいただきありがとうございます。

もうこの物語の行き先はわかりません。ぜんっぜん。

ただでさえ低いクオリティをこれ以上下げないように頑張りますので、どうかこれからもお付き合いお願いします。

10月：まだ『さよなら』は言いたくない

嬉しいことに、家には誰もいなかった。

水希も帰ってきていないようなので、和室の座布団に正座して決戦の時を待つ。どういうわけなのかもものすごい緊張していて心臓が口から飛び出してきそうだ。まあ、実際に飛び出してきたらかなりグロテスクなんだろうけど。

今回の作戦はこういう段取りになっている。

・水希が帰宅

・アタック。

お前は作戦というものをバカにしてんのか、と言われても仕方ない。これ以上考えられないんだから。アタック以降の作戦変更は臨機応変に行っていくつもりだ。できるかどうかわからないけどね。

「オレの、本当の気持ち。正直な気持ちを伝えればいいんだ・・・」
小声で自分に言い聞かせる。自分の気持ちが何なのかと考えれば考えるほど想いが生まれてきてうまくまとまらない。そうだなあ・・・色々思うことはあるけど、とりあえず1番伝えたい思いを真っ直ぐ伝えればいいんだよ。

時計の針の音だけがやけに響く。そりゃ、オレ1人しかない部屋なんだし物音立てずに座ってるんだから静かになるに決まっている。

「・・・本当の気持ち」

10年前に未練を残して別れてから、彼女への想いは強くなっていたつもりだった。でも・・・最近陽ちゃんや美春と関わっていくうちに、「想いは抱いているだけじゃ伝わらない」ということを教

えられた。そうだ・いくら心の内では大切に思っていたって表に出さないと伝わらない。今回だってそれが原因なんじゃないのか。オレが弱かったのも1つの原因ではあるけれど、やっぱり自分の想いを伝えてこなかったのもいけないと思う。まあ、自分本位で自分の失態を隠すための言葉だと思われても仕方がないけどね。だから、その失態はこの時間で取り戻す。

玄関の方から物静かにドアを閉める音が聞こえた。ついに戦いの火蓋は切って落とされた。もう後戻りはできない。背水の陣、悪戦苦闘なんでもござれ。玉砕覚悟最後の勇姿を神様も照覧あれ！それでできれば関係を回復してください神様。

「み、水希っ！」

リビングをスルーしてそのまま部屋へ行こうとした水希を呼び止める。

「・・・何？」

一瞬だけ驚いた表情を見せたが、すぐに例の冷たい表情に戻った。でも、そんなことで挫けるか！

「ちよつとだじえ」

噛んだ。

「・・・ちよつとだけ話がしたい」

流石に噛んだことは笑わなかったけれど、相変わらずの表情だ。何ならさっきのちよつとだじえで笑ってくれるところっちも楽しかったんだけどなあ。

微塵も表情を崩すことなく、和室に入ってオレの向かい側に正座した水希。もしかして話を聞いてくれるのかな・・・？

「話は手短にお願い」

オレは水希のこの口調が苦手。どうしてかって言うと、再会した当初のことを思い出すから。

さて、手短に話せとのことなので最初っからフルスロットルで攻めるよ。

「オレは……まだまだ水希と一緒にいたい」

「……………」

水希の表情にやつぱり変化はない。

「水希の信頼を裏切ったのは謝る。けど……」

「けど、何？」

その返しにうつと言葉を詰まらせる。

「またみつともない言い訳をだらだらと続ける気なの？そんなんだつたら、ボクもう部屋戻るけど」

立ち上がった水希。やば……え？予想以上に難攻不落なんだけど。

「それに、落ち着いたら戻ってくるって言っただでしょ？」

「そんなのウソだ。水希の家がどこにあるか知らないけど、実家から星園に通えるならわざわざうちの下宿する必要なんてない」

「……………」

「戻ってこないつもりでしょ……水希もウソ吐くの苦手だよね」すると水希は視線を泳がせてから、一歩だけ前へ出た。そして正座しているオレの目線まで腰を屈めて強い口調で言う。

「戻ってこないから何なの？別にボクがどこで生活しようが君には関係ないでしょ？ましてや、もはや何の関係もない君になんか

—

ちよつと待て。今聞きたくない一言が聞こえたぞ。

「関係なくなんかない」

久しぶりの低い声だ。どうやら水希にこの声音は効果抜群らしい。

一歩下がった水希は驚いたような目でオレを見つめている。

「水希にとってオレは他人かも知れないけど、オレにとって水希は他人なんかじゃない」

相手に何かを言わせる間は与えない。

「オレは」

さて、ここからがオレの本当の気持ちだ。何も感じないで帰らせはしない。

「　　オレはまだ、水希に『さよなら』は言いたくない。それに、人生最大の初恋をこんなところで終わらせたくない」

つかの間の静寂。

また時計の針の音だけが異様に響いた。

そして、開かれた水希の口から放たれる一言。

「・・・勝手にすればいいじゃん」

お互い目を合わせてなかったからどんな顔をしていたのかはわからない。でも言葉だけ聞く限りでは、これは失敗・・・？

そのまま出て行く水希の背中を呆然と見つめながらオレは和室で1人正座をしている。失敗に終わったなんて思いたくもない。この現状では心を動かすことはできなかつたけど、何も感じないわけではない。少なからず彼女は何かしらの感情を抱いた　　取り戻したはずだ。断言するのは早いから、取り戻してくれていると嬉しいと言っておこう。

とはいえ・・・勝手にすればいいじゃんというセリフは予想以上に傷ついた。だけど今彼女が負っている心の傷に比べればこんなもの・・・っ。

そんなことを考えて気が付いたらいつの間にか時計の針は10を指していた。

いつまで呆けてたんだオレは。

もっともつと水希と一緒にいたい

まだ水希に『さよなら』は言いたくない

頭の中にセメントを流し込まれたような感じ。何も考えられない。

そして定番の昼休み。オレとユツキとのぶながはいつものように屋上へと足を運んだ。昨日と違って雨が降りそうな空模様。天気が悪いからか屋上には誰もいない。

「それで・・・結果はどうだったんですか？」

のぶながが今更といった感じで訊いてくる。その隣でユツキは興味なさそうにパンを齧っている。いくら他人事だからってその態度はちょっと冷たいんじゃないの？オレは心配してくれているのぶながにざつと説明した。

「へえ・・・災難でしたね」

いや、そんなアツサリ切り捨てられても・・・。

「どうしよう・・・ホントにもう後がない・・・」

これで水希が帰っちゃったらどうしよう。今まで水希がいることが当然だと思ってたから、どんな風になるのか全く想像もつかない。「でも、ソラは本気でぶつかつたんでしよう？だったら何も心配することはないと思いますよ」

「・・・だけど・・・」

「最後の『勝手にすればいい』という言葉の真意は何か別にあるよ
うな気がしますが・・・それは然るべき時にわかると思います」

あの言葉の真意？オレには止めの一言でしかなかったけど、裏に別の意味があつたりするのかな？

「きつと長門さんは」

のぶながはそこまで言つて、何かを思い出したように話を切り替えた。・・・続きが気になるじゃないか。

「ユツキから何かアドバイスはあつたりしないんですか？」

のぶながが意味深な笑みを浮かべながらユツキに問う。この冷血男にそんな情があるわけがない。悪友がこんな窮地に追い詰められていると言つのに平然とチョコカスタードパンなんか頬張りやがって。

声に反応したユツキは視線をこちらに向けると、面倒臭そうに吐

き捨てた。

「何もねえよ」

「そうですか」

更に笑うのぶなが。オレにはこの2人のやり取りの方がわからない。

「まあ、何とかなるんじゃないんですか？僕も正直面倒臭いです」

「・・・のぶながだけは心配してくれていると思っただけどなあ」
のぶながはたまに（というか常に）本音を包み隠さず言うことがある。それが嬉しかったり逆に傷ついたりするんだけど・・・。今のは今までで1番傷ついた。ただでさえ傷だらけの心に追い打ちかけないでよ。オレが露骨に溜息を吐くと、のぶながは唇を尖らせて不満そうな表情を作った。

「だって、僕には恋人がいないのに人の恋の相談されたってつまんなんですし・・・」

あ、今の顔可愛い。

のぶながに恋人の2人くらいいても不思議じゃないと思うんだけどなあ。性別は知らないけど。

「そっか・・・それはごめん・・・」

「別に謝られても困るんですけど・・・」

「のぶながにだって好きな人はいるんでしょ？」

若干寒気を覚えたけどきつと気のせいだ。

「え？はい・・・いるにはいるんですけど、その人には別の好きな人がいるらしくてですね」

「そっか、でも挫けちゃダメだよ。思い続けねばきつと届くから」

「じゃあ頑張ってみますねっ」

珍しくのぶながの口調が明るくなった。んー、コイツも悩んでいたんだらうか・・・。

「お前ら本題から逸れまくってるぞ」

というユツキの指摘で気付く。そうだった。のぶながの恋愛について詳しく聞いてあげたいところではあるけど今はそれどころじ

やない。

「そうだった。それで、どうしたら水希はもう一度振り向いてくれるかな？」

しばらく考えてみる。けれども何も浮かんでこない。すると、今まで黙々とパンを頬張っていただけだったユツキがついに口を開いた。

「考えなくたってわかるだろうが。どんだけお前は鈍いんだよ」

面倒臭そうに縛っている髪を弄るユツキ。

「え？」

「本音でぶつかる以外に何か方法を考えられるほど優秀な頭を持つてるのかお前は」

「……持つてないね。」

「でも、それは昨日決行して失敗に終わったって……」

「諦めんなよ……」

それだけ言うとユツキは首を鳴らして屋上を出て行った。全身から面倒臭そうなオーラが滲み出てるねこの人。それでも、ユツキのアドバイスをゲットしたのはかなりデカイ成果だ。あんなに他人に興味を示さないあいつがテキトーっぽいけどアドバイスをくれたんだ。これを無駄にしちゃいけない。まあ、内容はのぶながと対して変わりはないけど。

「結局、口出ししましたねユツキは」

可笑しそうに笑うのぶなが。

「興味はなさそうだったからね。ちょっと意外かも」

「素直じゃないんですから本当に」

水希のお父さんが迎えに来る日まであと4日。どうにかして阻止しなければ……！

大した成果も挙げられず2日が経過。オレのダメージはかなり深刻なものになり始めていた。当然のことながら家の中では水希と顔も合わせないし会話もしない。水希に話をしてから何も進展していない現状に焦りまくっている。

「どうしようマジでどうしよう」

「そう焦るな。まだ2日あるんだろ？」

「まだ諦めるには早いですよ」

放課後の机の上突っ伏しているオレの隣でいつもの2人は慰めるように言ってくれた。

「もうダメかも知れない・・・」

オレは完全に諦めムードである。

「ねえ、のぶなが。もしオレが水希と離れちゃったらオレの彼女になっってくれる？」

自分でも何を言ってるのかわからなかった。のぶながと付き合ったら色んな人から妬まれてしまう。そんなのはゴメンだ。

「ソラがいいならいいですよ」

「そうだよねえ・・・って、え？」

もう何が何だか全くわかんない。

「バカな会話してねえで、これからどうすんのか考えなくていいのか？」

おっと、それもそうだ。残りの2日は多分何も変わらないと思うから、最後の勝負を仕掛けるとしたら迎えに来る当日だ。

「当日に賭けるしかないね・・・」

「そうだな」

ユツキも同じことを考えていたらしい。

「でも、どうやって切り出すんですか？何日も会話してない相手に・・・」

「そこはソラに任せる。まあ、そこをミスったら終わりだけだな」

「そんな不安になるようなこと言わないでよ」

もっと傷が増えちゃうじゃないか。オレが更になんとして

と、ユツキが再び口を開いた。

「お前が告白された同じ頃に、水希ちゃんも告白されてたこと知ってるか？」

「・・・え？」

そんなこと知らない。水希が告白されるのは当然なんだろうけど、そんなこと一言も話さなかった。

「そんな話聞いてないんだけど・・・」

「そりゃそうだろ。別に受け入れる気のない告白なんて彼氏に言っても仕方ないからな」

と、そこで大きな何かに気付いた。どうして水希があんなに怒っていたのか、たった今わかった。確かに浮気未遂というのものもあるけど、1番は・・・

「自分が告白を断つたのに、オレが別の女の子と一緒にいたから・・・」

「頭がよく回るじゃねえか」

それだ。それがきつと水希には許せなかったんだろう。だから屋上で会った時も、何も言わなかった。もう彼女はそこで何かを諦めていたのかも知れない。ざつとまとめると水希は、オレが隠し事をしたことに怒り、オレがウソを吐いたことに怒り、最終的には自分が告白を断つたのにオレが陽ちゃんと一緒にいたことが許せなかった・・・ということになるのかな？

「何て断つたかは知らないけど、まあ・・・お前にこういうことをされてあれだけ怒るんだから、きつともものすごい丁寧に断つたんだろうな」

何で言うってくれなかったんだろう。少しでも話してくれれば、オレの対応も変わってたかも知れない・・・なんて言うのは卑怯だ。今更そんなこと思ったって何も変わりはない。

「うわぁ・・・」

ここまで気付いて思う。

「すごい悪いことしちゃったなあ・・・」

「気付くのが遅すぎますよ。彼女がいるのに他の女の子に目が行くなんて考えられません」

「反省してます……」

「それで、当日の作戦はどうするんだ？」

当日は……。下手に何かを言うよりも、最後に聞いておいてもらいたいことだけを言えばいい。それで最後になっても後悔しないような、ぴったりのセリフを言えばいいんだ。オレにそこまで柔軟な思考力はないけど……。何とかなるはずだ。

「何とかするよ。でもさ、不安だから……。できれば一緒にいけると嬉しいなあなんて」

「はあ？」

「まあ、いいんじゃないですか？これもソラの成長の一環なんですし、少しくらい協力してあげても」

「少しくらいってかなり協力してる気がするんだが」

渋々といった体でユツキも承諾してくれた。今回の件はホント感謝してるよユツキ、のぶなが！

「ここまで協力してやったんだから、失敗はナシだ」

ユツキがニヤリと笑う。

それに対応するように、オレも無理やり頬を引き上げる。笑えるかわからないけど。

「おうよ、任せといて」

こつん、と拳をぶつけ合う。最初は頼りないと思ってたユツキだけど、最後はやっぱり頼っちゃった。いつも見ている限りでは失敗しかしてないように見えるユツキだけどこからこんな恋愛経験値を……。

気になったけど、ここで怒らせるのは勿体無いので胸の中にしまっておこう。

その帰り道、電車の中でもオレたちは一緒だった。思えば、ユツキとのぶながと一緒に帰るのは結構久しぶりかも知れない。ここ最近は色々ありすぎたからなあ……。陽ちゃんと寄り道したり、屋上で話し合ったりと真っ直ぐ家に帰ることが少なくなってた気がする。

「おいソラ、ちょっとコーラ買って来いよ」

「僕は紅茶でいいですよ」

「ちょっと待って、いつオレが君たちに飲み物を買ってくると言ったのか教えてくれるかな」

さつきから黙って窓の外を見ていただけだというのに。

「はあ？お前に協力してやるんだから、コーラの1つや2つくれえ買わせたっていいだろうが」

当然のように言うユツキ。さつき感じた頼もしさなど今は微塵も感じられない。まあ……。コイツの言い分も間違っではないんだけど、どうしてもか素直に領けない。遣伝子レベルでコイツに服従するのを嫌がっているらしい。

「そうですね。紅茶を買ってきて公衆の面前で僕に口移ししてくれただっていいじゃないですか」

「……え？」

ユツキは普通の顔をしているけど、今のぶながはすごいことを言った気がする。口移し？そんなことしたらもつと水希との関係回復が遠退いちゃうじゃないか。別にしたくないわけじゃないんだけど。「何お前キョトンとしてんだ？別に不自然な部分は見当たらなかっただろ。なあ、のぶなが」

「はい。ソラからの口移しなら僕何でも飲みますよ」

「のぶなが、熱でもあるんじゃないの？もしよかったら薬買っよ？」
こんなことを真面目な表情で言えるなんて絶対に正気じゃない。

「薬……ですか？もしかして……」

「そっち方面の薬じゃないから安心して。買うのは解熱剤だよ」

「どっちでもいいから、早く買って来い。もう着くぞ」

平然と荷物を持って立ち上がるユツキ。なんたる、コイツ疲れてるのかな？それだったらオレの方が疲れてるね。

でも、何ていうかこの2人とつるむのは嫌いじゃない。今も久しぶりにちよつとだけ楽しい気分になれたから。

「わかったよ・・・コーラと解熱剤ね・・・」

そしてオレは渋々、自販機と薬局へ向かうのだった。

日曜日。

約束の日。

水希の父親

ながと
そうせき長門漱石さんはオレの心境も知らずに、愉快に

姉貴と世間話をしている。その傍らでオレは何を言えればいいのか考えてるんだけど、真正面に仏頂面の水希が座っているので頭が全く回らない。こちらを見ているわけじゃないのに、凄まじいプレッシャーと威圧感。小さな虫だったらこの殺気だけで殺せちゃうんじゃないかってくらいすごい。そんな状況の中何かを考えようだなんて普通の人間だったらできない。

「そうかぁ・・・。ミナトちゃんももう大学受験なのかぁ・・・」

「時間が流れるのって早いですよねえ」

ちなみに今の姉貴は営業モードだ。礼儀正しく、漱石さんと話をしてる。服もちゃんと着てるし。

「だよなー。あんなに小さかったソラちゃんが高校生になったんだもんね」

視線がオレに向けられる。オレは適当に相槌を打つくらいしかできなかつた。冗談抜きで今はそれどころじゃない。

「それにしても、綺麗になったな。ミナトちゃんもソラちゃんも」

「ホントにお上手ですね」

ふふつと笑う姉貴。オレは何も聞いていなかったことにしておいた。今はそっちに突っ込む余裕はない。

それからしばらく話を続けていた姉貴と漱石さんだったけど、2人の傍らにいる水希の機嫌が目に見えて悪くなっていくのとオレの精神力が恐ろしいほど削られていることに気付いてくれた。

「・・・まだまだ話したいことは山ほどあるんだが、うちの愛娘の機嫌が悪くなつていくんでそろそろ帰るとするか」

漱石さんが立ち上がる。オレの隣で姉貴も立ち上がった。どうやら見送りに行くらしい。

そして・・・向かいに座っている水希が清々した顔で立ち上がった。これで顔を見合うのも（オレが一方的に見ただけだけど）最後になるかも知れないのに、そんな顔しないで欲しい。

「まあ・・・」

流石の姉貴もいい言葉が見つからなかったらしく、言葉を濁らせていた。

「おい、何も言わなくていいのか？」

小声で漱石さんが水希に問う。すると彼女は姉貴を見つめて小さく頭を下げた。

「・・・お世話になりました」

ふてた様な声で水希は言った。そのままオレに視線が移れば話を切り出そうとしていたんだけど、残念なことに水希はこちらを一度も見ようとしなかった。オレは座ったまま、リビングを去っていく水希の背中を見つめているだけ。このままでいいのかと訊かれて頷くわけがない。

これで最後でもいい。

10年前の最後の日のように、オレから切り出さなければ。

黙っていたら今度こそ離れ離れた。しかも、こんなに後味の悪い終わり方だなんて。

オレは貧血を起こしそうになりながらも、立ち上がった。リビングから飛び出して、閉まりかけている玄関のドアを勢いよく開け放つ。顔を上げると既に車に乗りかかっている水希の姿があった。

迷うな。ここで躊躇ったら全てが台無しだ。

まだまだ彼女に伝えていない想いがある。
叫べ。腹の底から。彼女への想いを。

「水希っ！」

水希はゆっくりとこちらを振り返った。ここで今日初めて視線がぶつかった。その瞬間、オレの中で堰が壊れた。

でも、ここでウダウダと御託を並べるわけじゃない。かと言ってずっと黙っているわけでもない。

オレが言いたいののはただ1つ。

「・・・待つてるから」

こんな場面でこんなことしか言えないオレはヘタレかも知れないけど、これが今言える全てだ。彼女への想いを伝えるのは後でもいい。ホントは伝えたくてウズウズしてる。ホントは彼女の笑顔が見たくてたまらない。

それでも、今はこれだけで十分だ。

「・・・」

少しだけ表情が変わったかと思うと、その顔を隠すように水希は車内へ乗り込んでしまった。

「それじゃ、ミナトちゃんもソラちゃんも元気だな」

窓から片手を挙げて、水希を乗せた車はゆっくりと発進し始める。ウソだ・・・このままお互い顔を見合えなくなるなんて・・・。

徐々に小さくなっていく車の影をオレは最後の最後まで見ていた。そして、車の影が見えなくなったかと思うと急に視界がグルグルと回りだして・・・オレの意識は途絶えた。

ソラくんの家から出て車は走る。

久しぶりに乗った車の匂いは何だか懐かしかった。お父さんが単

身赴任してから1回も乗ってなかったから懐かしく思うのも無理ない。

流れる景色をぼんやりと眺める。ボクは何を思っているんだろう。今から家に帰るというのに、心の中のモヤモヤがどんどん大きくなっていく。安堵なのか不安なのか区別できないこの気持ち。本当に居心地が悪い。

ボクはソラくと距離を置くって決めただ。

ソラくんはあの可愛い後輩と一緒にいればいいんだ。しかも、2人で逢引きする現場まで目撃したんだから2人の関係は確かなものだともわかつてる。

なのに・・・それなのに・・・なんで涙が出てくるんだろ。

心のどこかじゃ諦め切れてない。10年も待ってたのに、やっと出会えた王子様なのに、こんな些細なことじゃ諦められない自分が心のどこかに潜んでる。

ボクはどっちを信じるべきなんだろう。表面上で片意地張ってる自分を信じるのか、それとも心の中で諦め切れてない自分を信じるのか・・・。

「・・・水希、本当にこれでいいのか？」

そんな葛藤を抱いているボクにお父さんが声をかけてきた。

「いいの」

できるだけ涙声になっているのを隠そうと、小声で端的に返事をする。

「お前が何を見たのかは知らねえがな、これだけは言わせてもらおう」

前を見ているお父さんの顔はどんな顔なのかはわからないけど、少なくともからかっているような気配はしなかった。だからボクも真剣に耳を傾ける。

「後悔しねえようにしろよ」

「・・・・・・・・」

返事はしなかった。これで声を出せば泣いてることがバレるって
いうこともあった。それに・・・自分が何で迷っているのかを認め
るのが恥ずかしかったから。

ボクはこれからどうなっちゃうんだろう。王子様ナシでもちゃん
としていけるのかな？いや・・・逆か。ボクの王子様はボクがいな
くてもちゃんとやれるのかな？こんな時、「あの後輩がいるから大
丈夫」って思っちゃうボクはとっても意地っ張りだ。

「おい、しっかりしろ」

聞き覚えのある声でオレは目を開けた。頭上にはユツキと氷嚢を
手にしたのぶながが立っている。あれ？オレは一体何を・・・。

「長門さんを見送ってしばらくしたら、突然倒れたんですよ。もう
あの時はどうしようかと・・・」

オレのおでこに氷嚢を当てながらのぶながが言う。氷が冷たくて
気持ちいい。

倒れたって・・・どんだけ追い詰められてたんだオレは・・・。
自分の精神力が情けなくなってくる。

ちなみにユツキとのぶながには午前中からうちに来てもらって、
オレの動きを陰から見守ってもらっていた。1人じゃ不安だったか
らね。だから、漱石さんと姉貴の会話もオレの最後のセリフも全部
この2人は見ている。

「・・・まだクラクラする」

起き上がってみただけ、立てそうにない。

「無理すんな。39度も熱があるんだから普通にしていられるわけ
がねえだろ」

ユツキは面倒臭そうに大きな溜息を吐いた。何というか、2人に
迷惑ばっかかけてホントに申し訳ない・・・。

「2人に協力してもらったのに・・・失敗しちゃったみたい、だね」
相談も聞いてくれたし、アドバイスもしてくれたし、更には本番も見守ってくれた。それなのに・・・「ごめん」

涙が出てきた。

「お、おい泣くなよ！？別に失敗に終わったわけじゃねえだろ！？」
急にオレが泣き出したからか慌てるユツキと、

「そんな顔も可愛い・・・」

なぜか顔を仄かに紅潮させるのぶなが。

「だって・・・」

水希が去ってしまった悲しみやらあんな軽率な行動をした自分への怒りやら後悔やらが混ざりに混ざり合って今の心境は言葉にできない。この涙もどうして出てくるのかもわからない。オレは何であるかをしたんだろうか。こういうことになるのは最初からわかっていたはずなんじゃないのか・・・どんなに悔やんでも水希は戻ってこない。オレはホントにバカ野郎だ。10年もの間抱き続けた気持ちを自分の弱い意志で全部台無しにしたんだから。

「電話・・・」

涙が止まらなくて困っていると言うのに、突然電話が鳴った。誰だよこんな時に電話かけてくる無礼なやつは。もしこれで相手がセールスだったらその会社に殴りこみに行つてやる。今もたれているソファから電話までの距離は結構ある。我慢して取りに行くしかないか。

「つとと」

立ち上がった瞬間に、フラツとしたけど何とか歩けるみたいだ。

「大丈夫ですか？」

心配して肩を貸してくれたのぶなが。その顔がどうして赤くなっているのか知りたいけど、今は素直に身体を預けることにした。やかましく鳴り続ける電話を鬱陶しく思いながら、受話器を取る。

「もしもし？」

涙声を隠すように言った。

『お、ソラちゃんか？』

電話の相手は漱石さんだった。何の用事だろう。

「漱石さん……」

『落ち込んでるみてえだな』

受話器の向こうから笑う声が聞こえてくる。ちょっとだけ腹が立ったけど、その笑い声にかいかいや嘲りみたいな感情はないように思えた。むしろ、落ち込んでるオレを励まそうとしている気ですら感じ取れた。

「……わかっちゃいますか？」

『当たり前だろ。小さい頃から見えてきてんだ、声聞けばどんな顔をしてるかくれえわかる』

「……ってことは、水希から内容を……」

あまり漱石さんには知って欲しくなかった。きっと漱石さんの中のオレの評価はガツクリと落ち込んだことだろう。また大事な人との関係が1つ壊れた。と思ってたんだけど……『ざっとだけどな。そのことで1つだけ聞きたいんだが』

そこで漱石さんは一拍置いた。

『おじさんにはソラちゃんがそんなことするとは思えないんだ。もしかしたら、水希の勘違いかも知れないだろ？だからおじさんに一度話してくれないかな？』

「えっ……」

ここに来て、また希望が見えてきた。漱石さんに話すということの水希に伝わる可能性だつて十分にある。

『そうだなあ……明日の夕方とか時間あつたりするかい？おじさん火曜日までしか休みを取ってないもんでね、用事はできるだけ早めに済ませておきたいんだ』

「は、はいっ！大丈夫です！」

自分でも無意識のうちに声が弾んだ。

『ははっ。今、笑顔だろ』

「はい……また希望が見えてきたので……」

『それじゃ、明日の夕方7時頃にソラちゃんの家に行くからな』

あ……うちで話し合いするよりも、もつといい場所をオレは知ってる。未練がましいような気もするんだけど、この事件の決着はあの場所を着けたい。

「あの……」

電話を切るうとする漱石さん呼び止める。

『どした？』

「場所なんですけど、うちじゃなくて隣町のあの公園でもいいですか？」

隣町の公園だけで漱石さんにはどこなのか伝わるだろう。

『どーしてもそこがいいってんならいいぞ。あの公園でな』

「はいっ。よろしく願いますっ」

そう言って通話は切れた。受話器を置いて、小さくガッツポーズ。

「よし……まだ大丈夫だった……。今度こそ……」

それを見ていたユツキが優しく笑う。

「よかったじゃねえか。少なくとも失敗はしてなかったようだし」

「うんっ」

安心というか緊張というか……今日の感情はやたら複雑なものばっかだ。これで水希が少しでもオレに対する態度を変えてくれれば嬉しい。だからこそ、明日は漱石さんに全部話すつもりでいかなーい。

でも、その前に……

「あれ……またフラフラしてきた……」

視界がグルグルと回りだして、その場にペタンと座り込んだ。あれ……まだ熱が下がってないのかな……？

「もう、無理ばっかしないでください」

またのぶながに肩を借りる。その時、抱きかかえるのぶながの真っ白で（ちよつと赤くなっているけど）綺麗で端整な顔が近づいたから顔が熱くなった。

「あはは……ごめん……」

漱石さんと話す前に、この熱をどうにかして治しておかないとい
けない。

10月：まだ『さよなら』は言いたくない（後書き）

こんにちは、菊地です。

ホントに自分は真剣な場面を書くのが苦手みたいです。どうしたらいいんですかね。

お見苦しい部分が多々（というか殆ど）あったと思います。

もしよければこれからもお付き合ってください。

以上、菊地でした

10月：お話があるんです

気合で熱を下げた翌日の月曜日。

現在時刻は6時45分。家から隣町の公園まではそこまで遠くない。オレは学校を出てから家にも帰らずそのまま隣町の公園へと向かっていった。電車の車内は下校途中の学生で溢れていたけど、何とか座る席は確保できた。視界に入る学生の中には男女のカップルもいる。そのカップルの笑顔を見るたびに胸がチクチクと痛むけど、それもあと少しの我慢だ。ここで漱石さんにちゃんと話せば、ちょっとは何かが変わってくれるかも知れない。今はそう願うしかできなかった。

夕日を背中に受けながら、もしこのまま何も変わらなかつたらどうなるかをずっと考えていた。水希がいなくなった日常をオレはとう過ごせばいいのか。全然想像もつかない。それくらいオレにとって水希がいるということは当たり前だと思っていたのだ。彼女が去ってから、その生活のありがたみに初めて気付く。ありがちな展開だと自分でも思った。ドラマとかマンガの中だけだと思っていたのに、それが実際に自分に降りかかるなんて思ってもいなかった。

正直言うと、今は水希の顔や声や仕草なんかが愛おしくて仕方がない。

こんな感覚は初めてだ。彼女の全てを独占したいという欲望。これはかなり危ないことくらい自分でもわかってる。でも、しょうがないよね。だって男の子なんだもん。

隣町の駅に着くと、見覚えのあるようなないような学生たちがこちらをチラチラ見ながら歩いていった。多分、小学校とかそこら辺で一緒だった人たちだろうけどオレの脳内にその人たちの記憶は一切ない。あっても何の意味もない。そんなことを考えている空き容量もない。

美春と遊びに来たとき以来だから、夏休みから来てないのかな？
まあ、来た所で思い出したくもない思い出が掘り返されるだけなん
だけど。新しい住宅街やらコンビニやらでオレが住んでいた頃とは
全く違っている。さてと、待ち合わせの時間まであとちょっとしか
ないから急いで行かないと……。

公園に到着すると、漱石さんがベンチに腰掛けていた。

「おう、よく来たな」

漱石さんは相変わらずのオールバックで無精ひげだった。一言で
言うとチヨイ悪でワイルドな感じの人だ。どうしてこんなワイルド
な人から水希みたいな可愛い女の子が生まれるのか何度疑問に思っ
たことか。

「お待たせしました」

息を整えながら言う。一応、間に合うように走ってここまで来た。
漱石さんは疲れたような顔を作って見せた。遅れてすいませんね！

「あの、早速お聞きしたいんですが……」

オレはどうしても気になることが1つだけあった。なぜか今日水
希は学校を欠席した。それはオレが原因で学校に来なかつたのかど
うかだけ知りたい。オレが全部悪いのに水希が休むことはない。オ
レの方がどつちかかっていうと休みたいくらいだった。微熱がある中、
水希がどんな顔をしているのか確認するためだけに今日は学校に行
つたのだ。それなのに本人がいないんじゃない意味がない。

「どうして、水希さんは今日学校を休んだんですか？」

すると漱石さんは困ったように苦笑いした。

「それを最初に聞いてくるとは……。やっぱり女の勘は鋭いも
んだね」

「オレは男です」

この人はふざけてるのか本気なのかわからないことがあるから困

る。

「今朝な、水希がいつまで経っても学校に行こうとしねえから聞いたんだ。そしたらアイツなんて言ったと思う？」

そんなこと言われてもオレには皆目見当がつかない。

「『ソラくんがキツそうな顔するから行かない』って言ったんだ。これ聞いてどう思う？」

オレが水希のあの毅然とした顔を見るのが辛かったように、水希もオレの追い詰められたような表情を見るのが辛かったのだろうか。だとしたら・・・水希はオレが原因で欠席したということになってしまふ。

「・・・やっぱりオレのせいで、水希さんは・・・」

「多分、アイツはまだ諦め切れてないんだろうな。諦めてるんなら普通の顔してるハズだろ？なのにアイツは何か思いつめた顔ばっかしてやがる。生まれてからずっと水希の顔を見てきたけど、あんな曇った顔を見たのは初めてだった」

「そう、ですか・・・」

オレは俯く。親も見たことのないような顔をさせてしまった自分はなんて罪深い人間なんだろうか。

「まあ、そう落ち込むなって。ソラちゃんだってミナトちゃんから見れば生まれてから一度も見たことないような暗い表情してると思っせ」

自分ではあまり変わらないと思ってたんだけどな。やっぱり他人から見れば暗くて追い詰められたようでキツそうな顔をずっとしていたみたいだ。元から笑ったりしらないから更に暗い表情に見えたらもうな。

「父親としても、愛娘のあんな顔はあんまり見たかないんだが・・・。治すにはソラちゃんの協力が必要不可欠だ。どうかもう1回水希と話し合ってみてはくれないかねえ？」

漱石さんの真っ直ぐな視線を感じて、顔を上げる。

話し合いたいのは山々だけど水希がそれに応じてくれるかどうか

はわからない。もしかしたら断られてしまつかも知れない。

「学校に来てもらわないと、どうしようもないんですけど・・・来てもらえますかね？」

話し合うためには学校に来てもらわないといけない。キツイのはオレも一緒なんだから、少しくらい我慢してもらってもいいんじゃないかな・・・？

「それもソラちゃん次第かな。ソラちゃんが追い詰められているのもわかるが、露骨に感情を顔に出すのは水希を追い詰める原因にもなってるんだから」

そこで言葉を切る漱石さん。

「・・・どうして水希が星園学園に行くなんて言い出したか知ってるか？」

急に話題が変わったのに戸惑いながら首を振る。言われてみればどうして水希は星園学園に転校してきたんだろうか。それにオレの家に下宿してまで行きたかった学校なのかも不思議に思えてくる。考えていくとどんどん謎が浮かび上がってきた。どうして水希はオレの家に下宿することになったのか、どうして姉貴の存在を知っていたのか、今思えば不思議なことばかりだ。

「知りません」

姉貴は父親同士が知り合いで・・・とか言ってたけど詳しいことは知らない。

「アイツが星園学園に入学することになったのには色々と経緯があった」

「色々・・・ですか」

「今住んでる家の前に住んでたところから聖パウロは通ってたんだが、おじさんの仕事の都合で引っ越さなきゃいけないっーことになっただな・・・」

ちなみに漱石さんがどんな仕事をしているのかも知らない。娘を下宿させるくらい忙しい仕事なのだろうか。

「それで今の家に引っ越した当日に、1人の男だか女だかわかんね

えくらい整った顔立ちの人に何か助けられたみたいなんだ。何でも大事なもんをひったくりに盗られたとかでその優しい人物がそれを自分がボロボロになってまで取り返してくれたらしくてな。別れ際に名前と学校を尋ねたら・・・」

「星園学園だった、ってことですか？」

話を聞きながら頭の隅に何かが引つかかった。

「そう。それから水希は『星園学園に行きたい』って聞かなくてな理由を聞いたなら『助けてくれた人があの人に似てた』とかワケわかんないこと言うわけよ。それで苦肉の策で星園に近いソラちゃんの家の水希を送りつけた。うちからじゃ星園も聖パウロも遠かったしな。どうせなら深海家に預けちまおうと思って」

それじゃあ、最初から水希はオレが秋谷岬くんに似ていると最初から思っていたってことなのかな？それはそれで嬉しいような嬉しくないような・・・。

「ソラちゃんと水希の間に何があったかは知らないが、その何かがいツにとってもソラちゃんにとっても大事なことなんだっていうのはわかるつもりだ。だからこそ水希は見たこともないような曇った顔を見せるしソラちゃんだってキツそうな顔をするんだろ？」

漱石さんは空を仰いだ。そして溜まった毒素をゆっくり抜き出すように呟いた。

「お互いのことを好きだと思えているうちが1番幸せなんじゃねえのかなあ・・・」

「・・・」

オレはまだ水希を諦めるつもりはない。まだ水希のことが好きだ。向こうがオレを嫌いになってもオレは一方的でも構わないから好きでいる。水希が病んでしまいうくらいに好きでいてやるつもりだ。

「しかも、離れてるのにそいつの顔を意識してるなんて恋以外何も考えられねえよおじさんは」

もうトシなのかもな、と自嘲気味に漱石さんは笑った。

そこまで言われたらオレも決心しなければいけない。もう水希を

見てもキツそうな顔をしないこと。なるべく彼女の前でも普通でいること。かなりキツいとは思っけど水希の笑顔をもう一度見るためにも、漱石さんの厚意に報いるためにも乗り越えていかなければいけない。

それと、自分の気持ちにウソを吐かないためにも。

陽ちゃんと一緒にいるところを見られてから、どうしようもないほどの水希への想いが溢れ出して来た。自分でもどうして今まで気付かなかったのだろうというくらい大きくて重くて自分では抱えきれないほどのものだった。だから、それを全部伝え切るまで諦めるわけにはいかない。そして、できれば

「・・・わかりました」

オレはゆっくり言う。

「水希さんの前でも普通にすると約束します。絶対に破りません。

水希さんのためにも、漱石さんのためにも・・・」

そう言うのと漱石さんはニヤリと優しく笑った。

「バカ野郎、おじさんのためだとかは考えなくたっていい。ソラちゃんは自分のためだけに頑張れや。おじさんはただ愛娘の可愛い笑顔が見たいだけの親バカなんだから」

それはオレも同じです、とは言わなかった。

周囲から見ればオレはホントにバカみたいな男なんだろう。バカだと笑われたって構わないくらい、水希のことが好きなんだ。この気持ちにウソはない。

「明日から水希さんにも学校に来てもらってもいいでしょうか？」

「おうよ、おじさんに任せとけ。その代わり絶対繕いを戻せよ？」

「・・・はい」

オレは少し恥ずかしさを感じながら小さく頷いた。

漱石さんは見た目とは違って結構真面目に考えてる人なんだなあ・・・。ちよつとだけ認識を改めさせられたかも。

「ところでソラちゃん」

オレから視線を外し、再び星空を仰いでいる漱石さんがオレの名

前を呼んだ。

「はい」

なんだろうと思いつつ返事をする。

「・・・高2になっても胸が成長してないのは何でだ？」

「、、」

絶句した。

「おじさん、ソラちゃん絶対美人になると思うんだけどなあ・・・」
さつき改めさせられた認識が逆戻りだ。恐ろしいほどのイメージ
ダウン。

オレは落胆の色を見せないように言った。

「オレは男ですから」

翌日。

教室へ入ると頬杖をついて外を眺める水希の姿があった。その姿
を目にした瞬間、眠気が覚めて全身に力が入る。たった3日顔を見
ていないだけなのになぜかその横顔はとて懐かしく思えた。オレ
は水希の後ろ側を通って席に着く。後ろを通ったときは緊張が最高
潮に達して全身から嫌な汗が噴き出る。それでも普通の顔をしてい
なければならぬ。

オレが隣に來ると窓側を向いていた水希は突然机に伏した。そこ
までオレの顔を見たくないのかな・・・とちよつとだけ落ち込んで
みる。こっちは水希の顔を見たくて仕方ないっていうのに。

水希に感付かれないように横目で水希の様子を見ていると、伏せ
た腕の隙間から覗く水希の目と一瞬だけ視線が合う。

「っ」

視線がぶつかった直後に水希は立ち上がって教室を逃げるように
出て行った。・・・オレも何でか知らないけど心臓の鼓動が速くな
った。何だろう、こんな感覚は初めてだ。ぽーっと水希が出て行っ

た入り口付近を何気なく眺めてみる。水希は今何を思っただれを見
ていたんだらう。向こうもオレのことを考えていてくれいたんだら
うか。んー。考えてみても何もわかりゃしない。

午前中の授業中も隣が気になつてちつとも集中できなかった。右
側は見なかったけど、水希が何だかソワソワしているのが見て取れ
たからだ。いつもの水希なら一言も喋らず無言でノートにペンを走
らせているのだが、今日だけはノートを取っている様子も窺えな
かつたし、ずっとペンを弄つたり頭を抱えたり度々こちらに視線を向
けていたりした。明らかに挙動不審だ。実際、午前中4つの授業
で各教壇に1回ずつ注意されてたし。中には「深海さん、注意して
あげて」とか意味不明なことを付け足してくる先生もいたけど、オ
レはその注文を苦笑いで受け流した。満足に口も利けないのにどう
やって注意しろと。

そしてその挙動不審っぷりは留まるどころを知らず、ついにはワ
ザとこちらに転がるように消しゴムを落としたり、ペンを落とした
りと隣にいるオレが恐怖すら抱く行動に出始めた。オレに何をして
欲しいのかさっぱりわからないから、それもそのままスルーし続け
た。そんな無意味に時間が流れて今は昼休み。オレはいつものよう
にユツキとのぶながと屋上に行こうと教室を出た時だった。

「きゃ……」

「いつ」

曲がり角で誰かとぶつかった。急の出来事でオレも反応できず、

2、3歩ふらつく。

「ごめん……大丈夫？」

ぶつかった相手は尻餅をついてしまったらしく、痛かったのかそ
のまま廊下に座り込んでいる。オレは相手に歩み寄って謝りながら
手を差し伸べた。

「こっちこそごめん……」

相手は素直にオレの手を握ってゆっくりと立ち上がった。……

相手の外見は黒髪セミショートでどこことなく美少年のような雰囲気
を漂わせたボーイツシュで可愛い

「あー」
顔を上げてオレの顔を確認した彼女は表情を硬直させた。そして
それを見たオレも硬直した。

サツ

彼女 水希はすごい勢いで視線を逸らして顔を明後日の方向へ
向けると、硬直して力の入っていないオレの手から自分の手をスル
リと抜き取った。そしてそのまま教室の中へと入っていく。

「……………あー」

ユツキが言葉を探している。

「ん……………」

のぶながも言葉を探している。まあ……………よくある話だよ。別に
オレのことを嫌っているわけじゃないと思いたい。でもさ、明後日
の方向を向く水希の顔が若干赤かったような……………。

「ど、どうしたんだソラ。早く行こうぜ」

かける言葉が見当たらなかったのかユツキは不自然に慌てだす。
そんな風に誤魔化すくらいだったら寧ろノータッチで黙っててくれ
た方が嬉しかった。

「そうですね、早くしないとパンが冷めちゃいます」

購買のパンが温められているとは初耳だ。1回も温めてもらった
ことはないし第一購買に電子レンジはない。

「……………うん」

力なく頷いてオレは妙に足早に歩く2人の後ろをついて歩く。そ
のまま無言の時間が続き、階段の踊り場で誰かとすれ違った。

「こんにちは」

オレに向けて言っている気がしたのでオレは顔を上げて挨拶の主
がいるであろう方向を見て返事をした。

「こんにちは は」

しかし、こちらが挨拶し返した時には、既に相手は階段を降りて廊下を軽やかに歩いていった。あれ？今の声といい後姿といいどこかで見覚えが……。

「何だソラ。まだ浮気し続けてたのか？」

隣のユツキがからかうように言う。もしかして……。

「だから浮気は未遂だって言ってるでしょ……。もう掘り返さないでよ……」

流石のユツキもこれ以上からかう気にはなれないらしく、何も言いつ返してはこなかった。

もうあの子とは何の関係もない。元々断りきれなかったオレがいけないんだから、あの子に罪はない。だからあの子を責めるつもりはない。挨拶してきたならこちらも返すくらいの覚悟はあった。

「でも、今の子どこへ行くつもりだったんでしょね。歩いていった方向を見る限り、僕たちの教室っぱかったんですけど」

のぶながが頬に指を当てて言った。あの子が別にオレたちの教室に行っても何の問題もないような気がするんだけど……。

「別に何もないだろ。誰がどこへ行こうが自由じゃねえか」

いつもの口調でユツキが言う。まあ、関係ないんだし気にするだけ無駄だと思う。それよりも早く昼食を食べないと時間がなくなっちゃう。

「そ、それよりさ、早く食べないと昼休み終わっちゃうよ？」

話題を打ち切るように忠告すると、2人は特に怪しまず素直に歩調を速めた。

……でも、正直言うとあの子の行き先がとっても気になってた。根拠はないんだけど、かなりヤバいことが起きそうな気がしてたから。

さっきのハプニングから心臓のドキドキが止まらない。ただ手を握られたっただけなのに、どうしてここまでドキドキしてるんだろ。・・・そんなこと問わなくてもわかりきってること。

あれからボクは少し気持ちの整理を試してみた。ボクはどうするべきなのか、意地を張り続けるのか、それとも早く和解するべきなのか。・・・気持ちの狭間でボクは揺れていた。

まだ『さよなら』は言いたくない

ソラくんの言ったその言葉がボクを悩ませていた。その言葉を聞いたときから気持ちが揺れ始めた。そして別れ際でのあの言葉・・・あんな言葉を聞いて普通に振舞っていられる元カノなんているのかな。まあ、暴力とかよっぽど酷いことをされて別れたカップルなら気持ちが悪くどころか元交際者が気持ち悪くなって仕方がないと思うけど・・・。

あの日に屋上でソラくと鉢合わせするとは思ってなかった。しかも、隣にはボクじゃない違う女の子がいる時に。よくよく考えてみれば、ソラくんだって健全な男子高校生なんだから異性に興味があつたって不自然じゃない。それなのに、そんなちっぽけなことでもボクは酷いことを言ったりツンと嫌な態度をとってしまった。自分で言うのもアレだけどそれも不自然じゃないと思う。ボクは後輩からの告白をソラくんがいるから断つたっていうのにソラくんが別の女の子と一緒にいたのが許せなかった。その2人にどんな関係があつたかは知らない、告白があつたのかは知らないけど・・・それが許せなかった。そして2人の姿を見た瞬間、心の中の何かが一気に冷めていくような感覚と頭の先から凍っていくような感覚を覚えた。その時冷めた何かがソラくんへの・・・あ、愛だったのかも知れない。ボクは自分で作ってきたお弁当を机の上に広げているけど、箸は動かない。というか食欲がないのにどうしてお弁当を作ってきたんだろう。

「はあ……」

左隣の今は主がいらない机を見ながら溜息を吐く。ホント、これからどうなっちゃうんだろう……。

と、先を考えているボクの耳にどこから声が聞こえてきた。

「長門ー？お客さんだぞー」

振り向くと入り口近くの男子グループの1人がボクを呼んでいた。ボクにお客さん？誰だろう。お弁当箱のフタを閉じて、ボクは教室の入り口へと歩いていく。

「ボクにお客さん？」

声をかけた男子グループの1人に尋ねる。転校してきて結構経つてるからクラス内なら殆どの人と話はできるようになった。

「うん、1年の子だと思うけど」

「……？」

1年の子？ボクに後輩で知り合いはいないはずんだけどなあ……。誰かいたかなあと思いつつ入り口から顔を出す。すると……突然すいません」

ぺこつと頭を下げる小柄な女の子がいた。えーつと……

「どちらさま？」

女の子が顔を上げた。鎖骨にかかるくらいの茶髪でウェーブしたパフィーヘアが特徴的な女の子だった。そしてその子と目が合った瞬間、彼女が誰なのかはつきりと思いついた。

「あ……」

「えつと、1年の七草陽ななくさひると言います」

この子は……ボクが屋上でソラくんと一緒にいるところを見かけた少女だ。ボクから見ると丁度恋敵のようなポジションになる。彼女から見てもボクは恋敵のはずだ。そんな七草さんがボクに何の用事だろう？

「それで、用事って言うのは？」

心なしか口調がキツくなる。そんなボクに臆せず、七草さんは続けた。

「ちょっとお話があるんです。あと、謝らなきゃいけないこともあって……」

申し訳なさそうに目を伏せる七草さん。話ね……ボクはあんまりしたくないんだけどここで追い返すのも大人気ない気がする。

「そう……。それじゃあ、屋上でも行こうか……」

「あ、」

屋上へ行こうとしたボクを七草さんは止めた。

「屋上はダメです。もっと別の場所をお願いします」

「どうして？」

理由がわからない。

「だって……ソラ先輩がいるじゃないですか」

その名前を申し訳なさそうに小声で言う七草さん。それにちょっとだけイラつときたけど、笑って耐えた。

「話つてそのことなんでしょ？わかつたよ、それじゃあ……中庭にでも行こうか」

ボクは内なる感情を表情に出さないように必死だった。

「……はい」

七草さんもボクが何を思っているのか察したらしく、小柄な身体を竦めて頷いた。

パンを買ったのはいいものの、全く食欲がない。まだ完全に風邪が治っていないのかも知れない。いつもなら数分で食べちゃうようなジャムパンを今日は10分かかっても半分も食べていない。

「どうしたソラ。食べ切れねえのか？」

物欲しそうな顔でユツキが訊いてくる。お前の魂胆なんか見え見えなんだよ……！

「ちよつと、食欲なくてさ……。よかつたら食べる？」

オレがジャムパンをユツキに向けて差し出すと、

「お、いいのか？悪いな」

受け取るうとしたユツキより早くのぶながが動き出した。

「俺のジャムパンだぞ・・・」

静かな怒りを燃やすユツキ。元々オレのだから。お金払ったのオレだからね。のぶながはゆっくり食べていた弁当の残りを一気に口へと流し込んで飲み込んだ。そんなに急いで食べたら詰まるよ？

「それ、僕も欲しいです。ちょっとお弁当だけじゃ足りないんですよ・・・」

「お前いつも弁当だけで足りてるだろうが。何で今日になって足りないなんて言い出すんだよ」

「成長期ですから」

「お前の成長期は2年前に終わってるはずだ。その証拠に高校に入ってから身長伸びてないだろ」

「・・・・・・」

どうやら凶星だったらしい。のぶながも結構小柄なほうだからなあ・・・。オレも人のことは言えないけど。

「でもユツキだって伸びてないですよね？」

「悪いがまだ俺は成長途中だ。身長も辛うじて伸びてるからな」

「「ええっ!？」」

衝撃の事実におレとのぶながは一齐に驚きの声を上げた。こいつまだ背伸びてるのか!？180センチくらいあるんだからそれで止まっても生活に苦労はしないだろ!？オレなんて170センチないんだぞ！

「今身長いくつ・・・？」

恐る恐るオレは尋ねる。

「こないだ測ったやつだと、183あったかな。前回から2センチ伸びてる」

頭に手を当てて言うユツキ。前回の身体測定は確か6月にあったから4ヶ月で2センチか・・・。1ヶ月0.5センチ伸びてる計算になる。オレなんて・・・オレなんて中3の最初の身体測定から伸

びてないんだぞ！

「そんな成長の話はどうでもいいんです。ここは男らしく不意打ちでパンを獲ります」

「不意打ちのどこが男らしいの？」

「とういかのぶながは男だったのか？」

正確なオレの指摘とちよつとズレてるユツキの質問。確かに、のぶながを最初に見たときは完全に女子と間違えたけど・・・流石にもう間違えない。

「今更何を・・・」

のぶながも額に手を当てて呆れている。

しゅたっ

この場の全員が気を抜いている隙を衝いて、のぶながは豹のようになしなやかさで動き出した。そのまま手をユツキの手にあるパンに向けて真っ直ぐ伸ばす。完全に気を抜いていたからユツキでもこれは避け切れないだろう・・・と思っていたのに。

「甘いんだよ！」

ユツキはパンを持っていない方の手で、のぶながの手を受け止めた。そして、自分の後方へののぶながの身体を受け流していく。このまま勝負は決まってしまうかのように思えた。

「甘いのは・・・どっちですかね！！」

体勢が崩れているのぶながが威勢よく声を出した。手を掴んだままのユツキの手を離さないで身体の向きを変えるとそのまま一本背負いの体勢へと移っていく。バランス崩した体勢から一本背負いに持っていくなんてどんな身体能力してるんだよ。

「うお・・・」

ユツキは成す術も無いまま、のぶながに投げ飛ばされる。これで勝負はついた。まさかののぶながの逆転勝利。・・・今まで思ってたんだけど、どうしてユツキやのぶながには常人離れた運動能

力があるのにオレには普通の運動能力しかないんだろうか。なんというか、今オレは七つの玉を集める物語で主役級のキャラが必死で戦っているのを横で説明しているあの人物の気持ちがよくわかる。ろっがふうふうけん！

「それじゃあ、そのパンは僕が食べますね」

倒れているユツキからジャムパンを取ると、恥ずかしそうな顔でオレを見ながら一口パンを齧った。・・・なんか、のぶながが可愛く見えてきちゃった・・・。

「あ・・・」

可愛いと言う単語で、水希のことを連想してしまった。その瞬間、今まで忘れていたあんなことやこんなことが全て蘇ってきた。そういえば、さっきあの子はどうして教室に行ったんだろうか。別にあの子に先輩の知り合いなんてオレくらいしかいないと思ったんだけどな・・・。

「、」

そこである一つの光景が浮かんだ。もしかして・・・あの子は水希に会いに行ったんじゃない・・・。

「お？どうしたんだソラ」

既に起き上がっていたユツキがオレの行動を見て、不審に思ったのか声をかけてくる。つか、一本背負いを受けてどうしてすぐに起き上がるんだよ。お前の身体はゴムかなんかできてるのか。

「いや、ちよっと・・・」

ユツキが目を細めるのは、相手を探ろうとしているときだ。

「もしかして、階段で会った元交際相手のことでも考えてたのか？」
鋭い。

「まあ・・・そんなとこ」

「お前今すげえ修羅場にいるの自分でわかってるか？」

珍しく心配そうな顔をするユツキ。すごい修羅場？ただでさえ水希のことで精一杯だって言うのにこれ以上どんな修羅場があるって
いるんだ。

「わかってないならいい」

溜息混じりに言われた。なんかその言い方が気に食わない。わからないものはわからないんだから仕方がないじゃないか。

「……じゃあ教えてよ……」

すると、今まで静かにパンを齧っていたのぶながが横から言った。「その顔も可愛いです」

ボクたちは中庭にいた。嬉しいことに誰一人として生徒はいない。手で触れたら指が切れてしまいそうなくらい張り詰めた緊迫感が2人の間にある。その発生源がボクにあるってコトも十分にわかってる。七草さんから見たら顔に思いつきり感情が出てるんだろぅなあ……。隠す気もないけど。

「それじゃあ、手短に話します」

七草さんは神妙な面持ちで話し始めた。感情が表に出ないように気をつけないといけない。

「もうお分かりかと思いますが、お話と言うのはソラ先輩についてのことです」

あ、もう我慢できないかも。なんていうか、この子は悪い子じゃないんだろぅけど言い方というか仕草というかちよくちよくボクの癪に障る。ごめんね、君に悪気はないんだろぅけどボク今余裕ないからさ。

顔に漏れ出している苛立ちを気取ったのか、七草さんは唐突に頭を下げた。

「ソラ先輩は何も悪くないんです。全部悪いのは私なんです。だから……どうか、ソラ先輩だけは許してあげてください」

「……言葉を失った。」

何を言っているのかなこの子は。

「さっき、あなたとソラ先輩がぶつかったシーンを見ていたんです。」

あなたが教室に入ったあと、ソラ先輩はとても悲しそうな顔をしていました」

「……………」

黙って聞く。まだ耐えられるレベルだ。

「もし私のせいで、先輩たちの関係が崩れてしまったなら……何てお詫びをしたらいいのか……」

「……………」

まだ……………」

「本当にごめんなさいっ。私のことはどう思ってくれても構わないので、どうかソラ先輩だけは許してあげてください」

「ねえ、」

もう無理。さっきっから何かを言う度にボクの中の怒りゲージが頂点へと近づいていった。全部私が悪い？私のせいで関係が崩れた？私のことはどう思ってくれても構わない？

この子は何を言いたいんだろう。

「君は何をしたいの？謝りたいの？」

我慢しようとしてたけど、ダメだった。ここで堰が壊れるとそのままこの子の精神ズタズタにしちやいそうなくらい怒ってるんだよね。

「それと、あなたのせいで喧嘩しただなんて思わないで。ボクもあなたのせいで喧嘩になったとは思ってないから」

若干、ウソが混じってる。

「話はこれで終わり？ボクも戻らないと」

俯いている七草さんに背を向けてそのまま教室へ戻ろうとする。

「……………待ってください」

震える声で止められた。

「まだ何かあるの？」

顔を向けるのも面倒だったから、背を向けたまま答える。相手の顔は見えないから、どんな表情をしているのかわからない。

「最後に1つだけ聞いてもらえますか？」

「……………」

その声がやけに真剣だったので、振り向いた。七草さんはここま
で来る間で1番真剣な目をして、真っ直ぐボクの目を見つめている。
流石にこれを見捨てるわけにはいかない。なんか重要っぽいし。

「……私が何て言われて断られたのか、その言葉をそのままな
たに伝えたいと思います」

ソラくんがこの子に言った言葉。

なぜか無性に気になって、ボクは思わず七草さんの方へ一歩足を
進めた。

10月：お話があるんです（後書き）

こんにちは、菊地です。

気付いたんですけど美春さんが夏休み編から出ていないみたいなんです。

空気にならないようにするからね・・・

拙い文章で書いておりますが、よければこれからもお付き合いください。

以上、菊地陽でした。

10月：オレから告白させて欲しい

ソラくんがこの子に言った言葉。

どうしてかわからないけど、なぜかとても気になった。ソラくんは何て言ったんだろうか。もしかして、ボクみたいに他の人がいるからって言っただけ断ったのかな？そんな期待もちよこつとだけあったりする。

「あの日にあなたが屋上から去ったあと、ソラ先輩は壊れたようにこんなことを言っていました」

ボクの目を真っ直ぐ見つめながら七草さんは続ける。

「『昔の孤独なオレを救ってくれた恩人で、とっても大事な人。そして、オレが人生で1番好きになった女の子だよ』って嬉しそうで悲しそうな複雑な顔をしながら私に言いました。あなたたちの間に何かあるかは探りませんが、こんなに固い絆で結ばれている人たちの中に割って入ろうなんて最初から無理なことだったんですよ」
言いながら七草さんは自虐的な笑みを見せた。

・・・あの頃はソラくんが1人だなんて知らなかった。ただ、日が沈んで真っ暗な中1人で砂場にいたから不思議に思っただけ声をかけただけなんだけどなあ・・・。何だか思い出すだけで恥ずかしくなる。

それだけで、ボクを「恩人」だとか「大事な人」だとか表現するのは正直、過大評価しすぎだと思うけど。でも、少し嬉しい。そして、揺れていたボクの心をこの言葉は完全に掴んだ。

人生で1番好きになった女の子

ソラくんは七草さんと一緒にいたけど、ボクのことには忘れないでいてくれたらしい。

「あと、こんなことも言っていました。・・・」彼女だけはもう絶対に傷つけない。水希だけは、絶対に泣かせたくない。水希は世界中の誰よりも大好きな人なんだ』って」

思わず、初対面の後輩と一緒にいるのに顔が紅潮しそうになった。今までソラくんは自分からそういったことを一言も言ってくれなかった分、すごく嬉しかったり恥ずかしかったり。

「・・・私がソラ先輩に告白したとき、先輩は『お友達から』と言ってくれました。けれど、その言葉は私にとって嬉しいものではなく逆に告白失敗だと思えたんです」

寂しげな表情で言う七草さん。

「どうして？」

「実を言うと、体育祭の直後からソラ先輩とは面識があったんです。自分の中ではかなり距離が近くなったって言うタイミングで告白したんですけど、ソラ先輩は戸惑ったような表情で『お友達から』と言いました。この姿を見て、私はすぐに他に大切な人がいるんだってわかつちやいました。そして、どうにかしてソラ先輩を振り向かせたくて友達以上の行動やスキンシップなんかを求めちゃいましたけど・・・私が勝手に舞い上がってただけで、ソラ先輩には何の非もないんです。全部私が悪いんです」

ソラ先輩を振り向かせたくて。

私が勝手に舞い上がってただけ。

胸の中の錘が少し軽くなった気がした。

「私が言いたかったのはそれだけです。それでは失礼します」

七草さんは一礼して校舎の中へと消えていった。ボクは1人で立ち尽くす。気がつけばさっきまで七草さんに感じていた怒りは綺麗さっぱり消えていた。代わってボクの中には何やら暖かいものが広がっている。今まで意地になって狭い檻に閉じ込められていた自分の本当の気持ちが見つ青な空へと羽ばたいていくような解放感もある。その解放感を感じながらボクはこう思った。

・・・やっぱりそうだったんだ、と。

やっぱりボクはソラくんのが好きなんだ。ソラくんが思っているように、ボクにとつてのソラくんも大事な人だし今までで1番好きになった人だ。これからの人生でこんなに人を好きになることがあるのかってくらいに。

「世界中の誰よりも大好きな人……」

にやけるのが抑えられない。言葉を反芻するだけでにやけるのに、この言葉をソラくんが言っている場面を想像すると本格的におかしくなってしまうそうだ。

ボクは決めた。自分から何かを変えてみよう。ソラくんがキツそうな顔をして、へこたれずに自分から話しかけてみよう。誰かが率先して動かなければ何も変わらない。きつとソラくんにこんな大役は務まらないと思うから、ボクがソラくんの代わりにその役を担おう。そして、話しかけるタイミングさえ掴めば仲直りなんて簡単に……もしかしたら今まで以上の関係を築けるかも知れない。

「ふふっ」

自分でもわかるほど楽しげな足音が響く。今までの気持ち馬鹿らしく思えてくるほどボクの心は躍っていた。

ユツキの修羅場発言の真相がわからないまま昼休みは終わり、オレは何かすつきりしないまま午後の授業に臨んだ。教科は化学。化学の成績はあまりよろしくない。だって文系だもん。でも化学は嫌いだけど生物と地学は何故か好き。物理？何ソレ食べられるの？
今も黒板に小気味いい音を立てながら文字が書かれていくけど、正直言っただけで全く頭に入っていない。まあ、元々嫌いな教科ということもあるけど今はもう1つ理由がある。

「」

……昼休みに何があったのか知らないけれど、隣の水希がともご機嫌なのだ。

授業会場は普通の教室じゃないけれど、教担が席替えのクジを作るのが面倒だという理由で教室と同じ席順になっているのでオレの隣は水希だ。その隣にいる水希が周囲から浮くほどご機嫌オーラを出している。

オレからしてみると、これは恐怖以外の何物でもない。

このあとにどんなことが待っているのかわからない。というか、そもそも水希がこんなに笑ったところをオレは見たことが無い。もしかして、ユツキの言う「修羅場」を彼女は潜り抜けた結果こんな風になってしまったの言うのか・・・？ますます昼休みに何があったのか気になる・・・。

「では、この時に発生する気体の名前を・・・深海、答えて見なさい」

「えっ？あ、はいっ」

急な指名で驚きながら立ち上がる。話なんか聞いていなかったから何の実験なのかさっぱりわからない。

「おいおい、中学校のおさらいだぞ？塩酸をこっ、電池にして違う種類の金属をこんな感じにする実験だ。ほれ、早く答えなさい」

いやいや、こんな感じとかなんつーアバウトな表現なんだよ。そんなにわかるわけないだろ。全く実験の光景が想像できなくて四苦八苦（9割以上先生の表現が悪い）しているオレに隣にいる水希がノートに何かを書いてバレないように見せてきた。これは嬉しい。悩んでいる体を装って机に目を落とす。するとそこには・・・

ヒント：塩の素

と、女の子らしくないキリツとした文字で書かれていた。

「・・・・・・・・・・」

更にわからなくなつた。塩の素・・・？その発生する気体から塩が作られるってことなの？何じゃそりゃ。

「はやくしなさい」

アバウト先生がちよつとの苛立ちを孕ませた声で回答を促す。そんなこと言われたつて・・・塩の素だけじゃ何が何だかさっぱり。仕方が無い、現時点で浮かんでいる答えを言うことにしよう。

「えっと・・・海水ですかね」

「気体だつて。海水つて液体じゃないですか」

「岩塩ですか？」

「だから気体だつて言ってるでしょ。というか、君塩でも作る気なの？」

「じゃあ塩湖」

「違います。はい座れー」

なんだよ・・・せつかく当てられたから答えたつて言うのにそんな言い方はないじゃないか。ふくれながら座ると隣から声がかかった。

「ソラくん、答えは塩素だよ。『塩の素』つて言ったじゃない。意味を考えるんじゃないかって単純に文字を見て欲しかったんだよ」

水希がオレの目を見て話すのでオレの自然に水希の目を見て返す。

「そういう意味だったのか・・・。急に塩の素なんて言われてもわからないよ・・・」

オレから視線を外した水希は先程書いた塩の素という字を消し始める。なるほど、意味を考えたらずりや誰だつて海水や岩塩や塩湖になるわけだ

「・・・あれ？」

い、今・・・水希と話をしなかったか・・・？あのですつと仏頂面でおれに冷たい眼差ししか向けてこなかったあの水希と、今会話をしなかったか？ゆっくりと隣の水希を見る。彼女は何事も無かったかのように黒板とノートを交互に見ながら何かを書き込んでいた。でも、確実に今会話をしたような・・・。

これは一体どういうことだろうか。急に水希がオレに話しかけてきたりするだろうか。今までの行動や態度を見る限りそんなことは絶対にありえないはずんだけど・・・。

ふむ・・・女心と言うものは本当に不可解だ・・・。

「深海、リベンジだ」

再び指名されてオレは立ち上がる。

「硫酸と水酸化バリウム水溶液を混ぜるとできる塩は何か答える。

これも中学の単元だぞ」

へえー。これくらいだったらオレでも解けるさ。見縊ってもらっちゃ困る。

オレは十分すぎる間をとって、余裕たっぷりにごう答えた。

「こんなの簡単。硫酸バリウムでしょ？」

答えたあとに、教室中から「おおー」という声が聞こえたのがなぜか納得いかなかった。

やった！さりげなくだけどソラくと話すことができた！

最初の難関を無事に突破できてボクは胸を撫で下ろしていた。ボクから話しかけたことがそんなに珍しかったのか、そのあとソラくんは驚いたようにこつちを見ていたけどまだその顔を直視できなかったボクはノートをとっているフリをしてその場を凌いだ。とりあえず、話すことはできるからあとはどうやって話し合いに持ち込むかが問題になる。あんな嫌な態度でソラくんの家から出て行っちゃったから、改めて家を訪ねるのはちよつと気まずい。あの時の意地っ張りな自分に平手打ちでもしてやりたいくらいだ。せめて笑って出て行ったら少しでも摩擦は緩和されたかも知れないというのに。昼休みに七草さんからソラくんの言葉を聞いて、さっき久しぶりにソラくと話をしてから一層とソラくんにあのセリフを言っただけじゃ我慢できない。そんな自分じゃ抑えきれない欲望は気まずさなんて遠くに吹っ飛ばしてくれればボクは信じてる。

だから今日の放課後、ボクはソラくんの家を訪ねるつもりだ。厄介なことは早めに終わらせておいた方が気が楽だからね。

帰り道、ユツキの提案でオレたちは駅前のファストフード店に来ていた。目的は単なる暇つぶし。オレは家に帰ってもつまらないしやることもないので大賛成だった。ユツキにはまた別の理由があるそうだが聞くと面倒なことになりかねないので、聞かないでおこう。
「うーん……」

そんな息抜きの時間にも、オレは悩んでいた。今日1日で色々な変化があったからだ。午前中の水希の行動はどこかおかしかった。頭を抱えたり、オレのところをチラチラと見てきたり、拳句の果てにはオレの方へ転がるように消しゴムを落としたり。何をして欲しいのか全く理解できない行動だった。そして昼休みのユツキの修羅場発言から、更に状況は変わった。午前中とは打って変わって水希は妙に晴れ晴れした顔をしていた。水希は何がしたかったんだろう……。いくら考えてもわからない。

「ソラはさっきから何を考えているんですか？やけに神妙な面持ちですけど……」

ポテトを啜えながら、のぶながが尋ねてきた。

「ちよつと今日は水希の様子がおかしかったから、なんでかなーって」

「そーいやそうだったな。午前中から落ち着かない様子だったが……」

あのユツキでさえ水希の異変に気付いていたらしい。

「つか、お前から話してたじゃねえか」

話はしたんだけど……そのあとの進展は何もなかった。確かにあの時水希はオレの目を見て話しかけてきた。でも、それっきり一

言も交わさないまま時間は流れていったんだけど……。

「話したんだけどさ、イマイチ水希の考えがわからなくて」

「ほお……」

ユツキは一瞬思案顔をしたあと、すぐにいつもの表情でコーラを呷った。

そういえば、昼休みは何も食べてないんだから今はおなかが減っている。食欲が無いとは言ったけど、やっぱり欲求には勝てないね。手元にあるのは適当に注文したハンバーガーとポテトとコーラ。恐らくこれだけじゃ足りないだろう。まあ、食べないよりはマシだから冷めないうちに頂こう。

「はむっ」

ハンバーガーをもぐもぐと咀嚼しながらも、頭は味ではなく水希のことばかりを考えていた。今日の行動を見る限り、もう怒っている様子はなかったんだけど……それが却って気になってしまふ。オレから謝るべきなのにオレは会話すらできていない。どう考えても水希の怒りが収まるとは思えない。一体何が彼女を変えたのだろうか……。

「あ……ソラったらほっぺにソースついてますよ」

のぶながが顔を近づけてくる。え……この状況でこの行動って、まさか！

「えっ！？だ、大丈夫だから！自分でできるからさ！」

「……そうですか」

オレがのぶながのしそうなことを先読みして断ると、残念そうな顔で引き下がってくれた。このやりとりはあの子と食事したときだけで十分だ。これ以上オレの傷を掘り返さないで欲しい。今でさえ、あの子にはあるいことしちゃったなーっていう引け目があるんだから。

ナプキンでソースを拭き取る。くそ……ソースが多い照り焼きバーガーなんて注文しなきゃよかった……。

……ってあれ？オレの読みが当たったってことは、のぶなが

はオレのほつぺを舐めるつもりだったんじゃないよ？決して残念がつているわけでもものぶながだつたらいいかもなんて思っているわけでもないよ？

「はぁ・・・」

色々な感情が混ざった溜息が漏れた。

「そーいや、ソラの元浮気相手は昼休みどこへ行つたんだろつな」
ずっと黙っていたユツキが口を開いた。

「んー・・・オレにもわからないし、浮気相手じゃないからな」

そこ結構重要だからね。浮気相手じゃない、ただの友達だつて本人には伝えてあるはずなんだから。

言われてみれば確かにあの子はどこへ行くつもりだつたんだろつ・・・。

「まあ、俺からしてみれば何の関係もないわけだが」

コイツは一段落したらホントに非協力的になつてくれやがつた。興味が無いんなら最初つから協力するな！・・・と言いたいんだけど、ユツキの協力も一応は足しになったのでそんなことは言えない。もしかして・・・水希に会いに行つたとか・・・」

嫌な光景が脳裏に浮かんだ。女特有のドロドロした戦いというか、相手の弱味を指摘しあつ何とも言えない憎悪や嫉妬やらが交錯したぶつかり合い。水希がそういうことをする姿は想像できないけれど、彼女も女だからもしかすると・・・。

「はぁ・・・」

二度目の溜息。そんな姿は想像したくない。なるほどね・・・ここに来てユツキの言う「修羅場」の意味が少し理解できた気がする。

あの子と水希は何を話していたんだろつ。まさか、オレの悪口を通して意気投合しちゃつてたりしないよね？それだけが不安でならない。

「さつさと仲直りしてくんねえか？お前がクヨクヨしてるとこつちまで調子狂うんだけど」

悪口なのか励ましなのかよくわからないユツキの言葉。

そつだ。早く水希と仲直りしないと……。今日、水希と久しぶりにちゃんと会話できたんだからきつと状況はいい方へ傾いているはずだ。だったら、やることは1つ。厄介なことはさっさと終わらせた方が気が楽だ。

オレはその言葉に対して笑いながらこう返した。

「わかったよ」

心の準備さえできれば、3日以内には切り出してみようかな……。

あ、やっぱ1週間以内で。

日も完全に沈んで、冷たい風が吹く中ボクは歩いていた。

せつかく勇気を振り絞ってソラくんの家の扉を叩いたのに、本人が不在だったなんて。自分の中で盛り上がっていた気持ちだが、アスファルトの上に積もっている落ち葉のように虚しくなった。脱力感が重く肩に押し掛かる。

「……ソラくんは今どこに行ってるんだろう……」

思えば思うほど脱力感は募るばかり。どうしてこうもタイミングが悪いんだろう。

『そーいやさあ、この間行った喫茶店なんだけど……』

『あー、あそこのお店おいしかったねー。また行こうよー』

大きな街道を歩いているボクの視界の端に、1組の仲睦まじいカップルが映りこむ。2人の顔は本当に楽しそうで、それを見ている間はボクの心の傷を少しだけ忘れられた。けれども、すれ違ったあとに再び感傷が蘇る。それも、さっきよりも強く。なんていうか、自分がこういう状況に置かれているのに他の人たちは仲良くしているのがすごい気に入らない。ボクにだって彼氏はある。今はちよっ

と色々あつて複雑な状況に置かれているけど、人に誇れるような立派な彼氏がいるんだ。

でも、隣にはいない。

寂しさが増す。どうやったら早くソラくと仲直りできるんだろう。あのソラくんのことだから、ボクに話しかけるまでに相当な準備期間があるはずだ。ソラくんの準備ができるまで待つのは、個人的に嫌だ。要するに、あと2人の間の溝を埋めるのに必要なのはタイミングだけ。どちらかがタイミングを外さなければそのままトン拍子で仲直りくらいできてしまえばいい。そのタイミングをボクもソラくんも掴み損ねているのが現状。今日だって授業中に話したのをきっかけに話し合いに持ち込めばよかったのに、あのあとソラくんの顔を直視できなくなってしまった。ソラくんも少しくらい強引でもいいから話を続けてくれれば良かったのに。

「………？」

俯きがちに歩くボクの視線の先に、今度は見覚えのある制服が遠くにあつた。星園学園の生徒なのかな？もう時刻は7時を過ぎていくし、こんな時間に制服姿で歩き回っているのはどこかで寄り道した生徒か部活動に所属している生徒のどっちかだと思っただけ……。

だんだん近づくとつれて、制服を来た生徒の風貌が明らかになっていく。色白で、ちょっと珍しいネイビーの髪を肩の辺りまで伸ばして、右側の髪が耳にかかっている。女子であるボクから見ても可愛いなあと感じてしまうほどの美貌の持ち主らしい。

(あれ……?)

その風貌に見覚えがあつた。というか、たった今まで考えていたその人物とそっくりだった。

(もしかして……ソラくん……?)

両者とも互いを認識できる距離に到達した途端、同時に足を止め

る。・・・確かにそうだった。ボクが長年恋心を抱いてきた、男だか女だかわからないくらい綺麗な顔をしている大好きな人。

ボクは驚いた。

これは神様がボクたちに恵んでくれたチャンスなのだろうか。ソラくんの方も驚いたような目をして、すぐさま気まずそうに目を逸らした。

ボクも目を逸らしそうになるけど・・・ここで逸らしたらまた機が熟すまで待たなきゃいけない。この暗い夜道で2人きり、しかも淡く輝く街灯の光が2人の雰囲気を優しく盛り上げてくれている。・・・これほど絶好のタイミングなんて滅多にない。

立ち去ろうとするソラくんの足が再び動き出したとき、ボクは口を開いた。

「ソラくん」

「・・・」

怒っているような口調で言ってしまったのがよくなかったのか、ソラくんは悲しそうな顔をした。

「・・・ボクを見て・・・」

未だに視線を逸らしたままのソラくんにボクは1つ目の注文をした。するとソラくんはぎこちなく視線をこちらに向ける。その目は恐怖の色が少しだけ見え隠れしているのがわかった。

しばらくお互いの目を見合うだけの時間が流れる。ボクもここから先どうしようか全く考えていなかった。ええい、こうなったら直球勝負だ！くどいことは言わないで、言いたいことだけをスパッと言おう！一度そうと決めれば、ボクの行動に迷いはない！

「その・・・ごめんなさいっ！」
頭を下げて謝る。

10年の空白期間があつても、今ソラくんがどんな顔をしているかくらいはわかる。何を言おうとしているのかどうかもわかる。だから、相手に何かを言わせる間を与えない。

「ボクったら、何か勘違いしていたみたいで・・・。ソラくんが七

草さんと本当に付き合ってるんじゃないかって ソラくんはボクのことを嫌いになったんじゃないかって、本当は心配してた。怒ったような態度を取っていたのはただの見栄っ張りで本当はちゃんと事情をソラくんから聞きたかった。本当はっ・・・、本当は、早く仲直りがしたいっつと・・・っ！」

今まで抱いてきた色々な感情が涙となって溢れ出して来た。

「わわわ・・・泣かないでよ・・・」

困惑気味にソラくんが言う。まだどこかに遠慮というか警戒というかそんな類の感情が含まれている気がする。ボクは泣いてまで胸の内を白状しているのに、どうしてキミはそんなに奥手なのさ。

「本当にごめんっ！ごめんごめんごめんっ！！」

何度も謝りながら、頭を下げる。きつとソラくんだって辛い思いをしていたはず。いくら謝っても足りないくらいだ。

「・・・水希？」

「ごめんっ！」

ソラくんがボクの名前を呼んでくれたけど、謝り続ける。

「水」

「本当にごめんっ！」

頭を下げているから今ソラくんがどんな行動を取ろうとしているのかさっぱりわからない。でも、こちらへ近づいてくる足音が聞こえた。

「もういいから、とりあえず顔を見せてくれるかな？」

頭上から聞こえる優しい声。頭を上げるとソラくんは両手をボクに向けて伸ばしてくる。

「・・・えっ」

むにと両頬を触られた。そのまま指を滑らせるようにして頬を撫でたあと、ボクの顔から手を離す。??? 今のは何が目的だったのかな・・・。なんかボクの心臓の動きがかなり活性化してるんだだけ。

「悪いのは、オレだよ。水希が謝ることなんてない」

ボクは黙って聞き続ける。

「ずっと信じてくれてた相手に、初めてウソを吐いた。・・・これって男として最低なことだよ。だから許してもらおうとか、忘れてくれなんて言うつもりはない。水希が嫌になっただらこれが最後の会話でも構わない。でも・・・」

そんなの・・・嫌だ。確かにウソを吐かれたことはすごい悲しかった。心の中にザツクリと何かが突き刺さったような痛みさえ感じた。

「これだけは言わせて?・・・本当に謝らなきゃいけないのはオレの方だ。本当にごめん」

深々と頭を下げるソラくん。

「信じてもらえないかも知れないけれど、あの子とは本当に疚しい関係じゃなかったんだ。その・・・水希が思うような関係は築いていないんだよ」

わかってるよ。本当のことは全部あの子から聞いたから。

・・・もし、ソラくんが反省してるなら少しくらい無茶を言っても聞いてくれるかな?なんていう悪戯心が急に芽生えた。

「それじゃあ、さ」

ここでソラくんに2つ目の注文を試してみる。

昼休みからずっとその姿を想像してにやにやしてたんだけど・・・ソラくん本人にあのセリフを直接ボクに言ってもらいたい。

「ソラくんがこれを言ってくれたら、許してあげる」

「いやだから、無理に許してくれなくてもいいんだけど・・・」

何なのこの人は!許してもらいたくないの!?

「いいから、黙って今から言うセリフを一言一句間違えずに言ってくれたら嬉しいなあ」

しばらく考え込んでいたソラくんは、何かに気がついたようにハツと視線を上げて顔を紅潮させた。あれ?もしかしてわかつちやっ
た?

「ま、まさか・・・昼休みにあの子と話してた内容って・・・」

「あつたり〜」

更にソラくんの顔が赤くなる。

「そこまでわかってるんだったら、言わなくても大丈夫だよな？あの子を断るときに言ったセリフを、ボクに直接言っただけいい」

ソラくんは頭を抱えたり、歩き回ったり、首を回したりして時間を潰していた。そんなに恥ずかしいのかな・・・？恥ずかしいならどうしてあの子にはスパツと言えたんだらうか。お互いに何も話さない時間が流れて、ついに決心したのか今まで落ち着かない様子だったソラくんの動きが止まった。ボクも期待を込めた眼差しでソラくんの顔を見つめる・・・改めて見ると本当に綺麗な顔だと思う。この世界に数人しかいないような美貌（？）が眩しい。

なるべく緊張させないようにボクは目を閉じた。これで少しはプレッシャーから解放されるんじゃないかな。

「ね、ねえ・・・本当に言わなきゃダメ？」

「ダメ」

ソラくんがむう〜、とうなり声を上げてから数秒後、恥ずかしそうな声が聞こえてきた。

「み、水希は昔の孤独なオレを救ってくれた恩人で、とっても大切な人。そして・・・オレが人生で一番好きになった女の子だよ」

ボクの顔も赤くなっているのが自分でもわかる。

「もう絶対に水希は傷つけない。絶対に泣かせない。水希は世界中の誰よりも大好きな人なんだ」

聞き終えた瞬間、ボクはこのまま死んでもいいやって思った。幸せすぎて何が何だかさっぱりわからない。パニック状態だ。ちなみに恥ずかしいセリフを言い終えたソラくんは脱力したように溜息を吐いて額の汗を拭っていた。ボクはそんなソラくんに対して、優し

く言っ。

「よくできました」

ソラくんはもう一度大きな溜息を吐くと、再び真剣な表情に戻った。あれ？今度は何があるんだろう。

「そういえば、前の告白は水希からだったよね？」

ソラくんの家で告白したときのことを言っているのかな？あの時は確か・・・ボクからだだった気がする。ボクは黙って頷いた。

「だから・・・仲直りの証として、今度はオレから告白させて欲しい」「えっ？」

予想していなかった分、驚いた。

「よくよく考えてみたら、オレが自分の気持ちを伝えたことなかった。だからもう今後一切こんなことはしないっていう約束の意味も込めて、水希に受け取って欲しい言葉があるんだ」

大きく息を吸い込んでから、ソラくんはゆっくりと話し始めた。

「一度も面と向かって言ったことのない言葉を今から言おうと思います」

いきなりの謎宣言に更に驚く。

それから畏まった様子でソラくんは続ける。

「オレは、水希のことが大好きです」

・・・改めて言われるとちょっと恥ずかしい。あんなに言っ欲しいと思っただセリフなのにどういうわけか両手を挙げて喜べない。

「この気持ちは10年前から全く変わりません。今まで何人もの人に告白されてきたけど、やっぱり水希のことは忘れられなかった」
.....。

「前に水希は、自分が過去に固執しすぎて言っただよね。実はオレもそうだった。もう会えないって薄々は感じてただけけど、どうしてかもう一度会えそうな気がしちゃってさ・・・。今年の6月に水希が転校してきたときは本当に嬉しかった。最初は水希にオレがオレだって信じてもらえなかったけどずっと抱き続けてきた想いがあったから、ここまでやってこれた」

.....

「.....オレは水希が大好き。笑った顔も、ちょっとSっぽい時の顔も、声も、怒ったときの声は苦手だけど.....それでも、オレは水希の全部が好き。もう絶対に手放したくないってくらいに」

.....そろそろ我慢できないんだけど.....

「もし、水希さえよければ.....もう一度オレに水希の隣を歩かせて欲しい」

そう言っただけの反応を窺うソラくん。

はあ、今更何を言ってるんだか。ボクは返事をする代わりに、ソラくんとの距離を一步で詰めて思いつきり抱きついた。

「え.....ちょ.....っ」

突然の告白で驚かされたんだから、突然抱きついて驚かしたっていいじゃん。

ここまで来ると、もう人の目とかどうでもよくなってくる。仕事帰りのサラリーマンとか自転車に乗った中学生くらいの男の子とかがこちらを見てくるのもどうでもよく思えてくる。

「人が泣くまで待たせるなんて.....最低」

最後の方は嬉し涙だか安堵した涙かわからないものが目から零れ落ちて、声も震えていてちゃんとした言葉になつてなかつたかも知れない。緊張が解けたんだろうね。ボクは無意識のうちに心のかかでもものすごい緊張していたらしい。だからこんなに涙が出るんだ。

「緊張してたのはこっちも一緒だからね」

そう言うソラくんの声も少し震えていた。

このままずっと抱きついて久しぶりのソラくんの感触を味わっていたんだけど、流石に公衆の面前でそういうことはしづらい。

「はあ.....一時は本当にどうなるかと思った.....」

ボクがソラくんの後方に回ると、ソラくんは力が抜けたようにへなへなと地面に座り込んでしまった。どれだけ緊張してたんだろ.....

「あ、そうだ」

座り込んだ状態のまま、顔だけをこちらに向けた。

「さっきの告白の返事を聞かないと、完全には安心できないんだけど……」

告白の返事？そんなものする必要あるの？まあ、ソラくんがそう言うのなら仕方ない。

ボクは屈みこんでソラくと真っ直ぐ目を合わせたまま、囁くように告げた。

「これからも、ずっと隣にいてね。キミはボクの王子様なんだから止めにとびきりの笑顔を見せる。するとソラくんは安堵の息を吐いた。

そんなソラくんにボクも緊張していたことがバレないように、そつと安堵の息を吐いた。

「だったら、水希はオレのお姫様だよ」

そう言いながら、彼は初めてボクの前で『純粹な笑顔』を見せてくれた。ウソも隠し事も何もない本当に純粹な笑顔。こんなソラくんの顔を見たのは、実は初めてかも知れない。

10月：オレから告白させて欲しい（後書き）

こんにちわ、寝不足気味の菊地です。

やっと真面目な話が終わりました。

次回からは肩の力を抜いて書ければいいなあなんて思います。

それでは、これからもよければお付き合いください。

その後のお話

その後、水希はオレの家に戻ってきた。

事情を説明したら、最初は困惑気味だった姉貴も快く承諾してくれて、また毎日水希がいる生活を送れるようになった。今まで家中では親友というか悪友というか何となく一線を越えられないような関係（縛られたりキスしたりはしてたけど）で過ごしていたけど、これからはもう違う。

今までのオレは、積極的に身体接触を求めてくる水希に対してどこか躊躇いみたいなものがあつた。未だに水希と結ばれたことに実感が持てなかつたのかも知れない。けれども、オレは10年もの間温め続けた想いを全て水希に伝えた。今まで言いたかつたありつたけの言葉を1つ残らず水希に伝えた。

「ねえ、ソラくん」

リビングのソファの上で水希が肩を寄せてくる。右肩に感じるその温もりをずっと感じていたい、と彼女に言うのはセクハラになってしまうのだろうか。

「どうしたの？」

「あのさ、これから喧嘩してた間にやり損ねたこと全部やるつよ」

この子は確信犯なんだろうか。でも、喧嘩してた分のコミュニケーションは取り戻したいという気持ちもあつたりする。

「何からやる？」

決していやらしいことは考えておりません。

「じゃあ・・・さ、」

水希は少し恥ずかしそうに俯く。え・・・？やっぱりそういう方向のことをやるの・・・？

「『ただいま』の挨拶からしよ？」

上目遣いでオレを見つめる水希はとてつもなく可愛かった。そんな風に頼まれたら断れないじゃないか。

「そーいや、してなかったね。いいよ、しようか」

水希はソファから立ち上がり、オレの向かい側に立つ。頬を若干赤らめながらも、彼女は言った。

「ただいま」

その凜とした声は、さっきまでの甘ったるい声とは大違いだった。オレはそんな水希を微笑みながら見つめてこう返す。

「おかえり」

オレの言葉を聞いた途端に、にんまりと笑った水希はそのまま抱きついてきた。

「ソラくん、大好きっ」

よくもまあこんな恥ずかしいセリフを言えるものだ。オレは半ば

感心している。

これも、水希の心境の変化なのかな・・・？

修学旅行：出発前夜

2学期のメインイベントと言えば9月に行われた体育祭、クリスマスと同時に行われる学園祭だ。けれどもここ学園にはメインイベントがもう1つある。本当は忘れていたかったんだけど昨日のHRで担任がそれを掘り起こしてしまった。

「えー、みんなもよくわかってるかと思うが・・・」

全部の授業が終わって、みんな疲れている。多くの生徒が机に伏せたり、窓の外を眺めたり、近くの生徒と話をしていた。のぶなは正しい姿勢のまま話を聞き、ユツキなんかはもう夢の中だ。そのまま帰ってこなけりやいいのに。隣の水希も眠いらしく、欠伸をしている。そんな周りの連中とは全く逆の心境にあるオレは先生を視線だけで殺せるような目つきで睨み続ける。

「明日からは・・・」

その先を言ったら、手元にあるコンパス投げてやるっ！言っなよ？ぜつつつたいに言っなよ！！

「修学旅行があるからな」

殺意に駆られて無意識に動き出した右腕を机の下で必死に抑える。そう・・・。どういっわけか、10月の末から11月の初旬にかけて修学旅行があるのだ、この学校は。どうしてそんな微妙な時期にあるのかは知らない。

「明日は朝5時に学校集合だ。寝坊してきたヤツは置いて行くから覚悟しとけ」

・・・学校行事全般が嫌いなオレが最も忌避する行事、それが修学旅行だ。宿泊に「入浴」というのは必要不可欠なもので、オシヤレや外見を気にする高校生が入浴を怠るはずがない。ましてや、学

校の友人たちと宿泊しているんだから風呂に入らないヤツなんて絶対にいないだろう。そこで、オレの外見を思い出して欲しい。本物の女子にも女の子と間違えられるオレが堂々と男湯に入れるだろうか？

答えは簡単だ。入れるわけがない。

小学校の宿泊学習でも、中学校での1年の夏休みのキャンプ、2年の夏休みの泊りがけの登山、3年での修学旅行……どれ1つ、男湯に他の男子生徒と入った記憶はない。いつもオレだけみんなが入浴時間を終えたあとに1人で入るか、部屋の個室風呂を使わされるか、女湯に他の女子生徒と入らされた。女子と一緒に入らされた時は、本当にどうなるかと思った。周りの女子は普通に話しかけてくるし、中には大事な部分を隠さないで平然と歩くヤツだった。それ以来、オレは宿泊する学校行事を嫌うようになった。

それに、行き先は沖縄。海水浴もあるらしい。

(冗談じゃない……)

男物の水着を持っていったら、確実に没収される……！女物の水着を提供されて、オレは女子更衣室でそれを着て、女装部が鼻息を荒くして

「ソラくん？何でそんなに深刻な顔してるの？」

次々と脳裏を流れていく最悪の光景に頭を抱えていると、隣から声が聞こえた。

「え……？えつと……」

返答に困った。何て言えばいいんだろう……。

「もしかして、修学旅行とか嫌いな人だったりする？」

間違っではないない。女のカンは鋭いね。

「別に修学旅行自体は嫌いじゃないんだけど……」

「じゃあ何が嫌いななの？」

そこまで訊いてくるなら、オブラートに包んで言おう。

「夜」

一拍挟んで、水希の顔が真っ赤に煮上がった。あれ？何で顔を赤

くする必要があるんだろう・・・。

「そ、ソラくん？それはその・・・クラスメイトの前でそういうことを言うのはちょっと大胆なんじゃないの・・・？ボクだって心の準備ってものがあるし、そもそも修学旅行中にしたのがバレたら一大事だよ？」

何の話がよくわからない。どうしてオレが入浴するのに水希が心の準備をしなければいけないんだろうか。

「心の準備？」

「あ、でもね、ソラくんがどうしてもって言うならしてあげてもいいよ？それくらいの覚悟はできてるから」

「何の話？」

教壇では未だに担任が話をしているけど、そんなものそっちのけで水希との会話を続ける。周りのクラスメイトは時々、妙な視線をこちらに送ってきたんだけど・・・別にオレはいやらしい話をしていいわけじゃない。妙な視線を送られる理由が全くわからない。

「へ？何の話って・・・ソラくんの欲望の話じゃないの・・・？」

「欲望の『よ』の字も言っていないんだけど」

どつという経緯でそういう結論に至ったのか気になる。

「だって、夜が嫌いななんて言うから・・・」

ただでさえ赤くなっていた水希の顔が更に赤くなる。

「夜が嫌いなのはてつきり夜になると本能を抑え切れなくなって、色々なことをしちゃうからだと思って・・・」

「キミはオレを何だと思ってるの？」

そんな欲求不満な男に見えるのだろうか。水希に欲情したことはない。とは言えないけど。オレでも修学旅行中にそういった問題行動を起こそうなんて考えない。するなら家でしてる。

「・・・ごめん」

小さく謝るとそのまま水希は押し黙ってしまった。何この周りから注がれる「お前が恥じかかせた」的な視線は。オレは何もしてないからね。水希が勝手に変な想像をしただけだからね。

「おい、深海。聞いてるのか」

だから何でオレにはかり矛先が向くんだよ！

「はい・・・ちゃんと聞いてます」

担任の矢部ゴリラは一度説教が始めると長いと評判の教師だ。ただでさえみんな疲れているのにオレが原因で説教が始まったらみんなに申し訳ない。ここは素直に謝っておこう。

「まったく、教師側から見たらお前のような生徒が1番危ないんだ。しつかり話は聞いておけ」

よりによってオレみたいな模範的な生徒が教師からマークされるなんて・・・不本意極まりない。

「1人美少女がいるだけでも大変だというのに、どうしてウチのクラスには2人もいるんだ・・・」

「先生、聞こえてないと思ってるみたいですけど全部聞こえていますよ」

「そのうち1人はかなりの変態だぞ・・・。睡眠時間を大幅に削らなきゃいけないじゃないか・・・」

変態なのはきつと・・・あれ？誰だ？ウチのクラスに美少女なんていないと思うけど・・・。あ、水希は別だよ？

「あ、その子が本能むき出しの男子に襲われないように見張るんですね！流石です先生っ」

「いや、違うぞ？」

せつかく褒めたのに、どういうわけがゴリラは顔をしかめた。

「『襲われない』ように見張るじゃなくてだな、『襲われない』ように見張るんだ」

その美少女とやらはとっても欲求不満なんだろう。

「大変ですねー」

感心するオレを周りのクラスメイトは呆れた様子で見ている。何でだろう？

長い長い話も終わり、オレとユツキとのぶなが、その3人に新しく水希が加わった4人で学校を出た。水希との関係が戻ってから、彼女は積極的にこの2人と付き合うようになった。前までは、全く関わりがなかったのに、急にこうなったのでオレも未だに慣れていない。だって、可愛い子が2人に増えちゃったから……。

電車に乗る前も、電車に乗ってから最終ユツキのテンションはおかしかった。

「いやあ、修学旅行楽しみだな!!」

のぶながも水希もアゲアゲのユツキに全くついていけない。何がそんなに楽しみなんだ。オレからして見れば悪夢しかないというのに……。

「オレはちつとも楽しみじゃない」

「僕もです」

オレの言葉にのぶながも賛同する。

「小学校から宿泊する学校行事にはいい思い出がないんですよ。例えば……ほら、お風呂とか」

こ、ここに、同志が……!!すごい……。感動しすぎて涙出てきた。でも、よくよく考えるとのぶながの入浴についてはあまり違和感がないようにも思える。こんな可愛い子が裸（もしくはタオル1枚）でいたらおかしくなりそうなもの。オレだったら間違いない、抑え切れなくなる。

「風呂にいい思い出がないなあ?のぶながも変なヤツだな。風呂にこそ男のロマンがあるだろ?」

「雪時くんは何を企んでるの……?」

ちなみに、水希はユツキのことを今まで苗字で呼んでいたけど、距離がありそうで嫌だという本人の提案によって名前で呼ぶようになった。こんなバカとは距離があって丁度いいくらいなのに。コイツは距離をとつても自分からその距離を詰めてくるヤツだから。

「別に覗こうなんて考えてないから大丈夫だ。浴場つてのは撮影場

所を持って来いだと思わないか？」

撮影場所という単語にオレの第六感が危険を感知する。

「でも、お風呂にカメラなんか持ち込んだら怒られると思うけど・

」

「持ち込むのは男湯だから大丈夫だ」

「それはそれで誤解されるってことに気付けばバカユツキ」

男湯にカメラを持ち込む男。見つかったら弁明の余地はないだろう。

「つか、男湯に女がいる時点で誤解されるだろ頭使えソラ」

「女って誰のこと？」

しらばっくれてみた。

すると、のぶながはユツキに軽蔑の眼差しを向け始めた。そうだ

！もつとやれ！

「・・・？」

ユツキはのぶながの視線の変化に気付くことなく、首を傾げている。コイツはホントに都合の悪いことを受け流すのが得意だな。少しは見習ってやらんでもない。

「いくらユツキでもそれはよくないです。ソラと僕が女っぽい容姿でどれだけ悩んできたのか・・・きつとユツキにはわからないと思いますけど」

キリツとしたのぶながの口調に俺も背筋が伸びる。なんとというか、オレはこういう口調は嫌いだ。

確かに、オレはこの外見で悩んできた。ある時は女子更衣室へ連行され、またある時は女物の水着を着せられ、またまたある時は女子と一緒に風呂に入れられ・・・。ホントに苦しいことばかりだった。まあ、たまにはこういう外見でよかったと思うこともあったけど。

「いいじゃねえか、周りの人を楽しませるんだから。ホントにお前らの存在には感謝してるんだ」

聞き直ったユツキについてのぶながも呆れた。大きな溜息が漏れ

る。

「今絶対に楽しませるって言おうとしたよね？ユツキは楽しいかも知れないけど被写体であるオレは全然楽しくないんだけど」

「思い出せソラ、お前は極度のM体質だろ？」

「うっ」

言葉が詰まる。別にMではない。ちよつと責められるのが好きっただけで・・・断じてMではない。

「そ、そんなことどうでもいいんだよ！」

「ソラくんはすごいんだよー。家に帰ればすぐに服従してくれるんだよー」

無感情な水希の声。声の主を見るとその目にはイケナイ光が灯っていた。ほら見る、余計なところでスイッチをオンにするから。帰ったらどうなるかわからないじゃないか。

「だったら決定だな。お前に拒否権はない」

「ソラが被写体なら僕も協力します」

「あれ！？のぶながさつきまでそういうことはよくないって言うってたよね！？」

何だこの素早い乗り換えは！

「ソラくんも子どもみたいに大声出してないで、大人しく認めてよね。ボクも写真楽しみにしてるから」

「ちよつと待って、承諾する気はな」「認めてよね？」　わかりました・・・」

断つたらただでさえ、気持ちい　辛い体罰が増えることになる。それだけは避けたい。それにあの目で強引に言われたら認めざるを得ない・・・。

「それじゃ、決まりだな。覚悟しとけよ」

「楽しみだなー、ソラくんの艶姿」

このDSコンビを結びつけたのはちよつと失敗だったかも知れない。

ちなみに、修学旅行なんて行事は頭から綺麗さっぱり消えていたので準備なんて全くしていない。だから前夜にして初めて準備を始めることになる。そりやもう大変だった。バッグなんてずっと使っていないからどこに仕舞い込んであるのかわからない。まずはバッグを見つけて出すところから準備スタートだ。

「ねえ、ソラくん。ボクのバスタオル知らない？」

部屋越しに水希の声が聞こえる。水希は戻ってきたときから荷物を整理していたから準備とか簡単に終わりそうだなあ。

「知らない」

そんなものオレが知っているわけがない。それくらい自分で見つけてくれよ。

さて、オレはさつさとバッグを見つけないと……。部屋の押入れやら机の下、ベッドの下や布団の下に窓の外……。どこを探しても一向に出てくる気配はない。あれ……。おかしいなあ……。

「ソラくん、ボクのピンク色のＴシャツ知らない？」

だから知らないって言ってるでしょ。

「知らない」

水希が出て行く前までは、互いの部屋を自由に行き来できたんだけど、戻ってきてからは欲望を抑え込むためとかいうワケのわからない理由で部屋は行き来できなくなった。だから、水希の部屋がどうなっているのかはわからない。別に水希の部屋に入ったからって襲ったりなんかしないのに……。

「ソラくん、ボクの下着知らない？」

……。だんだん、探し物が際どくなっていくのは気のせいか？バスタオルに始まり、Ｔシャツに拳句の果てには下着だ。仮にオレがその在り処を知っていたとしたら、彼女はどんな反応を示すんだろうか。水希はオレが何の反応も示さないとわかりきって言ってきているのだとしたら……。ここで1つ驚かせてやるのもいいかも知れ

ない。

「えーつとね、確かお風呂場のカゴの中にあつた気がするよー。黒いやつでしょ？」

ふふん、これで水希は驚くだろう。自分の予想とは違う動きがあつたんだからね。オレは部屋で1人満足げな表情を浮かべていた。

「あれえ？ソラくんつてば、ボクの下着の在り処がわかるんだー」

「おや・・・？全然驚いてないだど・・・？」

「ボクの下着に興味あるの？言ってくればいくらでも」

「違つつ！適当に言っただけで、本当に知ってるわけじゃ・・・っ！」

「何でだ？何でオレがこんなに動揺してるんだ？」

「隠さなくてもいいのに」

心底楽しそうな声がドアの向こうから聞こえると、水希は階段を駆け下りていった。くそつ、完全にオレの負けだ・・・。しばらくすると下から階段を上ってくる音が聞こえてくる。本当に風呂場に行つて確かめたのか・・・。

「ソラくんありがと。ホントにあつたよ」

「ええ！？と叫びたくなるのを堪えた。これじゃ言い訳のしようがない。」

「それじゃあ、教えてくれたお礼に1ついいこと教えてあげるよ」

何かを企んでいそうな声。ドアの向こうにいる水希のイタズラっぽい顔が目に見え始める。

「ソラくんのバッグなんだけど、どういうわけかボクの部屋にあるんだよ。どうする？取りに来る？」

「何で水希の部屋にあるの？」

「さあ？ボクがいなかった時にあの部屋物置にでもしてたんじゃないの？」

あれ・・・気のせいかな水希の声がだんだんあつちのモードに入つてくるよな・・・。

「物置にはしてないけど・・・あ」

ようやく思い出した。姉貴の部屋に仕舞っておいたんだ。それで姉貴が部屋を整理するときこれ邪魔だと言って、空き部屋だった水希の部屋に放り込んでたんだっけ……。

顔が青ざめていくのが自分でもわかる。これはマズイぞ……今水希の部屋に入ったら何をされるかわからない。

「必要なら早く取りに来てね？」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

「でも、取りに来たときはどうしてボクの下着の在り処を知ってたのか話すまでたーっぷりイジメてあげるから」

いやいや、語尾に付けられても怖いものは怖いんだって。しかし、バッグは取りに行かなきゃいけないし何されるかわからないから怖いし……。

どうするオレ。明日の集合が早いからいつもより早く寝ないといけない。こんなことで怖がっていたらいつまでたっても準備が始まらない。というか、考えてみればオレがオシオキを受けるのは自分にだけ危害が及ぶけど、準備ができなくて集合時間に遅れるのは全体の迷惑になる。全体と自分、小と大……。犠牲にするべきなのはどちらかと問われれば、答えはもちろん小。自分の身だろう。

オレがバッグのために1回縛られればそれで済む。縛られる以上のことをされても耐える自信はないけれど、そうするしかない。オレは部屋を出ると、女王様が待つ部屋の前に立った。ドアからも部屋に充満するSオーラが漏れ出している。でもここで退いたら男が廃る。このドアの向こうにどんな快ら　苦痛が待っているよとも、オレは折れないっ！（別に狙ったわけじゃないよ）

ドアノブを捻って、中へと入る。女の子らしい部屋の中央に座る1人の女王。女王はオレの姿を確認すると、妖艶に口元を歪めた。

「お互いの部屋には入らないって約束……忘れてない？」

「あ……」

すっかり忘れてました。

「それを破って入ってきたってことは、ソラくんも承知の上なんだ

よね？」

冷や汗が止まらない。水希は四つん這いでオレの足元へ寄って来ると、そのままオレの腹部へと手を回してきた。

「どんなことにも耐えられるんだよね？それくらいソラくんだけ溜まつてるんでしょ？」

「溜まつてるとか言わないの」

この子こっちのモードに入ると、途端に口が悪くなるね。水希は全身をオレに擦り付けるようにしてゆっくり立ち上がると、腰に回ってる手の力を強めた。怖い怖い怖い怖い……。

水希はオレに囁く。

「今夜は長くなるよ？」

騒がしい修学旅行前夜になったとき。

修学旅行：出発前夜（後書き）

こんにちは、菊地です。

最近久々にゲームにハマっちゃいました、やや更新が遅れてしまいました。

いやあ、あれですね。もうなんていうか、聖なる光の強さはハンパなかつたです。皇国軍全滅ですからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0572q/>

美少女男子と美男子少女

2011年12月10日23時53分発行